

一般社団法人北海道建設業協会創立百周年記念事業

北海道内町村長及び

商工会長インタビュー

# 「地域とともに 生きる」

平成28年5月



くらしを守り地域を支える



一般社団法人

北海道建設業協会

Hokkaido Construction Association



一般社団法人北海道建設業協会創立百周年記念事業  
北海道建設業将来ビジョン  
北海道内町村長及び  
商工会長インタビュー

# 「地域とともに 生きる」

平成28年5月



くらしを守り地域を支える



一般社団法人

北海道建設業協会

Hokkaido Construction Association



	目次	3
	はじめに	5
	北海道建設業将来ビジョン 各町村長、商工会長インタビューについて	7
	「町村長及び商工会長インタビュー」実施経過	9
1	壮瞥町商工会長 堀口 一夫様	13
2	新冠町長 小竹 國昭様	36
3	斜里町商工会長 土橋 利文様	59
4	北広島商工会長 上原 康雄様	80
5	比布商工会長 荒尾 孝司様	98
6	浦幌町商工会長 竹田 悦郎様	116
7	安平町長 瀧 孝様	135
8	蘭越町長 宮谷内留雄様	156
9	蘭越町商工会長 堀川強太郎様	175
10	置戸町長 井上 久男様	194
11	標茶町商工会長 田中 進様	217
12	本別町長 高橋 正夫様	229

27	鹿部町長	川村 茂様	591
26	白糠町長	棚野 孝夫様	569
25	長沼町商工会長	岩城 榮市様	543
24	浜頓別商工会長	中村 忠勝様	515
23	新冠町商工会長	橋本 正美様	490
22	上ノ国町商工会長	小林 恭平様	467
21	上ノ国町長	工藤 昇様	446
20	別海町商工会長	橋本 淳一様	421
19	標津町長	金澤 瑛様	396
18	北斗市商工会長	宮崎 高志様	369
17	苫前町長	森 利男様	347
16	豊富町長	工藤 栄光様	325
15	奈井江町長	北 良治様	306
14	新篠津村長	東出 輝一様	280
13	美瑛町長	浜田 哲様	253

## はじめに

一般社団法人北海道建設業協会が、平成28年10月に創立百周年を迎えるにあたり、このインタビューを企画しました。北海道建設業協会は、北海道内の11の建設業協会の連合組織ですが、各会員は、北海道の建設業界では、国や北海道の工事を受注する大きな会社で構成されています。

しかし、建設業の仕事は、市や町、村の地方自治体の工事、商店や農家の建物、個人住宅なども含め、北海道内にあるすべての建築物・土木構造物・道路・堤防などであることを考えると、会員各社が仕事のつながりの少ない町村の現状はどうなっているかを、理解することは、協会と会員にとって重要なことと考えました。

そこで、今回は、14の総合振興局・振興局の区域で、町村長と商工会の代表お一人ずつを訪問し、地域の課題を中心にお話をお聞きしたものです。

インタビューのテーマは、1. 地域における課題、2. 建設業に対する印象と課題、3. 建設業に期待すること、の三項目としました。1. を主にお聞きし、2. と3. は、1. に付属した項目としてお話を聞きしています。

今回インタビューをさせていただき、町村地域では、町村長と商工会、農業協同組合をは

じめとして一致団結し、「地域で生きる」を体現していることを実感いたしました。また、その中で建設業界の役割が、大都市に住む人間が考えている以上に、大変大きいことも認識いたしました。自治体と各団体が連携して、地域が生き抜く力強さを見せていただきました。

このインタビューは、同じ百周年記念事業として策定した「北海道建設業将来ビジョン」北海道の礎を創り、地域をまもり、未来を創る』に、内容を反映するとともに、将来ビジョンを補完する位置づけとしております。北海道の町村地域の力強さを読み取っていただければありがたいと思います。

インタビューをお受けいただいた町村長様、商工会長様には、大変率直なご意見を含め丁寧に対応いただき感謝しております。インタビュー内容のとりまとめについては、至らぬ点もあるかと思いますが、ご容赦いただければ幸いです。

平成28年5月

北海道建設業将来ビジョン策定ワーキンググループ委員長  
一般社団法人北海道建設業協会 副会長 栗田 悟

北海道建設業将来ビジョン 各町村会長、商工会長インタビューについて

一般社団法人北海道建設業協会

顧問（現副会長） 栗田 悟

I. インタビュー項目

- ① 地域における課題
- ② 建設業に対する印象と課題
- ③ 建設業に期待すること

II. インタビュー項目の解説

① 地域における課題

- ・ 人口減少・少子高齢化の進行に対する不安
  - ・ それに起因する経済の縮小・産業が疲弊していくことへの懸念
  - ・ 生活機能維持の困難さの発生
- など、現在、地域で困っていることをお話下さい。

## ② 建設業に対する印象と課題

- ・ 建設業は、あまり良いイメージをもたれていないと感じていますが、いかがですか。
- ・ 地域における建設業は、活躍していますか。
- ・ 現在、建設業全体では高齢化が進み、若い人が入ってくれないという課題を抱えています。こちらの地域ではどうですか。

など、現状の建設業への見方などをお話下さい。

## ③ 建設業に期待すること

- ・ みなさんの周囲の建物や道路・上下水道・電気・ガスは、すべて建設業がかかわっています。今後も、地域に見合った建設業が必要と考えています。
- ・ 災害が発生したとき、人命に関しては、消防・警察が対応しますが、その後の施設の修復は建設業が行います。一刻も早く修復するという観点から、地域に信頼のおける建設業が必要と考えています。

以上のような見方を私たちはとっていますが、この考え方はいかがでしょうか。

そのほか、地域の建設業に対する期待があればお話下さい。

以上

「町村長及び商工会長インタビュー」実施経過

- |   |         |                       |               |
|---|---------|-----------------------|---------------|
| 1 | 壮瞥町商工会長 | 堀口 一夫様                | 平成27年4月6日月曜日  |
|   |         | (二社)室蘭建設業協会 菊谷 達夫 副会長 |               |
| 2 | 新冠町長    | 小竹 國昭様                | 平成27年4月8日水曜日  |
| 3 | 斜里町商工会長 | 土橋 利文様                | 平成27年4月9日水曜日  |
|   |         | (二社)網走建設業協会 西村 幸浩 副会長 |               |
| 4 | 北広島商工会長 | 上原 康雄様                | 平成27年4月13日月曜日 |
| 5 | 比布商工会長  | 荒尾 孝司様                | 平成27年4月15日水曜日 |
|   |         | (二社)旭川建設業協会 荒井 保明 副会長 |               |
| 6 | 浦幌町商工会長 | 竹田 悦郎様                | 平成27年4月15日水曜日 |
| 7 | 安平町長    | 瀧 孝様                  | 平成27年4月16日水曜日 |
| 8 | 蘭越町長    | 宮谷内 留雄様               | 平成27年4月20日月曜日 |
|   |         | 小樽建設協会 中野 豊 副会長       |               |
| 9 | 蘭越町商工会長 | 堀川 強太郎様               | 平成27年4月20日月曜日 |
|   |         | 小樽建設協会 中野 豊 副会長       |               |

- 10 置戸町長  
井上 久男様 平成27年5月25日月曜日  
(二社) 網走建設業協会 西村 幸浩 副会長
- 11 標茶町商工会長  
田中 進様 平成27年5月29日金曜日  
(二社) 釧路建設業協会 村井 順一 理事
- 12 本別町長  
高橋 正夫様 平成27年8月3日月曜日
- 13 美瑛町長  
浜田 哲様 平成27年8月6日木曜日  
(二社) 旭川建設業協会 荒井 保明 副会長
- 14 新篠津村長  
東出 輝一様 平成27年8月7日金曜日  
(二社) 札幌建設業協会 阿部 芳昭 理事
- 15 奈井江町長  
北 良治様 平成27年8月19日水曜日  
(二社) 空知建設業協会 砂子 邦弘 副会長 (現会長)
- 16 豊富町長  
工藤 栄光様 平成27年8月20日木曜日  
稚内建設協会 中田 伸也 副会長、老田 秀樹 常務理事
- 17 苫前町長  
森 利男様 平成27年9月7日月曜日

18 北斗市商工会長

宮崎 高志様 平成27年9月9日水曜日

(二社) 函館建設業協会 砂原 隆

事務局長代行・事務部長

19 標津町長

金澤 瑛様 平成27年9月25日金曜日

(二社) 釧路建設業協会 村井 順一 理事

20 別海町商工会長

橋本 淳一様 平成27年9月25日金曜日

(二社) 釧路建設業協会 村井 順一 理事

21 上ノ国町長

工藤 昇様 平成27年10月20日火曜日

(二社) 函館建設業協会 砂原 隆

22 上ノ国町商工会長

小林 恭平様 平成27年10月20日火曜日

(二社) 函館建設業協会 砂原 隆

事務局長代行・事務部長

23 新冠町商工会長

橋本 正美様 平成27年11月16日月曜日

24 浜頓別商工会長

中村 忠勝様 平成27年12月4日金曜日

稚内建設協会 中田 伸也 副会長、老田 秀樹 常務理事

25 長沼町商工会長

岩城 榮市様 平成27年12月7日月曜日

26 白糠町長

(二社) 空知建設業協会 砂子 邦弘 副会長(現会長)  
棚野 孝夫様 平成28年1月22日金曜日

27 鹿部町長

(二社) 釧路建設業協会 村井 順一 理事  
川村 茂様 平成28年1月25日月曜日  
(二社) 函館建設業協会 砂原 隆

事務局長代行・事務部長

※インタビューに同席した地方協会の委員・担当を、インタビュー対象者の次行に示して  
います。

以上

平成27年4月6日14:00～15:00 於：壮瞥町商工会

堀口 一夫 壮瞥町商工会長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

菊谷 達夫 一般社団法人室蘭建設業協会副会長

栗田顧問…最初に、壮瞥町について会長さんがお感じになっている課題をお聞かせ頂ければと思います。

（観光地の社会資本整備）

堀口会長…私も電気工事業ですので建設業界に入ります。この町は人口2、700人の小さな町ですが、洞爺湖の半分、それから火山の昭和新山、有珠山があり、それらは近い将来にはまた噴火するのではないだろうかと騒がせている山でもあります。そんな中でも観光客は年間約180万人が訪れています。昔は280万人とか300万人と言われていましたが、現在はその半分近くの観光客の入り込みです。昭和52年の噴火があり、あれから観光客の落ち

込みが大きくなっていったと考えています。そして平成12年に噴火があり、それらが観光客の入込にさらに大きな影響を与えたと思います。しかし、観光は、この町では切り離せない基幹産業のひとつになっています。

その中で一番が、道路整備が一向にできていないことです。「一朝有事」があった時に最初に出てくるのが建設業です。道路の復旧も含め、あの地域に住んでいる人達の生命・財産を確保するためにも、道路の確保をやってほしいと思っております。その後、水道、電気の整備はついてくるのです。

蟠溪地区がありますが、その入り口が国道453号で、これが何年か前から地盤が動いています。北海道開発局にも大変お世話になり、北海道にもお願いして、いろいろお知恵をお力を借りています。そして、この国道は、ちょっと雨が強く降ると通行止めになります。地元の間からは、宇宙に行く今の時代にちよつと雨が降ったら道路が止まるというのはいかなものか、という非常に手厳しい声も聞かれています。

昭和52年の有珠山噴火の時に、観光客がたくさん訪れる中で、地域では避難シェルターのものを早く造ろうという話がありました。しかし、日本人の良さなのか悪さなのか分かりませんが、喉元過ぎればピタツと忘れて、平穩無事な時はそのシェルターの話は出てこない。有珠山が平成12年噴火から折り返しに入って噴火に近づいていると言われており、防災の視

点から、シエルターを造り、観光客の皆さんの生命を一時的でも守ってやらなければ、観光地として責任を果たせないだろうと思います。短い期間ではできないでしょうが、北海道や国のお力を借りながらできないだろうかと考えています。

栗田顧問…町長さんと一緒に、要望に動いているのですか？

堀口会長…これは壮瞥町だけではなく、近隣の伊達市、洞爺湖町含めて、この西胆振のひとつの懸念材料になっているという気はします。

「人口減少と地域コミュニティの崩壊『コミュニティタクシー』」

堀口会長…町全体を考えると、地域コミュニティの崩壊があります。たまたまうちの町は、すぐ隣、車で10分か15分で伊達市に行けるので、生活の買物等については、他所様よりはいいと思っています。

町長の思い入れもありまして、町が補助して安く、医療機関、買物に通う特に高齢者のために気軽に利用できる地域コミュニティタクシーを導入しています。

栗田顧問…コミュニティタクシーは乗り合いなのですか？

堀口会長…乗り合いもありますし、個々に使う場合もあります。普通のタクシーで、タクシー会社と協定を結んで、気軽に高齢者の方が使えるようにしています。まだ自分で運転できる

人なら、自分で行きますが、高齢者、特に一人住まいのおじいちゃんおばあちゃんになると、買物に行くのも大変ですので、タクシーを自由に使いなさいということで、タクシー会社と町が協力して行っている事業です。

〔定住促進・子育て世帯対策、借り上げ住宅PFI方式（BOT方式）、商工会と町が連携〕  
堀口会長…全道の各町村が悩んでいるのは、人口減少です。いろんな施策があると思いますが、壮瞥町も移住定住を進めており、できるだけ定住していただきたいと考えています。

これは全国でも、はじめての事例だと思いますが、商工会が事業主になって、金融機関から約2億円の借入れを起こして、借上げ住宅を造りました。今も作っている最中です。全部で20戸建て、そしてその空き室補償を町がおこない、その家賃収入で、返還するという仕組みです。役場職員中心に、学校の先生方が入居者になります。これがうまくいけば、行政と商工団体が連携し、色々な事業ができると思います。商工会としては会員さん中心で考え、地元の建設業界に発注することになります。今回はモデル的にやっています。

この借り上げ住宅は、戸建てと集合があります。4戸一棟、それからメゾネットタイプで1階、2階を1戸にしたタイプがあります。2階建てで、1階と2階が別の人が入る場合、1階の人がうるさく感じるので、メゾネットにして1階、2階を一軒で住めば、騒音も緩和

されます。

そのメゾネットが2棟と、戸建、単身者も入れる個室的なものが2棟など、それが今十戸あります。一戸空いたときのその部屋代は町が融通してくれまので、商工会としてのリスクはなくなります。そうしないととてもできません。そして、20年間商工会が管理をしてその後町に移管します。家賃は公営住宅もその借上げ住宅もだいたい同じようで、6万、7万円ぐらいです。

栗田顧問・商工会がそういう事業を実施することはめずらしいですね。

堀口会長・商工会は基本的に法律で営利事業はできませんのでめずらしい形態です。この事業は営利でなく、行政とタイアップしてすすめる事業です。商工会は財産を持ってないし、金銭的なリスクは負える団体ではないので、そこは町が後ろ盾をしていただいています。日本ではじめてのパターンの商工会の事業です。

栗田顧問・商工会さんが事業主体で借上げの住宅を造り、その貸し先は移住定住してくれる人を優先する考えなのですか？

堀口会長…ええ、それもあります。ただ、基本的には町職員、町の教職員が中心で、今その人たちが入っている公営住宅等々を空けてもらって、そちらの方に移住定住の方に住んでいたことにしています。結果として公営住宅を政策的に空室にするために借上げ住宅を造つ

たこととなります。基本的には今は住宅難だったので町外から来て住宅のない人の解決策のひとつとして公営住宅を利用することにしました。

それから人口減少の歯止め政策の1つですが、子育て支援のための住宅を、町の方で何戸か造っていただきしまた。

これらも含めてうちの町に人が住めるような町にしていきたいと考えています。いろいろお願いをしながら、町も含めて合わせて知恵を出して、人の集まりを作る取り組みを進めていきます。

栗田顧問…子育て支援の住宅はどういう住宅なのですか？

堀口会長…安い住宅家賃で小学生から義務教育の子供がいる間は入れますという住宅です。子育て世帯を支援、応援して行きましようということ。子育てしやすい町作りの一環に、なればなということでしょうか。

栗田顧問…義務教育の間は入れるということ、その分だけ町で補助するのですか？

堀口会長…はい、そうなります。まだ戸数も足りないのです、これからそれを増やして、今既存の公営住宅の空きをつくって、移住定住の人たちに入ってもらおうとしています。

堀口会長…公営住宅も、公営住宅法という法律が厳しくて、住みにくい条件になっているところがあります。趣味の世界とは思いますが、犬や猫を飼っている人が結構います。昔の我々

の子供の時代だったら、外に放し置いて良かった時代でしたが、今はペットも家族です。公営住宅では、法律で飼えないらしいのです。それで、町の方にいろいろお願いして、ペットを飼ってもいい住宅を作れないかと考えました。

現在、建物を建てる方と管理する方が役場の中で違いますので、片一方は移住定住を進めていて、一方では公営住宅で犬・猫飼っていたら犬・猫を捨てるか自分が出て行くか、どちらか選択しなさいという扱いになっています。それでは、ペットが家族だという感覚でいる人は、公営住宅に住めません。極端なことを言えば出て行きます。出て行っても、町で代わりの住宅を用意してくれることもできませんと言っています。

片方では何とか住んでほしい、片方ではルールがあるから出てつてくれではザルで水をすくっているのとあまり変わらない話です。なんとか行政内部で、ペットを飼っても住める地域とか、この一棟は大丈夫とかぐらいの知恵は出ないのかという話です。

栗田顧問…面白い話ですな。

堀口会長…移住定住を言葉で叫んでも、現実にはぶつかる壁がいっぱいあります。それを、クリアするのはなかなか大変なことなのです。

栗田顧問…これからそういう問題はどこでも起こる話で、しかも移住してもらいたければ、その環境が国の法律で阻まれているのであれば、それは国としても本末転倒な話になります

ので、これは絶対要望活動をする方がいいと思います。

先ほどの商工会さんで造る借上げ住宅はペットを飼うのは自由ですね。

堀口会長…そうです。

それから、行政が造る建物はどうしても鉄筋コンクリート造りで、当然コストも上がります。一棟建てるのに何億円もかかります。ところが我々民間レベルで建てたら、基本的には木造でいいとされています。そして業者も、商工会とその会員さん企業でできます。それから行政がやると必要になる、完成図書を作れとかの書類作成が一切なくなります。商工会の会員であの書類を作るのは大変です。その辺を省いて最低限にして、その代わりに最高の建物を建てます。

「商工会の職員、役場の職員が、補助金を勉強することは大切です」

堀口会長…今、補助金は色々ありますから、それをうまく使えるように、情報を的確に拾ってくるとというのが商工会の職員の仕事だと思っています。これは役場も同じで役場の課長さんレベルになると、国の補助金がどこに何があるかってことぐらい勉強しておかないとだめです。

栗田顧問…今のお話すごくいいです。商工会の職員、役場の職員が、補助金を勉強することは

大切です。補助金は1年限りがいっぱいあるし、毎年毎年予算と法律が変わりますから、少し使いやすくなったりするのがいっぱいあります。

堀口会長…それでも、国の補助金は申請が面倒なのです。だから緩和するなら、もう少し細部まで緩和してもらいたいと思います。それから、商工会も少し横の繋がりを持って、良い役に立つ情報は発信していくことが必要です。

今の借上げ住宅もそうですが、よく視察研修に来ていただいていますので、そのときは我々が持っている情報は全部出しています。

商工会を対象に、一昨年できた中小企業基本法が一部改正されて、小規模事業振興基本法が成立しました。

今は、経営発達支援法で、これも経産省から補助金が出ることになりましたが、国に提出するときの企画書が、これが面倒くさいのです。同じ日本語なのに、なんとかならんのかなと思ってしまう。

堀口会長…去年からやっていて、今全道に152商工会があるのですが、その中で第1次審査申請したのが23、その中のひとつにうちも手を挙げているのですが、なかなか経産省も文言の使い方、整理が悪いと、何回かフィードバックされています。

栗田顧問…直接に国、経産省に提出ですか？

堀口会長…そうです。だから、厳しい。道の経産局が中に入ってくれていますが、厳しいものがあります。だけど、諦めたらダメだよという話はしています。一時審査で受ければ、今後の国からの補助金が非常にスムーズに出てくる話も聞かされています。

（伊達市大滝区と行政界をまたがった商工会活動「奥洞爺委員会」）

堀口会長…町作りのためにやっている事業形態の補助金のひとつで、うちの商工会は、今有珠の辺りで、「奥洞爺委員会」を作っていて、この洞爺湖の周辺、大滝の北湯沢の溪谷まで対象に入っています。

まず、ここに道内屈指の大きなホテルあります。野口観光さん、カラカミ観光さん、万世さんがあって、こういう人たちは自分独自でコマーシャルを打っています。あとの小さな旅館では、コマーシャルが打てない。それでこれらをみんなまとめて、十件程度にして「奥洞爺」という言葉で、コマーシャルをすることを考えています。食と温泉があるので、湯めぐりだとか、として捉え、来てくれたお客さんにリピート性を高めてもらうことと、連泊をしていただけるようなことを目的として、この奥洞爺委員会を作っています。農商工連携、六次産業化です。

地産地消で地場産の食も含めて、地域の物に付加価値を付けて売っていきましよう、そし

てそれらを「奥洞爺」と名付け、ひとつのブランドにしたいという大きな野望です。それを商工会がやっています。

堀口会長…本来で行くと大滝は伊達市に入ります。経済団体は商工会議所が伊達市さんにあるので、会議所さんの方に本来は入るとこなんですけど、市町村合併特例みたいなものがございまして、特異な形の商工会なのです。それで各地からも視察研修でよく訪れます。これも全国的にはあまりないパターンです。

堀口会長…一行政区域の中に商工会団体というのは商工会か、会議所かどちらか1つです。市町村合併の特例という形で残ったと思います。

栗田顧問…奥洞爺とはいいい響きですね。

堀口会長…ちよつとどこか秘密めいた感じですよ。似たような名前で、歴史は向こうの方が古いのですが、奥飛騨というのがあって、そこに視察に行き、向こうのリーダー的なホテルの社長さんにも大いに協力していただいています。

栗田顧問…そういう研究経費にその補助金があてられるということですね。

堀口会長…そうですね。その他いろんな形でも、ヤル気のある所には出すと聞いています。

堀口会長…ただ黙っていても、金は来ないという話で、やりましょうという気持ちです。六次産業化もそうですが、今、行政も含めてもう少し地場産のものを、大きくやっていきましょ

うと、農商工連携を集約していければと考えています。

行政の縦割りの壁と地域活性化活動の悩み

堀口会長…洞爺湖は、支笏洞爺国立公園に入っています。そして管理は環境省です。その中国有林もあり営林署が管理しています。

営林署では、ここにある老木・古木で、いつ倒れても不思議ではない木を切った方がいいですよ、と言うのですが、環境省は枝一本払ってはいけないといいます。何年か前の暴風雨で倒れている木もそのままです。しかし、私たちはそれで観光地と言えるのかと思っています。

行政は縦割りになっていて、林野庁と環境省がお互いに主張すると、結局地元にいる人間は何にもできません。例えば、電線が道路に入っていますが、そこに木が被さってきていて、誰の目から見てもこの木が倒れたらこの電線は切れてしまうというのがわかっていながら枝払い一本できない。そして、結局は暴風雨になって自然に倒れて電線を切つて、停電させて地域を真っ暗にするという不安があります。その繰り返しが非常に多いです。

国が言う国民の生命・財産を守るといのが原点でありながら、北海道は、冬場に木が倒れ電線が切れたら本当に大変です。暖房等々は電気が切れたらほとんど使えませんから。そ

れと住宅の電話、これも電気が切れたらほとんど通じない。皆さん携帯電話を持っているから、とりあえず問題はないとは思いますが、そういう危険性をはらんでいます。そこには手が伸びないし、行政の壁が、色んなところで立ちはだかっています。

商工会の場合は胆振管内に7つの商工会がありまして、商工会連合会を作って、2年に1回振興大会を開いて各地区の大きな問題をみんなで出し、それを陳情要望で活動するのですが、陳情は、北海道の環境事務所までいきます。

栗田顧問…昭和新山はどうですか。

堀口会長…基本的には噴火に対するお客さんたちの身を守るためのシエルトアの早期建設は待たなしてやってかないといけないと思います。噴火の兆候が現れてからだったらもう遅いです。観光地として昭和新山地域が衰退の具合がちょっとひどい。行政とも相談しながら、昭和新山をなんとかしようとして、第2の湯布院、第2の黒川に、観光特別特区にして、ある程度町並みを整理できるような地域にしていきたいと思います。それも含めて、これから建設業、特に土建業の皆さんには大変お世話になります。噴火があった時に、道路もないですし、今洞爺湖は1本止まったら、ぐるっと一周回って逃げる必要があるような逃げ場のないところです。

何十年も前から、北海道開発局、土木現業所（現建設管理局）を含めて、色々話をしてい

ます。トンネルをやる話もありましたが、早期着工してもらいたいと思います。計画ができて実行・行動までに何十年もかかっているのは、タイミングを逸してしまう気がします。少なくとも早目に決定したものはできるだけ早く着工してもらいたいと思います。北海道と本州と同じ土俵で比べると、違いは季節です。どうしても冬場の北海道をもう少し「中央」に考えてもらわないといけない。だから着工して完成するまでの間に冬をまたいだりしますと、手間もコストもかかります。

北海道の業界は、自ら地域を守っていくことが必要です

堀口会長…統計から、前々から思っていることですが、北海道の土建屋さんとか建築屋さんも電気屋さんもそうなのですが、大半が〇〇建設・北海道支社、北海道支店、北海道なにないの大手が受注し本店決済になる。それでは。北海道に税収がどの位入ってくるの、と考えたらそんなもんでもない。できるだけ北海道の企業が主で受注するような仕組みを業界としてもやっていかなきゃいかんね。

石川県には大手企業の支店、支社とかは一切ないと聞いています。電気工事業協同組合の全国会長さんは、石川県のヨネザワ電気さん、従業員百何十名、年収100億円、電気屋さんで、普通考えられないのになぜそうなるの、と聞いたたら、普通なら電気屋さんの支店があ

るのですけど、石川県はそれが一切ない。だからYKKが今度石川県に工場を出すといつても本社と言っています。そうやって、地域を自分たちで守ろうとしている業界もあります。まあ電気屋さんがそうで、土建屋さん建築屋さんもなんとか支店、支社は出てきてないのでもないかと思えます。だから北海道もそれぐらいになると、道内企業がもう少し大きくやれるのではないかな。

栗田顧問…なるほど。なかなかおもしろい話ですね。

堀口会長…いや、まあ、情報としてちよつと調べてもらえればと思います。だから北海道もやりようによっては、もう少し地元業者で、地元が中心になって、どうしても特殊技術とか、北海道で経験不足の場合は、それは大手の企業を借りるのもいいことだけど、なんでもかんでも出てこられてね、何億円以上になったら、なんとか支店、支社が出てくる事をどっかで抑えるくらいにならないといけないと思います。

栗田顧問…北海道以外の他県は、ほとんど本州ゼネコンです。北海道はまだ少ない方です。

堀口会長…島になっていますからね。本州に行けば隣の県までももの30分、1時間走ったら隣の県に行く状況で、朝家から出て、現場行って帰ってくるのも県をまたがって仕事ができる。ですが本州でも、県によって自分たちのことは守ると、やっているところもある。

栗田顧問…県発注はほとんど県内業者ですね。ダムとかは別ですね。

堀口会長…そういう特殊な工事は別です。

栗田顧問…普通の工事は、みんなそうですね。建設業に関する話は、今の話ですよ。

堀口会長…そうですね。将来的に言ったら、大手と喧嘩するのではなくて、仲良く情報の共有をしながら、できるだけ道内企業としてやれる分野には道内企業が、がんばるようなことに、将来的になってくれればいいと思います。会社の本社機能が北海道に来てくれるなら、それに越したことはないですけど。それはそれでいろいろ問題があるだろうから。

菊谷副会長…似たような話ですが、本社機能を移したら、一定のペナルティを課せるような仕組みを導入できないものかと思います。ペナルティは税金だとか、固定資産税とかです。それから逆に、地方に本社を移すことによって、固定資産税を何年間減免するとか。YKKの話は非常にもしろいし、ちょっと調べてみたいと思いました。

（ＴＰＰ問題について思うこと）

堀口会長…最近思うのですが、ＴＰＰが問題になっていて、農産物の輸出入だけ頭悩ませているけど、ＴＰＰは逆に建設業界にも大きな影響があります。それが意外と出てきてない。その辺の危機管理で建設業界もＴＰＰに関してはもっと色んな意見が出てほしいような気がする。

栗田顧問…アメリカはいまだに関心持っています。最近ちょっと危機感は薄れましたけれど、最初は、公共調達、いわゆる公共事業の話も書いてあったのです。日本の建設業の発注の仕方っていうのは閉鎖的だっていう、はつきり書いてあって、それをなんとかしないとダメだっていう論調だったのです。だけど最近はこちらとなくなりました。だからまあ、だいぶ終わりがかかっているのかなと思っています。

堀口会長…実は、私の個人的な見解ですが、TPPに本来あれだけ目くじら立てる話でもないのかなという気はしています。昔、米の一部自由化とか果物の自由化が叫ばれ、さもさも果樹農家は命取られるとか、米農家はみな潰れるみたいなことがありましたが、いざやってみたら意外と影響はなかった。日本人の舌は、同じサクランボでも佐藤錦とアメリカンチェリーと置いといたら、絶対佐藤錦ばかりを食えると思うのです。だから、あまり恐れるものでもないのかなという気はしています。

栗田顧問…私山形生まれですので覚えていきます。あのアメリカンチェリーがいつぱい入ってきて、もう絶対潰される、潰れるとサクランボ農家が言っていました。だけど全然そんなことはなかったです。

堀口会長…逆に日本のサクランボの方がはるかにすごいです。だから逆手にとって、そういうところに輸出をどんどん増やすぐらいのことをやれば良いと思います。

（伊達駅前でも公営住宅のPFI方式）

菊谷副会長…今、宮城県が集合の公営住宅と木造の公営住宅とをやっています。多分林野庁の木材利用のポイント制を使っているのだろうと思います。それで、犬・猫を飼ってもいいというものです。

あと伊達市でも、駅前に公営住宅の建設で、手を挙げたのは4社です。ヒラギンさん、スドウさん、それからコマツさん、あとアサギさん4社共同でやるとなりました。土地を決めたりするのは、駅前商店街の振興組合で、そしてその中に建てるのは坪いくらで、そして、完成後は市で管理します。建てるのは建設会社でやって下さいというものです。その時にたぶん、犬・猫の話も出ています。

堀口会長…今のPFI方式ですね。うちも似たようなものだけどPFI方式ではない。民間の商工会が建ててお貸しして、最後に町に返す形で、管理までうちがやる。

栗田顧問…それもPFIです。今日本で一般的ではないPFIですが、BOT方式です。

堀口会長…そうですね。うちはPFIもどきと言っています。

栗田顧問…日本のPFIのパターンにはないですけど、世界中にいくつかはあるパターンの中のひとつだと思います。だからすごいと思ったのです。

堀口会長…この方式でやれるのであれば、いろんな地域の商工会で本来営利を目的としてない

団体も、やり方によっていろいろできるし、それは行政と利害が一致することによってもっと手を広げていけるのかなと思います。

栗田顧問…トータルでは行政の金も少し入る形になって、商工会自らやった部分が大半だけど、それは利益を生まない。それで、若干損する部分は行政が補填するという仕組みですよ。

堀口会長…そうです。

栗田顧問…大変おもしろい話でした。地方でやるにはいいパターンです。

堀口会長…そして、行政もいいのです。

栗田顧問…手間かかりませんね。

堀口会長…建設に対して自分たちが一回に大きな起債を起す必要性がない。

栗田顧問…しかも建設業者は、商工会会員なので、行政は業者選定の心配をしなくていいことになります。変な心配するとすぐ談合とかの話とかなりますから。

菊谷副会長…伊達駅前の公営住宅も、伊達市は全く関係なく、基準だけ決めて、業者さんでやるということをやっています。

（地域の課題は共有、経済団体の連携と一体化）

菊谷副会長…それと、いつも思うことだけど、商工会議所と、商工会と話題の共通性があるは

ずなのに、コミュニケーションが少なすぎる。例えば噴火の時、商工会議所副会頭やって、商工会の会長もやったのですが、その時にも思ったし、いろんな事業をやっていく中で、商工会のものも全部含まれているはずなのに、提案事項が必ず商工会議所なのですよ。

堀口会長…3、4年前に、胆振振興局が音頭取りしていただいて、胆振管内の4つの商工会議所、苫小牧、登別、室蘭、伊達と、うちの7つの商工会が一体となって、洞爺湖温泉で合同の会合を開いた。そこで自分たちの地域の問題点を出しながら、みんなで考えようとした。そうなるオール胆振になる。胆振が抱えている問題を個別でなく、地域みんなで共有して認識しましょうということをやったことがあるのです。

栗田顧問…いいですね。

堀口会長…西胆振だけでは、信金の理事長が音頭取りをして、伊達商工会議所さんとそれからうちの壮瞥、洞爺湖それから豊浦3つの商工会会長、これでシンポジウムをやって、それぞれの地域の課題の意見交換をしました。まだ1回終わりましたが、これからも続けていくと聞いています。

堀口会長…何とか線で結ぼう、そして全体で見る課題は西胆振を面で捉えていくことが必要と思います。それは、商工業とか工業だけでなく林業・農業、それから漁業も含めて、西胆振で生活圏を持っている人たちを面で捉えて結んでいって、色んな情報を交換しながら課題を

解決することです。

栗田顧問…胆振も東と西で全然違います。

堀口会長…東と西では産業形態が違います。話しても温度差はあります。だから一体化が必要  
です。私が胆振管内の商工会連合会長もやっていますので、出来るだけ東部の意見も聞きな  
がら、振興大会とか、各種会議開催も出来るだけ東部と西部と順番にやっています。ただ産業  
形態が違うから、宿泊ひとつにしても西胆振に来たらいくらでもあるけれど、東部に行った  
ら宿泊施設もありません。

白老であれば虎杖浜温泉になってすぐ隣です。生活圈、商業圏が苦小牧と近すぎる。今ま  
では、「大昭和」という大企業に乗っかっていただけから、宿泊施設も街中に存在したけど、今  
になったら隣に大きな町があるとどうしても飲まれてしまう。だから今菊谷副会長が言った  
ように、本当に隣にありながら、商工会議所と商工会は、見たら同じですけど、規模、企業  
力が違う。ご存知の通り商工会は、本当に父ちゃん母ちゃんからはじまっている会員さんが  
けっこう多い。

栗田顧問…そうですが、トップ同士の意見交換は必要ですね。トップ同士でいいのだと思いま  
す。

堀口会長…トップ同士でいけば、けっこう個人的付き合いもあります。

栗田顧問…そこが一番いいです。少なくとも情報交換、例えば今の駅前の話とか。そうやっていると、実際にやろうとすると同じ悩みを持ちますから。

堀口会長…伊達市長さんが、けっこう色んな情報を流してくれます。昭和新山の開発も行政が入って、国の補助金を活用してやれる。ただ、やり方をきちっとやる必要がある。特にこの避難シェルターは国家レベルでやったって不思議じゃないので、町作りのために利用できる策もある。そういうことを考えたほうがいいよと、助言をいただいている。町長と伊達市長も仲が良い。

菊谷副会長…昭和新山の事を考えたら、観光協会は、洞爺湖とタイアップしないと絶対ダメです。

堀口会長…基本的に洞爺湖を割る必要はないです。行政区分では分かれているけど、陳情に行ったら同じような内容で洞爺湖町と壮瞥町でやっています。おなじ道路の拡幅で、この月浦近辺は洞爺湖町だし、仲洞爺近辺は壮瞥町だし、といって同じ話をしています。ここでイベントをやるとき、ツールド北海道をやるとき、車が走っている中でやって、あちこちで車を止めて行っている。建設管理部でやっている舗道も、まだ壮瞥温泉から洞爺湖温泉にかけて、まだ未開通の箇所があります。まして月浦方面へ行ったら本当にどうにもならない。前に、私も電気屋の発想として、洞爺湖一周に街路灯つけてはどうかといったことがある。そして

道路を照らすのでなくて、空に向かって照らせと話した。宇宙から見たら洞爺湖がぐるりと見えるくらいで、本当にそれぐらいの気持ちでやらなければ本当の意味の観光ならん。宇宙から見える洞爺湖です。

菊谷副会長…学校の先生に会ったら、ここは1時間走ったら絵にしたいものがたくさんあるというのです。

栗田顧問…おもしろいですね。

栗田顧問…いろいろなお考えや事業をお聞かせいただき、ありがとうございます。なかなかおもしろい話でした。

平成27年4月8日 13:30～14:50 於：新冠町町長室

小竹 國昭 新冠町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

栗田顧問：最初に、地域の課題をお聞かせいただければと思います。たとえば人口減少が問題になっていますが、新冠町の状況はどうでしょうか。

（新冠町の今一番大きな課題は、津波対策）

小竹町長：地域の課題は、沢山ありますが、新冠町は気候や地理的にも、日高管内の真ん中付近にあります。その条件からしても住みやすいところですよ。どこの町もそうだと思いますが、今まで住んでいた方々は将来もこの町に住み続けたいという希望が多いので、なんとか人口を確保して町づくりをしていきたいと考えています。

今の一番大きな課題は3・11東日本大震災を受けての将来への対策です。津波対策では、北海道が出しているシミュレーションでは最大のものが来ると今私たちがいるところも津波

に襲われます。対策を行って、安心して住むことが出来る地域をどうやって作っていかか、役場の中でいろいろ検討しております。特に公共施設の整備が、非常に大きな課題です。町そのものをどうするかということになると思っています。避難には、海岸付近ではやはり避難ビルのものが必要になると思います。

逃げるときは高台に逃げる。避難路も階段で2通路造りました。(役場の窓から見て)左の方は少し古く、右側は新しく造りました。階段で登って、逃げる事ができるようにしました。しかし、海に近い人は間に合いません。もう少し海に近いところに、避難場所として公共施設と併用した避難施設を造らなければいけないと考えています。全道的に海岸線はどこも大変な問題です。小学校、中学校も低い海の方にある。それらをどうするか、高台移転も大変なことです。

栗田顧問・10年くらいかけて少しずつ対策をとるわけですね。一気に対策をやると使わないビルを造ったと言われかねないですからね。

小竹町長・どう割り切るかです。そんな大きな津波は、1000年に一回で、仮に来襲してもあきらめると言うこともあります。何十年単位で来る低い津波にだけは、少なくとも対応できるようなことにするのか、十分に検討しなければなりません。最大の津波に対応できる構造物をつちり造るとすれば、簡単にはできません。

それは町民と色々と話をしなければなりません。役場の2階が災害対策本部になりますが、いざとなった場合、ここが使えないとなった時、本部は（窓から見える）丘の上に会館がありまして、そちらに移動できる体制づくりをしている最中です。

栗田顧問…災害時に、司令塔がなくなると大変です。あと少なくとも緊急の連絡が出来る電話が絶対あります。

小竹町長…本部機能を果たせるものを、会館につくることで今進めています。年に1回避難訓練をやりますが、その時は本部を移し、私達がそこに移って避難訓練の指示をしています。

人口減少対策、一次産業の振興と農業者の移住受入

小竹町長…人口減少はこの地域でも対応しなければならぬ課題です。これは今の一極集中を止めなければ解消できないと思っております。ご存じのように、東京が日本で一番子供を産みませんし、札幌が北海道で一番子供を産まない都市です。そこに人が集まれば、子供は増えません。そして、地域では人が移ったところは人が住まない状況になっていきます。日本の人口はどんどん減っていく現象が起こっていると思います。地方に人が住むことのできる施策を講じていかなければと思います。北海道の場合は何と言っても第一次産業の振興を図らなければ、一極集中は止まりません。そして人口減少も止まらないと思っております。新

冠町では一次産業の振興をやらなければならぬと考えています。

私どもの町は全道で一番の出荷量を誇るピーマンの産地です。子供の一番嫌がる野菜なのですが、新冠のピーマンは評価が高い。市場からはもつと出してくれと来ています。しかし、農村は高齢化が進んで、今のままでは生産者が少しずつ減っていきます。後継者をいかに作るかということが課題です。農家の所得を上げなければ、仮に農家の人に子供がいても所得が低い農業経営では自分の子供に農業の後を継がすことはしないと思います。ですから、農家の人の所得を上げてやらなければなりません。今のところピーマン農家は所得がいい。それで最近少しずつ、1度町外に出た青年が戻ってくるようになった。親もこれは子供に農家を継がした方がいいと思つていふと思います。ピーマンはハウスで作つています。町も一所懸命振興に力を入れており、施策として、ハウスを建てる時に30%を町が支援しています。後継者が帰つてきて、ハウスを増やしたいという場合は、40%助成します。町で支援をして農業振興を少しずつ図つていきたいと進めております。

また、農業支援員を置いています。地域おこし協力隊という国の施策です。色々な分野でやっていますが、うちの町は農業分野で全国から募集しました。地方に人を住まわそうという施策のひとつですが、大都市から地方に来た場合、国からの助成の対象になります。農業支援員は、最初の年に3名来て、もうすでに1人の方は独立してピーマンを生産しています。

たまたま農業を辞める方がおりまして、その農地と農家の家もそのまま自分で買って、ピーマンを作り、去年出荷しました。もう一軒もこの春から独立しています。2戸がピーマン農家になっています。今そういう方々がさらに4人ぐらいいる。

農家になるまでは、3年間の研修期間があり、その間に幅広く研修を行います。馬、酪農、畑作をやってもいいのですが、今回独立したのはピーマン農家です。これから他の分野にも出てくると思っております。

地域に住み、所得を上げられる体制を作って農家として入ってもらおう。そういうことをしなければダメという事で、今それを進めているところです。

栗田顧問…土地を買うにしても、4,000万円、5,000万円位必要になりますね。農家を始める時にどのくらいのお金が必要ですか。

小竹町長…ピーマン農家は意外とかかりません。ハウスでやりますから土地もそんなにいらないのです。

栗田顧問…集約化できるわけですね。

小竹町長…ええ、もちろん千万円単位でかかります。自己資金も多少は必要ですが、国も色んな制度がございますし、お金も貸してくれます。無利子で借りて、収穫上げた中から返していけばいいです。町も新規就農者には500万円出します。

栗田顧問…そうですか。

小竹町長…3年間研修の間はずっと毎月町が給料払っていく仕組みなのです。それは国が支援する形ですけど。今は4、5人います。そして独立したら500万円助成する制度です。国からもその他の制度があり、いくらからもらえるはずですよ。

栗田顧問…その500万円は出し切りですか？

小竹町長…出し切りです。

栗田顧問…返せとは言わないのですか？

小竹町長…言いません。

栗田顧問…一生この町に住むとか、条件がつく事はないのですか。

小竹町長…それはないですね。ただ農家をやるかどうかです。認定農家制度があります。その認定農家になった方は、将来とも農家をやるということですよ。あと病気したとか不慮の事故とかは仕方ないですが。そういう意欲を持って農家をやる方には思い切って支援するということです。

栗田顧問…しかし、国交省で2050年のビジョンみたいなものを昨年作ったのですが、その中に、中山間地域の1,000人のモデル地域、日本の標準的な中山間の人口構成、産業構成、一次産業地帯みたいなどころにしてシミュレーションをしました。何も施策をしないと小学

生が30年後、2040年には9割減になる。しかし仮に、ご夫婦と子供一人、それから夫婦でない男女が入って、トータル5人ですが、1,000人の中に5人入ると、それだけで9割減が4割減ぐらいに緩和されるといふような結果が示されています。

小竹町長…効果があるのですね。

栗田顧問…今のピーマン農家の研修制度の話して、研修員がお一人といいますが、その研修員はご家族ですね。ですから、研修員に4人子供さんがおられてとか、ご夫婦でということなので、2家族が農家として移住してさらに4人お待ちだという事は、それだけで計算では人口が増える方向に行くはずですよ。

小竹町長…新冠町は日高管内では人口減少が一番少ないです。ほとんど、微減程度です。

栗田顧問…来ている方は札幌からが多いのでしょうか、東京ですか。

小竹町長…札幌周辺が多いです。子どもも多い人では4人も連れてきた人もおります。そうすると入る家を探すのが大変です。町で家を探してやらなければなりません。

〔人口減少問題、小学校の統廃合と学校施設の売却〕

栗田顧問…アパートとかは山の中にはないですから、そういう場合どうされるのですか。公営住宅をお貸しするとかですか。

小竹町長…山には公営住宅もありません。農家が点在している状況です。

小竹町長…たまたま、学校の統合もそのときやっていました。町民からも怒られたのですが、人口が少なくなつて児童も一校10人か15人になったもので、学校統合をやりました。小学校9校をいきなり2校にしました。過去に1回も合併しませんでしたので、このままではどうにもならないという事で、普通は段階的に減らすんですけど、そんなことやったら子どもが戸惑うだろうし、地域も困るので一度に2校にしました。そして町で利用しない空き校舎を持つていても仕方がないので、民間の人に使ってくださいと校舎を売り出しました。それで学校は6校売れましたが、1校は売れ残っています。6校を全部グラウンドもつけて民間が買ってくれました。

栗田顧問…しかし、文部科学省の補助金が入っていますから、補助金適正化法に触れますけれどもどうしましたか。

小竹町長…文科省もこういう状況になってるので、柔軟になってきました。はじめは、まったくだめでしたが、途中で売った金は積立てをして、残った学校の改修費に使うなら補助金返さなくてもいいという制度を作ってくれました。

栗田顧問…それは町長のご努力ですね。

小竹町長…いやいや、そんなことはないですが、その結果、学校から離れたところに売れなかつ

た教員住宅が5、6戸あり比較的新しくったものを全部改修して、そこに農業支援員の方々に住んでいただいで、そこから農家の方が研修に毎日行っています。住宅の確保はなんとかできています。

栗田顧問…それはいいですね。余ったものを残してもしょうがないですし、壊すにもお金がかかる。使えるのなら直して使った方がいいです。

（学校が美術館へ）

小竹町長…民間に売った学校の山の中の1校は美術館になりました。ここに世界一の大きな絵があります。

栗田顧問…宗教画ですか。こちらの人がお描きになったのですか。

小竹町長…いやいや、外国の方です。高さが9m、横が27mという大きな絵が展示されています。その他の作品もいろいろありますが、メインがその絵です。所有者が大阪の人ですが、その幻想作家の絵が好きで、保管展示するところを探している時に、私たちが学校をたまたま売り出していました。ネットで見たのです。それで来られて、ここの体育館なら入るかもしれないという事で、ステージも全部取っ払うとちょうど入りました。

栗田顧問…27mですからプールですね。

小竹町長…あと教室にはその人の作品を入れて、美術館にして使っています。ここから車で30分以上かかります。

栗田顧問…なんとという美術館ですかね。

小竹町長…「ダイヤモンド」美術館です。

栗田顧問…国道に、看板がありました。

小竹町長…山の中ですから、行き先がわからないとよく言われます。

栗田顧問…これは悪魔の絵ですね。

小竹町長…幻想作家で、ダイヤモンドさんご本人が、健在ですから2度ほど、お見えになりました。私もお会いしてお話ししました。そこで人を集めてその人の講演を聞いたり、絵をみんなの前で描いたりします。描いた絵を、オークションにして、それを東北の震災復興に寄付するチャリティーにしています。

栗田顧問…この美術館には200点展示していますとありました。

小竹町長…各部屋にすぐたくさんあります。ダイヤモンドさんは、まだ70代になっただけで、健在です。たまにお見えになります。

栗田顧問…それは、人呼び込める種になりますね。

小竹町長…そうですね。去年あたりでその美術館に4、5万人は来ています。

栗田顧問…そんなに来館者がいるのですか。個人の美術館ですから入館料は取りますね。

小竹町長…1,000円ぐらいです。この美術館は、太陽という地域にあり、太陽小学校と呼んでいたので。

栗田顧問…あれは地域の名前ですか。太陽の美術館って書いてありました。

小竹町長…はい、太陽の森と言っていると思います。

↓情報通信、大容量通信回線の不足↓

小竹町長…ほかの課題は、どこでもある程度は整備していますが、光回線がこの市街地しかないで、この奥の地域、美術館からも言われていますが、光回線を引いて欲しいという要望が強いです。今使う割合がどんどん増えてきておりまして、町もNTTにお願いしています。NTTは採算性の取れないところは光ケーブル走らせるわけにはいかないといっています。国は、地方自治体で整備する場合は3分の1ほど助成しますという制度はありますが、結構お金がかかります。試算してもらいましたが、新冠町内の残っているとすると全部整備すると、10億円かかるとなりました。

小竹町長…私どものような小さな町で光回線だけで10億円かけることは、難しいです。馬の世界は世界と情報のやり取りもありますし、世界の情報も知りたい。送りたい画像も、動画で

送るということが大事で、それで取引も成立するらしいのです。その辺が今は全然できない状況ですから、馬の世界の人からもぜひやって欲しいと言われています。しかし、なかなか手をつけられないです。

栗田顧問…総務省の補助がいくつかあったような気がしましたが、それはもう探されましたか？

小竹町長…現在は、3分の1の助成はもちろんありますが、3分の2は地方負担です。国全体では人口規模で行くと99%光回線を引いて、終わっているといっています。確かに全国ではそうなのかもしれませんが、あと1%あるかないかという人がこのような地域に住んでいます。それを国はもう終わったという感覚を持っている。この考え方は、田舎に住んでいるものにとっては辛いです。

栗田顧問…地方創生のお金を使おうとするときに、地方がアイデアを出すことになりますね。  
小竹町長…それを何に、そして有効に使うかが問われることになります。アイデアと言っても、医療、福祉とか、他にもいろんな良いものが出てこないダメなのです。

栗田顧問…馬の話は面白いです。WiFiなどの無線ネットワークはあるのでしょうか。

小竹町長…はい、ただし沢に入るとなかなかうまく行かないところもあるみたいです。

栗田顧問…光ケーブルと無線を組み合わせるネットワークもありましたが。

小竹町長…はい、技術開発も進んできているので、もう少し様子を見るといい技術が出来るかもしれない。

小竹町長…この間隣町に、長谷川岳総務省政務官と北海道総合通信局の方々もお見えになりました。いろいろな話をしました。日高管内はネットワークの状況が似たようなところが多いので、日高管内の町議会議員さん方でも議員連盟を作りまして、いろいろな方に働きかけをしています。しかし、なかなかいいものは出てこないです。管内の議員連盟は、日高管内情報推進議員ネットワークといえます。

〔高規格道路日高自動車道の早期開通の願いとまちづくり〕

小竹町長…あとの課題は高規格道路です。そう遠くない時期に新冠にも来ますので、高規格道路の整備と合わせた町づくりを考えています。心配するのは、通過型の町になったら、町がさびれてしまうという心配があります。寄っていただけ、新冠のインターチェンジで降りていただける魅力ある地域づくりをしなきゃならないと思っています。

栗田顧問…新直轄方式で高規格道路を作ると、並走する国道の交通量が減ります。その時に高規格の場合はサービスエリアを作りませんので、インターのそばに道の駅をつくり、サービスエリアの代わりに機能を果たすことがひとつです。それでインターを降りた所に道の駅を

ひとつずつ作る計画をして、町も販売部分は土地も用意することになります。土地は国も駐車場部分には用意する仕組みになっています。今ここの道の駅はレ・コード館ですが、レコード盤の枚数は100万枚を超えたのですか。

小竹町長…まだ100万枚いってないです。今90数万枚でしょう。

栗田顧問…インターの道の駅は、基本的に中心は物販で、ここであれば魚、山のものです、農協・漁協と協力して行うことと、あと食事をするところがが必要です。簡単な食事とちよつと高級なレストランです。それを中心にやるのが一番いいと思っています。ところでインターはこの辺に出来るのですか。

小竹町長…すぐその道道のサラブレット銀座から出てきた突き当りぐらいです。

栗田顧問…それであれば、道の駅でなくても、今お話しした機能さえあればいいと思います。そして、既存の道の駅はレ・コード館の併設で、国道沿いで活用しますし、性格が違ふと思います。そこで降りてご飯を食べて、トイレ休憩をすることは、絶対必要になります。しかも日高の真ん中ですから、ちょうど休憩しやすいです。

あとは、先ほどの美術館をPRして、インターの道の駅と連携して、食べる・休む・見るという観光の基本をどうやるのかというだけなのだと思います。その時にここ新冠にしかないピーマンと美術館を活用することでしょうか。

小竹町長…もう今ぼちぼち工事は始まっています。厚賀インターは29年度に開通予定で、新冠インターチェンジまでがこの次の区間です。ここまで出来るのはまだかかるのかなと思います。すが、新冠町内でも、少しずつ工事が始まっています。

〓建設業界は、よく対応してくれる〓

栗田顧問…建設業界についていかがでしょうか。

小竹町長…私どもの町は、平成15年に新冠、門別、平取、日高の日高西部地区が大きな災害を受けました。新冠でも4名ほど死亡者が出ました。

台風10号が8月10日に来襲して、大雨が降りまして、大災害が起きました。その時以来、本当に建設業界の方々にはお世話になっています。災害の予防として建設協会の方々に事前準備をしていただき、大雨警報が出るとポンプを用意し、会社別に地区割りをして、対応していただいています。もちろん復旧にあたっては、大小含めて協会の方々に大変お世話になっています。町民の安心・安全を守るという事で対応していただいております。今年の3月10日にこの辺ではめずらしく大雪が降りました。重い雪で、ピーマンハウスが一部つぶれました。農家では生産のはじまる時期で、復旧に非常に困りましたが、建設協会の方々が後片付けを農家に奉仕していただきました。農家も大変感謝しておりました。地域の産業を助ける

事が、建設業にとっても将来はプラスになるという考え方もあるのでしよう。地域産業の確保のために頑張っていたらと思っています。建設業界の数も一時から見ると減りました。従事する方々も減りまして、私どもも困ったと思っておりますので、なんとか公共事業、私どもが発注する仕事も財源を何とか見つけて、毎年同じような規模で発注することが大切です。国や北海道にも継続的に、極端にあまり減ったり増えたりしないで、一定程度の規模を確保していただかないと、地域も守れない状況になると思っております。

栗田顧問…本場にそう思います。製造業では普通は受注残が3年間ぐらいあります。いわゆる仕事があるということですが、建設業は1年の中でしか仕事がないのです。それでは、将来を考えることは難しいと思います。建設業も、3年間ぐらいの受注残があれば、いいのです。全国的には建設業は6割が民間で4割が公共です。しかし、北海道は6・5が公共で、3・5が民間です。民間もほとんど都市部に集中しますから、たぶんこの辺の建設業は、家を造る建築屋さん以外はほとんど公共の仕事でしょう。町長さんが言われたような考えは非常に大切で、毎年、同じ予算額だよと言うだけでも違うと思います。

小竹町長…それなら安心して人雇えます。今だったら来年がわからないので、人は雇えないと思います。

栗田顧問…どこの産業も少子高齢化で働き手が不足して困っていますけど、建設業は極端に少

ないです。過去10年ぐらいで、北海道では全産業で24万人が職を離れ働く人が減りました。その中で建設業が12万人減っています。半分は建設業です。ものすごく大きいです。いま就業者を少し増やすとすると、建設業にもお願いしますと言っています。

小竹町長…安心して人を雇えるような仕組みでないとダメです。今年雇っても来年分からなようなことでは、雇用できません。また、若い人にも建設業で仕事をしたいと思えるような職場にしなければ来てくれません。

栗田顧問…就労環境を変えていくことが必要です。休み、給料は基本で絶対必要です。

〔東日本大震災復興のための宮城県山元町への職員派遣とコンパクトシティ〕

小竹町長…建設業も本場に大事な産業です。東北の宮城県に、去年とおとし、2年ほど続けて行ってきました。宮城県の山元町というところがありまして、そこに今も職員を1人派遣しています。うちも職員がいないので、最初は2、3年前に何とか町村で職員の派遣に協力してくれないかというお願いが全道に回りました。私も町村会の役員もやっていますので、出来る範囲の事はしなければならぬとおもい、2年ぐらい前、職員を1人、半年ぐらいの派遣をおこない、そのあと引き続き3ヵ月か4ヵ月ほど、また派遣しました。そして1年ぐらい間を置いて、今度は直に町長さんから派遣してくれないかと言われました、その

時に、技術職を派遣してくれないか、といわれました。しかし、うちらも職員数を減らしておりまして、技術屋も土木とか建築で1人か2人しか置いてないので派遣もできないものですから、申し訳ないのですが事務職を派遣することで、この4月から1年間1人派遣しています。私自身も復興支援の産業祭りをやるから来てくれないかというので行きましたし、去年は私どもの職員親睦団体が、研修旅行で、山元町へ行きました。合わせて5、60人の職員が行ったと思います。そういうことがあったので、実際に現場へ行きまして被害状況を見たら手伝わないわけにはいかないなあと感じを持ちました。

栗田顧問…手伝わないとダメです。私も北海道開発局にいましたので、3・11のあとにすぐ職員を出しまして、自分でも相馬港に職員が行っていたので、そこに行きました。本当に何にもない状態でした。もうすごい被害で、復旧復興はお金の問題ではなくて時間がかかると感じました。元に戻すには相当大変です。

小竹町長…山元町の年間予算は、うちと同じぐらいの予算で5、60億円くらいでした。人口はもっと多いですが、それが400億円とか、500億円の予算になって10倍の仕事をしなければならぬ。とてもできないものだから繰り越しすると翌年また同じ状況になった。町長さんも、去年かおととしに町長選挙があつて、町づくりをコンパクトシティーの考えで行おうとした。あそこも集落がバラバラで、高齢者がそれぞれ住んでいるので、これからはもう

少しコンパクトにし、3つぐらいの集落を作って、いろんな機能を固めた方がいいと考えたようです。しかし、町民の一部から今まで住んでいたところが何でダメになるのだ、と反対され、対立候補が出てきたようです。選挙には結局勝ったのですが、町づくりはそういう面で非常に難しいです。しかしいい機会だったと思います。

栗田顧問…ええ、いい機会です。しかし、すぐやらなくていいのです。どういうことかと言いますと、町の中心拠点となる公共施設をリニューアルする時に計画をつくる。しかし、離れたところの人たちには、強制はしない。そうすると、お年寄りも移転しなくても、若い人はその周辺に住むようになります。そこで、公共サービスを行って、同時に今まで行っていた離れたところの公共サービスも大変ですが継続していく。そのうちに、拠点から離れたところのサービスは少しずつ減って、一世代代わった時に、その中心が町になっている、という発想で町づくりはいいと思います。

小竹町長…だから焦ることはないのですね。

栗田顧問…ええ、一気にやると大変ですから。町長さんは、この町から逃げられませんか、先ほどのインターの周りに道の駅を造るところに、拠点をつくってもいいわけです。将来はインターの近くに住めるぞ、でも構わないわけです。そういうようにコンパクトシティーを見てもらえると、うまく行くのかなと思っています。

「高齢者への買い物対策と見守り」

小竹町長…今のことに関連するかもしれませんが、お年寄りが分散しているというのは、対応が大変です。ただ買い物に困るといふ話もあるので、今町で助成して、商工会に委託して年寄りのところに配達サービスをしています。注文聞いて、そして配達をする買い物支援対策です。

栗田顧問…それは商工会の事業ですか？

小竹町長…はい。専用の職員を2人ぐらい雇って御用を聞き、また、ファックスで送ってもらって、それを配ってお金をもらうことをやっています。

栗田顧問…御用聞き買い物配達ですね。それは絶対必要ですよ。

小竹町長…そうです。地域にはお店がないのですし、交通の便も悪いので不便に感じている高齢者が多くいます。今まで、町が多額の補助金を出して民間のバス会社が町の山の奥まで行っていましたが、使いづらい運行するので利用者が減って辞めることになりました。代わりに、今年4月から町がバスを運行するデマンドバスみたいな事業を始めました。バスを2台持ち、出来るだけ細かく利用しやすいようにしています。

小竹町長…町がここまでやらないといけない状況です。本当にきめ細かく住民が困らないようにしていくことです。

）学校売却はヤフーオークションで）

小竹町長…売り出した小学校の美術館以外の使い方は、老人ホーム等の老人福祉施設、それから大きな牧場の方のオフィスとかお客さんの接待用、地元の建設会社の事務所、札幌の宗教団体でミュージカルをやるための、子供たちの練習場所です。それからもうひとつが、中学を出て親元にもいれないし、就職もできない20歳までの子供たちを仕事に就けるように教育するスクールです。児童相談所で相談受けた子供たちを、なんとか仕事に就けるように教育する。その学校に泊まって、住み込んで教育する学校です。先生方をきちっと配置して、国からも補助が出ています。

小竹町長…始め、学校を売り出すなんて、なんということをするのだ、と言われました。しかし、逆に注目されて、ヤフーの官公庁オークションに出したのでヤフーの表彰ももらいました。官公庁オークションの先駆けみたいだったので。その後みんな真似し始めました。学校を統合したのは平成20年です。統合してすぐに売却しないと建物を管理するだけで大変です。無人になると学校のガラスは壊されるので、管理のために職員がずっと見て回っていました。

栗田顧問…いい話題です。観光施設ではない施設で、今の小学校の使い方のように、こういう使い方がありますよとか、こういう人たちがここに住んでみてはどうですか、という提案を、

町のホームページに出すのはいいことです。

「民間宿泊施設は、なかなか成立しにくい」

栗田顧問…今回ここで泊ろうとして宿を探しましたが、出てくるのはレ・コードの湯でした。それでやはり宿泊施設が足りないのかなと思えました。商売の人が来ようとする、宿泊施設がもうひとつあつた方がいいかなと思いましたが。地方はどこでもそうなのでしょうが。

小竹町長…その辺が非常に難しいです。理由は夏と冬の観光で利用する方の差が激すぎることです。ほとんど雪が少ないというのが逆にマイナスで、中途半端です。第三セクターで乗馬クラブをやっています。そこも夏はどんどん人が来てくれます。しかし、その水準に合せた人や馬を整備すると、利用が極端に少ない冬もその人件費や、馬の管理費がかかり、経営的に成り立たちません。私も副町長の時に第三セクターの社長をやっていました。その当時、夏はインストラクターを4、5人雇って、冬は仕事が無いのでニュージーランドに行ってもらいました。そして、翌年になったら戻ってこいというやり方で、何年かやりましたが、それではいいインストラクターは定着しません。新冠を半年で辞めて、ニュージーランドに行ってきてくれでは定着しないので、今は辛いです。4名を、冬もずっと雇っています。こういう経営しなきゃならないのは、本当につらいです。だから夏は混んで待たせて不評を買おうと

きもあります。新冠温泉レ・コードの湯もそうです。夏はけっこう混みますが、冬はダメです。

栗田顧問…長い時間ありがとうございました。

平成27年4月9日14:30～15:30 於…斜里町商工会

土橋 利文 斜里町商工会長

市川 正親 商工会事務局長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

西村 幸浩 一般社団法人網走建設業協会副会長

（オホーツク管内をまとめるために包括連携協定を考える）

土橋会長…オホーツク管内がバラバラでは困ると考えています。この間も商工会議所の永田会頭と話しましたが、包括連携協定でも行い少しまとめないといけないと思っています。昔からオホーツクは地域バラバラなので、それはある意味では特色でしたが、そろそろみんな力を合わせて何かしないと、時代に取り残されてしまうという話をしたのです。

栗田顧問…永田さんは、確か北海道商工会議所連合会の地域振興委員長をしていますね。

土橋会長…私も北海道商工会連合会の地域振興委員長やっています。それでこの間、北海道の段階で商工会連合会と商工会議所連合会で包括連携協定を結びました。私が担当委員長やっ

て、永田さんが商工会議所の担当委員長でした。オホーツク管内は管内でやってみようという話がこの間出ていました。

土橋会長…商工会連合会と商工会議所連合会で結んだ包括連携協定では、このあと共同事業を行いたいと考えています。その前に管内は管内で結んでおかないと進んでいけないことになりません。

土橋会長…北海道では40数社ぐらい包括連携協定を結んでいると思います。それで毎年知事公館で食事会と称して、包括連携を結んでいるところからワインなどの商品を持ってきて、食べながらやっているんです。

土橋会長…地域的にみると、オホーツクが置いていかれているのです。オホーツク管内では1社も連携している会社がないのです。それでいつもさびしい思いをしています。他地域は必ず1社や2社はあるのです。

栗田顧問…それは何故ですか。会社の規模でしょうか。

土橋会長…規模は関係ないと思います。例えば、根室管内も信金さんが包括連携協定を結んでいます。

栗田顧問…規模じゃないという事は、経営者の意識ですか。

土橋会長…意識というか、必要があるか、ないかの判断は経営者の問題でしょう。それオホー

ツク管内に信金は3社あります。ところが他の振興局では1つぐらいしか信金がないです。そういう意味で、地域心というのか、意識があるかないかは多少違うと見ています。

人口減少はどこでも起きることで、それを前提に地域の生きる方向を考える

栗田顧問…地域の課題の背景にあることは人口減少と思っています。そこから派生する色々な経済の縮小とか、生活基盤の維持という話が派生していくと思っています。人口減少と課題と思われている事を、お話しいただきたいと思います。

土橋会長…人口減少は、どこの地域でもこれから2050年に向かって心配していることです。が、基本的には地方よりも東京・札幌のほうがこれから高齢化に対しては非常に苦労すると思っっています。今はいいですが、今若い人もいずれは年を取っていくわけですから、そういう意味からすれば地方よりも都市の方が大変という意識はあります。

栗田顧問…実際に私も本当はそう思っっています。札幌を見ていますと自力で生産する機能を全く持っていないところ。そこで、高齢化していくと生産人口が大きく減少して、金を生まなくなり、逆にお金を公的に出さなければいけない人口が大きく増えると考えていくと、札幌は意外に厳しいと思っっています。

土橋会長…逆に今200万人いるから、2050年に100万人維持できるのかと思っっています。

栗田顧問…人口問題研究所の推計ですと単純推計で2040年に142万人です。

土橋会長…増田レポートによると、この管内については18市町村のうち、17市町村が消滅して斜里だけが残りとなっていましたが、そんな事はないと思います。この管内で1町だけ残ってやっつけていけるわけではないです。全く架空の論理であって、いくら人が減っても、市町村は存続すると、楽観的に見えています。ヨーロッパを見ても人口800人か1,000人ぐらいの村でも、所得だけを考えると非常に厳しいでしょうけれど、良い環境の下にもすごく快適に暮らしているという状況がありますので、少し価値観を変えれば田舎の生活は、経済的なものばかりではなく、自然環境の下に快適に暮らすという価値観を持った人にとっては非常に暮らしやすい所になるのではなからうか、と思っっています。

それから、生産現場は、生産性と一次産業の維持さえできれば、人口が減った方が1人当たりの所得が増えるのです。そういうことから、基本的には悲観的に考える必要がないかなと思います。ただ今一番心配しているのは、商店街です。これは見事に疲弊していることは事実です。そのなかで、地方にとって一番困るのは、食料品の問題だと思います。あとの商品であれば、インターネットで1日もあれば買える時代になっていると思います。ここ数年必ず吹雪があつて道路が閉鎖されます。下手をすると3日4日閉じ込められ、食べる物がないという状況になる危険性があります。今地元の商店では在庫を過多に持っていますので対応

できますが、今のジャストインタイムではコンビニでは、毎日毎日ピストン輸送で、それもコンピュータで繋がって、どういうものが不足しているかでピストン輸送していますが、3日4日止まれば、食べる物がなくなる状況があるのです。

栗田顧問…東日本大震災の3月11日に札幌にいましたが、あの時、水はあつという間になくなりました。続いて被災地に紙おむつを送ることになり、小売店を探したのですが見つかりませんでした。後で聞いたことですが、石狩湾新港に北海道におむつをデリバリする倉庫があるのですが、そこが5日で空になったということでした。ですから自動車輸送、フェリー輸送、船の輸送、それらがないと、北海道は北海道で作っていない物は5日でなくなると実感しました。同じことが地方にも起こるといふことです。

土橋会長…それから、去年、実感したのですが、80歳近いご老人がコンビニに吹雪の中買い物に来て、「弁当ないのか」と聞いたら、「ない」、「カップ麺ないのか」と言ったら、「ない」、「あ何にもないんだね」と言つて帰つたと言う話なのですが、よく考えれば、おでんとか肉まんとか食べる物はあるのです。だけどマニュアル通りにしか店員は対応しないですから、何もないですとそれで終わり、何もないのかと帰つていったということでした。そういう状況を見ると、マニュアル通りやっているから仕方ないのだろうけれど、もう少しフレキシブルに対応する店員教育をしてもらわないと、大変な事になると感じております。

栗田顧問… 店員さんも若い人だけではなくて年の功が必要です。

土橋会長… そういうことで、生活機能維持に関して、食べ物に危機感を持っています。なにか起きた時にそれがどういふふうに関能するのか、多少心配です。

栗田顧問… 地元のを地元で供給する仕組みが本当はもう少ししないとダメですね。

土橋会長… しかし、コンビニは先々に様々なことをやるのです。前々から言っているのですが、地元の商店街が御用聞きを復活すべきだと言っています。ところがコンビニがもうすでにやり出しているという話になる。先手、先手でコンビニにやられているのは将来的にはいいのか疑問が残ります。

栗田顧問… コンビニにやられると負けます。

土橋会長… システムで負けますね。下手すると佐川急便、クロネコヤマトとタイアップして始めると、地元の商店は、全然かなわないです。

土橋会長… 最近、北海道開発局でも、災害の時に吹雪でも避難場所としてコンビニを利用するみたいです。何かあったら無理しないでコンビニに避難してくださいと指導している。そのことと裏腹の事が地域では起きているという気がします。

「地域の企業をどのようにして継続するか、業種転換していくこと」

栗田顧問…今駅前の地元の商店街を、拝見してきましたが、きれいになって食べ物屋さんばかりちっとなつていてという感じですが、辞めていく方が多いのでしょうか。

土橋会長…私が会長になって、平成19年から23年度まで5年間かけて、区画整理事業で道路拡幅を実施しました。道路拡幅は1・2・30 kmで、目玉になるところに区画整理事業1・3ヘクタールを導入して、そこに道の駅、民間の町づくり会社を作つて、物販を行う核となる施設を作りました。それで4、5年経つたのですが、せつかくシャッター街の商店街を失くしたのですが、またぼつぼつ出てきた状況です。根本的には、この問題はなかなか解決しないという感じですよ。

栗田顧問…それは後継者不足なのですか？

土橋会長…これは建設業とか商工業とかに関係なく、さらに農業漁業に関しても、いわゆる後継者不足は地方においては深刻に起きている状況です。これはどのくらい収入があるという問題ではなくて、後継者として何をやりたいかという価値観が違う場合は絶対その職業には就きたくないのが今の時代で、収入が多いか悪いかというより自分として生きがいを持てるかどうかというのが、これから問題になっていくのではないかと思っております。皆さんが言っているように後継者がいないわけではなくて、田舎に帰ってきたい人はいっぱいいるけ

れど、自分のやりたい職業とマッチングしてない。それをこれからどうやって埋めていくのだろうか。よく言われるように、地方に企業家を育てなきゃならないといいますが、私達のような既存企業を、いかに企業転換しながら企業内起業を進めながら、企業を残すというのもひとつの手とっています。そのためには、創業よりもエネルギーを非常に多く使うものですから、そのための補助金、補助制度がこれから必要と考えています。そのために小規模企業振興基本法と小規模企業振興支援法が最近6月に出来たのですが、道も条例を作つてくれるという事で、町にもお願いして条例を作つていただきたいと話をしてるところです。要するに持続的に企業の継続化を図つていかなければ、と思つています。土建屋は土建屋が出来るといふ事ではなくて、土建屋だけど、その地域に必要な土建屋の数は、おおよそ決まっているわけですので、これからどういふ業種転換が必要かを判断しながら雇用を守りつつ、会社を維持する事を考えていかなければならないという話になると思います。

栗田顧問…業種転換は、なかなか難しいですね。

土橋会長…私の会社は実は約100年経っている企業ですけど、私で4代目になります。4代とも全部職業が違います。あまり大きくはならないですが業種転換しながらなんとか生き延びています。

栗田顧問…そうですね。それでは転換する意味では、既にご経歴があるから、また考えなけれ

ばいけないということなのです。

土橋会長…私の会社ばかりではなく、地方もそういう時代で、会社を黙ってつぶすのもっていないと思います。その人材とか、会社が持っているいろいろなものを何かの形で残していかないと地方の雇用は守っていけないという感じがします。その辺はきちつとやってかなければいけないと思います。

栗田顧問…条例作ってもらって、一緒に商工会として活動するという話ですね。それは国の法律にぶら下がっている補助金ですか。

土橋会長…そうです。小規模企業振興基本法と支援法と二つの法律が出来たのです。支援法のほうは商工会に関係する法律です。それに基づいて今高橋知事が中小企業・小規模企業基本条例を作ることをご約に掲げていただいで、地方の企業を持続的に継続させることを目的とする話です。その条例をもとに今度は市町村で同様の目的の条例を作ってもらうことにつながっていくと思っています。

栗田顧問…確かに、それであればつながります。

土橋会長…今まで小規模企業には光が全然当たらない。

土橋会長…今まで中小企業でひとくりです。それでは中小企業にあてはまる企業は、地元は何社あるかというと、ほとんどの企業は社員数が片手以下ですから、88・3%は小規模零細

企業です。

地域は一次産業で生きる、しかし、その流通には高規格道路ネットワークが必要

栗田顧問…今農工商連携とかで一緒にやりましょうという声が強いのですが、商店街のお話以外に、農業や漁業のお話はいかがでしょうか。

土橋会長…ようやく最近農業がいろいろやるようになりました。管内でもうちの町もそうですが、とりあえず今までの農業の流通系統でいくと、地元のものや何一つ証明するものがなかった。それで農協といろいろ相談させてもらいまして、うちの町では斜里町産100%の小麦を作ってくれとお願いしました。これはコスト高になるのです。混合で製造するものを別にしておいて、斜里町産100%の小麦を作ってもらい、それを使って農協さんには麺などいろいろなものを作ってもらい、商工会はお菓子、スイーツを作る形です。今、それを進めています。斜里町は弘前市と友好都市30年なので、弘前からりんごを持ってきて、アップルパイを作ったり、ギネスに挑戦という事で、2m50cmぐらいの直径のアップルパイを作って、ねぶた祭りに無償で配布したり、地元のお菓子屋さん5軒には新しいスイーツを作って売ってもらったり2、3年前からやっています。その小麦と同じ発想で、私はオホーツク振興機構の理事もやっていますので、今度はオホーツク管内でオホーツク産100%の小麦を作っ

てもらい、推進している現状です。

栗田顧問…小麦が今いろんなことで、パン用の小麦とかああいうのが出てきたし、生産量増えましたですね。

土橋会長…春よこいななど、品質的には非常にいい小麦です。

栗田顧問…そのようですね。

土橋会長…斜里町の小麦生産は、単収（10 a 当たり）でも全道トップクラスであり、帯広、十勝よりはずっと多いと思います。

栗田顧問…私港湾の仕事もやっていますので、釧路港に小麦サイロを建てたいということ。北見の農協から言われて建てたのにはびっくりしました。農業のほうに聞いたら、きたほなみと言う小麦の生産量が1.3倍に増えた。それで供給量が増えたと言っていました。

土橋会長…こちらは流水来ますから太平洋側に輸送しなければなりません。

栗田顧問…そうですね、どうしても出荷のためには釧路を使わないといけません。

土橋会長…釧路か十勝です。

栗田顧問…両方ですね。だから広尾にも小麦サイロが増設されました。

土橋会長…ただ十勝のほうは高速道路がつながってないのです。広尾までが全然整備が動いてない。さらに釧路と網走間は高速道路がなにもないですからね。

土橋会長…私はこの管内は日本のチベットと言っています。高速道路もない、高速鉄道もない、飛行機だって50人100人乗る飛行機しか飛んでない。これじゃ置いていかれる話です。

土橋会長…稚内には高規格道路はトンネルが出来ればもうすぐつながる。こちらは近々つながるのが1本もない。それで今新幹線、新幹線と言っているのであれば、少なくとも女満別と函館を飛行機でつないで欲しいと言っています。130万人のインバウンダー、外国人の観光客が入ったと北海道は言っているけれど、ここはただか外国人の宿泊は8万7、000人ぐらいです。やっぱりつなぐためにはいろいろな交通網や仕掛けがあるので、その辺を知事にもお願いしている。今年是新幹線開業と、知床世界自然遺産10周年ですから、それを2枚看板にしてなんとかインバウンドの観光客をこちらの地域にも引っ張れないかと考えています。そのためには、それ以前に道路交通網が必要です。

栗田顧問…昨年まで広島市におりまして中国地方5県を管轄していましたが、新幹線、高速道路は、北海道と比べればほとんど揃っている感覚です。

土橋会長…そうです。東北6県もほとんど揃っています。今や社会資本整備では北海道と東北は逆転しています。

栗田顧問…確かにものすごいスピードで作っています。私は、生まれ山形ですが、山形の真ん中に高速道路つくっているのですが、10年くらい前は、私が生きているうちは出来ないと思っ

ていました。

土橋会長…今仙台がものすごい。震災景気というか、駅前も駅裏もすごい勢いで整備をしている。

栗田顧問…駅裏に、あんなにビルが建つたのにはびっくりしました。

土橋会長…東京から仙台まで新幹線で1時間半です。盛岡まで2時間ちょっとです。やはり便利がいいです。

栗田顧問…私は東北の育ちなので、昔から新幹線がないのは変だと思っていました。皆さんにこの話をすると、だけど飛行機があるからいいじゃないかと、皆さんそういう答です。私は、交通手段としては、便利さが全然違うと思っています。

土橋会長…地上で移動することは飛行機とは違う。同じ1時間半でも、飛行機に1時間半乗っているのは監獄にいたみたいな感じです。列車の1時間半は自分で立って歩いて食堂車へ行ったりして、自由にできるからあつという間に着く。飛行機の1時間半は遠いし、車で空港へ行つて30分なり1時間待って、飛行機に乗って、到着して、また移動がある。そういう意味からすると地上でつながっているのは便利がいいです。

栗田顧問…やはり道路ネットワークは必要です。

土橋会長…要するに、何もないう事という事はユニバーサルサービス以前の問題です。

栗田顧問…ユニバーサルサービスは国がやらなきゃいけない最低限のサービスですから、そのサービスが新幹線だったり、高速道路だったり、かまわないと思います。

土橋会長…だから、札幌に来るのにも我々が生きている時に来るかどうか分からない状況です。以前は、金沢新幹線と同時開業だったはずなのに、今は2周ぐらい遅れていると思います。

### 〔商工会活動と職員〕

栗田顧問…若い人が働きやすいようにと話をされていましたが、最初のお話のような中で作り出しているということですか。

土橋会長…若い人はね、地方には仕事がないのです。職業は限られているので、こういう事をやりたいと言っても、その職業がマッチングしなければ、いくら居てくれと言っても残ってくれません。そういう意味では、せめて、管内にある色んな企業に当てはまるように、そういうところとマッチングさせるといふ事業もこれから必要なかとおもっています。何も札幌へ行かなくても、この管内にそういう勤め口があるんですということを、きちんとストックしておくようなところが必要と考えています。それはこの町だけではなく、管内の人口維持には必要です。

栗田顧問…今までも、商工会は、そういう努力をハローワークと連携しながらやっておられた

のではないですか。

土橋会長…それがなかなかうまくいかないのです。町役場も商工会も、最近は、採用試験が統一試験なのです。全道一か所で試験を行っているので、圧倒的に地元の人採用はないのです。なぜこういうことが商工会で起きたかと言いますと、町村合併で商工会の数が圧倒的に減ったのです。そうすると、職員が余ります。小規模事業者数ごとに職員数が決まっていますから、1プラス1が2にはなりません。二つ合わせても職員は増えません。そうすると、その余った人材は、全道で回さなくてはならないことになりました。そうすると今度は全道一律の採用になるのです。それが始まって、今度は、札幌で採用した人が、5年で異動があるルールとなつて、5年経つと、みんな札幌近辺に帰りたいがるのです。田舎に残りたいという職員はいないのです。

栗田顧問…そうすると、先ほど言われた地域のために色々な新しい形をつくらうという動きをするのには、やりづらい面がありますね。

土橋会長…やりづらいというよりも、理解したと思つたらもういなくなる。それと事業やるにも、職員がいらないものだから事業の立上げ補助金をもらおうと考えてももらえない。

栗田顧問…最初の補助金申請書を書かなければいけないです。

土橋会長…契約する人間がいらないのです。

土橋会長…それ以前に、商工会としても認定機関があるから、職員が変わったので、それも受けられない。

市川事務局長…それを受けないと、今度は開業する事務所の方が融資制度を受けるのに、いい融資制度を受けられなくなるのです。商工会としてそういう機関に認定されることが前提となります。

土橋会長…地方創生と同じです。今まで一律になっていたのですが、3割ぐらいカットして3割分努力したところに配分しますというのですが、ある意味では切り捨てになります。それと同じことが商工会でも起きているのです。

市川事務局長…特に小規模事業者に対して、どういうふう guidance するかを問われているのです。栗田顧問…それは大変ですね。しかも職員が五年ごとに変わる。

市町村長は自治体を経営する能力が必要

土橋会長…私たちも大変です。それから、首長は、経営能力、力量を問われています。首長は努力しない自治体はないと言っていますが、中小零細の社長は、努力したが潰れたので、すみませんとは言えない状況でしょう。努力しているが結果がついてこないものは、努力したとは言えないという話を首長にしています。

栗田顧問…町村長さん、市長さんは、地方自治と経営の感覚がないと思います。

土橋会長…そうでないとできません。これからは、結果を出してもらわないといけません。努力するだけでは、困ると考えています。

栗田顧問…多分全体が人口減少とともに縮んでいく世界になります。そのこと自体は先ほどおっしゃられたとおり、考え方次第で悪い事ではないのですが、どうしても落ちてくるころが出てくることになります。

土橋会長…それを一番先にやるのがコンパクトシティで、中心市街地をぐつとまるめないと今のものを維持できないということです。そうすると、いろいろ絡んでくるのですが、例えば中心市街から外れると地価が落ちるとかの問題になり利害関係が発生したりします

栗田顧問…地価が落ちると、自分が売ろうとしたのに高く売れないとなります。

土橋会長…行政としてはやりづらい。だけど、やらないと行政としても残りません。

栗田顧問…行政が線引きしてくれないと絶対できません。

土橋会長…それをやるかやれないかという、厳しい立場に市町村長は立っていると思います。栗田顧問…しかし、そういう不安定さは、いつの世にもおなじようにあった気がします。

土橋会長…選挙制度によって民主主義は歪められているというのか、中央政治は、できないこともやれると言う人が当選する時代になった。たとえば、町に病院は維持しなすと言うのだ

けど、とうてい維持できないと思います。札幌に住んでも病院に行くのに30分や1時間かかるのですから、通院するときは30分や1時間かけてもいいのではないかと私は思っています。

土橋会長…田舎の人間は網走や北見の病院に通います。学校もそうで、北見、網走の人間は札幌へ行きます。そして札幌の人間は学校も病院も東京へ行きます。東京ではアメリカとかヨーロッパへ行きます。だからキリないことです。だけど人間は、そういう心理が働きます。

栗田顧問…斜里町の4代続けて会長さんはここにお住まいなのですか。

土橋会長…ええ。

栗田顧問…先ほど代ごとに職業が変わりましたっておっしゃりましたが、どのような仕事でしたか。

土橋会長…一番初めは曾祖父が農協の初代組合長で、農家やりながらでんぶん工場を運営していて、酪農を斜里に一番初めに導入したのです。祖父は、今度は木材業を始めて、全道に4つぐらい工場がありました。3代目で建築を始めまして、4代目の私で土木を始めたのです。土橋会長…木材業は、知床が世界自然遺産になって辞めました。

→建設業を経営するためには、安定した規模の公共事業予算が必要↓

栗田顧問…建設業は今やっておられますけど、厳しいのでしょうか、なんとか地域で続けない

といけないと、お感じなのでしょうか。

土橋会長…仕事は今更増えるとは言えないのですが、安定的に仕事があればと思います。その辺を将来ビジョンが分かるようにしてもらったほうがいい。本場に時代に翻弄されて、設備投資も過大にしたら、将来苦しむだろうという感じがしないわけでもない。拡げる時は楽なのです。しかし、潰れる時は倍以上のエネルギーがいる。今のままでは大変だと思います。

栗田顧問…今の国の公共事業予算規模では、毎年度安定的に配分する方法しかないと思います。土橋会長…予算は10年ぐらいするのか、5年で終わるのが問題なのです。

栗田顧問…そこを10年とは言えないと思いますが、5年くらいは続けると言える状況にあるという感じはします。

土橋会長…その辺の用途を、ロードマップなりで示してくれないと難しいです。

栗田顧問…北海道の建設業は公共事業の比率が高いので、そうすると国の予算の縮みで本当に苦しむのです。

土橋会長…それで若い人を入れていいか、非常に迷う。採用したのはいいけれど、5年で辞めてくれとか10年で辞めてくれというわけにはいかない。だから、自分の息子にしても、後を継ぎなさいと大きい声で言えるかというところ、これまた言えない状況です。

栗田顧問…それは思います。

土橋会長…それと、民主党政権時代のひずみで優秀な技術者は少なくなって、若い人は育つのにこれから7、8年かかると思います。コンクリートから人へと言われている時代に、親だつて土木とか建築にはやらないです。将来のない業界に、子ども達も行きながらないです。そういう連中が今卒業してきているわけです。今新たに入ったとしても、大学に4年とそれから企業入つて3、4年経たないと一人前にならない。

栗田顧問…7、8年は長いです。

土橋会長…だからさつき言ったように、10年このまま続くのであればそういう覚悟があるけれど、5年で終わるのであれば覚悟はできませんという話になります。

栗田顧問…とりあえず、アナウンスだけでも今年と同じ、という話がそれぞれで言えるようになればいいと思います。

土橋会長…今年も消費税分までは増えませんでした。

栗田顧問…北海道は少し全国の配分よりは増やしてもらったのですが3%は増えていないです。

「建設業は、商工会活動などの地域活動に積極的に係わってほしい」

土橋会長…それから、もう少し建設業の方が、商工会なり地域のほうに積極的に携わってもら

わないと困ると思います。管内に15の商工会がありますが、その中で建設業の商工会長が3人なのです。それでも最近増えたのですが、私が会長になった時は一人しかいなかった。なんだかんだ言っても、各市町村で一番大きい企業は建設会社です。それが黒子に徹していますが、もう黒子の時代は終わって、表に出てきてくれないと困る。

栗田顧問…表に出るとみんな嫌がって叩かれた時期がありました。

土橋会長…いやいや私は十何年も商工会長をやっています。

栗田顧問…けっこうみんな嫌がった部分もございました。

土橋会長…それでも、出てこないといけないと思います。

土橋会長…青年会議所はやったことがありますが、商工会はやったことがなかった。商工会の理事もやったことないのに、今は副会長や会長になっています。岩田さんが北海道青年会議所会長の時に、副会長をやっていました。斜里町は青年会議所もありました。

栗田顧問…青年会議所は今もあるのですか。

土橋会長…ありますよ。一時は私たちの時は網走より大きかったです。商工会ではどこへ行っても知っている人いないので非常にさびしかった思い出があります。

栗田顧問…長時間、貴重な話をありがとうございました。

平成27年4月13日 13:30～14:30 於…北広島商工会

上原 康雄 北広島商工会長

高田 信夫 北広島商工会事務局長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

栗田顧問…商工会活動をおやりになっていて感じる地域としての課題をお聞かせ願えればと思います。

「北広島市も人口減少が進んでいることに驚いた」

上原会長…北広島市の人口が1年前くらいに6万人をちょっと割りました。2025年までは切らないと言っていたのです。

市役所の政策で18歳未満のお子さまがいて夫婦がある年齢以下の場合には、他市などから来る方も含めて、住み続けるために住宅を取得した場合、中古も含めて50万円を助成することをしています。それで人口の減少を歯止めする事業として取り組んでいます。

地方創生会議で2040年までに人口減少で896の市区町村がなくなると聞いてびっくりしました。北広島はその中には入ってないですが、引っかかりそうなのです。

栗田顧問…そうですね、私も読みましたが、ほとんどの市町村が引っかかります。

上原会長…中身は見えていませんが、聞いて信じられないと思いました。この地区は江別・千歳・恵庭・北広島でまとまり経済も政治もだいたいその地区で動いています。その中で北広島が引っかかるのかなと思つたのですが、現状はそういう状態です。

〔北広島市をもっと知ってもらえるように活動する〕

上原会長…市では輪厚工業団地をつくりました。この時代に新しい工業団地をつくって企業進出は本当にあるのかと心配されましたが、今のところは3割ぐらい埋まりました。場所的にも空港にも札幌にも近いので、人気があつて順調にいけばここ2、3年で80%以上いくのではないかと聞いています。

栗田顧問…今北海道に進出してくる企業が少し増えてきました。

上原会長…増えてきました。東日本大震災以降リスクを回避するために、北海道、特に北広島は安全です。地震は多少ありますが津波の心配はない。今年から工場が稼働しているところもあります。あとは現在、名古屋の中北薬品が工事中です。そして輪厚工業団地ではないで

すが、この商工会に近い土地に石屋製菓も工場を作り、3つのラインを移設することのようです。来年夏ごろ着工すると聞いています。そういう面では明るい。もう少し町をPRしていかないとダメなのかと思います。

商工会も市が進める北広島市シテイセールスに共同で取り組んでいて、新たな都市型観光推進協議会を立ち上げ協議を行っている最中です。ともかく北広島をもっと知っていただいで、魅力をなんとか作り出そうと努力しているところです。

栗田顧問…それは行政と商工会と観光協会ですね。観光協会は商工会と一緒にですか、それともまったく別ですか。

上原会長…事務局は市役所の商工担当です。都市型観光推進協議会の第1回目で、私の考えでは将来は観光協会も独立しないと観光振興を集中してできないことなど、いろんな課題を話しました。

栗田顧問…北海道は、最近観光客がどんどん増えていますから、都市型観光も当然必要で、観光協会も独立した方がいいような気がします。

上原会長…その方が集中できますし、いろいろ課題を見つけてすぐ動けます。

栗田顧問…その都市型観光推進協議会を立ち上げられて27年度から活動することになるのですか。

上原会長…今協議中ですが、次回は平成27年4月14日で第5回目です。今年度中にある程度進むと思います。

〔商工会の会員の現状は、入退会により減ってはいない〕

上原会長…商工会の会員は730名弱ですが、入会はしていただけるのですが、同じぐらい廃業していきまます。経済が厳しいと思います。退会の人はほとんど廃業です。

高田事務局長…後継者がいないか、会長が言われたように景気が北海道はまだ上がっていないので、会社を持続していくのが難しいという方がおられます。

栗田顧問…北広島商工会の入退会状況は、ここ4、5年くらいはそのような感じなのですか。

高田事務局長…全国的には会員数は落ちていますが、ただここ3、4年は730前後を維持していますので、なんとか組織的には成り立っています。

栗田顧問…工業団地の企業誘致なんかも市役所と一緒に活動されているのですか。

上原会長…商工会自体ではやっていません。市役所が中心で、専門に職員がっています。引き合いはかなりあるようです。石屋製菓では、恵庭のグリコの工場跡を検討したことがあるらしいのですが、駅に遠いのです。北広島の場合は、駅から見えるぐらい場所で、駅に近い。恵庭は土地価格が半分ぐらいで買えたらいいのですが、こちらのほうがいいと決断したよう

です。

栗田顧問… 駅から遠いと従業員が嫌がると企業の皆さんは言っています。

上原会長… 北広島は札幌に15分くらいで行けます。こんな便利なところは無いのです。さらに空港には20分弱で行けます。

栗田顧問… 私は札幌から来ましたがエアポートに乗ったら16分です。

上原会長… 最高にいい場所ですが、それがなかなか浸透していません。北広島はいいところと言いながら住むまではいかない。特に環境は緑が多い。そういうところが活かされていないといふか、活かされてない。

栗田顧問… 上野幌からJR沿いにずっとサイクリングロードありますが、あれはすごくいいですね。あれも何年前に整備されたのですね。

上原会長… もう10年以上前になります。

栗田顧問… 列車に乗って見ていると少しずつ道が伸びていく感じだったです。

高田事務局長… これから恵庭をぬけて千歳に行く構想です。恵庭の境までは道路があつて整備しています。

上原会長… あそこでマラソンもやっています。

栗田顧問… そうはいつでもこの区間は林があつて一番風景がいいと思います。

上原会長…桜も植えているから、あと何年かすればすごく良くなると思います。

（商工会には、大手企業が入らない）

栗田顧問…商工会会員は、先ほど入会する人と退会する人がいるとお話されていましたが、退会する人は1回退会したら再入会はないのですか。景気が悪いことと後継者不足ということでしたが、後継者不足はなかなか難しいことと思います。

高田事務局長…ゼロではないのですが、ほとんどありません。

栗田顧問…退会することは、倒産ではなくて先の見通しがないという理由ですか。

上原会長…そういうのもあります。それと組織率は5割以上ありますが、ただ大きな企業はなかなか入ってくれないのです。大きな企業にはあまりメリットがないと言ったら、そうかもしれないのですが、やはり北広島で事業をやっている以上は地域貢献の一環として、入会していただきたいといつもお話しています。昔は資本金で年会費決めていましたが、今はある程度残っていますが、一番高くて年間6万円弱ぐらいです。昔であればスーパードライエーが入っていた時は月10万円ぐらいでした。ただ企業も変わってきて札幌の本州資本のスーパードライエーなどは入ってくれない。

栗田顧問…そうですね。そういうところにはお願いには行かないのですか。

上原会長…支店には行っています。店長に会っても本部に伝えるぐらいで、本部の判断する人に合わないダメです。過去に、オートバイ販売店の店長が、ぜひ入りたいと言ってくれたのですが、札幌の会議でその案件を上げると、入らなくていいとなりました。現場の人は入って協力したいというのですが。そういう事があって、市で条例を作ってもらいました。北広島基本条例で、商工会や工業振興会の入会の責務をうたっていました。しかし、強制力がないのです。

栗田顧問…基本条例ですね。しかし、今はコンプライアンスやCSRの話もあるのでしたら、本社の社長はいいことを話しても現場で全然やっていないと話をしたほうがいい気がします。今は、地方創生の時代ですし、この地域で金儲けされているのですから。

高田事務局長…大きい企業に行ったら入会はお願いしています。商工会から受けるメリットは、大きい企業はすでに全部持っていますので、地元で立地しているので地域振興に協力する責務が会社にはある、というのが考え方です。それでよつ葉さん、そして今回、道新総合印刷所さんも4月1日に入っていたいただきました。よつ葉さんは去年か一昨年かに入ってもらっています。

栗田顧問…北海道の企業は入会するでしょうが、本州の企業はどうですか。

上原会長…あまり入会してくれません。ご存知のように本州のスーパーは今日売ったお金はそ

の日のうちに東京に全部送ります。

栗田顧問…そういうところを直さないと、地方に金は回らないと思います。

上原会長…本州のスーパーが本店することで交通渋滞を起こしたり、あるいはゴミ処理とか、いろいろな問題が出てきます。それにもかかわらず北広島で行うイベントには、まるつきり協力してくれません。私たち小規模企業の人は寄付していますが、知らん顔です。そういうところを多くの人に知ってもらいたいと思います。

〔小規模企業振興基本法と経営発展支援計画の策定〕

栗田顧問…商工会の小規模企業振興基本法と支援法の2つ出来ました。それを使って何かをおやりにする計画はございますか。

上原会長…まだ経営発展支援計画を策定中です。5月の予定だったのですが、一次で出した商工会の計画が、国が想定しているレベルでなく全国で見直しがかかりました。

栗田顧問…北海道ではいくつ出していましたか。

上原会長…今のところ23の商工会が最初出しています。

高田事務局長…十勝管内がたくさん出しています。石狩管内では当別さんが出しています。それが終ってから進めます。

栗田顧問…今準備をされているわけですね。

高田事務局長…そうです。それと並行して小規模補助金は今でも申請できるようになっているので、何件か今申請しております。

上原会長…経営発展計画と言って、その計画がないと先ほど言われた小規模企業振興基本法に基づいた色んな予算がついても、使えなくなるのです。

高田事務局長…各商工会でその計画を持つことになります。その計画は金太郎飴でなく、その地域の特徴や個性を加味したものでなければならぬと聞いています。それと商工会職員のレベルアップも盛り込んだ内容の計画でないといけないと思います。

栗田顧問…それでは職員も資格などを取ることも入るわけですか。

高田事務局長…研修とかです。職員をレベルアップしていくような内容を入れておかないといけない。

栗田顧問…安倍総理もアベノミクスで良く言っています。元気な地域はどんどん応援する、でするので、まさにそのことなのでしょう。

高田事務局長…今までの中小企業基本法では、企業が発展するような支援でしたが、今回は継続持続可能な企業の支援も入っています。そのための計画書にならないとダメです。今までは立上げ支援とか成長する企業支援、新たな事業を起こすとか、でした。ただそれだけじゃ

なくて、今ある企業も日本の経済を支えているという反省に立って今回小規模企業基本法が出てきたと思います。

上原会長…成長して小さいところが中規模になって、中から大規模になってというのが理想ですが、でもそこまでいかない企業がいっぱいあります。私は花屋で、全国企業にまでいかないのが現実ですが、ただ地域では、それなりの協力・応援はいつもさせていただいている。そういう企業も今回は支援します、応援しますと、いう案も入っています。

〔北広島市の建設業はしつかりしている〕

栗田顧問…会員の中に建設業もたくさん入っておられると思いますが、ここの建設業の方たちは、しつかり仕事していますか。

上原会長…昔から見たら北広島市の建設業界は落ち着いてきました。昔は建設業界が2つに分かれていました。

北広島に本社がなければ北広島市が発注する工事は受注できないということで採めた時期もありました。そのころからは、かなり時間は経っています。

栗田顧問…しかし、これからは市の発注する工事は本社が市内にある会社でないと受注できないと、なるのではないですか。

上原会長…その当時は、札幌に本社を置いていた会社があつたのです。今はそうじゃないのでしょうが、そのほうが受注できる。今は、そういう面は全て整理されて、私の印象では建設業界は落ち着いていて、もめることもなく地域のために一所懸命やってくれています。ほとんど災害はないのですが、地域のイベントには特に積極的に協力していただいでいて、建設業界はいい組織になって来ていると思つています。

栗田顧問…そうですか。イベントにもちゃんと協力しているのですね。

上原会長…やってくれていますし、助かっています。

栗田顧問…そうですか。ほとんどは市の発注する工事が多いでしょうか。それとも民間の、先ほどの石屋製菓の工場を建てるというような仕事もされているのですか。

上原会長…規模の大きな建設会社がありません。今、市で新庁舎建てると聞いているのですが、たぶんほとんど札幌の大きな会社が受注すると思つています。

高田事務局長…仕事は、昔は公共中心でしたが、やはりだんだん民間のほうにシフトしてきていると思つています。

栗田顧問…民間の工事というとアパートとか住宅とかマンションですか。

高田事務局長…先ほども言いましたが、大きいと言つてもそんなに大きい建設会社がないので、そういう工事が多くなつて来ていると思つています。

栗田顧問…しかしそういった工事をする人たちがいなくなったら困りますね。

上原会長…いや、困ります。下水道、道路など、やはり建設業界がいなくなったら誰がやるのかと思います。自分たちでは出来ないことです。

栗田顧問…建設会社も今若い人が入らなくなって困っています。休みがない、給料が安いとか、3Kのきつい・危険・汚いというイメージです。少しイメージを変えないといけないと、漫画も作りました。女性は、ただまだ少ないです。漫画も建築の現場なので、女性を主役にしています。

上原会長…北広島の建設業界では、人がいないので仕事が出来ないことが、若干あります。技術者が高齢化していて、若い人の確保も難しくなっていると聞きます。

栗田顧問…市が発注の水道工事などを受注しているのであれば、取りあえず会社としてのベースは良いはずですので、個人住宅は仕事としてできそうな感じがします。

〈人口減少での社会資本整備〉

上原会長…少子高齢化で人口が減ってくるからこそ、インフラをもっとしっかりしていけないと、ますます人口が減るといふ見方もあると思います。

栗田顧問…インフラをしっかりとしていくところと、少しずつ壊していくところを選択しなければ

ばならないと思います。人が住まないところに道路があっても意味がありません。幹線道路がしっかりしてれば良く、その枝葉になる道路で人が住んで商店街があつて工場があるところは維持していくことになると思います。

上原会長…本当に将来はどうやっていくのでしょうか。人が減つていって、家がポツンと離れていたら除排雪は大変です。

栗田顧問…そういう離れた家は、これからは少しお金を出していただいて除排雪するようなことになると思います。

上原会長…それは絶対あり得えます。

栗田顧問…フランスのぶどう農家は山の中に住んでいます。そこで葡萄酒のぶどう作つて、おいしい葡萄酒を出している。それで500人とかですつと住んでいますから、別に人が少なくても暮らせないことはないと思います。

上原会長…協力し合つていけば住んでいける。今夕張が、コンパクトシティと言つてなるべく集中して住むようにやっています。

栗田顧問…今コンパクトシティがまちづくりをする人たちの合言葉みたいになっています。ただ一気に進めようとする、先ほどの離れた家に住んでいる人たちから大反対を必ず受けて、進めなくなります。ある町長さんからお聞きした、こんな例があります。東日本大震災のま

ちの復興の方法として、被害を受けてもう一回、まちを作り直さなければいけないので、コンパクトシティはちょうどいいわけです。今度はこじんまりしたものを作っていいこうと住民の皆さんに提案すると、俺の土地がそこから外れているので賛成出来ない、となります。

上原会長…以前韓国へ行った時に、韓国と北朝鮮の国境でも農業をやっている。農業者はそこに通っている。なるほど、こういうやり方もあると思いました。

栗田顧問…いずれ農業でも住むところと働き場所を、分離していくことになると思います。

〔建設業に期待すること〕

栗田顧問…建設業に期待する事は、どんなことですか。

上原会長…先ほどお話ししたイベントなどに協賛したり、ボランティア的な事もやっていたり、地域貢献の事業としてチャリティーゴルフや市に図書を贈呈するなど一所懸命に建設業界もやっています。

上原会長…お世辞ではないですが建設業界がなければ大変です。ある程度の建設業者がいないと他の町の会社に全部持っていかれてしまいます。

上原会長…今自転車道で恵庭に向けて整備している工事も他の町の会社です。道道ですが、北広島の建設会社で出来ない工事ではないので、地元の会社で受注してもらいたと思います。

商工会も、建設業界も、地元では例えば出来ない工事で極力下請けは地元の会社を使って欲しいというお願いはしています。

北海道開発局にも陳情行っています。受注した会社には、商工会会員の商品などを使っていただきたいとお願いはしております。効果は、出ていると思います。

上原会長…私たち商業者は、建設業者がある程度景気が良くなないと私たちに金が回ってきません。だから期待が大きいのです。建設業界も落ち着いてきていますし、商業者のためにも安定した経営もしてもらいたいと思います。市の公共事業は減っています。道路、下水道もほとんど終わっています。

栗田顧問…これからは大きい業者でなく地元の人たちにやってもらわないといけない二次改築、修繕系になっていくと定期的に発注できます。地元にとってはそのほうがいいと思います。例えば随契で1年2年3年先に定期的に工事が決まっていれば建設会社も設備投資もしやすいです。

（人口減少の原因は何ですか）

栗田顧問…北広島で人口が減ってきている根本的な原因は北広島市自身から発生しているように、近隣市の影響が出てきていることでしょうか。先ほど会長がお話ししていたように、空

港も近いし札幌もJ・Rを使えばアクセスには全然問題ないのですが、それにもかかわらず人口が減ってきているのはどうしてかという単純な疑問です。

高田事務局長…正確に分析したものはないのではつきり言えないですが、交通が良いために札幌からも通って帰れる、それと高齢化が非常に進んでいる。北広島団地が出来て45年経ちました。ここの高齢化率が、街区によっては40%を超えるところもある。全体では20数%ですが、そういう形で人口が減っていることがあります。確かに出生率が札幌と似ています。先ほど会長からお話したように、このまま何もしないと消滅する都市に入っていると思います。

上原会長…学生が働く場所がないので、どうしても厚別から通うことになっています。大曲と清田区は隣り合わせです。清田は土地造成しているのですが、大曲には来ていません。札幌からアウトレットモールには来ていますが、実際は住むまでいきません。

高田事務局長…大曲はアウトレット周辺にはアパートが出来て増えているのですが、札幌から通っている従業員もパートもかなり多いと聞いています。

上原会長…アウトレットモールには延べ1,000万人の来場者が来ています。

〔商工会に大手企業も入会してもらえんといひ〕

栗田顧問…商工会にもう少し大手企業も入会してもらえんといひと思ひますが、いかがですか。

上原会長…結構大きな会社も入ってくれているんですけど、まるつきり無関心なところもあります。

高田事務局長…経済センサスからいくと、商工業者数1700、1800社あると言われてい  
ます。

北広島の建設業だけでいえば、地域にある建設業として、市民の色んな相談を受け入れて  
くれるフットワークがいい建設業ですつといていただければと思います。

栗田顧問…それは大事ですね。

高田事務局長…大手はそれが出来ません。

栗田顧問…市民との関係ですね。

上原会長…工業団地に就職したら2年か3年のあいだ家賃保証があります。市はいろいろ手を  
替え品替えやっています。例えば、私たちのような小規模会社が開業すると、15万円の家賃  
なら7万5千円を限度に1年間、保証する空き店舗対策を行っています。1つの飲食ビルに、  
1件もお店がないところもあり、けっこう空き店舗が増えています。

高田事務局長…年間2、3件は出てきます。それも商工会に入ることの基本ですが、  
これも強制力ないので入ってくれる方もいけば入ってくれない方もおられる状況です。

栗田顧問…そういう個人の営業店舗みたいなもので商工会に入ろうとすると、会費はどのくら

いになるのですか。

高田事務局長…資本金なしの場合は年1万6、800円です。

栗田顧問…それが最低なわけですね。

栗田顧問…長時間ありがとうございました。

平成27年4月15日 15:00～16:00 於…北海道商工会連合会

荒尾 孝司 比布商工会長、北海道商工会連合会会長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

荒井 保明 一般社団法人旭川建設業協会副会長

栗田顧問…地域の課題を中心に会長さんが感じておられることをなんでも結構ですので、お話をいただきたいと思います。

↓建設業は地域の経済活動にもっと携わるべきである↓

荒尾会長…上川地方では、建設作業員は兼業農家が多かったのです。お父さんが建設作業員をやって、祖父さん祖母さんと奥さんとで田んぼを耕作する、という兼業農家の形です。ところが、だんだん農業そのものが、特に稲作ですが、ある程度大きなスケールで作らないと立ちいかなくなり、専業農家がどんどん増えてきて、建設作業員をなかなか集められないことになりました。さらに比布町を見ていると建設作業員は平均年齢70歳を越えている状況ですの

で、それこそ農業を息子に任せてぶらぶらしている人達しか現場に携わらない状況です。

人手不足というのは、大都會のように外国人の労働力を当てにできるのであれば、それはそれで一つの方法ですが、これから上川地方をみると、旭川も含め、地方都市、あるいは商工会地域は建設の労働力、土木も含めて、これから集まらないと思っています。

これは私たち商工会連合会が抱えている人口減少問題ともクロスするのです。公共工事を受注しても、その工期が決められた工事が受け切れないというようなことがあります。資材も上がっていますから見積もりと言っても価格が合わないことが起きます。

建設業が、地方で頑張ってもらわないと、人口減少と言っても要は働くところがなくて人口が減っているわけです。建設業がどんどん仕事を取って、ある程度のレベルで人を雇ってくれないと地方はこの人口減少や高齢化に歯止めがかからないと思います。実際問題として、地域に働くところがないからどんどん都会に人が出て行くわけです。その一番の中核になってくる雇用の場としての建設業ですので、頑張ってもらわないと自分たちがイメージする商工会の町村の姿にはならないと思います。

栗田顧問…商工会の会員の中に建設業、比布町では何人くらいいますか。

荒尾会長…建設業は工業部会の内一割強です。

栗田顧問…一昨日、北広島の上原会長さんのところにお聞きしたのですが、今の話と全く同じ

ですが、建設業が元気にならないと商業者には全く金が回ってこないというお話でした。上原会長さんは花屋さんですね。

荒尾会長…そうですね、花屋さんです。やっぱりだから今、音威子府と中川の間でトンネル工事をやっていますが、ほとんどの工事の宿舍が全部音威子府なのです。そのため音威子府はかってない景気の良さです。昔は商工会の会長さんは、建設会社の社長さんが多かったのです。特に上川は塩狩峠から向こうはほとんど建設業の人が会長をやっていました。今は北部、塩狩から向こうは和寒と中川ぐらいです。以前は美深も建設会社でしたし、下川も谷さんがやっていました。

栗田顧問…今、建設会社を経営している商工会長は二箇所くらいですか。

荒尾会長…管内全体では、もうちょっとあります。それでも私のほうの石北はゼロですし、富良野ブロックが南富良野と上富良野が建設会社です。中央は東神楽が高橋さん、東川が藤田さんです。そして鷹栖が測量事務所ですので全部建設関連です。そして旭川が中村さんです。栗田顧問…先週の金曜日に斜里の土橋会長さんにお会いしましたが、もつと建設業は地域の大きい企業なので商工会活動に熱心になってもらいたいというお話をお聞きしてきました。昔はやっていますが、今は少ないという話で、黒子よりも、表に出て地域を引っ張っていくような活動にしてもらいたいとお話がありましたがいかがですか。

荒尾会長…いや昔は、建設会社が商工会会長をやっているけど、今はあまり前面に出て経済活動をやっている、そして公共工事も取るというのが、良く見えないと、思われています。

栗田顧問…どうしても、まだそう見られますね。

荒尾会長…ただそんな見られかたよりも、実際には地域のリーダーシップを取っているわけですので、建設業の人たちが地域の経済団体の長になってもらわないといけないと思います。小売店のお父さんが商工会会長やっていると、会議のたびに店を閉めながら、出席しているのでは商工会活動は進められません。しかし、旭川も商工会議所会頭は代々建設業だったので、今は新谷さんですが、その間高丸さん、小松山さんで、その前はずっと建設業で盛永さん、新谷さんのお祖父さんです。

栗田顧問…商工会議所関係は結構、建設業が会頭になっています。ただ商工会は意外と少ないというイメージがありましたのでお聞きしてみました。

荒尾会長…田舎の建設会社でもとんでもなく大きくなったら会長はやりません。

〔商工会活動と比布町の建設業界〕

栗田顧問…商工会活動として働く場所を作るとか、会員の方たちの振興などは今どんなことをやられていますか。

荒尾会長…今は、基本的に各単会はそれぞれ工業部会を作って、研修会とか勉強会、あるいは交流会をやっていますが、連合会としてというのはないです。

単会はだいたい部会制度の中で商業部会、工業部会、食品環境部会の3つが基本的に持っている部会です。それぞれが、工業部会では建設だけでなくて建設にかかわる業者、資材、下水道屋なども入って、勉強会や先進地視察をしています。ただ田舎にも建設業協会があります。

栗田顧問…はい、あります。町村、市それぞれございます。そこはそこで建設業界の人はまともっています。

荒尾会長…ただそこに資材屋とか下請の畳屋さん、内装屋さんとかは入って行けないのです。

それで商工会の中の工業部会に入っています。

栗田顧問…元々どちらかというと元請会社の協会になっています。

荒尾会長…昔は比布町の公共工事の請負額で会費が決まっていました。

荒井委員…今もその名残はありますが、あまり受注額の比率を大きくすると、業界団体としてコンプライアンス上好ましくないので、定額会費と実績に応じた会費にしています。しかも実績は過去3年とか5年とか、長い期間の平均にするようにしています。

荒尾会長…比布町では、公共事業の比率が少ないです。ですからそれも止めたみたいです。

栗田顧問…比布町が出す工事は当然ご地元が全部受注されるのですね。

荒尾会長…ある程度のクラスになると、Bクラス以上とかあるのでしょうか。

栗田顧問…工場の大きさです。

荒尾会長…ですから最近では町の単独自業はあまりありません。町単独事業であれば地元の企業にある程度優先することはあるのですが、ある程度難易度の高い工事になると田舎の建設業ではどうしようもないです。

荒井委員…学校や体育館の改築とかですね。

荒尾会長…そうです。そういう時には下請けに入れてもらうことをお願いします。そうしないと実際は作れないです。比布町も今度、中学校の耐震工事をやります。

栗田顧問…耐震で中学校といえはなかなか地元では無理ですね。

荒尾会長…無理です。旭川の会社と地元の組み合わせになります。

荒尾会長…体育館は以前、耐震工事をやりましたが、その時も地元建設会社では全然対応できなかったです。なんとか共同企業体までは行かなくても下請けで入れてもらうように考えます。

栗田顧問…それはそうですね。そういう要望活動は絶えず行っているのですか。

荒尾会長…そうです。ご存知のように、比布町は旭川から10分か15分ですので、完全に経済圏

としては旭川です。ある程度旭川の業界の人に協力してもらわないといけないと思います。今は昔と違って家はほとんどハウスメーカーです。地元の建設会社で家を建てる人は全くないです。

栗田顧問…そうですか、しかし地元の建設会社で大工さんはまだ残っておられますよね。

荒尾会長…いや、もう何人かです。町単独事業であれば、例えば公営住宅の補修など、その程度のレベルのもので。あとは公営住宅でも今は町外会社と地元会社の共同企業体です。

栗田顧問…新築の場合ですね。

荒尾会長…地元建設会社は、RCが出来ないです。

栗田顧問…公営だとRCですね。

荒尾会長…はい、去年は木造でやりました。

栗田顧問…RCを薦めるのは耐震性と防火性の問題です。先週の月曜日に壮瞥町の堀口会長さんにお話を伺ったら、地元の信金からお金を借りて借り上げ住宅を商工会が建設して、町の公営住宅のように使うことをお話しておられました。公営住宅を造るとRCになるので、商工会に木造住宅を造ってもらい町が借り上げる。20年間商工会が所有し、その間に家賃収入を借金返済に当てる。そうすると地元がつけられる木造の住宅で大工さんも使えて商工会の会員も使えて、いいという話をされました。

荒尾会長…なるほど。壮瞥町は力があるのですね。比布町は田舎の割に公営住宅の比率がものすごく高いのです。それで町が何年か前から、民間のアパートを建てるのに補助を出して、8戸のアパートが2棟建ちました。ただ、旭川に近いといっても旭川と同じ家賃は取れないので、補助を出して満戸にしても、銀行のローンが払えないので、なかなか難しいです。町でもいろいろやっています。無償で土地を提供するなど、子育て世代を相当優先する施策を行っています。しかし、旭川の東光よりも近いぐらいですが、山ひとつ北へ入るのはきつと相当田舎に来ると感じるでしょう。

〔人口減少問題について〕

荒尾会長…商工会でも札幌で職員採用して、その時にはどこの商工会でも参りますと言って面接に通るのですが、でも根室とか、オホーツクならその内連絡がつかなくなります。

栗田顧問…斜里町商工会の土橋会長は、そのことを言っておりました。札幌で採用して5年間たつとみんな帰りたいと言うようです。

荒尾会長…やっぱり、地元での雇用場としても商工会があるわけなので、地元の人に応募してもらい、札幌で試験を受けてもらって、優先的にその商工会に入るといふシステムでないといけないと思います。

昔は違ったのです。町ごとに試験を受けられましたので、極端な話をすれば、その町の会長さんが採用を決めるようなもので、そうすると結局そのあとの試験が受からないのです。指導員になるための試験がありますが、なかなか受からないのです。

そういう弊害も昔あって、北海道統一にしたのですが、それはそれで今度は地域制で島などは出たい人ばかりになっています。

荒尾会長…学校の先生ほどには、僻地手当はつきません。地元で育って地元で働いて地元で骨を埋めたいという人は必ずいるでしょうから、その人たちが残れるような商工会や色んな業種があればいいと思います。

栗田顧問…斜里町商工会の土橋会長は、地方に帰りたいという人は実はいるけれど、希望する職種がうまく揃えられないという話を言われていました。

荒尾会長…大学を卒業して田舎に帰っても、せいぜい役場か農協くらいしかありません。

この間猿払の会長が言っていたのですが、ホタテの柱をはずす女の人があんまりいなくなる。原因はずっと同じことの繰り返し返しの仕事ですからスキルアップしないのです。人が10個出来るが、私は20個出来るというぐらいのスキルアップです。ですから、田舎に来て子育てをして働いて、今の時代ですからインターネットのLineでつながって仕事ができます。そういう人がけっこう北海道に来て仕事しています。ただ子育て世代なので、奥さんがその

地域で働く場所は、そういったレベルの仕事しかないのです。それでは満足できないという事だと思っています。

栗田顧問…比布町に住みたいという人は多いのですか。

荒尾会長…宅地造成を行ってもなかなか売れないです。旭川の人は東に行きたいのです。東光、豊岡東管内です。ですから同じ会社が宅地造成しても、永山と東光では、便利さでは永山のほうが便利と思いますが、売買価格が坪で1万円以上違います。

やはり、北へ行くこととトンネル1本通ると相当地方に行く感じがします。退職者は結構来ます。例えば校長先生を辞めて最後の終の棲家で家を建てて余生を過ごすという人たちは来られますが、これから子供を育てる人たちは、なかなか来てくれません。中には学校の先生で赴任してきて、いい町だからここで家建てるという人も、たまにはいますが、多くはありません。教育でもどんどん子供が減っていきます。小学校も中学校も今はもうほとんどが1学級です。

栗田顧問…日本創成会議の増田さんのお話があります。消滅という言葉を使っています。

荒尾会長…ショッピングですが、あそこまでは行かないために頑張るのでしょうか、過去の想定グラフを見るとだいたい合っています。

栗田顧問…人口に関しては30年後まではだいたい当たります。

荒尾会長…ただ、そこに人が住んでいて地域があつてコミュニティがあるとところが全くなくなるっていう事にはならないと思いますし、ならないように商工会は特に地域のコミュニティの中核として頑張つていかなければならないと思つています。

栗田顧問…全くなくなるっていうことはなくて、ヨーロッパ、例えばフランスのぶどう農家をみますと、500人くらいで集落をつくつて、ぶどうを作つて葡萄酒を作つています。あれで食えているわけです。ああいうのを見ると別に充分だという気がします。

荒尾会長…結局Uターンはほとんど農業です。大型化した分だけ農業が食べられるのです。比布でも後継者がいるところは30町歩ぐらいないと専業農家として食べていけないところだと思ひますので、農協青年部だけはどんどん増えています。

栗田顧問…それはそれでいいことですね。

荒尾会長…いいことです。しかし、絶対親と一緒に住みません。普通は農家は農作業ですので、土地は山ほどあります。例えば2世帯にしても同じ土地の中に建てているのはほとんどないです。ほとんど町の中に家を立てて農作業に通うのです。奥さんがそういう条件を出しているのかな。

荒尾会長…だから奥さんは絶対田んぼには入らないです。それどころか、同じ敷地内にも建てないですよ。本当は同じ敷地に建てるほうが機能的です。しかし、田舎でも町の中に建てま

す。昔は農地が大規模ではないので、その農家の人たちが建設業を下支えしていました。

栗田顧問…それはさびしいですね。

荒尾会長…田舎である程度建設のスキルを持った丁場をやる人を長い不況でみんな離してしまつたのです。大学の建築を出て図面を引ける人たちを抱えられる田舎の建設会社はみんな無くなつてしまいました。

栗田顧問…そうだと思います。本当にギリギリまで行きました。ただ最近はずいぶん少なくなつていのではないですか。まだアベノミクス効果は地方に来てないという話ですが。

荒尾会長…来てないですが、少なくとも民主党政権に比べたら、先が見えます。民主党政権のときは、将来のことは全く見えなかつたです。

栗田顧問…全体が縮小する政策のみで、雇用とか景気浮揚という政策はなかつた気がします。

### （商工会活動の課題）

栗田顧問…商工会の会員は減っているのですか。

荒尾会長…減っています。商工会全体、全道的にそうです。法定脱退が多いです。法定脱退というのは廃業とか倒産です。任意脱退は商工会に魅力を感じなくて辞めることですが、それではなく後継者がいなくて辞めるとか、廃業と倒産です。統計での倒産件数は1,000万

円以上の件数ですが、商工会地域はもともと小さい会社が廃業、倒産するのでカウントされていないのです。

栗田顧問…なるほど。最近、倒産は多いのですか。

荒尾会長…いや、もう落ち着きました。そして最近、銀行も支えてくれます。

荒尾会長…商工会青年部の数が何年前に2,000人を切って、去年はじめて全道で1,800人を切りました。152商工会あるので、一商工会が単純計算で10人ちよつとになります。だいたいどの町も商工会青年部が中心になりますから、その10人ちよつとでコミュニケーションの中核を作っていることになります。ここが一番頭痛いところです。今休部しているところもあります。例えば、音威子府は今休部です。一人もいなくなると休部になります。一人でもいるとまだ賛助部員で組織として成り立つのです。北海道で赤井川と音威子府の2つが休部です。

栗田顧問…青年部は40歳までですか。

荒尾会長…はい。全国的に問題になって、全国は去年45歳まで引き上げをしました。北海道は連合会の定期総会の承認がいりますので、今年45歳にします。ただ商工会はそういう意味では問題がありました。40歳まで一生懸命商工会活動で頑張ってくれた人が40歳過ぎたら行くところが無くなるのです。その時にお父さんと代替わりすればそれは商工会の会員活

動できますけど、お父さんがまだ60歳くらいでは引退しないで親会の会員になっていきますと、そのバックボーンがなくなるのです。

栗田顧問…なるほど。そうすると稼業だけになるということですね。

荒尾会長…そうです。せつかく育つたのにもつたいないということが過去にはありました。今は賛助部員制度といって、残ってもらって一緒にやってもらっています。

〔小規模企業支援法と経営発展支援計画〕

栗田顧問…行政にこうして欲しいとかはございますか。今、小規模企業振興支援法のもとで、商工会議所も変わる、商工会も変わるといいますが。

荒尾会長…成長戦略の中で中小企業基本法は要するにある程度大きいレベルの人たちにどんどん伸びていってもらおうということが根っこにあり、本当に小さいところに対しては焦点が当たっていません。平成11年ころ、中小企業基本法が改正になった年あたりから、成長戦略でどんどん商品開発をして海外に出て行ったりする企業には手厚くしますが、従来然とした企業には比較して日が当たらなくなったのです。それで全国で廃業とか倒産とかとんでもない数、何十万社かが、平成11年以降に減ってしまいました。ブレーキを掛けすぎたのでしょうか。

それで従来から地方で頑張っている企業に対してもっと成長だけではなく、持続的な発展をするような形があってもいいのではないかと、ところから始まりました。それを進める障害は、今までの基本部分は経営改善の普及事業推進だったのですが、やはり伴走型という一緒になって企業を持続していく方向に切り替えるのが小規模基本法です。

特に先ほどから言っていますように、人口減少の中で業種としては全然成り立っていない業種もあるわけです。その人たちが方向転換する、あるいは本当に頑張っている人たちがなんとか持続して行けるように商工会も一緒になって伴走型で支援していくことです。そのため、これから色んなメニューが肉付けされることになります。きめの細かい施策をつかって、本当に田舎で頑張っている小さい企業に、将来が見えるような支援をしていこうということです。連合会もそういった部分にそれぞれの単会に対して指導をして行かなければならないと思います。

栗田顧問…商工会の職員のレベルアップをしないといけないとお聞きしましたが。

荒尾会長…常に国会などでは、一生懸命頑張っている商工会や企業と何もしない商工会や企業を一律に扱うのはおかしいとの議論がなされています。

そのため発展支援計画をつくって、計画の認定を商工会が取らないと新しい事業に対して入っていないようになりました。その認定を152商工会全部が取らないといけないと考

えています。隣町の商工会は認定を取りましたが、こちらの町は認定を取りませんでした。となると、認定を取っていない商工会の若い人たちがその事業に乗って新しい事業をやりたい時に、うちの商工会は認定されていませんので、この事業は無理ですとなります。会員に不利益が生じることになります。

ただ計画内容のハードルが相当高いですので、それだけ職員も勉強しないといけないです。そして行政も一緒になつてその地域の将来をどうするかということも認定の中に入ってきますので、商工会だけでどうこうというよりも、行政と一体となつてその町をどうするか、その中で商工会がどうなっていくのか、会員企業がどうなっていくのかということを計画として上げることになります。それこそ職員間の資質格差が問われると思います。今までのように北海道連合会が取れば自動的に152商工会が認定されるものではないので大変です。

ただ、北海道は独特なのです。本州は合併が進んでいますから商工会の単位がものすごく大きい訳です。そうすると職員数も多く、専門的な指導員の中でも関わってける専門職を作れるのです。ところが北海道の商工会は町村合併が進んでいませんので、上川管内でも旭川みたいに大きい商工会もあれば、音威子府のような小さい商工会もあります。商工会は基本的に4人体制というのが非常に多いです。事務局長と専門指導員と補助員と記帳専任職員

がいて、この4人の中で、誰が経営発展支援計画をやるのかと言ったらやはり指導員が中心になって認定を受けますので、今までやっていた仕事に認定のための計画書作成が入ることになり、なかなかハードルが高いです。

そして今相当先行して出していますが、経済産業局がまず窓口で審査して、よしとなると経済産業省に上げます。この方向転換と第三者も入って審査しますので、いい加減な計画書では認可にならないと思います。連合会も一度に、例えば152のうち50商工会の計画が上がってきて、それをすべて指導するとなるとマンパワーが足りません。ある程度年次計画を持って、そういう事業に入っていく会員企業があるところから優先的に進めていくことが必要と思います。

荒尾会長…北海道は一次で23の商工会が出したのですが、レベル的には北海道経済産業局でゴーサインが出るものにまだなっていない。6月に、基本法が出来ました。そして、8月から9月に来年の3月までに認定の計画書を出すということはやはり大変難しいです。

荒尾会長…国は、そんなことは絶対しませんと言っているのですが、計画を認定された商工会とそうでない商工会が今までの従来型の補助金だとか事業を申請した時に優先権をつけるのはと心配しています。

荒尾会長…商工会も中核になってくれる建設業が良くならないと地域は良くなっていけないの

で、頑張っていたら、北広島商工会の上原会長が言っていたように建設業が良くならいと物は売れないのです。商業者は良くならないのです。

荒尾会長…私は飲食業で、色々やっています。レストラン、仕出し屋、あと温浴施設もやっています。遊湯びつぷという施設です。

荒井委員…もともとは地元で有名な料理屋さんです。

栗田顧問…どうもありがとうございました。

平成27年4月15日16:00～17:00 於…北海道商工会連合会

竹田 悦郎 浦幌町商工会長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

栗田顧問…普段お感じになっている地域の課題をお話しいただければと思います。

「町村の建設業の役割と位置づけは雇用の受け皿、しかし徐々に減少している」

竹田会長…建設業関係からお話しますと、商工会での建設業は10年以上前には企業数も結構多かったのですが、行政財政改革の進む中で公共事業縮減がなされ、公共事業に携わる会社が、ほとんど廃業や倒産していきました。以前は20数社の建設業協会のメンバーがいたのですが、今は12社と、半分ほどになってしまいました。浦幌町は農業地帯ですから、建設業は、農業者の冬期間の雇用の受け皿として、推移してきました。地域の雇用で、大きな役割を果たしてきたのです。今はどんどんそれが減少して、作業員の高齢化もあり、建設業自体の技術者の数も減ってきていますし、建設業者の数も減ってきて、地域の人口減少につながっている

ところもあるのかと思つています。

栗田顧問…統計の期間を忘れましたけど、北海道の全就業者数が平成9年から平成25年までで24万人減つていて、そのうち12万人が建設業で減つています。ものすごい数を、建設業で減らしています。

竹田会長…地域における建設業の役割は、本当に大きな支えになっていた部分はあったのが、どんどん失われてきて、今では、商工会地域はどちらかと言うと、私たち商工会組織は主に小売業、それからサービスマス業、建設業、製造業等そういう業種なのですが、小売り・サービスマス業は、地方では一人、二人夫婦や家族労働の店が多いので、雇用は昔と違つて今はもうなくなつて来ているのは事実です。だからどうしても町村の場合には建設業関連業種が少しずつ減ることによつて、雇用の場が失われてきたのです。

栗田顧問…なるほど、そういうことなのですね。

竹田会長…大きな受け皿だったのです。ただ、季節的な受け皿でもあったのですが、今それも少しずつ冬期間の工事も出るので、通年化に向けて頑張つている業者の方もおられるみたいです。実は私も電気工事業で建設業の一部です。年間雇用で今18人居ります。

栗田顧問…壮瞥の商工会長さんの堀口さんは同じ電気工事業ですが、北電の電気工事業は将来の受注量が見えるような形でやっていたと思いますと話がありました。一方、公共事業で

は工期は一年以内が多く、来年受注できるかわからない世界になっています。

竹田会長…北電さんも経営的に厳しく、今まで発注していた工事も少しずつ減って来ています。ただ、私達が話しているのは、今抱えている技術者を今仕事がなくなったとって解雇していった時に、いざ同じ仕事回復した時に、建設業と同じで技術者は一回離れてしまうと元に戻ってこないことです。

栗田顧問…建設業は、それを経験しました。

竹田会長…違う業種に行ってしまったら絶対戻ってこないです。

竹田会長…私達も同じ悩みを抱えています。ただいずれにしても、私達は田舎で小さく仕事をやっているので、地域の公共インフラはメンテナンスも含めてなんとか守っていかなければならないことで、小さくてもやっついこう、継続していこうと思っています。

栗田顧問…電気を守らなかつたら生きられないです。

竹田会長…どの業種もそうだと思います。

〔建設業にとって予定価格・受注価格が低過ぎる〕

竹田会長…今、建設業の場合は入札制度がどんどん変わってきています。これは北海道や町村の入札に参加させてもらっていますが、なかなか昔と違って取れなくなってきたのも事実で

す。この間も帯広建設業協会と話した時に聞いたのですが、十勝は落札率が低いのですか。

栗田顧問…はい、低いです。

竹田会長…その原因はどういうことなのかと聞いたら、官公庁の出す予定価格の設定、単価の基準が低すぎるのではないのかと言っていました。競争、競争でいけば、最終的には自分たちの、私たちも同じですが、首を絞めることになります。これが続いていった時に、建設業自体が存続できないような状況にならなければいいが、とこの間話していました。

栗田顧問…その問題はずっとありまして、最初のお話は予定価格が少し低いという話です。それも積算のいろいろな単価と歩掛を毎年少しずつ上げる方向で進んでいます。国土交通省は一般管理費もこの間上げました。少しは前より良くなっていると思います。

竹田会長…国関係の単価、それから北海道の単価、そして市町村の単価がどんどん下がってきます。市町村に比べいくほどはつきり言えば単価は低いのです。そういう部分も、建設業協会が町村や全道の市長さんあたりに訴えていただけなのかと、思います。市町村では、北海道単価から見るとだいぶ低くなるので、はつきり言って市町村単価の工事は経費も満足に出してもらえない状態です。それと物価調査会の単価では、町村に比べいくほど流通で価格は絶対高くなってきました。輸送費がかかります。そういう部分は加味されないのです。市町村の仕事では、北海道の単価、都市部で購入できるような単価で積算することも多

いので、そういうところも少しずつ市町村も、財政的には厳しいからなかなか簡単にはいかないとありますが、直してもらいたいと思います。ただ、私達は市町村の場合、工事現場へ行くと大体みんな身内みたいでよく知っているので、行政からのサービス工事がだんだん多くなってきました。道路でもそうなのです。取り付け道路をちよつと施工したら、サービスでやってくださいとなります。町村も予算がないからそれぐらいはしてやって、となつてしまします。そういう部分では、地方に住むと大変な負担になっています。

栗田顧問…昨年、改正された品確法では、そういうサービス工事や予定価格を何も理由なく下げることがはやってはいけないこと、と言っていますが、さてどこまで守られるか、建設業界では心配しています。町村の工事はなかなか難しい、と言っていました。

竹田会長…やはり今ね、東日本の震災があつて以来、国のほうも耐震対策を進めていて、建物関係も町村の場合も今は耐震化工事の真最中です。ただ耐震化も建物はそういう形でやっています。橋梁関係や道路という、土木構造物の耐震化はどうでしょうか。

栗田顧問…橋梁がまず一番問題で、それは管理者、いわゆる町道であれば町、市道であれば市、そこが点検をして、もし地震に対して危険であれば、管理者が国の補助をもらつて直すという管理者責任になっています。それで、技術的に難しい場合は、道庁や開発局が技術支援をする、そんな形で町なら町、市なら市が発注して直していくのが今の流れです。それも、昨

年から始まったばかりでこれから進んでいくことと思います。

（公共事業の原資として自主財源が必要）

竹田会長…町村の場合は、特に交付金が減額されることによってその地域の、例えば公共事業の発注もできないという話になります。それはわかるのですが、日本全体の立場から言えば、国も商工業と同じように、もう少し交付金に頼らない自主財源を使いながら、それを地域にうまく還元、還流できるシステムを考えないと、交付金が減るから公共事業を減らします。地域は、地域の安全安心は守れないと思います。町村も自治体も交付金の大小に関わらず、地域それぞれで取り組んでいただきたいというのが私の考え方です。なかなか難しいのですが、それをやらないといつまでも交付金に頼ります。今の日本はいつまで莫大なお金を出してくれるか分らないです。

栗田顧問…今の額が精一杯だと思えます。

竹田会長…そうです。ただ、町村も基金とか自主財源をある程度持ちしている部分はあるのです。町村の場合、どの市町村も同じなのか分かりませんが、基金がたまるとそのお金をうまく使いながら、また基金を増やしていくという考え方がないのです。基金を使うと減るといふ考え方で、そこが行政の一番おかしな部分ではないかと思っています。

栗田顧問…財政調整基金は、今は少しずつ積み増しできるところになってきました。一時はどこの市町村も減って大変だったですが、ある程度増えていきますので、それを使って、町の税収に跳ね返るような政策を打ってもらうことが本当が一番いいことと思います。

竹田会長…行政は今まで歳入はあまり考えないです。いくら歳出カットするかということしか考えていないので、入ってくるわけがないのです。

栗田顧問…それを考えないと入ってこないです。

竹田会長…そうそう。それはどこの市町村も、けっこう多いと思います。

栗田顧問…それで商工会の会長さんをおやりなので、役場と一緒にやってそうやりましょうともっていかないといけないと思います。

〔資金を地域でうまく還流させること〕

竹田会長…地元の市街地に構えている組織としては、私達が生き延びるために、その財源を地域でうまく還流させることが一番大事なのかなと思います。

栗田顧問…それはすごく大事だと思います。地域の中で外の企業を使わないとダメな部分はある程度はあるのですが、できれば少し高いけれど地元の企業を使うことをすすめることは必要です。

竹田会長…本当はそうして欲しいのです。ただ、十勝の場合で言えば、建設業界の協会の業種の中で、土木建築でもある程度十勝の大手さんは帯広市内に構えているのです。それでも市内の業者さんと町村の大型工事についてはJ・Vを組んで結構やらしてもらっているのです。だから、そういう形で今後も数は少ないけども、地元の業界で技術に劣る部分は技術的に進んでいる企業さんとJ・Vを組んで地域の業界を助けていただきたいと思います。

栗田顧問…それが当り前と思います。町の学校を直すときに耐震工事であれば町内の建設業者はできないです。

竹田会長…また、人がいないのです。

栗田顧問…だから、帯広の建設会社が入ってきて一緒に組んでもらうのは仕方がないことだと思います。

竹田会長…どこの町村もだいたいそうです。

栗田顧問…そうです。

竹田会長…帯広の建設業者もそういう考えで、地域の業者とJ・V組んで地域の業者にちゃんと利益配分も相応にやっていたいて助かっています。昔は、いいところ取りして持っていたかたときもありましたが、今はそういうことがなくなってきました。そして地域の建設業関係の会社も、技術者もどんどん減ってきて作業員も高齢化しているものですので、例えば

これから地元で大きな災害があった時に、それに対応できるだけの技術力や動員力が疑問視されてきています。

栗田顧問…今それが非常に心配で、作業員が減って高齢化すると、普通に企業として考えればいずれその会社は廃業になります。だから、建設業が1社もなくなると、本当の災害の時に北海道は、町といってもすぐ広いですから、それは困ると考えています。災害だから町外の人が入ってきてやればできるといわれますが、何で困るかというところ、一刻一秒を争うときに、災害の場所や地名がわからない、そこに行く道路が分からないとなるのです。どこの沢かも分からないという世界になります。

竹田会長…そうなのです。今町村ごとに、地元の協会としても防災協定を結んでいます。ただ、それだけでは対応できないことが今後出てくると思っと思っていますので、できれば十勝の場合は、例えば帯広建協さんとその町村の協会とが連携を取る形で、システム作りも今後必要になってくると思います。町村によっては地元で対応できない部分がこれから出てくると思います。

栗田顧問…今の話は、町の建設協会と地域の帯広の建協が協定結ぶとか、ということですね。竹田会長…そういうことも今後必要なのかと思っっています。

栗田顧問…それは必要です。

「過ぎた地域貢献は、小さい建設会社の仕事を奪う」

栗田顧問…先ほどの自主財源で発注してもらいたいという話がありましたが、町のなげなしのお金でも地域の建設業界がなくならないように町に必要な道路の補修や崖を直すとか、それから北海道、国の交付金をもらってくることで、それらを織り交ぜて一定額の工事予算を町で踏ん張ってもらうことが必要です。

竹田会長…新聞でよく見ますが、建設業が地域貢献活動で、北海道や北海道開発局の工事を受注した時に、その工事箇所町村に対する地域貢献活動で床板修理など、いろいろやってもらいすぐく助かっています。助かっている反面、地元の業界の仕事はその分なくなることもあります。そういう貢献度はこれからますます幅広くなっていくのですか。

栗田顧問…幅広くなりません。せいぜい今程度です。

竹田会長…貢献度のポイントでその協会の会社のランク付けの大きな基準点になっていくので、みなさん小さくても大きくても貢献、貢献となって、町長から表彰状もらったりしているのも写真載っているのですが、それだけで本当にいいのかと思っています。

栗田顧問…入札契約制度も、毎年少しずつ変わっていくのですが、今は災害関係以外の地域貢献は点数化しない方向になっています。

竹田会長…そうですね。

栗田顧問…防災活動などで町の災害の時に協力しましたというような貢献が主になっていきます。

竹田会長…地域貢献活動で保育園の施設をペンキで塗りましたとか、ちょっとした校庭の補修をしましたとか、それも全部貢献活動に入っていますが、その分小さくても地元が発注してくれば多少でも仕事になると思っている人もいるのでは、と思っただけです。

栗田顧問…なるほど。そういう見方は初めて聞きました。確かにそうですね。元々国が発注する工事の積算の中に、つまり、建設会社が発注する部分の中にイメージアップ経費というのが入っています。仮に100を予定価格とすると受注額が92とかであれば92%分の約2%少しの金額がイメージアップ経費として入っています。建設業のイメージが上がるようなものであれば何に使ってもいいのです。それで工事現場の周りを全部花壇にしましたとか、歩く人に迷惑掛けないように壁に絵を描きましたとか、ああいうのはみんなそうなのです。その範囲で実施する分にはいいのでしょうか、どんどん広がることはないと思います。ただ、町の仕事になってもらったほうがいいですね。

竹田会長…ということは、町村にしてみれば貢献活動の中でやってもらうと、無料でやってもらえることになります。しかし、町村があまりそれに期待すると思っただけです。

栗田顧問…町村が発注すれば、町内企業にお金が回りますが、町外企業に無料で行ってもらえ

ば、町村の発注工事がなくなり、結局は町村の企業にお金が回らなくなります。

竹田会長…そういうことです。

栗田顧問…その話は、面白い話なので、今度ぜひ町長さんにお話ししてください。

竹田会長…どんだんやってもらうのはいいのですが、貢献活動の中でも、事業の中でもひょっとしたらその部分は貢献活動でやってもらわなくとも、地元以小さくても発注して、地元の業者が出来る部分があると思う場面もあります。

栗田顧問…それはありますね。花壇の補修とかね、壁塗りとか地元の人でできます。

竹田会長…そうです。それがあまり広がると、困ると感じています。

栗田顧問…これからはたぶん心配ないと思います。

竹田会長…そうですか。

〔十勝は一つ、十勝懇話会の効果と役割〕

竹田会長…十勝の話をさせてもらえば、先ほどもお話ししましたが、今帯広建協の音頭で町村会の3役、商工会の3役、それと商工会議所の3役、それと大学の学長、そして建協の3役で構成する十勝懇話会という会議を作っています。そこではこれからの十勝をどういう形で、さらに十勝だけでなくて北海道をどういう形にするか、そして私達が出来る事は何かについ

て懇談をし、道内外の様々な分野の大学教授や、今活躍している会社経営者など、を十勝に呼んでシンポジウムを開催し、外から見た十勝として提言をしてもらい、それに対して地元はどう対応できるかを話し合い、年に数回、開催させてもらっています。そして、札幌の北海道開発局の職員や技術者の方とか北海道の方とかが帯広に来られる場合もありますし、私達も札幌に行つて会を開いたり、さらに東京まで行くのです。そういうことをすることによつて、地域外で行われている情報で私達が分からない部分がどんどん広がつてきて、十勝の地域づくりにおいて大変助かっています。萩原会長さんも区切りをつけてはどうか、という話がありました。

栗田顧問…もうやめましょうという話ですか。

竹田会長…いえ、最終でどう形にするかも含めて、どう進めるかです。もう少し継続して欲しいとなり、今年もたぶん行われると思います。

栗田顧問…十勝懇話会をこれからどうするか、話がすごく広いのでどうまとめたらいいかと、私に相談がありました。十勝懇話会の3年間のまとめを拝見させていただきました。平成23年から平成25年です。これでまとめたいのではないですか、みなさんきちんと発言されているし、食糧とエネルギーと観光という3つの柱で、発言したことがストーリーになつています。これで十分と思いました。それから、これからも絶対これ続けたほうがいいと話しまし

た。十勝が一つという意識を産業界、学識者が持つことは、すごく大事な事です。ぜひ続けろと萩原さんに言ってください。あの懇話会で話し合うことの方が内容をまとめるよりも重要な事のような気がします。

竹田会長…そうですね。私も商工会長になってから感じたことは、私が会長になった頃は、まだ帯広の商工会議所さん、建協さんはまだまだ遠い存在でした。町村の商工会、経済団体といえども、市の組織とはかみ合わない部分がありました。私達、町村は大きなところに利用されてしまうのではないかと、思いました。

栗田顧問…大きいところに飲み込まれるのではないかという話ですね。  
竹田会長…そうですね。そういうのがどうしても昔あったのですが、それが逆に、商工会議所さんが町村に目配りをしてくれて、気遣いをしてくれます。帯広建協さんもやはり小さな町村にまで目をかけて、色んな形で協力をしてくれるという姿勢がどんどん出てきて、それであれば十勝は一つという合言葉の中で皆さん方がそれぞれの立場で協力し合い団結しているという意識が高まったのが事実です。

栗田顧問…いい事だと思います。

竹田会長…農林水産も含めて、全部そういう意識なのです。

栗田顧問…農協の会長さんも入られていますね。

竹田会長…入っています。

栗田顧問…他ではああいう会合はないのです。

〔町を支える建設業には一定の事業予算と利益の確保が必要〕

竹田会長…十勝の農協組合長の有塚さんとか、山本組合長さんとか、長瀬さんも、このTPP問題が始まる前から、十勝が農業王国になったのは、農業基盤整備が毎年毎年行われて、はじめて農業生産がこれだけ上がってきたので、これからも欠かすことなく、金額の大小に係なく農業基盤整備を継続していただきたいと、経済団体としていろいろな陳情・要望をする時にお願いしたいという考え方なのです。農業の基盤整備がきちっと確立された中で生産性が上がり、作物がいろんな形で拡大してきたのです。ある組合長が言っていました、例えば酪農地域であれば、生ものの牛乳を生産した時の輸送、流通ルート、道路が整備されていなければ運ばませんし、また冬期間であれば、道路の除雪などができていることが必要です。建設業の皆さん方がいち早く道路を開けてくれて生ものの輸送も助かっているのです。建設業は地域にとってなくてはならないものという認識が強くなってきているのは事実です。

栗田顧問…建設業は一時すごく悪いイメージで、公共事業をたくさん受注して、ドラ息子がい車に乗ってその辺を走り回っているというような、感じでした。

竹田会長…そうそう、そうなのです。しかし、建設業は本当に裾野も広いですし、ライフラインに密着していますがお金だけで捉えられて、一般の消費者、町民・住民の方もどこかの政党が悪い悪いと言ったものですから、コンクリートから人へ、でしたが、ちょっと違うのではないかなと思えました。コンクリートも、人が作るもので、大事なのです。

竹田会長…国の政策もあって、急激に減らしたのは分かるのですが、やはり最低限の事業量は継続していてもらわなければ、ますます市町村の小さな町へいけばいくほど建設業者は減少していくと思っています。先ほど言われたように、町村に対して、私達の商工会組織としても、町村長との対話の中で建設業のそういう部分は強調していきたいと思っています。

栗田顧問…災害になったときには、その町村で誰かが建設業を営んでいてくれないとすぐには助けようがない世界になると思います。その町の建設業が軸となつて地域のいろんな情報を発信して、力のあるところが助けに行くという図式が崩れると大変なことと思います。今度、いろいろな町長さんにお会いした時に、そういう話を私もするようにします。安定して一定額の工事予算を出してもらえればいいと思います。今は町の建設会社は一所懸命やつてもらっているといつても、利益を出して会社の後継者とそれから技術者と少しの人を雇用していかないと会社は続きません。

竹田会長…今までは安く受注して下請けもまた叩いて、という図式ではなく、ある程度の落札

率で受注して、下請け・孫請けにも、利潤が取れるようなシステムにしてもらわないと、いつまでたっても下請け・孫請けが大変だということだけは避けていただきたいと思っっています。私もゼネコンさんの下請けも何回かやったことがあります。本当にいい部分をゼネコンによつては頭から削られて経費は出ないことがありました。私達は、地域のために仕事をやろうと思っっていますが、元請の利益を出すために仕事をやっている感覚になつてしまふわけです。そういう感覚にならないような元請さんが育つて、多くなつて欲しいと思います。

栗田顧問…そうですね。今は国土交通省が公共設計労務単価を上げましたので、それが本当に労働者まで行き渡っているかという調査をしていますので、みんなピリピリしています。それが政府の約束だとして上げたので、下請けさんの労務賃金もちゃんと上がっているか、元請で全部それを取っていたら意味がない話です。そこは非常に気にしているとこです。

〔新しい商工会活動へ、小規模企業振興基本法と支援法及び経営発達支援計画の策定〕

栗田顧問…比布商工会の荒尾会長さんともお話ししたのですが、小規模支援法で経営発達支援計画を作らなければいけないと言つて、それが結構問題なですという話をしたところなのですが、竹田会長のところはいかがですが。

竹田会長…いや、問題なのです。というのは、5か年計画なのです。そして、その認定を受け

ることによって小規模事業者、地域の事業者が事業計画を立てる場合について、商工会の職員が、伴走型応援の形で個人企業の計画を商工会と一緒に実施していくという事なのですが、今は5か年の事業と予算を、毎年5か年分予定として出しているのです。それをこれからは毎年毎年一年一年の事業検証をしていかなければいけないのです。

栗田顧問…予算を執行したら、成果が出たのかを検証する、公務員で言う事業評価ですか。

竹田会長…そうです。それが今の商工会の規模、職員数によって、それが検証できるのかどうか、ということと、その仕事にかかりつけになったら現在ある一般業務に負担がかかってしまうのです。

栗田顧問…この検証は大変です。

竹田会長…そうですね。だけど、国は意外とそういうことを簡単に出してきています。町村は地方創生の5か年計画をこれからやりますが、それと同じだと思います。町村も国にその計画を出した時に、本当にそれだけの能力がある職員がどれだけいるかによって、町村の計画内容が変わってくるのです。だから、町村も実施する場合には、町村の職員と私達の商工会と産業団体が一緒に計画を立てていかないと、町の計画が成り立っていないと思います。

栗田顧問…絶対一緒に立てて、そして商工業部分の所は切り出して、町は町の部分を切り出し

て、というようにぴったりくっついた形にしておかないといけないです。

竹田会長…今、支援法の関係で全道152ある商工会のうち一次募集で計画を出したのは、全部で23カ所の商工会ですが、そのうちの16が十勝です。

竹田会長…十勝で18町村あるうち16町村が出したのです。その認定がまだなのです。国も3月末に結果通知が来ると言っていたのですが、国の作業も遅れているようです。

栗田顧問…全国的に内容をもう一回見直すと聞いています。

栗田顧問…しかし、16町村が出したのは、すごいことです。それは竹田会長さんの音頭ですか。竹田会長…いや、連合会の指導と職員のやる気です。

栗田顧問…やっぱりそうなります。

栗田顧問…どうもありがとうございます。

平成27年4月16日11:00～12:00 於…安平町追分庁舎会議室

瀧 孝 安平町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

栗田顧問…町長さんが今お考えになっている地域の課題を中心にお話いただけると建設業にもつながっていくと思います。よろしくお願ひします。

〔人口減少と対策、安平町のまち・ひと・しごと総合戦略〕

瀧町長…今、国が地方創生のまち・ひと・しごと総合戦略を作って、地方を応援する交付金制度を作り、頑張るところに優先的に配分するようなことが始まっています。

この安平町も合併してから約8・3%、人口が減っています。合併した時に9、300人ちよつとで、なんとか1万人にしようと思っていたのですが、なかなかそうはいかなくて、定住対策とかいろいろ行い効果があった時もありましたが、その効果が薄れるとまた自然減少が進む、というように人口減少がずっと続いてきています。

消滅都市という言葉を日本創成会議で発表していますが、その推定によれば北海道中のはとんどの7割以上、150弱の自治体が消滅するといわれています。

要は20歳から39歳までの子供さんが生まれる年代の人たちがいなくなることがこの人口減少の大きな原因ということで、私達も以前から継続して移住定住などいろいろなことをやっています。しかし、全国的な問題であり私達だけがいくら頑張っても限界があるとも思っています。国が頑張るところには配慮することなので、私達もなんとかチャンスを活かしていきたいと思っています。

子供さんが生まれる世代の若い女性の方をどうやって増やしていくかを多くの町村が考えています。日本の人口構造は逆ピラミッドで、年少のところが非常にいびつになっていますので、私達の町も同じで、とりわけ高齢化率も3人に1人を超えて平成27年3月末で33.62%になっています。高齢者が多いので、その高齢者の方たちの知恵を借りてこれから町おこしをしようというのが、これからの私達のやるべきことと思っています。国がおっしゃるように良いところを何点か捉えてやっていますが、それが全部の市町村に通用するとは思っていません。この町はこの町のポテンシャルを活かした、まち・ひと・しごと総合戦略、地方版の戦略を、作るということです。

「まち・ひと・しごと総合戦略、道の駅」

瀧町長…ちようど今年いろいろな事業展開をしようというところで、大きく3つくらいに分けて、考えています。一つは道の駅を作ることです。今国交省さんとも調整させていただいて、本当はこの道東道の追分町インターチェンジの近くでやりたかったのですが、適地がないので少し離れますが、1 kmぐらい南で、考えています。住民の皆さまの合意形成を一所懸命やろうとしています。4月早々に説明会を始めたところです。まだ正式に道の駅を作ると意思表示をしているわけではないのですが、社会資本整備総合交付金を使いまして、都市再生整備計画を作つて国に出させていただきました。その承認をいただいで、多分予算の箇所付けもされたと思っています。道の駅としてまだ認定はされていませんが、そういう補助交付金制度も使わせていただいでおります。住民の合意形成ができれば、道の駅を作りたいと考えており、理解をいただければ、今年実施設計にとりかかりたいと思っております。

栗田顧問…土地は町の土地ですか。

瀧町長…そうです。道東道のインターチェンジから少し外れて、野球場とか小学校のグラウンドなどがあるところに約1・5ヘクタールの町有地がありましたので、そこでやろうとしています。

栗田顧問…ここからそう遠くないですね。

瀧町長…このすぐ近くで、国道234号沿いです。当初は追分駅の裏で、考えていました。ここは鉄道の町でしたのでSLを活かした道の駅を作ろうとして、千歳苦小牧の拠点都市の関係で駅の裏に計画してあったのですが、鉄道ファンだけでは観光としては難しいということもあり、国道のそばで集客をすることがこの町の知名度を高めるためにも一番いいと考え、3年ぐらい前からいろいろ計画立てていました。今駅の裏にある鉄道施設を移設して、併設した道の駅にしようと考えているところです。どうやって雇用確保をするとか、この町のいろいろな産品の直売所などもやります、産業おこし、ものづくりも含めて、道の駅をやっつけようと考えているところでございます。

栗田顧問…町が投資するのですから、最後は雇用ですね。

瀧町長…いろいろ議論がありまして、道内で今日発表になって115カ所目の道の駅があるのですが、賛否両論があるのは、道の駅の良いところと悪いところがはっきりしていることです。

栗田顧問…道の駅で品物が売れる、売れないで見るとそうなります。

瀧町長…消極派と積極派がおりましてその辺をどう理解していただくかが課題です。ここまで来ましたので国の都市再生整備計画の社会资本整備総合交付金も決めていただきました箇所付けもさせていただいておりますので、今はなんとか住民の皆様に理解をしていただきました

いと思っています。この機会を逃せばもうしばらく出来なくなってしまおうと思っています。

栗田顧問…交付金を使っているとすれば、この機会を逃すと難しくなりますね。

栗田顧問…町長さんもお分かりだと思いますが、農協の方と商業の方が、その道の駅で頑張つて儲けようというところが道の駅として流行っています。

瀧町長…それらの人たちがどう関わっていたかどうか、今のところ私達がやっているのは、農協さんに頼るのではなく、農家の人が直接頑張つて自分たちの家計を助ける、そういうメリットを考えています。また、ここもアサヒメロンなどいろいろな農産品がありますので、そういったものは当然団体を通してやっていただくことと考えています。

一般のものは農家の方が自分たちで生産したものを自分たちでしっかりとマネジメントして売ってごらん、というシステムでいきたいと考えています。当然道の駅をつくることによつて、この周辺で営業している方、いわゆる流通をやっておられる方にも影響はあると思いますので、あまり競合しないようにやっていこうと考えています。

栗田顧問…この農家からこういう商品をいつ入れてもらう、どのくらい入れてもらうことを、実際にマネジメントする人がしつかりしないとうまくいかないです。

瀧町長…まだ今のところは、道の駅は公共団体、公共的な法人しかできませんので、なんとか将来は、そういう団体の方に公共的な法人になっていただいでやっていただきたいと思って

います。今その詰めをしている最中です。今のところは町が主体で動いていくことになりませんが、いずれ観光協会のような公共的な法人に、運営主体になっていただければありがたいと思っておりますが、そううまくいくかどうかは分かりません。

栗田顧問…今町長さん方と商工会長さん方をインタビューで回っていますが、いろいろお話をしていると、商工会が元氣であればそういうことを事業として町の委託を受けて引き受けて、農協さんと自分の会員の人たちと一緒にしてやっていくことは可能な感じは見えました。

瀧町長…商工会では収益事業は難しいです。むしろ別なところでやっていければと思っております。今の観光協会は町の職員がやっているような状態ですから、今年も事務局長さんになるような観光やっていた方を一人任期付職員で採用しました。

瀧町長…町の職員として3年間の任期付で採用して、今観光協会の事務局をやっていた方がいいです。本州で働いていた観光のプロの方です。

「まち・ひと・しごと総合戦略、認定子ども園・児童館・子育て支援センター・放課後児童クラブ、子育て拠点の形成と総合庁舎への移行」

瀧町長…2つ目は、今人口減少社会で、若い子育て世代の方にこの安平町を注目していただくこと、知っていただいで来ていただいで、そして住んでいただけるような町づくりをしよう

ということですが、その中の1つは、この早来にも認定こども園がありますが、それを今民営化します。追分地域にも追分保育園と追分幼稚園、それと旭保育園という公立が2つと民間の保育所が1つあります。これを認定こども園にする時に統合することになっています。民間の社会福祉法人にお願いして認定こども園を目指していますが、その拠点はこの庁舎を明け渡して使ってもらおうとしています。

ここの1階を認定こども園にして、子供さんは減っていますので、3園統合して欲しい90人ぐらいの認定こども園にしようと考えています。2階には、議会などがあるのですが、児童館、子育て支援センター、そして今学童保育、放課後児童クラブ、こちらのほうが今年子ども・子育て支援法が変わりまして、今まで小学校3年生までだったのが6年生にまで拡大され増えるものだから、2階にその子育ての、今言いました児童館、子育て支援センター、放課後児童クラブを作ることにしました。

安平町は、合併方式が、対等合併だったので、全国でも稀な庁舎が分庁方式という事で、本所は一応早来になっていますが、お互い庁舎を残して本所だとか支所だとかということではなく、分庁方式にしたのです。

それを今この庁舎を子ども子育て拠点にするのを契機として庁舎機能を、見直ししましょうということ、合併して今年で10年経ちますので、やるとしたら町村合併して10年目の今

と考えています。

この追分庁舎をJＲ追分駅前にある「ぬくもりの湯」というお風呂つきの施設が併設された「ぬくもりセンター」に今社会福祉協議会しか入っていないので、総合支所として移すことにしています。そこは合併する前は福祉の拠点でした。

早来は、総合庁舎として今まで機能分担方式でここ追分には教育委員会があり議会があり、そして健康福祉課、建設課という大きな機能がありました。それを今度は総合庁舎として早来庁舎に一元化しようとしています。

そして平成30年4月を目指して、庁舎を改築して耐震化して、横に増築をして教育委員会、議会、を全部集約した施設をつくるということで、これも住民の合意形成が必要でして、理解が得られれば今年から順次設計をしながら段階的に進める流れで考えている大きな対策の一つです。

これは、私達にとって大事業です。さらに、もう一つ、その次があります。公民館に教育委員会が入っていますが、何人か残して全部移します。教育委員会制度も変わりましたので町長と教育長が一緒にいるのがいいという考えで、早来庁舎の総合庁舎に移す考えです。

「まち・ひと・しごと総合戦略、住民及び世界への情報発信エリア放送「あびらチャンネル」」

瀧町長…大きな2つ目の事業は、汚職事件があった情報化事業のことです。議会でも今回予算を計上したことについて撤回したらどうだという話をいただいたのですが、職員は職員、悪いことしたのは悪いこととしたので、事業は私達としては止めることは出来ないとしています。町の将来にとってこの事業は、冒頭で申し上げた人口減少社会の中で高齢人口の拡大、今最大の目玉としている観光、この町を知っていたかく、子育て世代の方に注目をしていたかく、そのために情報発信していくことが必要です。今までのようにただゴルフ場がありますとか馬産地ですと言っても、攻めていかなかったのです。攻めるためには情報の伝達手段といふものをしっかりと構築してこの町を知っていただくことです。北海道の中でも道庁の職員です。えもまだ「やすひら町って言うのですか」と言われて、がっかりすることがあります。

栗田顧問…それは怒らないとダメです。

瀧町長…本州の方は仕方がないですが、北海道の職員ですら「やすひら町って言うのですか」というのであれば、合併した町の宿命ですが、どうしても町を知っていただく手段として、この「あびらチャンネル」という北海道ではじめてエリア放送を活用したテレビを、全域で広げていく計画で、昨年遠浅地域を一部先駆けてやりました。

しかし、その中で問題が発生してしまいました。情報をいわゆるインターネット通信網を

はじめとして、いろんな伝達手段がありますが、外部に情報発信するということで問題の備品を整備したときに不正を起こし事件になってしまいました。それとは「あびらチャンネル」は違うのですが、関わったことは間違いないので、議会ではそういう職員が関わった工事について撤回すべき、という意見もありましたが、私達としましては先ほども言いましたように、それはそれとして反省をしながら不正のないような形で見直して、そして事業は3月1日から動いていますので継続していきたいとしています。議会で大議論になりましたが、「あびらチャンネル」という事業を議会で通していただいたので、あとはしっかりチェックしながら不正がないようにしてやっていくということになりました。

早来に「あびらチャンネル」の本局がありましたので、平成27年度は追分に基地局を作ることを進めます。これから6月の議会に箇所付けを提案のうえ、工事の設計をして、改めてもう一度委託契約をやり直し、全体設計を見直しながら、次の工事を実施していきたいと考えています。

「あびらチャンネル」という手段を使って、テレビで町内の方にはご覧になっていただいています。町の情報をどうやって発信していくかという課題はあります。しかし、町内の皆さまにも情報を提供していただいで、それらのいろいろな情報を、インターネット通信網だとかワンセグ、フルセグの機能が付いたシステムに乗せていくことができますので、町外に

も十分発信していけると考えました。観光や先ほどの道の駅を中心としたいろいろな情報発信をやっていくというのが今考えていることです。

そういう事を通じてぜひ安平を知っていただいて、何とか人口減少に歯止めをかけ、そしてまた最終的には定住人口に結び付けていきたいと思っています。町の人口減少に対する取り組みに関しては以上でございます。これは30億円を超える大事業です。

不正事件で、その入り口でつまづいていますので、何とか町民の皆さまにこの2ヵ月かけて、理解していただきたいと考えています。4月にまず自治会町内会の代表者の方にご説明し、来月はまた町内10カ所で説明会を開き、最終的には全体的な住民説明会を開き、いろいろな声を聞きまして、賛否両論あると思いますのでよく見極めた上で実施をするかどうかという判断をしていきたいなと思っています。先ほど言いましたように道の駅は、社会資本整備総合交付金をいただく箇所付けもしていただいたのに、これを降りるということになると私達としては将来に不安を残してしまうということになります。そのため、しっかりと説明をして理解をいただきたいと、思っているところでございます。

栗田顧問・今の「あびらチャンネル」で、住民の住んでいるところがポツポツと離れています。が、全部世帯をカバーできるのですか。

瀧町長…今検証している最中ですが、昨年遠浅地域でやったときも、やはり不感地域はありま

す。木があつて邪魔して、届かないというところがあります。それは最終年度で、全町的にやった段階でどういったところが見られないかと、その解消する方法は、例えば基地局を立てる手段もありますので、そうなるともたお金がかかりますが、いろいろなことを考えて進めます。最終的にどうしても不感地域が出てきたときは、テレビではなくスマートフォンなどを配って対処するともあります。いろいろその対処法を考えている最中で、最終年度に対応していこうと思つています。

いずれにしても防災情報もありますので、何らかの形で町民のみなさまにお知らせをすることが必要で、きちつと対応していきたいと思つています。できれば100%と思つているのですが、今の方式では100%は無理と思つています。今のやり方は、30局位で全町域をカバーしていますが、それだけでは実際にはカバーできないと思つておりますので、ある程度コストをかけていくつか局を増やしたとしても、100%にはならないと思います。必ずかなり離れているところや、どうしても障害があつて届かないところがありますので、そこはもう仕方ないと思います。電波で飛ばす方式をやつているところがありますので、スマートフォンなどを配つて、カバーするとか、も考えています。

栗田顧問…最後はそこになります。時間はかかつても100%を目指していくということですね。

瀧町長…そうです。だいたい5年ぐらいの間には全町をカバーしたいと思っています。ただ今こういう事件が起きましたので私達もストップしようかと思つたのですが、今北海道総合通信局さんが主体で大学の先生と勉強会をやつていまして、北海道でエリア放送を広げていこうと、今札幌市のテレビ局と、やるところもありますし、釧路町さんもやりたいということ、私達だけの理由で簡単に止めることは出来ないことになっていきます。その中の議論の一つにエリア放送には補助制度がないことがあります。それで、それをどうするかも含めて今勉強会をやつて考えていくところです。

私達としては決して悪い手段ではないと思ひますし、補助制度さえあれば本当はいいのです。私達の今回の事業は、たまたま国の元氣臨時交付金があつて、それを使わせていただきました。遠浅地域は1億円ぐらいで終わりましたが、あとこれからまだ4億円弱ぐらいかかるので、これをどうするかが残つています。いずれにしても今は自前でやろうということを考えております。

栗田顧問…自前は厳しいですね。

瀧町長…はい、厳しいですが、先ほど言いましたいろいろな大型事業もそうですが、合併特例交付金を使わせて頂いたり、過疎債を使わせて頂いたりして、実質的には半分ぐらいは補助金になっていきます。そういう有利な起債を使わせていただいきたいと思つております。

おかげ様で合併して10年目ですが、合併効果は私達の場合には非常にあったと思っています。今財政調整基金とかの特定基金も増えてきて、当初の計画では合併する時に財政が問題だったのですが、今は基金もありますし、そういうものを投入しながら十分やっていける財政収支計画も作っていますので、やることについては心配ないのです。

例えば道の駅であれば将来負担になるという議論はありますが、黙って手をこまねいて何もしないよりは、アクションをしないと、次の世代が変わっていかないと考えています。私達としては、こういう大型事業、30億円をちよつと超えるのですが、この事業をやっても十分可能だと思っておりますし、将来にやった後にある程度の資金も残していけるといけるという精算を立ててやっていることでございます。私としては、あとは皆さん頑張ってください、みんなでもやろうという雰囲気になっていけば、変わっていくところだと思います。

栗田顧問…そうですね。そこが一番大事で、それを使ってみんなで儲けましよう、町を良くしていきたいましようというふうになるといいです。

瀧町長…そういう発想になっていけば、あちこちの道の駅も手掛けられた北海道コンサルさんに、いろいろ試算をしていただいて、黒字になるような形で出していますが、大幅な赤字にならないようにするには、皆さんの頑張りが必要だと思います。ただ行政に任せたり、特定の人に任せたりしてしまうとうまくいかないと思っています。

栗田顧問…結局、どこを見てもうまくいっているところはみんな協力してやっているところ  
です。

瀧町長…みんな依存体質ではダメです。

〔安平町の建設業と契約システムの再検討〕

栗田顧問…建設業は今の事業を地域でしっかり担っていくことになりますね。

瀧町長…そうです。今、例えば早来地区の国道が4車線になりました。その周辺を今建設協会  
の方にも入っていただいでビュートイサポートルート234という組織を作って、美化活  
動をやっていたいでいます。美化活動の住民の活動団体で、それを中心的に建設協会の方々  
にも関わっていたいで、町のイベント、一番大きなイベントといえは「安平うまか祭り」  
というイベントを7月の第1週にやりますが、そういう時にも積極的に参加をさせていただきます。

私達は建設協会さんがいろんな意味で活動していただいでいると思つていますので非常に  
感謝しております。ただご指摘のように北海道全体もそうですが、若い人たちは建設業界  
に入る方が非常に減っていることは間違いないことだと思つていまして、私達もそうした危  
機感があります。合併してから2社ぐらい辞められた会社もありますが、私どもは建設業界

の方も頑張っていただいて思うっています。

栗田顧問…建設業は、大きな流れで言いますと、1年ごとの年暮らしなのです。次の年どうなるか分からないので、町長さんにお考えいただきたいことは、来年も再来年もずっとこういう事業が少なくとも5年ぐらい町としては、少ないけど頑張りますというところを持つていただける大変ありがたいと思います。

瀧町長…それは協会からお話ありますし、今回のように不祥事があって契約システムというのを見直している最中ですが、どうしても壁にぶつかるとは、一般競争入札であれば誰が入るか分かりませんので、ただそうなると地元の企業が取れる、取れないという話になりますし、国のほうもできるだけ地域の企業を考えたいという話です。きちつとやれば全て一般競争入札、オープンでやるということになってしまいます。

栗田顧問…地域の小さい仕事は地域の建設業にやってもらう。技術的に出来ないものは仕方ないですが、町が発注する事業は町の人が発注することがいいのではないですか。能力的に難しい部分は、町内の会社だけであれば必ずありますのでジョイントベンチャーで応札できると指定していただけるといいと思います。

瀧町長…交付金、補助金の額が決まれば、それでコンサルタントに設計していただき、その設

計金額がそのまま予定価格になるという仕組みですので、コンサルタント、交付金、補助金に係わった職員は予定価格が分かることになりました。

そのシステムを考える検討委員会をやっている最中で、大きく変えていかないと私達がやっている予定価格は意味がなくなってしまうと思います。設計した人は設計価格が分かっているわけです。そして、変えられないというのも分かっているわけです。それであればどんどん漏れてしまいます。そこは変えていかないといけません。地域差で何%から何%までは、例えば、その範囲以内で北海道の場合は3%ぐらいまではなど、を考えていかないと、予定価格イコール設計金額ですから、私達がいくら頑張っても意味ないと感じています。

### 〈建設業の役割・期待〉

瀧町長・建設業に期待することは、今私達の大きな課題はインフラの維持管理です。いわゆる長寿命化計画を作って進めています。道路や、公営の様々な施設について何十年も経って、どうやって維持していくかが最大の課題です。これは建設業さんだけではなく、私達行政も含めてこれをどうやって計画的に支援をいただいで、計画作りだけではなくて、実際に補修する時に起債だけではなく違う形でやっていただけないのかというのが最大の課題です。そうすると建設業の方も、ある程度安定した継続的な事業が出来ると思っています。そうやっ

ていかないと、本当にこれから大変だと思っておりますので、その辺をぜひお伝えをいただければありがたいです。

もう一つは、ここ胆振は有珠山があり樽前山があり、そういう火山を抱えているところでもありますし、また石狩低地東縁断層帯という断層帯もありますが、今のところ私達安平町は平和で安全な安心な街で、災害があまり起きないところです。昨年遠浅地域というところで、これまであまり起きたことないのですが、竜巻がありまして、それこそ業者の方に飛んできていただいているいろいろやっていただきましたが、本当に稀です。やはり災害が起きると、建設業に頼ることになりますので、何とかがんばっていただいています。

栗田顧問…これから公共施設の維持を考えていただいて、少なくとも1社だけは町に残してもraitたいと思います。そうしないと大きな災害が起こった時に、地域の細かい事情分からないために、町外からの助けが大幅に遅れてしまいます。

瀧町長…それは私達も、建設協会さんと災害が起きた時には協定をさせていただいています。建設会社さんがいないと何もできません。災害がないと言っても小さなところがちよつと決壊したとかはあります。そういう時にはすぐ対応していただいていますし、大きな役割を担っていただいておりますので、私達としては共存共栄していく建設業界と思っておりますし、必要な協会だと思っております。

私達としても国の補助金も遅いですから、春先に仕事がありませんというのも悩みの種ですが、できるだけ単独事業を5月6月という前半で発注するようにお願いもされています。私達も配慮して単独事業をやっているというのが実態でございます。

今冬の事業というと建物、例えば公営住宅の廃墟であったところを壊すような仕事しかありません。しかし、そうになると、建設業界さんも人を確保しなければならないのです。それで特定の会社ではなく、協会の皆さんで協力してもらってやる形にしないと、冬期間に従業員の方を休ませてしまいます。そういうところは頭が痛いところですよ。

「再び「あびらチャンネル」、太陽光発電、大型の蓄電池システムの立地」

瀧町長：「あびらチャンネル」は、事業期間は最大5年と想っています。今年を追分の地域で基地局を、例えばぬくもりセンターにつくるとしても市街地だけになり、周辺が残ります。来年は早来・安平で、最終年度で追分地域や遠浅・追分・早来の不感地帯、をと考えています。今のところ4年だと思っただけです。ただシステムがうまくあればカバーできますが、たぶん4年で全部をカバーできるかということになると、ちょっと不安なところがあるので、5年はかかるかなと思っています。

整備費は全部含めると総体の事業費が5億円です。ただ、これは30局でカバーできますと

いう計画でのお金ですので、たぶん5億円では終わらないと思います。最後に先ほどお話ししたような方式でカバーしようとするれば、これでは収まらないので多少は上積みになってくると思います。

瀧町長…ここ安平も大規模太陽光発電や、大型の蓄電池システムという北電さんと住友電工さんの共同で世界最大級のレドックスフロー電池の設置による実証実験を200億円ぐらいかけて今北電さんの南早来変電所内に、建物を作って、今から中のシステムを作っていくようです。今年の冬ぐらいまでには出来ると聞いています。ソフトバンクさんも今年11月ぐらいまでには完成すると思っています。ここも太陽光発電が結構あります。しかし、残念ながら太陽光発電は雇用がありません。

栗田顧問…土地の貸し出しだけです。

瀧町長…それで今国が財政審議会で問題にしているのは、償却資産を廃止しようという動きです。ゴルフ場利用税とか、固定資産税の償却資産が租上に乗っているのです。償却資産を地方税から取られたら私達のように太陽光発電をやっているとところは一銭も税金が入ってこないのです。これは大問題です。雇用でもあればまだ我慢できますが、太陽光発電にメリットがあるとすれば償却資産ということしかないのです。これが無くなると、私達はやった意味がなくなるのです。ただパネルが置いてあるだけのことになります。

（平成27年度全日本ホルスタイン共進会の第14回北海道大会と平成28年度日本ゴルフ選手権の  
安平町開催）

瀧町長…あとイベントのこと2つお話しします。1つは今年10月23日から26日まで全日本ホルスタイン共進会の第14回北海道大会があります。これは10年ぶりの開催になりますが、北海道で初めて開催することになります。安平町早来の新栄にある北海道ホルスタイン共進会場というところでやります。5年前に口蹄疫とか大震災で中止になってしまいました10年ぶりに実施されます。

また、来年日本ゴルフ選手権大会、まだ日程は決まっていますが、たぶんリオデジャネイロのオリンピックが8月で決まったので、もう間もなく決まると思いますが、その前にやるということで富岡にある北海道クラシックであります。大きなイベントがこの町で2つあります。ご注目をいただければと思います。たぶん7月になると思います。よろしく願います。

栗田顧問…ありがとうございます。

平成27年4月20日11:00～12:00 於…蘭越町長応接室

宮谷内 留雄 蘭越町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

中野 豊 小樽建設協会副会長

栗田顧問…地域の課題について、町長さんがいつもお考えになっていることをお話しただけ  
ればと思います。

↓人口減少が一番地域の課題、しかし、町や地域だけでは解決できない↓

宮谷内町長…人口減少問題、これが一番です。地方創成会議で議論しているように地方の人口  
がどんどん減って行っています。私は以前から今まで人口が減少して大変だと言っていたの  
ですが、北海道はもちろんのこと、国全体がそういう状態になっています。平成27年4月9  
日の北海道新聞だったと思いますが、全国の896自治体が今後消滅して行くだろうと、地  
方創成会議で増田さんが発言した記事が載っていました。昔、全国で市町村は2、500あつ

たのですが、今は1,718市町村しかありません。2040年、平成52年には、約50%がなくなってしまうということです。

この地域も例外ではなく、1市19町村が後志管内にありますが、人口1万人以下の町村がほとんどです。特に人口減少、少子高齢化、過疎、そして福祉医療、経済、景気、雇用、財政（市町村の財政難）が課題だと思えます。人口減少で一番困難なことは、今になっては遅いぐらいですが、このままでは地域のコミュニティが成り立たなくなり、地域が崩壊してしまうのではないかと、農山漁村は消えて行くのではないかと、私は一番懸念しているところです。

栗田顧問…人口減少は実際、前々から町長さんが取り組んで来ておられると思いますが、その中でやっておられること、それから、これは効果ありそうだというようなものもおありと思います。その点についてはいかがですか。

宮谷内町長…例えば、後志地区は北海道農業の縮図と言われております。水田あり、畑作あり、果樹あり、酪農あり、畜産あります。私も町長として27年目になりますが、一生懸命全力で人口減少の対策を行ってきました。しかし、人口減少問題は一つだけの施策だけではどうにもならないのです。私も農業、特に稲作、と福祉に力を入れてきました。実際、管内の各町村も一生懸命、農業や水産業に力を注いできましたが、如何せん、農業をやっていけないと

離農して行く人が多いのです。北海道でも、平成2年、25年前までは、農家戸数が8万6千戸ありましたが、平成22年では4万戸になっております。このことを考えると農山漁村の人口減少は、都道府県や国の政策が重要で、市町村など地方が頑張っても限界があることがはっきり言えると思います。

私も町村代表として北海道総合計画の策定委員を務めていますし、国土交通省の国土審議会北海道分科会計画部会にも所属し、様々な勉強して気付いたことは、人口減少問題は一つの町でいかに努力しても限界があるということです。自分たちの力がないことを感じます。

例えば、農家が8万6千戸あったのが半分近くなった、そうすると当然それに関わる商店なども同じように減っていきます。しかし、農家戸数が減っても面積が同じなら、例えば10人が1人になるので、所得は10倍あると言います。

栗田顧問…同じだけ生産できればという前提です。

宮谷内町長…出来るとしても、それは、必ずしもその地域が、それでよいかということにはならないと思います。もちろん所得がなかったら生活ができないのですが、私が農業や水産業に関わって感じることは、国は所得にだけ目を向け、本当に農業や水産業のことを考えているのかということです。私は北海道農業会議の委員も務めていますが、TPPの問題は深刻で、日本全体で10兆円ある農業生産額で、北海道は1兆円を占めています、それを削

り落としてもなんでもない、さらに、日本のGDPは今500兆円ぐらいで、北海道では1兆4、000億円ぐらいだから、1兆円はたいしたことはないと言う人がいますが、私は考えています。

栗田顧問…私も大変な影響だと思えます。

〔農業水産業の専門高専を作れないか〕

宮谷内町長…国が経済を大きくしていくという立場で方針を進めてしまえば、大変なことになります。

皆さんご承知のように全国に工業高等専門学校は52ぐらいありますが、全て電気科、機械科です。北海道の食料自給率は200数十%ですから、北海道は将来の日本の食糧基地だ、また、全世界の人口は65億人ぐらいだから、90億人台になる、北海道は今後、アジアの食糧基地だという方がいます。理論上はよく分かりますが、工業高等専門学校の一例を見てもわかるとおり、農業、林業や水産業の高等専門学校はなく、本当に農業に力を入れているとは思えません。北海道がそういう意欲があるのであれば、なぜそのぐらいの農業の学校を作る努力をしないのか、そういうところで日本の先駆的な役割を担っていかなければならないと、この頃強く感じているところです。

「農機具を北海道で作れないか」

宮谷内町長…蘭越でも農機具の販売する支店があるのですが、この機械は全部、本州や外国で作られたものです。それをなぜ、北海道で賄うことができないのか、議論では民間や公の企業が一緒になって作り出そうという話はあるのですが、現実にはできていないということですね。だから、域際収支はいつもだいたい1兆6千億円とか2兆円くらいのマイナスになっています。それを改善しない限り、北海道はよくならないという気がします。

現在、自動車や農機具を作っている企業は独占的になっていきますから、新しく農機具を作ると言っても、金融機関はお金を貸してくれません。しかし、農機具ぐらい北海道の企業で作れないものかと思えます。

今、蘭越町も5カ所の地区で道営の土地改良事業を行っていますが、自民党が政権に戻り、事業も元に戻ると思っていました。私は、北海道土地連の副会長を務めていますので、よくわかるのですが、みんなが一斉に予算要望したことから、事業費が足りなくて大変な状況になっています。平成26年だけで、60億円足りないとか600億円足りないとかわれられています。

農業ひとつをとっても、将来に向かってどう取り組んでいくのかということですね。農業者の数が減ってくると、当然、農家の子ども達もいなくなります。皆さんが、人口減少問題に

工夫を凝らしてどうするか真剣に取り組んでいます。しかし、一町村だけではどうにもなりませんし、北海道全体でやってもどうにもなりません。蘭越町では米作り農家はまだ340戸ぐらいあります。その農家が高齢化し、続けて米を作っていくことは困難です。これは建設業も同じですが、何か急にやるといつてもお金がいるし、労働者も必要です。

米作り農家の一戸当たりの面積は、蘭越では9ヘクタールから10ヘクタールぐらいです。大面積の人たちはまだできませんが、9ヘクタール程度の農地では、生産性を上げるため基盤整備が必要で、それを今、町内5カ所で実施しています。

気温が低くなり、また、雨の多いときは、水田の土地改良がされてないと、水が溜まり、冷湿害が起きます。それで、土地改良して生産性を高めるために、面積を大きくしていくわけです。以前は1反(10アール)くらいが大きいと言われていましたが、現在は2町歩、3町歩(ヘクタール)になっています。国営はもっと大きくしているそうです。

そういう中で、先ほど申し上げたように、機械を大型にしなければなりません。北海道庁や北海道開発局、北海道大学、酪農学園大学、民間、銀行などが協力して、北海道で大型の農機具を作れるよう、前向きにできないか強く望んでいます。

「新しく農家を始める人達は、トマト栽培を進めている、土地と資金が少なくとも出来る」  
宮谷内町長…新しく農家を始める人に、9ヘクタールの水田を買って、さらにコンバインやトラクターなどの大きな農機具、その他小さい農機具を買おうとなると、資本力が必要となり大変です。

人的担保、それから物的担保がない人にお金は融資してくれません。それでどうしているかというところ、最近では、米の外にトマト生産が盛んになっています。

中野委員…トマトジュースを作っていますね。

宮谷内町長…昨年は一次申告で、2億6,000万円ぐらいの売り上げになりました。ハウスや土地がなくても、個人でできる能力と生活可能な収入を考えると、60mぐらいのハウスが、6本から10本あれば、やっていけるそうです。

それで町では、農協が使わなくなった農地を買い取り、研修農場をやっています。平成24年度に4戸の研修生を募集して、2年間の研修を終え、27年4月から4世帯、子ども生まれて10人が実際に集落に入り、農業を行っています。

中野委員…どちらから来た方ですか。

宮谷内町長…北海道外で、北海道に来たことがあるという人が多かったです。

栗田顧問…確か研修期間2年間は給料払いますね。

宮谷内町長…給料払いますが、国の担い手育成事業です。27年度も募集したところ1戸入りしました。

役場の指導員による2年間の指導で、実際に農家に入って学んだ方がよいということになりました。例えば、農作業は夏には朝5時位から始めて、日が出て、暑くなったら止め、また夕方作業するというような「ノウハウ」を身につけなければなりません。

27年度の研修生も農家で研修の後、研修農場に研修を積むことにしています。

栗田顧問…本当の農業を知らないとだめだということですか。

宮谷内町長…そうです。それで農業の専門学校が必要だと言っているのです。北大や、帯広畜産大学などがあるだろうと言われますが、4年間大学に行っても、2年は教養を学びます。後の2年間で、専門知識を得ると言いますが、実際の農業を学ぶことは困難だと思います。私は、いつも、農学部出の職員を試しています。例えば、リービッツヒの養分率について、これは、肥料には、窒素、リン酸、カリウムの3栄養素があり、そのうち一番少ない栄養素に成長が左右されるというものです。これは、樽桶の原則といって、昔、おばあちゃんが樽で沢庵を作るときなど、新しいときは良いのですが、古くなって、樽を組む木の一片が折れると、水をいくら入れても、折れたところから出てしまいます。水田も畑もそうなるという話なのですが、その辺を試しに農学部を出た職員に聞くのですが、よく分かっています。高

校出ても、大学出ても自分の土地で実際に自分の体が農業を分かるまでには10年ぐらいはかかると思います。どこの町でもそう言われているようです。新しく農家になるというのは大変なことです。

余談ですが、農業のお嫁さんのイメージを聞いたところ、暑いのに外で農作業に励み、昼は、ご飯支度をして、その後、子供の面倒を見る、大変な重労働だと思われています。実際に、今のお嫁さんは早く切り上げて、ご飯支度に帰り、子供はおばあちゃんがみる、そして、おばあちゃんがたはパークゴルフをするなど、農業をみんなで手伝うことがなくなったそうです。

しかし、現実には、農業、水産、林業を営む人が減って、町は衰退が目に見えて、集落が維持できなくなってきました。そのことが一番心配です。

「全力で人口問題に取り組んできた、しかし、一つの方策、施策や政策だけではどうにもならない」

栗田顧問…長い間町長さんをおやりになって、蘭越の中でもそういうことがあちこちで起こっているのではないですか。

宮谷内町長…起こっています。蘭越のことだけを言えば、町の農家への支援は、堆肥投入やトマ

ト栽培などのハウスの4分の1の補助など、話しきれないほどたくさんやっています。それで何とかなるだろうと思っていました。今は大変になると思い始めています。農村漁村は戦後から人口減少は続いていました。私が小学校の頃、昭和20年代、中学生は金の卵と呼ばれ、卒業後は俱知安の2つの学校へ列車に乗って通っていました。蘭越中学校だけでも、140〜150人の生徒がいました。目名、昆布、御成、三和、初田と地域に各中学校がありました。それが、一つになり、現在は一学年20人を切るくらいに減っています。どこの町もそうだと思います。

20何年間後ろを見ず、全力でマラソンと同じに走ってきました。後ろを見ていたらできなかったと思います。どこの町村長も同じだと思いますが、自分が地域の人と一生懸命頑張っているのに、どうしてこの問題を解決できないのかと思います。日本創成会議の増田座長さんではないですが、女性の20歳から39歳までの人がどんどん減っていることが問題だといわれていますが、その範囲の人をどう増やしていくか、一つの施策や政策だけではどうにもならないわけです。人口減少問題は本当に大変です。

（人口減少下で生産拡大の方向とある程度の生活が出来ればよいという考え方の選択）  
宮谷内町長…今の日本が進めようとしているのは、人口が減っていくのに、生産のパイを大き

くしていいこうという方策です。資源がないので苦労しながら世界の中で戦ってきました。一方で北海道はどうなのでしょう。そうじゃないと思います。豊かで、環境が良くて、ある程度であれば良いという考えもあると思います。

栗田顧問…私もそう思っています。

宮谷内町長…無限の追及です。経済の規模が大きくなって、所得があつてというのも一つの道だと思のですが、今のままであれば、限りなく追及して、人口減っていったら、今後の方策は、国内にはなくなると思います。

なぜ人口が減りだしたかという点、私たちが子供の頃そうだったように、若い女の子たちは、テレビや映画で都会に素晴らしいイメージを持ち、そこへ行ったら幸せがいっぱいあると思ってしまう。だから学校を出て、札幌などへ行くのです。例えば、テレビの映像で、女の子が仕事から部屋に帰ってきて、水を飲むだけでも、普通の田舎の子供ならうらやましいと思うのです。私たちの町もそうですが、夢に惹かれるということが、地元で女の若い子がいなくなる原因だと思えます。

私が町長になって最初に、これから高齢化社会になると考え、20数年前に目名地区と昆布地区に高齢者生活福祉センターを造りました。自分で生活できる高齢者が冬の除雪などに困らないよう、居住スペースを10数戸備えています。温泉のお湯を入れて、お風呂を造り、看

護士を配置してデイサービスをやっています。

供用を開始してみると、当時の考えと違い、家族が面倒を看られない、自分でやっていけないという人がどんどん増えていきました。そういう方をどうするかということで、今度は、中心部でお店を辞めた方から土地を買い取り、共生型の高齢者住宅を造ることにしました。また、ケアハウスも計画しています。役場の審議会で2年ぐらい議論しています。やりたいことはたくさんあるのですが、最後には、財政の関係で、順番をつけ、今年だけでなく、平均的にやっていかなければならないということです。

↓平成の合併問題でみんなが町のことを考えるようになった↓

宮谷内町長…ここ10年くらいで、みんな地域のことをこのままではいかんぞと考えはじめたと思います。そのきっかけは平成の大合併だと思っています。私はいろいろな週刊誌や新聞に、合併には消極的だと書かれました。今だから言いますが、私は合併しないなんて一言も言っていない。しかし、橋や道路なら20年か30年経てば壊せますが、合併したらそうはいかないと話したことがあります。その時は自分の町を見る力でそう考えたのですが、職員も住民も当時の考えと同じになってきたと思います。

平成21年1月6日の北海道新聞の社説に私と奈井江町の北町長が載りました。その中で、

町の自立を町民との対話や専門家との討論会で3年をかけて決めたことに、東京大学の篠原名誉教授が新しい自治の形だとして絶賛されました。それまではバスに乗り遅れたなどと言われていました。

他の合併した町村がどうだったと言えば、私の知らないところで良くなったところがあるかもしれませんが、状況はほとんど同じで、人口は減っています。議会からも合併しないで良かったと言われています。法定協議会に入っていたのですが、議会が離脱しました。合併しなくて良かったというよりも、その時にみんなで考えたことが良かったと思います。

町の事務職員は、最高で150人いました。それに幽泉閣と雪秩父という二つの温泉を経営していましたので、それを加えると職員は180人いました。合併のために、職員が勉強会を行い、私も余計なことはいませんが、そのうち5人の係長を指名して自立の道を検討させました。課長などがやれば、私の手先として私の言ったとおり、どんどん借金をして施設を作り、今の国のように返す金より、借りる金が主となり、プライマリーバランスがいつも赤字になってしまおうと考え、若手を起用しました。

その時、北海道が、蘭越町役場は潰れますとホームページに載せました。その時の係長5人に対策を検討させまして、行財政再構築プランを作り上げました。今では、全部の会計で48億円の基金があります。

150人いた事務職員は、今約100人です。温泉の職員を足しても120人切っています。その代り、臨時職員が増えています。

また、北海道で自治体の第3セクターで温泉を経営していて黒字のところはどこかありますか。たぶん蘭越町だけだと思います。

中野委員…雪秩父はどうですか。

宮谷内町長…雪秩父はとんとんで辞めました。また建て直しています。

中野委員…雪秩父を民間に払い下げなかつたのですか。

宮谷内町長…いいえ、払い下げようとしているのはスキー場です。雪秩父は建て替えて日帰り温泉にして、健康づくりの場にする予定です。現在、蘭越の観光は、蘭越・ニセコ・倶知安の3町で構成する観光圏が観光庁から指定されました。蘭越町は入らない予定でしたが、他の2町の町長がどうしても入ってほしいとのことで入りました。町の温泉があったからだと思います。

また、人口が減って担い手が少なくなっても農業ができるようにと、吉国地区に稲の苗を作る育苗施設を作りました。683ヘクタール分の苗を作って農家に出荷しています。農家の苗を作る労力を補完しています。町内の水田約1,700ヘクタールのうち、683ヘクタール分の苗を供給しているので、町内で生産される「らんこし米」の3分の1の苗を町

が作っていることとなります。施設は町が直営で運営しており、担当の産業経済課職員だけでなく、早朝から他の課も手伝ってやっています。1日、育苗マットを9、000枚から12、000枚出荷します。機械で種を蒔き、水をかけて、育苗室で「は種」させます。3日後に育苗室から出して、農家に出荷しますが、臨時も含めると、常時35人程度で作業を行っています。

毎年、作業を始める前の早朝に、私も含めみんなで安全を祈願します。初出荷にも駆けつけ職員を激励しています。農家の労力を省き、他の作物も作れるように町が対応しています。人口が減り、町の経済も縮小しています。ですから、新聞などで企業が史上最高の利益を上げたと報道されても、田舎ではそういう実感はありません。

プレミアム商品券は、蘭越町も売り出しましたが、最初は購入者の行列ができたものの、まだ完売になっていません。また、町で住宅のエコ化を推奨しており、暖房の熱が逃げないように窓を直したり、断熱材を入れたりするなど家の改修に、1戸当たり50万円を限度に助成しています。限度額を60万円に引き上げる予定ですが、これに使えるよう、建設券のプレミアム商品券というのも商工会で発行予定です。

福祉については、蘭越町にも介護施設があり働きの場があります。蘭越高校の生徒や倶知安高校に通学している生徒にまで、初級介護士の資格を取るための経費6万円を蘭越町が補

助しています。できれば地元で働いて欲しいと期待していますが、なかなか働いてくれません。逆に倶知安や共和、ニセコから蘭越町に働きに來ます。それで住宅を完備しています。今後は、補正予算で1億数千万円かけて町外の介護士などが住める1棟6戸の住宅を入札する予定です。そういう小さなことまで、町でやらなければ、人は簡単に減って行きます。

栗田顧問…先ほどの経済がたえず発展するのではなく、ほどほどの経済で生活ができて一生がうまく回ることがいけないのか、という話をされましたが、蘭越町の経済規模が縮小して人口が減っていったとして、一人当たりの食べる分というのはそんなに変わらないわけですから、そこで生活が回れば、よい生活ができるのではないかと感じますが、いかがですか。

宮谷内町長…価値観の問題です。日本の教育が、先ほども言ったように一次産業と言いながら、卒業後はものづくりで生計を立てる、ものづくりをして優秀という方向に導いています。それもちろん大切ですが、一方で、農村漁村では、ほどほどの生活を求める人たちがいることも、それは良いのではないかと思えます。選べるようにした方が良いと思えます。

栗田顧問…都会は別に平気なのでしようが、確かに地方に行けば行くほど、農機具の話にしても、福祉の住宅まで造らなければいけないということも起こるのだと思います。

宮谷内町長…ですから、結果的にその施設の財源がないということとなります。都会でもそうい

う施設を作ることが出来なくなり、いずれ施設が足りなくなり、札幌も東京も孤独死する人がたくさん出てくることになります。他人事のようにですが、穏やかでない時代が来ると思います。福祉に携わる人で大事なことは、人間として高齢者や体の不自由な人をきちんと介護をする専門知識をもった職員の養成がもっと必要だと思います。ところが、収入が少なくて、採用の募集をしても応募する人がいません。飛躍していえば、建設業も蘭越町では、私が町長になった時は70億円から90億円ありました。

中野委員…後志全体がそうでした。

宮谷内町長…お金借りて公共事業をやりなさいという政策でした。ところがある時、これ以上貸さないとまりました。

中野委員…今はむしろ、国や道の予算より、自治体で交付金があるので、建築などは自治体の仕事が増えています。しかし、北海道は減りすぎています。

宮谷内町長…確かに、北海道の予算が2兆6,000億円か7,000億円あると思いますが、交付税が7,000億円で、税金が5,000億円までいかないのです。そういう状況で頑張っているの、知事は大変です。

「リーダーに必要なこと、勇氣、決断、思いやり、計画性、創造性」

宮谷内町長…この間新聞に、北海道のGDPを50兆円にすると書いてありました。

栗田顧問…はい、見ました。

宮谷内町長…私が札幌である人に50兆円の話をしたら、なればよいが、夢の夢だと言われました。私が総務課長の頃、横路さんを見てきました。20兆円にする、25兆円に持つていくと言った時には、うれしいと感じたものです。それが、現在、だんだん減って18兆4、000億円とか6、000億円くらいです。50兆円といったら大きな目標だと思います。それを26年かけて実行するという話だったので、気の長い話だと感じました。私たちリーダーは夢や希望を与えなければなりません。また、自分の燃えるような、心の魂が燃え尽きるような勢いでやらなければ誰もついでこないと思います。なぜかと言えば、私が町長になった時、今、代議士になられた方のお父さんで、私のことを変わった奴だと言いながら、「宮谷内くん、人の上になる者は、大工もそうだが、町長ならなおさらだが、勇氣、決断、思いやり、計画性に創造性と、この5つのない奴はなにやっても途中で投げ出す。」と言われました。勇氣、決断は、やれないことがないが、弱い立場の人や体の不自由な人、所得に恵まれない人、思いやることを常にリーダーは持たないといけないということでした。それから、こういうことやりたい、でっかい夢を創造するのはいいが、計画性がなかったら到達しない、と教えら

れました。今もこの5つを常に考えてやっています。生意気なことを言うようですが、自分で燃えるような情熱がなかったらだめだと思います。

栗田顧問…大変面白い話をしていただき、ありがとうございます。

平成27年4月20日13:30～14:30 於…蘭越町商工会

堀川 強太郎 蘭越町商工会長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

中野 豊 小樽建設協会副会長

栗田顧問…商工会長さんを引き受けられて地域が抱えている課題は感じたと思いますので、それを中心にお伺いできればと思います。

（蘭越町の建設業）

堀川商工会長…時代がこれだけ少子高齢化になって来て、いろんな部分で仕事もなくなっているのも事実です。蘭越の場合は今年の1月に人口5,000人を切ったのです。平均すると年間70名から80名が亡くなり、人口が減少するのも仕方ないのかもしれない。例えばお店を新築する、改築するなどは、市街ではほとんどないです。住宅を建てるのも、ほとんどハウスメーカーで、地元には建築屋さんがありますが、どういう理由なのか分かりませんが、

昔と大きく変わってきています。

栗田顧問…「街の茶屋」でお茶を飲んできたのですが、その建物等、町が関わるものはどちらかと言うと地元の建設会社で行っているのですか。

堀川商工会長…公共事業についてはそうです。お茶飲んでいただいた「街の茶屋」は基本的には第3セクターでやっているのです。商工会は800万円の資本金のうち300万円ぐらい出して、町が200万円、あとの残りを一般町民からです。佐藤建設の佐藤社長が第3セクターの社長をやっているのですが、なかなか経営は大変みたいです。佐藤建設、志比川組、菅原組が小樽建協に入っているのですね。

中野委員…そうです。我々の協会の会員になっています。蘭越で1社今年になって廃業した会社はどこでしたか。

堀川商工会長…長澤建設です。

栗田顧問…廃業ですか。

堀川商工会長…町の仕事、北海道の仕事もやっていて、土木は少いで、建築と冬になると除雪もやっていました。辞める理由もいろいろあったと思います。もちろん商工会員でもあったし役員でもあった。従業員も結構いましたが、3月いっぱい辞めました。

中野委員…辞めた建築の技術者は、うちにも来ましたが、条件合わなくて中堅ゼネコンに流れ

て行きました。なかなか優秀だったみたいです。

堀川商工会長…本人はもとも鹿島にいたのです。それで蘭越に戻ってきて今の幽泉閣とか結構大きい建物手掛けていました。

中野委員…管内でもけっこう建築をやっておられました。

堀川商工会長…やっていました。蘭越にとっては、「なして辞めるんだべ」と、みんな思っていました。

栗田顧問…そうですね。

堀川商工会長…うちの建物ももう30年以上も前に建ててもらいました。商店街の店舗や住宅も多く建てています。

中野委員…一頃建築も含めて10億円ぐらいやっていました。

堀川商工会長…かもしれません。

（商工会のこと）

栗田顧問…商工会の会員数と言うのはずっと減り続けるという感じですか。

堀川商工会長…後志管内では倶知安と岩内・余市は会議所ですから、それを除いた16商工会では、蘭越が一番多いのですが、さっき出た長澤さんとか大きいところが2件ぐらい辞めています。

す。今は、195、6会員だと思えます。小売店でも大きい店で、8月いっぱいまで辞めたところもあります。だから結構シャッター下りている店舗、空き地になっていましたでしょう。うちの2件おいて隣にホンマさんという110年続いた呉服屋さんがあるのですが、そこも4月いっぱいまで廃業しました。さみしい限りです。

中野委員…そうですね。どこの町も同じような状況です。

栗田顧問…民間の住宅をハウスメーカーが建てるということは、民間の住宅を必要としている人もそれなりにおられるわけですね。

堀川商工会長…はい、います。

栗田顧問…しかしハウスメーカーが先に売り込んで、それで建ててるのですか。

堀川商工会長…ここ商工会の裏もともと鉄道の事業団の土地だったのを行政が買って、それを地元に住むのであれば、10年間住むと土地を安く分けてあげるといふ政策で売ったところ。ほとんどここは埋まって、1つ空いているかぐらいです。それもほとんど地方のハウスメーカーが建てています。

栗田顧問…営業の問題ですか。

堀川商工会長…どうなのだろう。ここも安くはないです。

中野委員…安い事は安いですが、宣伝に費用をかけていますから、それにみんな持っていかれ

る感じですよ。

栗田顧問…そうなのですか。逆に商工会さんのほうでPRしてあげたらいいですね。こういう人来るぞとなったら、サトウ建設が在りますとか。

堀川商工会長…役場の職員はほとんどハウスメーカーです。若い人は特にそうです。

栗田顧問…そうなのですか。それまじいんです。

堀川商工会長…しかし、上からいくら言っても、しょうがないことです。

栗田顧問…お金の問題ですから、確かにそうです。

中野委員…そういう意味では小樽市の市役所の職員も2割ぐらいは札幌から通っているのです。ハウスメーカーとは別な話ですが、それは教育の問題で、小樽で子供を教育させるより、札幌に行つて教育するというのは、ナンセンスです。

堀川商工会長…そういう個人的な思いは分からないこともないのですが、しかし市役所の職員が札幌の圏内から通つて来ているというのも、示しのつかない話だと思えます。

中野委員…ただ縛ることは出来ません。先ほど町長さんも言っていました、教育の問題はすごく重要なのですね。

（観光ガイドの養成）

栗田顧問…今小規模企業振興支援法が施行されましたが、それで案を作って認定をもらって、そのルールでお金をもらって小規模企業支援をするという話が進んでいますがいかがですか。

堀川商工会長…16日に連合会の理事会がありました。一次認定を受けた商工会って少ないのです。三次が一番多いのです。私のところも準備しています。

栗田顧問…新しい補助金の事業は別にしまして、今ある補助金の事業は最近ではどんなことをやっておられますか。

堀川商工会長…蘭越は羊蹄山麓の6つの商工会と観光ガイドの養成をする事業の補助金をもらっていました。観光ガイド試験を受かった人達にガイドの1級2級のような資格を与えて、ゆくゆくは農業なら農業専門、山なら山専門、川なら川専門などの観光ガイドを育て、どこかにそういう人を登録しておき、後志管内に入ってくる旅行者、観光客の要望があればそこから派遣をしてガイドをすることを目指してスタートしました。

堀川商工会長…今、旅館やホテルに泊まった団体のお客さんに、例えば後志や倶知安の歴史、町の質問をされたときに、知っている人がいて語り部としてやるということはやっているかもしれません。ただ観光ガイドというのは、例えばニセコの工藤龍雄さんなどがやっている

山専門のガイドさんはいるだろうし、川のほうはペンションのオーナーがバスでそういう釣りに詳しい人を一人後ろにつけて、蘭越なら蘭越の尻別川に連れてくるとかはおこなっています。しかし、ボランテニアでやるのならいいかもしれません、旅行者は、山という人もいれば、川、川と海と一緒に、あるいは農村関係という人もいて、分野で専門的なガイドを何人か育てないと、ついたはいいが全然ものを知らなかったと言われたら困るわけです。

栗田顧問…客のほう知っていたのでは困ります。まだそこまでは行ってないですか。

堀川商工会長…まだそこまでは行ってない。

栗田顧問…それは継続して訓練をやることになったのですか。

堀川商工会長…今もう、観光ガイドの新たな募集とか試験はやっていません。それもお金がかかります。受験料取ったとしてもお金がかかります。小樽さんは観光案内人がいます。

中野委員…観光案内人は、商工会議所が全部管理して、試験もやっているのです。運営から大変です。

堀川商工会長…そうだろうと思います。それをここは羊蹄山麓、倶知安の商工会議所も入れてスタートしたのです。目指すのは専門分野にある程度たける人を育成して、要請があれば派遣をする。そうすれば1時間いくらの料金で案内するということです。

中野委員…ほとんどボランテニアです。だから仕事に余裕のある人でないとそこまで徹底して

出来ません。ただ蘭越の中でやるのは大変かもしれないです。

栗田顧問…ボランティアをやってくれる人が集まらないということがありますね。農家の人は仕事柄無理ですね。

堀川商工会長…会社とか役所を定年になって時間的な余裕がある人でないとできません。

中野委員…小樽は先生が多いのです。学校の先生を辞めた人が結構こういうのに興味持ってやっている人もいます。

栗田顧問…なるほど。ということは都会型ではなくて、蘭越はこころしい別の形でないと難しいですね。先ほどの語り部みたいなのだったら、時間決めて、夜の夕食少し前の30分とかならあるのかもしれないです。

〔高規格道路の整備を促進して欲しいこと、及び除雪の連携が出来ていない〕

堀川商工会長…建設関係では高規格道路が共和までは来ます。共和からきつと倶知安、ニセコのどこかまで来るのかな。

中野委員…倶知安の5号線のどこかで終わり、倶知安から先は現道を使うという考えです。だから蘭越は当分、そういう話が出てこないかもしれないです。ただ新幹線があります。ここのもよりの駅は倶知安駅ですが、新幹線が通ったらガラッと変わります。

堀川商工会長…そうです。10分か15分くらいです。

中野委員…新幹線ができれば、外人が生活するには二セコが一番でしょう。

堀川商工会長…高規格道路について3年ぐらい前に何回か、何人かこられて意見を聞きにいらっしゃいました。その時に今おっしゃったように倶知安から黒松内間は今の国道5号線をもう少し改良して、準高規格道路みたに区間をするというような話がありました。ただ、黒松内や、鳥牧の会長も含めて、このままだったら永久にそうなってしまっているので、運動だけではつづけた方がいいと言うのです。

栗田顧問…私も運動は続けた方がいいと思います。

堀川商工会長…蘭越も黒松内も寿都も鳥牧もOKと言えばそうなってしまいう可能性もあるし、ダメでもととで今まで通り少し時間かかってもいいから、倶知安から黒松内の高規格道路を頼んだ方がいい、運動した方がいいと、いう声があるのも事実です。

栗田顧問…黒松内まで出来たのですから、もうそのままつなげばいいのです。

中野委員…黒松内につなげば完全にループ化できます。なにかあった時には、途中国道であればいろいろ問題が出てきます。

堀川商工会長…しかし、そのうちに人口も今の半分くらいになるのではと思っています。

栗田顧問…北海道全体で2040年に420万人で、7割くらいになるのです。この辺ですと

半分というのはあるのかもしれないです。

中野委員…今回のビジョン策定で人口問題研究所のデータを後志で全部計算したのです。今21万人で、25年後は半分の10万人になるのです。

堀川商工会長…蘭越も平成35年か40年で人口3、800人ぐらいになるのではないかと断言していました。今5、000人切ったのです。

栗田顧問…しかし、人口が減ってもそこで暮らす、町長さんは言われていましたが、暮らす豊かさみたいなものさへ価値として認めれば暮らせませす。まして農業ですから、食べ物にはそんなに困らないはずですよ。あとは農業として働くことと、それに付随する周辺の商品、それをどう手に入れるかということ、子供の教育・医療の問題です。そのことも高規格道路や新幹線ができると、解決するのではないかと思えます。元から解決するかはわかりませんが、ここで暮らす分には暮らしていける状態はできるような気はします。ここに住んでおられる方は皆さんこの土地を離れたくないです。病気になるから病院に入るから仕方ない人はおられると思います。

堀川商工会長…蘭越も意外と土地が広いのです。駅が昆布、蘭越、目名で、それぞれに集落があります。そこから離れられない人も結構います。そこを行政としても放っておくことにならないので、住民から要望があれば色んなものを作っています。しかし、現実問題

として、どんどん人口が減って、そういう公共施設がどこかに一ヶ所にかたまっていればいいのですが、色んなところに色んなものがあるので、管理も大変で、お金もかかります。昔から、蘭越は港のほうから開けてきましたので、4 kmぐらい海岸線があり、結構人が住んでいます。住んでいれば住んでいる人の要望も取り入れなければなりません。しかし、雪が多いところにしては、蘭越は行政のおかげで、除雪は道道も、国道も、町道も管内で一番綺麗にやっているといます。ただ、いつも思うのは、国道、道道、それで町道もありますので、管理が縦割りで、国道を除雪していくと、道道や町道にぶつかるところに、壁のように雪を置いていきます。普通の乗用車では、スピードを出して突っ切らないと国道に出られません。そういうことを毎年思うのですが、どうして国道の管轄は国道だけやればいいとなるのでしょうか。奈井江は、一括で全部町が除雪やっていると聞いています。そうなるかという事も無くなるのでしょうか。

栗田顧問…一緒に連携してやれと言っているはずですが、現実はそのような問題が残るのですね。  
堀川商工会長…いや、やってないです。

栗田顧問…その話今回何人かの商工会長さんからも聞きました。話をお聞きして、そうではなく、さらに50 mぐらい入って処理してやればいいのではないかという話を言ったような記憶があります。しかし、そうすると除雪業者にとってお金払ってもらえない範囲が増えたりし

ます。発注者の問題になるのですが、払えばいいと言っているのですが、そうなっていないかたたりしています。その辺まできめ細かく職員に行き届いていないのが現実だと思います。

堀川商工会長…どこかで音頭取れば、出来そうだと思います。

栗田顧問…何回も要望を言ってください。

堀川商工会長…この前の通りは道道です。国道が向こうにあり、それで間に入っている道路が町道で4本あります。お年寄りで、土木に電話かけてくれとよく言われるのです。私は商工会会長としてはかけることにはないのですが、頭に来た人は、直接小樽の土現（建設管理部）に話をします。そうすると、小樽から蘭越の支所に電話来て、小さいロータリー持ってきてやります。冬の3か月間と少しかもしれないですが、高齢化してくると愚痴を言いたくなる人も多いかもしれません。

栗田顧問…職員に聞くとものすごい数の除雪への苦情が入っています。個別に言うよりも会長さんがまとめて言ってもらって直った方がもっといいとおもいます。

堀川商工会長…細かいことまではいいのですが、国道と道道と町道の交差するところはお願ひしたいです。

「プレミアム商品券について」

栗田顧問…先ほど会員数が195、6と言っておりましたが、部会が3つあるのですか。

堀川商工会長…商業、工業、観光です。

栗田顧問…その比率は、均等に会員数はいるのですか。

堀川商工会長…比率から言えば観光が一番少ないです。ただ食堂などがとりあえず部会に入っている人が何人かいるかもしれません。

栗田顧問…多いのは商業ですか。

堀川商工会長…そうです。商業部会は年末の売り出しや、カードをやっています。

栗田顧問…プレミアム券は全体でやっているのですか。

堀川商工会長…そうです。販売総額5、000万円で、1万円を5、000セット、5万円を1、000セットを用意し、先週の金曜日（4月17日）ぐらいで、3、000セットようやく超えたぐらいです。今日も何人か買いにきてくれましたが、このままなら残るので、町長のところにお願ひに行つて、今最高5万円なのですが、20セット20万円まで欲しい人には売るところにします。20万円なので24万円分まで使えます。

中野委員…絶対に得です。

堀川商工会長…しかし、これが売れないのです。

中野委員…町内だけでしか使えないのですね。

堀川商工会長…そうです。農協、それからホームマックの子会社ニコット、では使えません。

栗田顧問…ホームセンター系はダメなのですか。

堀川商工会長…行政は農協には他の事でも補助している部分もたくさんあるので、外してもいいということでした。また農協入れたとすれば、ガソリン、灯油なども農協なのでほとんど農協に行きます。

栗田顧問…そうすると、商工会と関係のない所に行くということですか。

中野委員…建設関係は使えないのですか。

堀川商工会長…使えます。それはそれで、5月1日から、最高50万円で30セットプレミアム建築券を売ります。プレミアムは、10%です。

中野委員…なるほど50万円なら使えます。

堀川商工会長…はい。窓を直したり風呂を直したり玄関直すなど、いろんな分野でつかえます。しかし、それは50万円の1割増しで55万円使えることにしています。

堀川商工会長…それが来月の1日から始まるので今のプレミアム券をそれまでに売り切らないといけないと思っています。ニセコは3割アップ、京極4割だったと思います。

中野委員…しかし、国の補助は決まっているのではないですか。

栗田顧問…決まっています。基本は2割ですので、補助金はそれだけです。

中野委員…あとは自前で町が負担するのですね。

堀川商工会長…はい、自前でやるか、あるいは入ってきた補助金の以内でやるかということですね。

栗田顧問…逆に、金額を上限にして発行数を減らすということですか。

堀川商工会長…そうです。

栗田顧問…京極の4割は、すごいです。

堀川商工会長…町によっては、俱知安は中学生以下の子供に一人7,000円の商品券を無料配布するのです。

栗田顧問…また使い方が違うわけですね。

堀川商工会長…それで、残った補助金で1万円の2割アップの商品券を、売ります。その町でどうやったら有効に使えるかを考えてやっていると思います。

栗田顧問…アベノミクスの効果ってまだ来てないと声が多いのですが、どんな感じですか。

堀川商工会長…私は全然アベノミクス効果は感じられません。プレミアム商品券を売り出して初日に1,200万円ぐらい行きましたが、今ようやく3,000万円超えです。

中野委員…簡単に売れて引き換えするものだと思いますが、そうでもないのですね。

堀川商工会長…1万円買う人もいますし、2万円、3万円買う人もいます。しかし、3万円買う人も現金を3万円持って商工会に行かなければなりません。それで、買ったら3万6千円分使えます。5万円持ってきた人は6万円分使えるのですが、とりあえず5万円を用意しないと買えないのです。

この間限度アップを町長のところをお願いに行った時にいろいろな話をしましたが、いくら2割アップだろうが3割アップだろうが買うのにお金があるわけですから、それだけ売れ行きが悪いっていうのは、お金がないわけではないのでしょうかが最小限にしているのかと思っております。北海信金の本店長を良く知っていたのですが、余市町の場合は北海信金の本店で全部引き受けて、販売も換金も行い、換金分は商店に振込みするようにするというのです。それで3日か4日で売れてしまうという話ですが、本当にそうなのかと思います。蘭越は、プレミアム商品券を何年前か前にやったことがあるのですが、今回はどうするかと聞かれましたので、やっていただくのはありますが、今まで3回も4回もやってきて最終的に売れなくて最後は金額を無制限にして、欲しい人はいくらでも買っていいとしました。50万円でも70万円でもいいとしました。そうすると売れます。時期にもよるのですが、玄関フードを造るとか、冬の少し前なら除雪機を買う、玄関をロードヒーティングにするなどです。それで今回も、町長やるのはありますが、結局また残ると思うと言ったのです。

だが最終的にはとりあえずやってみようとなりました。それで、今まだ2、000万円ちょっと残っています。

栗田顧問…過去にもそういうことだったのですね。

堀川商工会長…そうです。結局はお金をたくさん持っている人が最後にたくさん買うのです。

栗田顧問…それはそうですね。

中野委員…6万円使えると言っても5万円の出費する必要はないと思う人は出さないです。無理やり買う必要ないということですね。

堀川商工会長…だから今ちようど、例えば冬にはまだ早いのですがタイヤを交換するとか車検がすぐあるとか、灯油をとりあえず夏だけでも200リットルか300リットル入れておいたほうがいいなど、を考える人達はきつと買っていると思うのです。

栗田顧問…当たり前前の話なのですが、買わなければいけない物が今ないという人は買わないわけですね。

堀川商工会長…最初の時に1、200万円ぐらい売れた時は、本当はまだ欲しい。しかし、スタートは1世帯5万円が限度ですとなっています。それで、息子さんがいれば息子さんの名前で亭主の名前とを使って2つ買えば10万円まで買えるのですが、だいたい5万円です。それ在今限度をあげると20万円になるので恐らくけっこう売れると思います。

栗田顧問…なるほど。それでは最終的には心配はないのですね。5、000万円分の商品が商工会から出るということですから、結局売れた方がいいわけです。

堀川商工会長…そうです。ほとんどの業種を網羅しているから、コンビニもセイコーマートとローソンが使えます。

栗田顧問…そうですか。コンビニ使えるのなら、それは大きいです。

（せせらぎ祭りの開催）

堀川商工会長…イベントの話では、一時期、北海道開発局に関係する業者の人が、1級河川尻別川を舞台として、せせらぎ祭りというイベントをやっていました。一度なくなつて、同じ会場で去年から町主導でせせらぎ祭りをまた始めました。

栗田顧問…町が中心のイベントには建設会社も手伝っているのですか。

堀川商工会長…商工会には声がかかっていません。私も商工会長を12年になりますが、青年部の時からそういうイベントはずっと関わってきました。産業まつりは私達が陳情して、私達が青年部の32、3歳かその前のころ始めました。後志管内で一番先に商店街通りをシャツトアウトして歩行者天国をやりました。それを少しずつ大きくして夏祭りというイベントに育て上げ、それでも俱知安、岩内、余市のじゃが祭や、ソーラン祭りみたいにはならないので

すが、商工会の青年部だけでやっている祭りではなくて、産業まつりとして、町と農協と商工会の3者で一つ祭りを作ってほしいとしてスタートしました。事務局を毎年は交互に受け持つことになりました。

私は1回目の時実行委員長をやりました。もう産業祭りは止めています。

栗田顧問…大きな祭りはなくなったのですか。

堀川商工会長…そうです。2年か3年前に青年部が復活して、7月にらんこ市を始めていますが、そのらんこ市の日程と、今年の1回目のせせらぎ祭りが重なったので、ずらして、らんこ市をやりました。今年も実施すると思います。

栗田顧問…今日はどうもありがとうございました。

平成27年5月25日13:00～14:00 於：置戸町町長室

井上 久男 置戸町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会顧問（現副会長）

西村 幸浩 一般社団法人網走建設業協会副会長

栗田副会長：町長さんのお悩みになっていることをお話ししていただければと思います。よろしく願っています。

「人口減少はずっと続いており、町づくりもその影響は避けられない」

井上町長：地域における課題という事で最初に項目として掲げられておりますけれども、ここに書いてあるようなことはまったくその通りと思います。少子・高齢化、人口の減少はずっと続いておりますから、町づくりもそうしたことへの十分な認識と検証は避けられないという事です。それぞれの町も人口減少という厳しい課題を抱えながら町づくりをしていかなければならないだろうと思います。近年、それに加えて高齢化が加速度的に進んでいます。

高齢化率はほとんどの町で限りなく30数パーセントから40パーセント近くなっているとされています。これは町づくりにおいても、人口減の問題ももちろん大きい課題ではありますが、高齢化は今まで経験したことのない現実ですから、そういう中で町をどう作っていくのかが大きなテーマになっていると思います。特に今申し上げたようなこの高齢化率が上がってきている状況の中でも町の活性化、町に元気がなければいかんという思いで町づくりに取り組んでいるわけです。言葉では簡単ですが、現実はなかなか面倒です。

私は、今年60歳と言ってもこの高齢社会の状況を考えますと、75歳ぐらいまでは現役として町のために尽くしてもらわなければならない、という思いで町民のみなさんと付き合わせてもらうからその覚悟をしておいて欲しい、60歳になって定年になったからもう自分是一件落着だなんていうふうには言わせるわけにはいきません、と話しています。そんな思いでこの少子化、高齢化の課題克服をいろいろやっているところです。

#### （環境の変化による自然災害の発生）

井上町長…2つ目の課題として、環境の変化があると思います。特にこのオホーツク管内、小さな災害と言うのはありますけれども、比較的自然災害に強い地域だと思います。置戸でいうと、まさに自然災害に強い町だということで、行政の立場としてもそうですし、また町民

の人たちの意識としてもそんな思いで今日まで来たと思います。しかし、近年の気象状況を考えますと、集中豪雨や冬場の豪雪、あるいは夏は本州のほうにも負けないぐらいの猛暑、それから季節はずれの台風、などいろいろありますから、今まで言っていた安全な地域だなどとやっていられないと思います。したがって新たなステージでこの環境の変化や問題を考えていかなければいけないだろうと思います。

〈社会ストックの維持補修〉

井上町長…それから3つ目は、社会ストックの維持補修です。価値あるものを作って長く大切に使うことは大事なことと思いますが、今まではだいたいがそのものを造っていく、例えば橋にしても道路にしても公共建築物にしても、新しく造っていくという事に主眼を置いてきたように思います。財源対策の事ももちろんありますが、社会インフラを長持ちさせることにより持続可能な社会を積極的につくることの重要性も、今日抱えている課題の3つ目になると思います。

〈少子高齢化対策ではコンパクトシティ、公共施設の統合を推進〉

井上町長…そこでいろいろな対策が必要になってくるわけでありますが、それぞれの町によって

違いがあると思います。一概に言えませんが、先ほども触れましたけれども、少子高齢化の問題で言えば、私の町ではコンパクトシティという事を念頭に、例えば高齢住宅の住み替えをやっています。出来るだけ中心市街地への建て替えを中心に進めているところであります。また、道路もそうですが、この市街地と郊外の集落を結ぶ道路の新設や改築、これをやっていく必要があると思つてまして進めているところです。選択と集中がこの部分では言われるんだらうなと思います。それから公共施設の統合です。私のところも中学校と小学校がそれぞれ4校あったのですが、中学校については35年前に統合してひとつにしました。小学校4校、これは4年前にひとつにしました。それから幼稚園、保育園、それから僻地保育所これも全部合わせますと5つありましたが、ひとつにしました。公共施設の中でも、学校や幼稚園・保育園の統合というのは簡単なことではありませんが、私は出来るだけ時間をかけても統合することの必要性を説明し、地域が頑張れるうちは頑張りたいと言つてきました。行政も支援するから決して最初から統合ありきの事ではないということです。しかし皆さん方がOKしたときには受け入れられるだけのキャパシティを確保しておくからという考えで小学校も校舎を新しく建てましたし、幼稚園・保育園・保育所も認定こども園として、新しく建てました。こども園のほうは同じ時期にみんな一緒になりましたが、小学校4校のうち1校だけは少し遅れました。全校生徒が確か17、18人いたと思いますが、10人切ると統合小学

校に移ると地域や父兄からもその意思表示は受けておりましたので、2年後には一緒にになりました。学校が地域にとって特別な拠り所みたいなどがあるわけです。

栗田副会長…中心ですね。

井上町長…はい。100年の学校の歴史があるわけです。地域にとってもそういうものですし、それから山村留学で新しい生徒さんなり親御さんなりが、それぞれの地域に来ていきますので、そういう人たちになると来た時の思いと違うのがあります。だから少しでもこの地域の学校を残してほしいという思いが強くなったと思います。私共はけっして無理しなかったですし、その人たちの思いと言うものを十分受け止めながら進めて来ました。都会では、1校になってもスクールバスで全部送り迎えますから、学校が終わったら生活の拠点がそれぞれの地域のほうに帰って行くという事だけで、なんら不思議のない形だと思えます。そんなことで教育施設の統合を進めてきました。施設的には耐震化の問題が当然ながらありますので、新築部分にはそのことを念頭に置きながら建てましたからなんら問題はないのですが、先ほど申し上げました中学校は35年ぐらい前に統合しましたので、これは耐震化しなければならぬので、ほぼ2年かけて耐震化をやりました。しかし耐震化は思う以上に建設費がかかります。

あとで考えると新しく造ったほうが良かったなとも思いましたが、仮校舎をつくってそこ

で1年、2年授業をやつて、今の校舎を壊してそこに建てればいいという事にはなるのですが、壊すにも相当な費用がかかりますので比較設計をして、厳しい財源と言うことからしますと、どうしても既存の建物を耐震化するしかないと最終的に落ち着いたのです。

〔高齢者福祉施設の老朽化による改築はお金がかかるが必要なこと〕

井上町長…それから福祉の問題で言えば、私のところは老人ホームを建設したのは、網走管内で一番早かったのです。昭和39年に定員80人の老人ホームを建てたのですが、その後それと併設する形で定員50人の特別養護老人ホームを建設しました。これが機能的なことも含めて老朽化していますので、新しくしなければならぬ状況を迎えています。この高齢者福祉施設の増改築には15億円から20億円ぐらいかると思います。

厚生労働省、文科省もそうですが、制度も、補助率もありますが、特に学校施設の文科省の補助事業で言うと、補助率そのままとはいかないです。農業ですと対象事業費の50%とかいう補助率になるのですが、厚生労働省は予算枠が厳しくなると基準単価が下がったりします。最終的に25%ぐらいの補助率が当たり前のようになってきます。ですから老人ホーム等含めて高齢者の福祉施設の建設に当たってはやはり相当な財政出動を覚悟しなければならぬと思います。

栗田副会長…次の喫緊の課題になっているわけですね。

井上町長…そうです。それが対策の一つとしてあります。それから環境の変化を課題で申し上げますが、その対策はハード・ソフトの両面での整備が出てくると思います。

〔財政基盤がしっかりしている今、簡易水道の統合を実施している〕

井上町長…今置戸町で簡易水道の統合をやっています。飲料水の確保ですから、避けて通れないものです。今まだ仕事を進めている途中ですが30億円を超えています。

栗田副会長…別々になっていた水道組合を幹線で結んで、そして、浄水場を1箇所にするやり方ですか。

井上町長…はい。

栗田副会長…それは大変です。浄水場そのものがけっこうな規模に膨れ上がります。

井上町長…そうです。水が素晴らしくいいのです。本当に冷たいですし、水質も問題ありませんし、本当にいい水だと思います。それぞれ個々の家庭にすると特段困っている状況は無いのですが、しかし施設が古くなって来ているのです。

将来を考えると、まだ財政基盤がきちつとしている時にこういう問題をやっておかないとどうしても先送りになってしまう。しかも小さい事業費ではないですので、財政基盤がしっ

かりしている内にやった方がいいという事で進めています。遅くとも再来年には終わります。

〔防災のソフト整備、自主防災組織の立ち上げ〕

井上町長…先ほど少子化の問題の時にもお話しましたが、公共施設の耐震化の問題、これは避難施設としての機能も持っていますので、公共施設の耐震化はこれからも進めていかなければいけないと思っっています。それからソフト面の整備で言えば、地域防災計画の策定は終わりましたが、緊急速報メール、そして自主防災組織をきちっとしていかなければならないと申し上げています。自助、共助、公助と言いますが、自分たちが住んでいる地域は自ら守るという意識を高めていく事が、行政が地域の人に転嫁するというわけではありませんが、基本だと思えます。その意識を高めるために色んな場面で地域の人たちにお話ししています。自主防災組織を今積極的に立ち上げていくことを進めています。

栗田副会長…どちらかと言えば町内会単位ですか。

井上町長…そうです。

栗田副会長…みなさん、お話には乗ってくれているのですか。

井上町長…乗ってくれます。うちの町は本当に自然災害の少ないところなのです。ですから、無防備という事ではありませんが、地震で揺れてもたかをくくっているとあります。だ

けど最近の気象変動を考えても今までと同じように考えているわけにはいきません。対岸の火事というわけにはいかないよ、ということも、お話ししながら進めています。

栗田副会長…こういう事が起こるかもしれないというイメージを持ってもらうのは大事です。

井上町長…そんなふうに思います。それからこれは当然の事ですが、国や北海道や他の自治体との広域連携を積極的に進めていかなければならない時代と思っています。それから上下水道のBCPを今策定中です。

栗田副会長…BCPについては北海道や厚労省からの指導があるのですか。

井上町長…具体的な指導はありませんが、もちろん国などからそういうような事は情報として頂いたりしています。

栗田副会長…強くなくてもこういうのは必要です。色んな施設についてBCPの話は必ずやっています。

### 〔公共施設の長寿命化〕

井上町長…そうですね。それから社会ストックで、橋梁と公営住宅、あるいは下水道の浄化センターこれらの長寿命化計画を策定しまして、改修を開始しているところです。また本年度はこの公共施設等の総合管理計画も年内に策定を終わる予定でいます。

栗田副会長…そうですね。実際に長寿命化計画を作って進めようとする、最初の年は何をやっていいかわからないところから始まりますね。

井上町長…そうですね。

栗田副会長…最初長寿命化をやるうとして施設を実際に行くと、すごくやるのがいっぱいあるように見えて、何から始めるかを決めるのが大変です。始めがうまくいかないと進まないと思っていました。

井上町長…あります。私も役場出身ですので、若い頃は建設課にいた時代もありました。当時の事を考えると、特に橋梁などは、古くなったら新しく架け替えるのが当たり前のように思っていました。

栗田副会長…その当時は古くなったら架け替えるのだろうと私も思っていました。

井上町長…中途半端な事業費ではないです。国費や道費を使う前提にして架け替えることになると当時思っていました。

栗田副会長…多分みんな思っていたと思います。

井上町長…今日の長寿命化計画に基づいて更新することが、少し情けない時代になったという感じもしないわけではないです。

栗田副会長…社会の体力がなくなったという感じがします。

井上町長…はいそう思います。西村組さんのように建設業をなされている人であれば、理解しながらも特に思うのではないですか。

栗田副会長…新しく造ってくれたら楽なものと思っと思っています。先ほどの学校の耐震化の問題で、新築か改良かということと同じです。

井上町長…私のところも、100mぐらいの橋ですが、事業費予算がないということとで半分ずつ改良しています。しかし、地域の人たちにするとその仕事やっている間はぐるっと回って別の橋を渡るのです。幸いにして何をやっているんだというお叱りは来ないからまだいいのですが、早く通れるようにしてほしいということです。

栗田副会長…当然別の橋を渡ることになります。

井上町長…はい。新しく造っているのであれば、そうかと思うのですが、この程度の改修で、まあ補修工事でも確かに億単位のお金はかかっていますが、しかし、このぐらいは単年度でなんとかならないものかという思いはあります。

栗田副会長…今の橋は町が発注しているのですか。道庁さん、国ですか。

井上町長…発注は町です。

「マスメディアを通してイメージアップを図る努力を」

栗田副会長…建設業に対する印象と課題ですが、あまり良いイメージを持たれていないと感じますがいかですか。

井上町長…私は、そういう良いイメージを持たれていないという事はないです。

栗田副会長…そうですね。ありがとうございます。いやなかなかおっしゃりにくい話かと思いますが。

井上町長…そんなことないです。3Kと言われていたかは、私は分かりませんが、昔よりはずっと改善されているように思います。

栗田副会長…まだまだ言われています。

井上町長…そうですね。建設業で働く技術系の女性を「ドボジョ」というのですね。

栗田副会長…「ドボジョ」とか団体によって「けんせつ小町」とか、いろんな言い方しています。最初は「ドボジョ」から始まりました。

井上町長…そうですね。いろんなマスメディアを通してイメージアップを図る努力を業界の人たちはやっているのですが、そのことは必要と思います。一番は、公共事業がなんだか悪い事業のような、一時そんな時ありましたが、ああいう事は少なからず引きずっていることがあると思います。なんだかんだ言っても、北海道は公共事業がある程度ないと小さ

い町はキツイです。ただ建設業をやっている人たちもいろんな形に変わって来ていますね。人の問題にしても機械の保有の問題にしても、特に人の問題っていうのは全く変わって来ています。それと施工技術は間違いなく進歩してきています。その中で労働環境の改善に努められておられます。そのことが安全につながっていると思っております。印象としてはけっして建設業に悪いイメージは私にはないです。

栗田副会長…そうですか。ありがとうございます。

栗田副会長…この町の建設業は町長さんに愛されているのですね。それはありがたい話です。井上町長…建設業に限らないですが、課題は若手技術者の育成が重要です。それには今日まで培ってこられた技術の伝承、経験はいろんなところでものを言うことがあると思います。そうしたことを踏まえながら若手技術者を養成していく必要があると思います。もう一つはもっと情報発信をやっていく必要があると思います。PR不足は言えると思います。災害時の建設業者の人たちの初動対応、それから復旧作業に至るまでの対応、そうしたことを自分たちがやっていること、それから自分たちの役割、そういう事を積極的にPRしていった方がいいと思います。農地の整備、治山、治水の関係、高規格道路、なんでも言えると思います。皆さん方の中では十分行き届いているのかもしれませんがPR不足は否めない感じはします。

栗田副会長…はい、PRはまだまだです。やらなければいけないと建設業の人たちが思いはじめたのはここ3年くらいです。建設業にとってショックだった話ですが、今年の初めに、北海道商工会議所連合会と一緒に、お母さん方を集めて建設業に対する印象を聞きました。そこで、お母さん方から、公共事業は悪いイメージで、予算は減らされ、将来がない産業にうちの息子はやれませんか、という話でした。また、話を聞いて、いい事をやっていることはわかりましたが、今まではほとんど伝わっていませんよ、という会話でした。進路を決める時に、子供さんのそばにいるお母さん方にとって建設業は選択肢にないことが、あの時にはっきり分かったのです。ただ、そうやって意見交換しますと、そのことがPRの場でもあるので、建設業も結構労働環境が良くなって来ているのですね、3K改善もかなり努力されているのですねという意見もありました。しかし、そこで初めて言われるようでは、もう終わっているなと思います。もっとPRをやっていかないといけないということで、中学生やお母さんと小学生とか、そういう人たちを、少なくとも建設現場を見てもうことは色んなところでやり始めるようになりました。少しずつですがやっていくことが必要と思います。あと実際に建設業に就職してもらうためには、高校生を実際に企業に来てもらうインターンシップというやり方で、2、3日現場体験をしてもらい、それで選んでもらうこと、を協会や会員企業でやるようになりました。それでもまだ2、3年です。

井上町長…そうですか。女性の見方はなかなか厳しいと思います。以前は女の人が建設関係の仕事に携わるのは、工事現場のほうの賄いとかには女性もいらっしやったかもしれませんが、直接に現場、しかも技術者では近年です。

栗田副会長…本当に近年です。

井上町長…それでもまだ女性のほうから目を向けられているからいいではないですか。

栗田副会長…確かに、それはあります。

井上町長…がっかりすることないと思います。自分たちの子供の勤め先の選択肢にないなんて言われても、まだまだしつかりした産業です。しかし国の予算とも大きく関わってくる産業なので経営はなかなか難しいですが。

栗田副会長…そうです。

栗田副会長…私も建設業に何十年も携わっていますが、民間の製造業であれば3年先までこのくらい仕事がありますと分かりますが、建設業は公共事業では1年分しか仕事に分からないのです。来年になつたらまた受注するために頑張らなければいけないです。それであれば来年の事は考えられない産業だと思っています。それはあまりにも厳しいのではないのかと思っています。

（大通りの拡幅と街並み整備）

栗田副会長…今日通つてきて、この前の道路すごくきれいにされて、両側の街並みを新しくしています。もうだいぶ前におやりになった事業ですか。

井上町長…はい。もう20年になります。この道路は道道です。拡幅に合わせて街並みの整備をやりました。その時の最大の問題は電柱をどうするかということがありました。最終的には、電柱は地中化もちろん議論しましたが、最終的には裏通り側に回しました。

栗田副会長…家・建物の後ろに回したのですね。その方が金はかからない方法です。

井上町長…そうです。合わせて歩道は5m取りまして、50cmのセットバックを設けてその部分は個々の商店の人たちに提供してもらったのです。それと合わせて常呂川から水を引く張り、両サイドに流雪溝整備をしています。水利権の問題は今も厳しいと思いますが、当時消防水利があつたので、それを活用することで、比較的順調に進めることができました。さらに拡幅と合わせて個々の商店の新築もしました。もちろん辞める店屋さんもありましたし、移動もありました。それでも、その中心でやっていただいたのが、当時の商工会長で、その会長さんが建設業の社長さんでもありました。その方が中心になって進めてくれましたので、やはり雑貨を営んでいる商工会長ではないので手法も、かなり違つたと思います。ですから私もから見ると非常に良かったと思います。もちろんその会長の人徳があつたからでもあり

ますが、一所懸命熱意をもってやってくれまして、店屋さんには近代化事業を使い、無利子資金借りまして20年償還でもうほとんどここ1年ぐらいで返し終わると思います。

栗田副会長…まだまだきれいです。

井上町長…町も店の正面の一部分に木を使いなさいという事で木を使ってもらいました。当然ながら塗装も剥げてきますから、今は新しい制度を作りまして町も一定程度の支援をして木の部分は化粧直しを今やっているところです。

栗田副会長…20年前ですか、その割にはすごくきれいな印象を受けました。

井上町長…そうですね。まだ時期が時期ですからありませんが、花を飾る事をやっています。私は、花代には金を出しませんので花は自分たちで用意して下さいという話をしています。花を飾ることに基本的には行政は応援しませんと言っています。それは、いろんな意見あると思いますが、花を大事にする人でないと、飾っておいてもそれだけの世界です。まして行政から応援もらっても、お金をもらった時はやるけどあとはやらないということです。それでは花は植えても水はやらないみたいなのです。それでは、花を飾る意味合いも何もないと思います。例えばスタンディングバスケット、1m50cmぐらいの高さでこんな大きなバスケットに花を植えている場所もあるのです。そういうものには町のほうで、バスケットの部分は提供するので、中の花は皆さんでやってください、あとは個々の店の前のプランター

はそれぞれがやってくさいとしています。花へのいたずらは100%ないです。酒に酔って花や花壇へのいたずらもありませんね。この大通り商店街で花を飾ることをやってから一度もないと言ってもいいと思います。

栗田副会長…地元の人の人柄ではないでしょうか。

西村委員…町を愛する意識が高いのではないですか。

井上町長…まあそうでしょうか。うれしいですね。

井上町長…建設業界は、今申し上げたような事で当然ながら若手技術者の育成や情報発信をもっとやるというのではないのでしょうか。あとは、行政の役割も当然あると思います。地域における中長期的なビジョンの視点で人材を確保するとか官民の役割分担など、そういう事もこの課題としてはあると思います。

〔建設業に期待すること〕

井上町長…3つ目の建設業に期待する事は、地域の安全安心を守ることです。今まではどちらかと言うと作るだけみたいなどころがありました。維持管理の担い手としての役割を建設業の方々にも期待したいと思っていますし、この次の世代に財産を継承するという意味で、全業界のリーダーシップをとっていく立場になってほしいと思います。特に人材の育成は重

要と思います。さらに技術者だけでなく、その子供たちにも将来の後継者なり人材を作っていくという意味で、子供たちにも建設業の重要性があることを、機会を捉えてお話しすることも大事だろうと思います。あと、この地球規模での環境対策、特に日本の建設業に関わっている人たちの技術は非常に高いと思っていますので、これまでの技術をこの環境対策にぜひ発揮してほしいというふうに思います。世界で活躍する技術者に憧れる子供たちが、今申し上げたことを子供たちに位置付けされていけば、間違いなくこの技術者に憧れる子供たちが必ず出てくるであろうと思います。

栗田副会長…ありがとうございます。

建設業は技術者を抱えてほしい、そうなるようにみんなで努力を！

井上町長…小さい町の、悩みと言うか、残念さ、みたいなことをちよつと申し上げます。昔は、建築業者であれば大工さんと言われる人をはじめとして技術者と言われる人たちを何人か会社として抱えていました。少なくとも人的な資源は確保していたと思います。これはやむを得ないというのは良く理解しているつもりですが、今は仕事を取ってから人や機械の手配をやりやります。人、技術者と言われる人たちも機械と同じような形になっていると感じます。小さな町では公共事業は実は非常に重要なのですという話をしましたが、会社が一定程度の技

術職員、技術者を抱えている前提になるのです。当然ながらその人の家族もいます。町の人口にも影響してくるわけです。そのことは町の活力、元気さにも関係します。いつ仕事が会社として受注できるかどうか分からない中で、人的な資源などいろいろなものを抱えて覚悟だけをしておくわけにはいかないということが現状だと思います。

栗田副会長…それもさつきお話ししました1年分しか手持ち工事がないというところにも要因があります。国では、国債という制度が限定的に使われていますが、あの制度をもう少し拡張してもらえばいいと思っています。新しい制度は国がやり出しますと道債も出来るようになりますし、たぶんそれを見て市町村でもおやりになることが可能になると思います。少なくとも2年か3年国債ぐらいを目安にしたいと思っています。

西村委員…3年国債でいくのが建設会社としてはベストかもしれないです。

栗田副会長…1回受注すると3年間は一定のお金が入りますとなっていますと、少しは動きようがあるかと思っています。その代り1社ではたぶん受注できなくて、ジョイントベンチャーになると思います。結局3年分の仕事を1回の入札で受注することは3人が取る仕事を1人が取ることになりますので、不公平感が入札の結果によって発生しますが、今の制度の中で可能かと思っています。

「工事は4月から出来るようにしたい、会計年度を変えられないか」

井上町長…それと北海道では、冬は事業が困難ですから、会計年度が4月1日からと言わないで12月ぐらいからにすればいいのです。

栗田副会長…はい、わかります。

井上町長…私は、すごく難しい事はわかりませんが、認められることになると、特に建設業は、画期的に変わると思っています。4月でいろいろな事業をスタートさせるにしても、起工が4月1日以降です。当然ながら、起工して、現場の仕事発注するまでに、また時間がかかります。しかし、その発注事務は、4月からではなく冬にやっていたらいいのです。そうすれば現場を預かる業者の人たちは雪融けた4月5月になってすぐに本格的に現場に入れるとなれば、1年の12か月の使い方が大きく変わると思います。

栗田副会長…変わります。それはずっと言い続けています。

井上町長…何も新しい事ではないのです。

栗田副会長…今は、そういう事をやってもいいのではないかという雰囲気にならずにつなってきました。逆に町村会、商工会、商工会議所の議論でそういう話をしていただく機運を我々建設業が動いて、やらないといけないと思っています。

井上町長…この限られたその夏を、有効に生かさなければいけないです。私も職員に何をして

いるんだとはっぱ掛けるのですが、手続きばかりやっていたら、実際に現場の仕事をするのが秋になってしまっぞ、と話をします。しかし、少なくとも仲間に入ってくれるのは東北の北のほうの人ぐらいです。

栗田副会長…本州は年中仕事ができるので、全然関係ないのです。

井上町長…まったく関係ないです。

井上町長…会計年度を変えることは簡単なことではないと思います。西村さんたちのような仕事をしている人にとって、この1年の12か月が、もっと有効に、建設業をやっている人たち  
の声に伝えられるような仕事の出し方は、手続き上の問題だけだと思っています。

栗田副会長…私もなんとかしなければいけないと思っています。

井上町長…私は本当にもつたいないと思います。西村さんのところのような会社であれば冬の仕事はあると思いますが、こんな小さい町の建設業やっている人には、秋風を感じるようになって初めて本格的な仕事に関われる感じではないでしょうか。

栗田副会長…今は発注の仕方だとそうなっています。

井上町長…小さな町の、小さな町の建設業をやっているとところは大きなり小なりそうじゃないでしょうか。

栗田副会長…おっしゃる通りだと思いますね。

栗田副会長…だいたい予定の時間になりましたので、今日はありがとうございます。

平成27年5月29日14:00～15:00 於…標茶町商工会

田中 進 標茶町商工会長

藤原 利洋 標茶町商工会副会長、一般社団法人釧路建設業協会会員

井上 栄 標茶町商工会事務局長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

村井 順一 一般社団法人釧路建設業協会理事、釧路商工会議所副会頭

栗田副会長…お感じになっている地域の課題をお聞かせ願えればと思います。

（人口減少について）

田中商工会長…地域の課題は、人口減をどうやって止めていくか、標茶町で何人想定してどういう町づくりをしていくか、町の形成をどうするかということだと思います。管内で言えば最少人口をどうすれば、その町が機能するか、このことは管内商工会や道連理事会でも話をしています。単に人口が減るといふ問題だけではなく、人口が減ると商工会の会員も減少し、

商工会が維持できなくなる地域が出てくる可能性がありますので、どうやって人口減に歯止めをかけていくか、維持できなければ商工会の統合も考えなければならぬということ。商工会の課題としては人口減をどうやって食い止めるかに尽きます。

栗田副会長…人口減少は、日本全国で起きているので、2040年人口問題研究所のデータはたぶん30年後ですので、だいたいあの通りになるのです。食い止めるには人口の多い所から引張ってくる方法と、子供を増やしていく、この二つになります。それでどれだけ人口減少を緩和するかを出来るだけ早く手を打つということだろうと私は思っています。

田中商工会長…この町にも単年度で約60人の外国人登録があります。今後増えていくのかはわかりませんが、人口減少に歯止めをかける方策のひとつに考えられないかと思っています。また、当商工会青年部では「お試し暮らし」という短期滞在の受け入れ事業を、現在、町内に住宅3棟で実施しています。この事業を通じ、将来本町に住みついていただけの個人や家族に期待しているものです。

今日、標茶でセミが鳴いていました。桜が例年より早く5月の連休前に咲き、しかも葉より花が先に咲くなど気候の変化を感じています。本町ではこれまで一次産業でも酪農が主体ですが、農産物が採れるようになれば多種多様な産業が根付き、違った形の人口減少の歯止め策や六次産業の創出などで、新たな農業が出来ると思います。

ベトナム人の農業研修

栗田副会長…先ほどお話しされていた外国人登録が約60人というのは、農家の作業に入る研修で来られる方ですか。

田中商工会長…そのうち70%程、40人強が研修です。4、5年前までは中国の方が多かったのですが、現在ではベトナムから来られる方にシフトしているようです。

栗田副会長…研修期間は3年ぐらいですか。

田中商工会長…長くて2年だと思います。

栗田副会長…しかし、同じ人は使えないですから大変ですね。

田中商工会長…そうですね。ただベトナムで日本に来る前に、研修で日本語をある程度習得することとしているようで、雇う側も楽かなと思っています。

栗田副会長…国としてやっているのですか。

田中商工会長…国として送る側で確か3カ月ぐらい研修をして来るみたいです。

栗田副会長…それはいいことです。

酪農生産物の流通販売について

田中商工会長…例えば、地元で酪農をやめた人たちが地元の同じ酪農のところで働けるような

仕組みがあれば人口減に歯止めがかけられるのですが、そう簡単ではないので町外に流出すると地元には戻ってこないです。

栗田副会長…酪農業を辞めた人はどちらに行くのですか。大都会に行くのですか。

田中商工会長…大都会とは限りませんが、働き口を探すためには、都会に行かないと仕事がないのです。

栗田副会長…バターの輸入の話などがあると、やっていると矛盾していると時々感じますが、生産量を上げることは今のこの地域の酪農でも限界があるのですか。

田中商工会長…バターなど乳製品にまわる牛乳の予定数量は、どこにどれだけ行くか割り当てをしているので、例えば磯分内雪印工場で作っているバターの生産を増加させたいから牛乳を欲しいと言っても無理なようです。

栗田副会長…他で余った牛乳はまわさないのでですか。

田中商工会長…生乳を本州にどんどん出荷している状況なので、そこまで手が回らないのかもしれません。ただ、過去には牛乳を捨てたこともあるので、捨てるのであれば、例えば加工用牛乳をしかるべきところを買ってストックするなどして加工用に回し、生産力を上げるような仕組みができないだろうかとわれわれ経済人は思います。過去にはバターを安価で還元した時代もありましたが、現在、磯分内工場は地元のイベントに使えないほど町外へ出

荷されています。

栗田副会長…地元に残らないという事ですね。地域の自立を考えた時、リタイアした人がその能力を生かし地域に残れるよう、地域の産業として、うまく新しい道を見つけていけない限り雇用は生まれません。

〔野菜や小麦生産による多品種化が必要〕

田中商工会長…JAと雪印種苗と町がタイアップし、草地型酪農の模範となる農業法人を設立しました。その農業法人に隣接し、人材育成のための研修施設が先日、本町にオープンしました。また、本町では丹頂大根という大根も作っていました、昨年10億円突破しました。今後、大根だけではなく、他の食品、野菜ものも十勝なみに作れるようになればかなり違ってくると思います。広大な土地の活用によって、将来的に一次産業イコール酪農というイメージを脱却し、多様な一次産業の発展に期待しています。

栗田副会長…野菜系は間違いなく北海道は足りないのです、売れます。

田中商工会長…小麦がここで採ればいいと思います。昔、作っていたと聞いていますが、地域的に冬期間の凍結深さが深いことが問題だったと思いますが、気候環境が変わってきているので、割と手がかからない小麦が採ればと思います。

栗田副会長…手が掛からないで、しかも収量がすごく増えた品種が出てきています。

田中商工会長…隣の弟子屈町では、「そば」、「摩周メロン」や「マンゴー」を作っている方がいます。

栗田副会長…マンゴーはハウスですね。補助金に関係しない作物をいくつも増やしていかない  
と、最後は自立できないです。ただ時間もかかるし成功するのは大変です。

田中商工会長…千葉県でハウス栽培をやっている人の話ですが、本州の夏の暑さ対策よりも北海道でのハウス栽培に将来性を感じている方もいるようで、山形のさくらんぼ業者も富良野地域に来てしていると聞いています。

栗田副会長…私、生まれも育ちも山形なのでよく知っています。もう山形では作れなくなってきたと言っていました。

田中商工会長…北海道の一次産業がこれからいろんな分野に伸びていくだろうと思っていますので、この地域も何か手立てを考えないといけないと思います。ソーラーもバイオマスも考えられています。

栗田副会長…酪農地帯なので、バイオマスはいいと思います。酪農に伴う生産高が相当なものですので、資金的には少し新しいことを考える余地はありますね。

田中商工会長…最近では、肉牛も盛んになってきています。相対的に売上の中でバランスが取

れてくれば良いと思います。

栗田副会長…生産物の種類が増えるのは大事だと思います。

〈商工会と農協の連携〉

田中商工会長…商工会としては、観光協会とも連携しながら食肉など地場食材を生産している人達とタイアップして取り組むなどの底上げ応援をやっています。多種多様な地場食材があった方がイベント等には有利です。イベント等に関しての農協との連携は、非常に好意的です。

栗田副会長…それは大事なことです。

田中商工会長…JAしべちゃは管内でも大きな農協なので地域全体の中で有益な情報をいち早く収集する意識と体制が必要だと思います。

栗田副会長…今までの話お聞きしますと六次産業化は比較的進めやすい状況に少しずつなってきたということですね。

田中商工会長…そうです。素材はあるので、少し手を加えてやると出来る事があります。

栗田副会長…基本は地元の名産を地元で作って、それを徐々に品質を高めてブランド化していった量を拡大するという世界ですね。

（標茶高校で農産物活用の物産を生産している）

田中商工会長…標茶高校は、元々農業高校が前身なので乳製品や肉の加工品を作っています。道内含めて人気があります。

栗田副会長…テレビでよく宣伝される高校ですね。

田中商工会長…標茶高校では、ノウハウを地域へ提供する姿勢があると言うことなので、生徒たちが作る張り合いのできる形で、さらに何かできないかと思っています。

栗田副会長…標茶高校の生徒さんはみんな農家のお子さんなのですか。

田中商工会長…今は総合学科になったので、実家が酪農の子供たちは減っています。

栗田副会長…そうですね。しかし、そういうもの作りを高校時代に体験すれば酪農の見方が違います。

田中商工会長…高校でチーズ工房やっていたり、パティシエ志望の子たちが全国大会で優勝したりしていますので、そういうところに就職する子たちも出てきています。

栗田副会長…食品系に就職するという事ですから、それはすごいことです。

田中商工会長…全国のテレビに出たりしています。私も同窓会の会長やっているので、色々な形で活躍してくれる子をバックアップしています。

栗田副会長…すごくいいネタですよ。そういう立派な高校があつて、それを使って製品化する、

そのノウハウは普通にみんなに提供するという話はテレビドラマで描くようなストーリーです。

田中商工会長…どこかで点を線にすれば進んでいくと思いますが、なかなか進みません。  
栗田副会長…しかし、いい話です。標茶町にはネタがたくさんあると思います。

〔厚岸、根室、北見までの国道のグレードアップを要望〕

田中商工会長…建設業で言えば、シマフクロウ圏でのトライアングル構想がありまして、その中の一つとして厚岸、根室、北見までの国道のグレードアップの要望を行っています。今まで釧路管内での連携が主体でしたが、北見地域の畑作地帯での有機たい肥の取引で北網地域とのパイプができています。釧路はもとよりオホーツク圏とつながる国道391号のグレードアップを要望しています。せめて、追い越し車線を作って欲しいと思っています。

栗田副会長…ゆずりあい車線ですね。

田中商工会長…追い越し車線を増やすことで一般道でも条件によっては、制限速度をアップさせることも可能になるとおっしゃっている学者もいます。また、北海道の凍土にも負けないような道路をつくっていかないといけないと思っています。根室への高速道路の延伸も要望しています。魚の輸送など物流業界からもスピードアップが望まれています。これが必要と

いう具体性を示していくことが必要だと思えます。

栗田副会長…先ほどの有機堆肥輸送の話を、もう少しお話し下さい。

田中商工会長…たい肥はこの町から出すのですが、厚岸と北見を結ぶ接点も模索しなければなりません。今、釧路港で整備が進行している、穀物のバルク港湾も酪農地帯が発展しなければ不要になってしまいます。

栗田副会長…酪農で輸入穀物を使うことが前提です。

田中商工会長…今釧路商工会議所の村井副会長がおられるのでお願いしたいのは、管内の酪農地帯や北網までの物流を発展させるため釧路市が先頭になっていただきたいと思っています。釧路港が出来た時に酪農業者が半分になっていたらどうしようもありません。

栗田副会長…そうですね。しばらくは心配なさそうですが、将来のことは分かりません。

〔標茶町の除雪延長は町道で530km〕

栗田副会長…田中会長さんと藤原副会長さんの様子を拝見していますと、建設業とも大変仲が良さそうで良かったと思っています。

田中商工会長…冬期間、標茶の建設等の業界と町直営で、町道だけで530km、膨大な除雪を担っています。

藤原商工会副会長…その内、8割、約450kmを民間委託で担っています。

田中商工会長…やっぱり建設業界がしつかりした体制を取っていることが大事です。

栗田副会長…町道で530km除雪はすごいです。

田中商工会長…さらに国道、道道もあります。

栗田副会長…除雪費用はどのくらいですか。

田中商工会長…例年は1億円強、昨年は大雪で4億円近くです。

栗田副会長…そんなに雪は降らない地域ですよ。

藤原商工会副会長…豪雪地帯ではないです。

田中商工会長…今年は例年雪が多い地域が降っていないです。

栗田副会長…西側は全然降っていません。

田中商工会長…旭川も例年の半分と言っています。

藤原商工会副会長…こちらでは例年は降らないので最大の体制を取った経験が乏しく、逆の意

味で大変でした。

田中商工会長…副会長の会社では、除雪に行ったら帰ってこれないような地域もあります。

藤原商工会副会長…そういう場所が多いです。気候変動もあって、これからこういう事がたび

たび起こるようになる可能性が高い気がします。

田中商工会長…冬のイベントは全部出来なかったです。雪が多いのが良いのか悪いのかは別に  
して、雪が降れば春が早いのです。

栗田副会長…なるほど、地面があっただかいのですね。

田中商工会長…凍結するよりは、早く雪が降って地面が凍結しなければ農耕が早く始まります。

栗田副会長…先ほどの凍土深さの問題ですね。

田中商工会長…そういうのが解消されれば、また新たなことが始められます。

栗田副会長…今日は貴重なお話をありがとうございます。

平成27年8月3日月曜日13…30～14…30 於…本別町長室

高橋 正夫 本別町長

野田 仁 一般社団法人帯広建設業協会副会長、本別町建設業協会会長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

栗田副会長…町長さんがお悩みになっている今の地域の課題、をお聞きしたいと思っています。そうすれば、建設業もその中で何をすべきかが自然とわかります。

〔地方の財源が大幅に減りました。〕

高橋町長…課題はたくさんありますが、やはり財源です。まずは財源がないとダメです。地方交付税は平成12年がピークでした。小泉さんが財政改革を声高にうたったときから、3分の1の交付税が減額になりました。それからが本当に大変な時代になりました。本別町の規模で、当時はまだちようど1万人ですから、一般会計約100億円でした。それからどんどん構造改革で交付税が減って行って、3分の2になって、予算は今では60億円です。それだけ

の財源が町の中に、落ちていかないことになるので大変な経済状況になります。事業もそうです。そこに持ってきて今までなんとか頑張ってきたふるさと銀河線がなくなって、営林署から含めて官公庁の出先がほとんどなくなりました。町を支える産業がどんどん縮小してきました。それに伴って学校も少なくなっています。当然少子化だから人口減になっていきます。大きかった対策は高齢者対策だけでした。ここ20年あまりの動きはそんなところでした。建設業も構造改革が始まる前と後では3分の2です。一時、公共事業も無駄だとかありましたが。

私達は、十勝本別には、無駄な公共事業は一切ないと堂々と国に言いました。例えば本州には1000年の歴史がある都市があり、北海道はまだ100年です。だから社会資本整備もまだまだで、言ってみればヨチヨチ歩きができるかできないかみたいなものです。本州に追いつくまではいいかと思いますが、必要な社会資本整備ができるまで、もう少し長い目で見てくださいと思っています。その時にやっと自立できるので、それまでもう少し待ってください、そういう言い方をしながら、北海道地図見たら線路は逆になくなっていて、道路は繋がっていない、暮らしては医療も福祉も教育も含めてすべてが過疎になっていて、町を支える産業もなくなっています。本別は建設業が第2の基幹産業というくらいみんなが頑張ってくれました。帯広に次いで業者も多く存在をしていた町だったから、建設業は町を支える

意味で大きな力になっていることは間違いないです。経営が悪くて辞めていく人はあまりいなかったですが、将来を見越すと後継者がいないなどで、本別では大きな企業、老舗、歴史のある企業が、どんどん看板を下ろしていくので、これは影響が大きかったです。

栗田副会長…後継者は都会のサラリーマンになったのですか。

高橋町長…サラリーマンになりました。大きな企業が合併したり、先を見越して辞めたりしました。野田さんが頑張ってくれるから助かっているみたいなので、野田さんもいなかったら大変な話です。

高橋町長…頑張ってくれて支えてくれる企業、先頭を走っている企業が、看板を下ろしてしまうので、影響は大きかったです。特に雇用への影響は計り知れないのです。すべてが負のスパイラルになって、どんどん人は減っています。

栗田副会長…その辞めた人の雇用は町内の他社にお願いしますね。

高橋町長…最初のうちは関連する町内企業に行きましたが、そのうちパイが少なくなってきました。通年雇用は難しくなり、技術屋を確保していても仕事がないとなると、技術系、事務系も含めて、会社を支える建設現場の鉄筋、作工大工など、そういう技術屋がほとんど町外に出て行きました。玉突き現象のように、例えば本別から帯広方面へ行って、札幌で止まらないうで本州などです。ほとんど十勝にそういう人材を確保することは大変な時代になってきま

した。都会に行かなければ暮らしていけない状況です。まさに一極集中です。そういうことを目の前で、肌で毎日感じながら暮らしている状況でした。

### 〔十勝懇話会〕

栗田副会長…帯広建協会長の萩原さんが中心になって十勝懇話会をやっていますが、私もらって読ませていただいています。いい話を皆さんでされていきますし、普通は帯広市長と本別町長の十勝町村会長さんが一緒になることはなかなかないですね。

高橋町長…あまり今までないです。

栗田副会長…それがああやってお話されていて、しかも一緒になってやりましょうと、いう話で進んでいるのは悪くないと思います。

高橋町長…あの懇話会も、萩原会長が、建設業だけということにはならないので、地域みんなが元気になるように、自分たちも将来的に生きていくために、何ができるかも含めて、全体の中で地域づくりの視点で一緒に考えませんかということの提案です。それで各界いろいろ入って、オール十勝の体制を作って、将来に向かっての議論をしています。でももうちょっとあの会議で、例えば道東自動車道をどうするなど、いろんな議論をして盛り上げながら中央に対して必要性を訴えて、しっかり基盤の整備をしていく、そういう方向にもう少し力を

入れているというものでしたが、まだそこまでいっていない状況です。しかし、お互いの理解ができたり、本音でいろいろな話し合いができたりして、そういう基礎ができたという感じですよ。

栗田副会長…商工会と商工会議所が一緒に話すこともほとんどないです。帯広商工会議所の高橋会頭も、この間インタビューした浦幌の竹田商工会長さんなんかも一緒になって話しされているので悪くないと思っています。

高橋町長…あれは、十勝を一つに、を仕掛けたのです。色々な課題があるので、政治的な課題も含めてですが、十勝の産業がお互いにどう力を合わせてやっていくのか、力を合わせればその力は何十倍にもなりますが、今までみたいにバラバラだったら十勝の発展はないことも含めて、十勝みんなで考えていこうということなんです。合併のときも、バラバラよりも十勝一つをみんなで考えていったらどうだろうとなり、はじめて商工会と商工会議所が、行政と農業が一つのテーブルにつきました。今までは商工会議所と農協が一緒になることはありませんでした。

高橋町長…私も今だから言えますが、商工会と商工会議所がお互いに力を合わせることは、もともと商売敵だからまったくないわけですよ。それを越えて、一つのテーブルで協議ができて、今何をやるにもオール十勝でやる、そして十勝の郡部があって今の帯広市になってきたし、

町村も帯広市があるからそこをシンボルとして、安心した地域づくりができる、そういう関係なので、お互いに認め合いながら力を合わせてやっていこうと、いろいろな出来事の中に投げかけながらやってきているのです。T P Pがいい例ですが、十勝は30団体全部集まったらオール十勝で、十勝を守ろうという体制です。それは建設業もしかり、それぞれが頑張らなければ、自分のとこだけが生き延びるなんてことはもうないわけですから、お互いに尊重し合いとところは認めて、そしてみんなで知恵を出して十勝を作っていこうということです。

市も町村も140年の歴史があるので、初めて定住自立圏を協定しました。歴史に残ることです。それと来年の4月から、消防の広域化が実現して十勝で一つになります。すごいでしょ。そういうことを仕掛けて、帯広が頭になります。それまでは我々が黒子になってまめていきます。誤解しないで聞いてほしいのですが、帯広市は何判断するのも市長一つなのですが、町村会は18あって、それぞれの事情なり意見なり思いもあります。それを一つにするのは並大抵のエネルギーじゃないです。そこに行き着くまでが相当いろいろな出来事があった、それを乗り越えて一つになっていくということです。

栗田副会長…平成の大合併を一回くぐっているから、そうなるのでしょ。

高橋町長…それもあります。

栗田副会長…合併をやろうとすると相手の懐が見えて、財政が悪いと嫌だとなっていきましたね。

高橋町長…話は逸れますが、北海道が合併のパターンを示してきて、本別、足寄、陸別で協議しなきゃならないことになります。嫌でも協議をやります。法定協議会ができるかどうかは別としても、任意協議会をやりますが、始めたら、粗捜しになります。借金多いとか、インフラ整備できてないとか、とても嫌なことばかりでした。それを経験すると自分のところだけではどうにもならないとなります。

栗田副会長…自分のところにフルセットで作ろうとしていたけれど、できなくて中途半端になっっている状態です。住民サービスを考えて、コストがかかるわりに見合わなくなるから、みんなでやらなきゃならないです。

高橋町長…そして隣町が持ったから、うちもという時代じゃなくなっています。発想を変えないといけないですが、この部分は隣にお願いします、これはそちらでお願いします、できないところは自分のところで頑張つて、そしてもつと大きくやらなければならぬ時は十勝全体でやるとか、発想を変えていかないとどんどん人口が減っている、地域も財源ももたなくなります。その中で現実はどう対応するかと言えば、みんなで力を合わせないと、俺が俺がと突っ張っていたのではまちづくりはできていかないということです。今の十勝は最高の社会ができているから、特に農協組合長からでた有塚会長はものすごく気を使ってくれます。会長と一緒にやれる間に、この十勝の形をきちつと作りましようと言わせてもらっ

て、帯広商工会議所の高橋会頭も本当にスピード感があって、しつかりやってくれます。竹田十勝管内商工会連合会長もガツチリみんなをまとめてくれています。本当に今はいいです。帯広市と行政も素晴らしく連携が取れていますので、素晴らしい体制になっています。

栗田副会長…外から見るとそう見えますし、色んな話を聞いてもそういう言葉が簡単に出てき  
ます。

高橋町長…そこで、萩原さんもすごく頑張っていて、連携会議（十勝懇話会）やりましょ  
うという発想になってくるのです。だから自分たちもそういう中に入って一緒にやっぱりこ  
の十勝のために頑張ろうと、何ができるか何しなきゃならないかを含めてやりましょうとい  
うことで、それは今の建設業協会の皆さん方はしっかりその辺は見据えて努力していただい  
ているところです。

栗田副会長…建設業は結局自分で需要を作れないので、皆さんと話をして、それならこれはど  
うですかという提案するしかないのです。萩原さんが中心になって一つの会議をずっと維持  
しているのは大事なことだと思います。トップの考えがみんなわかることは大事なことです。  
高橋町長…本当にわかります。しかし、どこであってもトップ同士が気楽に声かけたり、握手  
したり挨拶したり、そういうのは十勝の中では今まであまり見る光景ではなかったです。そ  
ういうことになればすごくいい形で、十勝の住民の皆さんから見る目もそういう目になって

きたのではないかと思えます。みんなで本当に一つになって十勝がまとまって頑張っているということですよ。

高橋町長…帯広市長の考え方も帯広市だけでなく十勝を必ず意識しながらすべてにおいてやっているから。我々含めて、それらなら一緒にやろうとなります。そういう話を、じっくりできるといのが大事です。

高橋町長…米沢市長になって、1年か2年経った時、企画会議などに行くと、最近帯広市の職員の頭が低いと職員が言っていました。その辺は変わったという意識は持っています。いい意味で、ちゃんと見ているなと思います。定期的にガス抜きも含めて、話をするのは大事です。お互い、市長はこういうところもうちよつと気をつけて職員を指導した方がいいよ、こんなところに利用されるな、など、本音が言えます。

栗田副会長…実際には上の立場でないかわからないことがあります。  
高橋町長…十勝懇話会のメンバーは、おなじ目線で語り合えます。

「新しい人が商売を始めていて、町も支援しています。」

栗田副会長…町の商工会、商業はどんな感じですか。例えば本別町へ来る途中まで商店は閉まっていますでしたが、ここ町の中入ってきたらみんな開いています。

高橋町長…本別もご多分にもれずで、本当に高齢化しています。みんな私と同じか、先輩ばかりです。コンビニとAコープとスーパーフクハラさんぐらいです。あとは個人経営の店で頑張ってくれているのは数件です。商店で、食料、薬局、呉服屋は、まだ頑張ってくれているけれど、厳しいです。

栗田副会長…厳しいですか。今、北2丁目のバス停で降りて、道の駅まで行って戻ってきたのですが、その間で見ましたけど比較的きれいでみんな開けています。

高橋町長…この大通り街も高齢化で辞めていきました。本別町も企業化支援と言って、一昨年からは本別で企業をやる人の応援をしていて、町外からも若い人が9人、最終的に入りました。中には司法書士やいろいろ異業種がいっぱいいるのですが、お蕎麦屋さん始めたり、焼き鳥屋さん始めたり、おやき屋さん始めるとか、いろいろの職種が、始まりました。今商工会の青年部が人数は少ないけど、ものすごく元気です。

栗田副会長…ここは青年部を維持できているわけですね。

高橋町長…維持できています。まとまりいいし、ものすごく元気です。先週もこの役場の広場で、「ピアカ」をやりました。青年部の伝統的な行事ですが、しっかりやってくれました。今年の冬は節分に雪明りナイトを2月の最初に、町民の数だけキャンドルですと言ってやります。その日に合わせて豆まきを、「豆まかナイト」と言って、これポスターですが、ここでやります。

そういうイベントを、青年部が力を合わせて企画しています。それで青年部が、農村青年と力合わせて、色んな農産物や、特に来週肉祭りをやります。

栗田副会長…肉祭りは7日8日と書いたポスターがありました。

高橋町長…青年同士のつながりが非常に強くなっていい形で今やっています。

栗田副会長…そうですね。農協の青年部と商工会青年部の仲が良いとはあまり聞いたことないです。

高橋町長…仲良いとか悪いとかよりも繋がりがなかったです。

栗田副会長…そうですね、接点がもともとないので、商工会長さんにお聞きしても、どうしても繋がらないからと言っていました。

高橋町長…「豆まかナイト」は豆の町本別なので、商工会青年部がせっかくだから豆をもっともっと発信するために節分の豆まかナイトをやってくれたのですが、そこに農協青年部長さん方を招いて、そこで上から豆シヤワーを浴びさせるなどをやって、みんなで声かけながら連携して、役場の青年婦人部がちょうど仲介役みたいになって、一緒に頑張っているんな行事を仕組んでいるのです。

栗田副会長…役場の人たちも間に入るわけですね。やっぱりそれが必要です。

高橋町長…黒子で、ダシなのです。役場が動かないと、直接くつつかないです。

高橋町長…必要なものが全部、職員が色んな立場でできます。

栗田副会長…高齢化対策で企業化支援という話がありました。町の単独費ですか。

高橋町長…単独費です。

栗田副会長…経済産業省の補助金とかを使っていないのですか。

高橋町長…はい、使っていません。施設に300万円、商品開発に30万円から50万円、それで羊羹作っている人もいるし、アンパン作っている人もいるし、乳製品を作ったり、ピザ焼いたりなど色んな人がいます。志を持っている人たち、若手でやる気がある人がどんどん手を挙げてそれを応援しています。

栗田副会長…そうですね。商品開発したら自分のところで売るのでですか。

高橋町長…そうですね。道の駅で売る人もいます。例えばお菓子類なら町のお菓子屋さんと一緒に売って売ってくれます。蕎麦屋さんを始めた人もいます。

栗田副会長…今も続いているのですか。

高橋町長…続いています。もう3年です。この前先月の成果発表がありました。15件か16件、成果発表がありました。無農薬のオーガニック肥料を作る企業など、多種に亘ってやるのです。そして道筋も作って販売することになっています。

栗田副会長…町が道筋をつくる必要ですね。

高橋町長…作るところまではみんな頑張つて作ります。あとは、出口がどうなるかなのです。  
栗田副会長…売り先は、作る人は見つけられないですね。

〔良い玉ねぎを作る若者へ支援〕

高橋町長…そうです。一昨年から玉ねぎを作る若い人も2軒出てきました。11月に消費者協会を中心にして消費者のふれあい祭りというのがあります。健康づくりなど、いろんなことやりますが、そこに持ってきた玉ねぎが見事で4種類ありました。それが、苗床から始まって普通24回ぐらい薬をかけるのですが、それを8回以内に抑えている。本場に低農薬で、見事なもの作るので、加工用にするとうちは二東三文みたいな値段になるので、生食で売りたいというので、とりあえず軌道に乗るまでは全部町で引き取ることにして、給食センターや町の施設、病院などに使わせてもらうことにしました。それだけ低農薬で作っている地元のものだから、特に給食で子供たちに、食べてもらう、そんな形で協力させてもらっています。個数が増えれば、セイコーマートや企業にも引き合いがあります。加工用ならコロッケ屋さんなら小さいも大きいも関係ないので皮剥いてくれるのなら全部持つていくと言っています。そういうところも紹介したりして、売り先に困らないようにしています。芋でもなんでもそうですが、そうやって全部持つていってくれれば。ひと手間かけて選別して、工場持つて

いつてまた選別されてといったら、6割ぐらいになります。天気を見ながら人件費かけてるので、それであれば掘って大きいも小さいも関係なしに納めてもらったら、大きい面積でも作れることになります。

栗田副会長…そうですか。玉ねぎ作りを低農薬でやりたいということがあるのですね。

高橋町長…そうなのです。今無農薬で野菜作っている、がんこ農場が出ました。だんだん安全安心で差別化してよりいいものを作ろうという心意気もある人が増えてきました。

栗田副会長…それは本来農協の人がすることではないですか。

高橋町長…ロットが小さいと面倒でそんな小さいものどうしようもないと言います。例えば玉ねぎならホクレン仕切りでは6町歩（ha）以上とか、10町歩（ha）ないとダメとか、そういうロットで扱っているのです。実験・試験的にやるなどまったく相手にされないのです。職員も面倒だから行かないです。農協はどうすると言ったら、農協もこんなのやるのですが、組合さんはどうするの、畑作農業は4品しかないけど、4品プラス1品にできる夢のある作物を作ってはどうか、と言っても、そんなの面倒くさいから改めてやらなくてもいいと言います。

それなら、4品なら4品でそこはしっかりやってくださいと言っています。個別にやりたい人がいたら、そこは町が直接、応援させてもらおうという方向でいっています。新しい作物

で加工用のトマトの実験をやったり、薬草も試験栽培やったりしています。

栗田副会長…北海道なら薬草はいろいろ取れます。

高橋町長…薬草は、前から十勝で言えば川西農協で個人的にやっている人いるのです。何十町歩（ha）も作っています。今まではほとんど中国が原料なのですが、中国もいろんな面で不安があるから北海道にも移したい意向があつて、大樹など何箇所か、美幌のほうでも作っているのです。

栗田副会長…薬草は札幌周辺でもツムラが動いていると聞きました。北海道で薬草をきちっと作れるようになると、だいぶ変わります。もともと値段が高いです。

↓暗渠排水整備で農業生産性が大きく上がった。↓

高橋町長…それと若い世代が頑張つて独自で小麦の製粉や、集団を作つて新しい商品作りなどを行っています。直接パン屋さんや加工業者と連携して食品を作つたりしています。本当に個性的なものを作っているのですが、T P Pが発効するといっぺんに終わりになります。片方で頑張れと言いながら、T P Pがあるから、後のことを考えなければならぬし大変です。そういうことも含めて考えていかないと、基盤整備もおかしくなります。今年のはじめで小麦が取れるか取れないかの瀬戸際でした。干ばつが続いて、小麦がだんだん細くなつて、

枯れ始めたら雨が降ってきたのです。あと1週間雨が遅かったら、他の作物もみんなダメになっただけです。

高橋町長…乾燥して、芋は育たない、ビートだけは少し良かったですが、豆は伸びないです。畑もパサパサで、あの雨で救われました。デントコーンが1日で3cmぐらい伸びました。今までなら小麦は雨が降ったらコンバインが大きいので畑に入れないですが、工事しましたので、朝まで雨が降っても入れます。基盤整備のおかげです。

高橋町長…暗渠です。これは見事で、ここまで採れるようになったのは基盤整備のおかげです。栗田副会長…暗渠は効きます。

高橋町長…そして、北海道は特にパワーアップ事業でかなり開発が進みました。ところが、予算が今年は全然つきません。畑総事業も、全地区で行っているのですが、公共予算が4割しかつかないのです。今までは補正がついたので何とかなりましたが、投資予算が少ないです。

栗田副会長…公共事業の場合は予算が安定しないと大変です。

高橋町長…そうです。安定することが必要です。企業も私達も継続してある程度計画していかないと人も雇えないので、事業も進んでいかないのです。一つの事業が5年なら5年、10年なら10年と計算できないと、例えば今年3億円ついて来年5、000万円では困ります。も

う少し展望の持てる政策を、財源も含めてやってもらわないといけないと思います。

栗田副会長…何十年前と一緒にですね。

高橋町長…そう、変わっていないのです。

栗田副会長…農業生産は、効率良く、いいものを作るために公共で水の手当てを全部してやらないと、うまくいきません。昔ながらの用水排水だけだったらできません。

〔建設業の役割を果たすためにも責任のある建設会社が必要〕

高橋町長…それをやるのも段取りするのも、現場で手当てするのは建設業です。だからその体制が崩れると、基盤整備はできないわけです。このままあと3年経ったら十勝の建設業を潰すことになる、北海道や国交省に言っています。仕事がなくてやらないのなら仕方がないですが、一箇所繋がらない道路<sup>1</sup>があり、港に連絡しない道路<sup>2</sup>がありながら、事業をやるらないので、建設業協会の人も、ほんとに干上がってしまいます。除雪も、災害も、地域づくりも誰がやるのでしょうか。まちづくりの人材も含めて、大事なところです。責任をもつ

1 道東自動車道（足寄～陸別間）

2 帯広広尾自動車道（大樹～広尾間）

て行う建設会社を選んでやる必要があります。公共事業の役割があるわけですので、しっかりと責任を持った発注をしないと、地域から、建設業者がなくなってしまう。町は発注の絶対量が少ないので、国も北海道も力を合わせて地域を守る視点で努力してもらわないといけないとみんな言います。

高橋町長…役人の皆さんは何を言っているのかと驚いたり、眉をひそめたりするかもしれませんが、私も長い間いろんなことをお願いしています。例えば道路では、北海道横断自動車の足寄り口から陸別までがどうして凍結区間なのでしょう。誰に言っても、みんなやりましょうと言ってくれます。しかし、結果的にセレモニーで終わっています。協議会もあるのに資料をあげてくれないと審議は出来ません。これは事務方のみなさんが堂々と上げてくれないと進みません。太田大臣は、進めていこうという思いでやってくれています。今陸別までは認可になりましたので、とにかく少しでも早くこっちにパトントッチできるように進めたいだけだと思います。また広尾の港まで届かないのでお願いしています。

栗田副会長…計画段階評価ですので5年くらいかかるはずですが、そのなかで環境アセスをやりますので、少なくとも1年半か2年ぐらいデータを取る必要があります。

高橋町長…私のところはジャンクションですが、その機能はまだ十分に整備されていません。白糠まで伸びても、白糠からこちらに来て、足寄には行けないのです。それだけでなく、

ものすごく交通量が増え、本別も入り込み数が増えました。やはり道路もネットワークですからは一日でも早く繋がらないといけません。まして、北海道のご真ん中で繋がっていないことになりました。道路は242号の1本しかありません。この道路は、川の側と斜面に張り付いた道路です。ちよつと崩れたら陸の孤島になります。せめて片側1車線がいいので安心できる高速道路を作ってほしいのが当たり前の願いだと思っています。これができると観光も物流も含めて画期的に改善されます。

〔各産業は人手不足、行政機関が人材育成を意識してやる必要がある〕

栗田副会長…人口減少対策とか何か特別なことをやっておられますか。農業研修生の受け入れとかありますか。

高橋町長…研修生も受け入れています。研修生の受け入れは労働力になっています。中国から酪農家になるといふ皆さんに来てもらってなんとか経営が成り立っている状態です。人口減もそうですが、人手不足は間違いなく各産業にできています。介護の現場も医療の現場も農業の現場も建設の現場もそうです。十勝の事業所の技能士会要請もありますが、雇用期間が通年になるようにして、人材育成、特に技能士さんの育成をしなければ、家やビルを建てるといつても基礎をやってくれる人がいなくなります。それぐらい人材育成、人づくりは行

政機関が、国も道も市町村も合わせて意識してやっていかなければならないことになっていきます。

栗田副会長…はい、今そうなっています。今まで私のいる建設業協会は、どちらかと言うと施工管理のほうですので、技能系の人たちは下請けの専門工事業の人達です。その人達が作業するので、その人たちが集まらないと大変です。

高橋町長…帯広で聞くと、来てくれて良かったのですが、冬は離職しますので、その間、コンビニでアルバイトしていますが、結局、春になっても戻ってこないといっています。

栗田副会長…そちらが楽で、賃金も大体同じくらいですので、そうなります。色んな人にお聞きしますと、まず建設業のイメージが悪かったのがあって、それから休みがないのがあります。若い人は休みがないのが一番嫌で、その次給料が少ないのが不満となっています。建設業は週休二日をサラリーマンのようには取れるはずがないので、3月の末くらいまでしっかり仕事をして、工事が終わったら4月は少なくとも有給休暇をしっかりと取れるような会社にならないといけないと思います。今までは雇用保険で工事のない期間は手当していましたが、今は一度離職すると戻ってこないです。会社も苦しいですが、しっかり給料払っていくことが必要になっていきます。

高橋町長…先ほども技能士さんと話をしたのですが、例えばこの沿線見ると、1年中働けなく

て雇用できなくなつた陸別の人たちはまず本別まで来ます。そして本別で雇用できなかったら今度帯広へ行きます。人口の少ないところからどんどん移動して行きます。

栗田副会長…事業量が小さいのでそうなるのでしょうか。

高橋町長…本別はまだある程度のダム機能を持っているので、留まってくれる人が多いです。まだ、本別は恵まれていると思います。

「本別町の建設業協会はまちづくり、イベント活動などしつかりやってみてもらっています。栗田副会長…先程も言いましたけど街並み見えて、綺麗だと感じましたので、それは公共事業を行ったからということではなくて、それぞれの商店がしつかり構えを作ってくれていると思います。」

高橋町長…そういう意味では商店も含めて本別は意識が高いと思います。町をきれいにするっていう意識も町民は高いのです。年に2回春と秋清掃指導していますが、1軒1軒回って衛生組合が町のごみを拾い、草を生やさないように衛生検査を自らやっている町です。他の町にない良さがありますので、本別はきれいですねと言われるのは、建物がきれいなのではなくて、ごみが落ちてない、清掃が行き届いていることがよく言われます。旅行する人が公園へ行つてトイレ入ると、この町がどのくらい清掃されているか一番よくわかるそうです。本

別は一回もそれでクレームつけられたことがないです。今日もその道路を通ったら自治会の人や国道の花壇の草取りをやってくれていました。自治会と町内会のみなさんが国道に花を植えて、駅前の銀河通りから通学道路まで通りの人達または農家のご婦人方が花いっぱい運動やってくれています。

栗田副会長…ありがたいですね。

高橋町長…ありがたいことです。建設業協会は大雪が降ったら先頭になって自ら重機を借りてきて、レンタルしてそして排雪から何からやってくれます。大雨が降っても全部ボランティアです。断水になっても協会長が自ら袋持って1軒1軒に水を配ります。協会会員の人が冗談で、災害が起きたら、また協会の金が全部なくなると言っている人がいますが、建設業協会はわが町の安心安全の支えです。

栗田副会長…ありがとうございます。よくわかりました。

高橋町長…これだけやってくれる協会はないです。高橋さんのところはなんであんなに協会がきれいにやってくれるのと言われます。

栗田副会長…普段からの付き合いと色々な話も聞いていただいているから動いていただけるでしょう。

高橋町長…いや、協会が自らまちづくりいろいろな役割で積極的に参加してもらっています。

観光協会から何でも建設業協会の会社でやってもらっています。

野田氏…いえいえ、そんなことないです。

高橋町長…本別のイベントは会長の協力でみんなうまくいっています。今度9月の第一土日に、きらめき祭りがあります。花火大会と歌謡ショーで大きいイベントです。

栗田副会長…今のお話をお聞きしますとイベントが月に1回ずつありますね。

高橋町長…はい、あります。

野田氏…本別はイベントの多い町です。町長は全部出ていますから、大変だと思います。

高橋町長…子供たちが語る会などもあります。一番の本別のどんなところがいいですかと聞くと、まずイベントがいっぱいあるからいい、楽しいといっています。その次は自然が豊かで楽しい、そして何が欲しいのと聞くと、ゲームセンター、イオンのようなものがほしいといっています。

栗田副会長…イオンですか。

高橋町長…そう、総合的に買い物やいろんなことできるからでしょう。イオンが昔進出する話がありました、うまくいきませんでした。

高橋町長…銀河通り商店街という駅前から川までですが、それぞれの個店を生かして、協定を結んでそしてみんなで力を合わせて、北海道の事業で再開発をやりました。今でもそうですが、通りのお祭り銀河通りフェスティバルをやります。それがこの前の土曜日でしたが、す

ごい賑わいです。

栗田副会長…道道ですね。

高橋町長…はい、道道です。21回になります。

栗田副会長…そうですか。道路を拡幅してまわりを良くしていったんですね。あの小公園も土地を空けてもらってつくったですね。金星公園とか名前がいろいろついていました。

高橋町長…銀河の里なので、そこにこだわって星にまつわるいろいろな名前にしています。駅を降りると駅前カラクリ時計があつて、音楽が鳴って時間ごとにSLが走ります。銀河通りのカラクリ時計があつて、高校の上の太陽の丘にもそういう時計があつて、そして橋を通ると愛の架け橋になって音楽がなつて、夕方5時になると町内に音楽が流れるということですね。本別駅が今の道の駅で、北斗七星、アースホールと言うのが銀河通りにあつて、そして本別中学校がオリオン座、本別高校が北極星、そして、太陽の丘があつてという物語にしています。

栗田副会長…維持は町でやっているのですか。

高橋町長…はい、委託しますが町でやっています。

栗田副会長…わかりました。長時間ありがとうございます。

平成27年8月6日木曜日15:00～16:00 於…美瑛町長室

浜田 哲 美瑛町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

荒井 保明 一般社団法人旭川建設業協会副会長

栗田副会長…皆さんにお聞きしているのは地域で今お悩みになっていることをお話いただけると建設業にも繋がるということで、よろしければそういったところからお話いただきしたいと思います。

「海外の観光客が買いだめして送るという状況は予想以上に驚いています」

栗田副会長…今日JRで旭川から富良野駅まで乗ってきましたが、ほとんど中国人ですね。

浜田町長…駅に行くと、私達が外国人です。

栗田副会長…私は背広を着てカバンを持っていましたが、そんな人は誰もいなかったです。

浜田町長…いいいです。

栗田副会長…ちょっと時間がありましたので、駅の周辺を回らせていただいて、そうすると会う人は外国の人だけでした。まだ時間ありましたのでコーヒーを「おきらく亭」で飲んできましたが、これも外国人しかいませんでした。日本人はいないです。

浜田町長…はい、美瑛町はインバウンドで貢献しています。震災後の予想以上の外国人観光客の急激な伸びで、中国の上海、香港、インドネシア、そういうところから来る人、特に中国本土の人々が買い物をしてきているとのことです。だから商店街が、忙しいとなってきた様子なので、悪くはないと思っています。

栗田副会長…北海道の色んな観光地は、これで生き延びるなど感じています。

浜田町長…美瑛町の町は観光に関してこれまで丘のまち美瑛というテーマを前の町長から譲り受けて、観光と農業を徹底的に連携して情報発信するという取り組みを進めています。あつる時、スーパを美瑛町も含めて作りたい企業があるから希望があれば情報交換をしますが、あつるといふ提案がありました。その時、スーパを町に欲しいと思っていないという話をし、私には行きませんでした。その際に、でも町の活性化はどうするのと聞かれましたので、美瑛町の人は例えば東神楽にもスーパはあるし旭川にもあるし中富良野に行ってもあるし美瑛の入り口にもあるし上富良野にもある、だから町内での購買は重要だけれど、一方で外に行ってお金を使うのは、旭川に行つて安くて良いものがあればそこで買うのは現実なので、それ

を町内でどうしても買って欲しいというのは無理がありますし、そういう事は長続きしないと考えています。

私達がこれからの商工業や観光を町づくりの中にどうやって位置付けるかということですが、町内の購買と共に、町外から来た人がいかに美瑛町で買い物してもらえかが重要だと考えており、それをしなければ次の時代を見据えた町づくりは難しいと話をしています。しかし、そうは言っても観光客が来て、実際にそんなに買うものでもないと思っていました。が、今回中国をはじめ外国の方々に来て、葉や下着、電気製品などを買ってもらっている、それがこれからおなじ流れで続くかどうかは別として、可能性があることを私自身が認識できてありがたいという思いで商店街の話を伺っています。

栗田副会長…きれいに町づくりをした意味が本当に出てきたという感じですよ。

浜田町長…そうですね。まったく予想外の次元で、海外の観光客が地域の販売に関わってくるのは、私にとっては意外なことでした。国内の観光客が来て電気製品や下着などはよほどのことがないと買わないですし、もちろん薬も持って来ます。海外からのお客が商品を買いために送るといふ状況に驚いています。

栗田副会長…夏よりは減ってきているのですが、この冬もずっと続いていますね。

「冬の青い池のライトアップを仕掛けてみました」

浜田町長…それで去年の冬に、青い池のライトアップを仕掛けてみました。

栗田副会長…それは知らなかった。

浜田町長…実際の照明を手掛けたのはテレビ放送などで活躍されている方で、どうせやるなら一流どころにお願ひし、照明は派手な色を付けない事としました。美瑛の冬の景色を発信することを考え、青い池は情報力があるので切り口にしてやってみました。1日平均2百数十人が見に来ていました。2百数十人があの寒い冬の雪の中に見に来るのです。青い池は雪で埋まって見えないのですが雰囲気は良く、白金温泉にもお客さんに泊まってもらいました。海外の人も国内の人も含めて、人の流れが少しずつ変わってきています。特に海外のその勢いは面白いと思って、期待しています。

栗田副会長…そうですね、中国をただ嫌と言わずに大事にしてほしいです。

浜田町長…そう、そんなこと言うのは、昔の日本の観光客がヨーロッパへ行ってどんだけだったかを忘れているのです。私もまったく同じで、町議会議員のときにイタリアへ行って、百人だけか百何十人だけ一緒に並んで美術館で見ているときに、イタリア人に不思議そうに指差されました。それを考えると、文化力は育て上げるのであり、風習の違いもありますので、寛容な気持ちも必要です。美瑛でも農耕地に観光客が入るといった問題がありますが、こう話

をしてきました。皆さん考えてみてください、もつと多くの人が美瑛の風景や青い池などを見に来てくれることで、この景観がきつと皆さんの作る農産物に付加価値を付けることになるよう取り組んでいきますので、美しい農村景観を維持して行きましよう。その景観維持の結果、こうやってお客さんが来るようになり、美瑛の農作物が美瑛産ということで選ばれる時代になってきたのです。農地に無断で入ることは行つてはならない事だという情報を繰り返し発信しながら、言葉を交わし交流をすることで、私達自身も観光地としての力を付けていくことが必要であり、良質な農作物を作ると共に、美しい生産地を付加価値として、農業地域の持続発展を目指しています。いろいろな課題は有りますが、そこは農協さんや関係団体とも理解し合つて取り組んでいかななくてはならないと思つています。

〔農協の流通は、180度変わりました〕

浜田町長…私が町長になってから農協の流通は、180度変わってきました。それまではホクレン一辺倒だったのですが、当時の組合長等と協力し合つて、民間流通にも対応を広げながら、その代わり国の補助金等も活用させてもらい、倉庫や選別・乾燥などの施設を整備してきたのですが、現在、農協はしっかりと利益を出しています。

栗田副会長…ホクレンで扱いますと、面積や量のロットの最低がありますね。

浜田町長…はい。しかし、そうすると混ぜ合わせるのでブランド化ができないのです。

栗田副会長…北海道産にしかありません。

浜田町長…例えば今回農協で進めている加工用の玉ねぎも、東京の会社から引き合いが来て、美瑛産の作物として認知を頂き、東京に送り込むという方向で進んでいるようです。これも、地域の戦略の中に情報発信がなかったらできないことなのです。

浜田町長…北瑛の小学校跡地に去年オーブンしたのですが、農水省の補助金なども活用してレストランと併設したシェフの養成所を作りました。日本各地からシェフの卵を集めて、ベッドメイキングから接客まで全部2年間かけてやるコースです。それで若いシェフを輩出していくためにやっています。今は12人ぐらい泊まれるようにしているのですが、そういった美瑛ブランドを担ってくれる方々のパワーは素晴らしいです。イタリアから1、500万円かけてパン焼き機の釜を買いましたが、本格的な美味しいパンも焼いています。

〔小麦ゆめちからは、美瑛から栽培〕

栗田副会長…美瑛選果でのパンがありました。渋谷のパン屋ピロンに私はおいしいと思ってよく行っていたのです。そのパン屋さんでやっていた人を使って美瑛選果でパンを作っているというので、絶対食べないといけないと思って買ったのですが、おいしいと思いました。

浜田町長…あのパン屋さんも、何故美瑛に来たかというのと、ゆめちからという麦が今話題になってきていますが、以前、あのゆめちからの種を使う農家がいなかったのです。超強力粉で、パンでも麺でも核になる麦なのです。私達が普段作っている麦は中力粉で、海外から強力粉を輸入して日本の国内の麦は多くは混ぜ合わせる増量材になっています。数年前、その麦を試験場が持って歩いていたので。美瑛町に来て、この種を10年かけて作り上げたのですが、今のところ誰も使ってくれないと言いました。私のところに種を全部置いていって下さい、試験栽培してやりますよと言ったのですが、国のお金で作ったので、全部は無理だけど5分の1程度ならと言って置いていきました。それを農家の人に渡して、損をした分は全部補償するからやってみてくれとお願いしてやり始めました。実は北海道でゆめちからは美瑛町がトップで始めたのです。そうしているうちに四国の製麺屋や大阪の敷島製パンとか、聞きつけて来だしました。ところがあの人たちの必要量を確保できないので、サンプルだけ送っていたのですが、そのパン屋さんも実はフランスから麦を輸入しているのですが、国内産の麦で本格的なパンを作ってみるのが実は夢だったと言い、そんな麦を美瑛でやっていると聞いて進出を検討したのが始まりです。

栗田副会長…そうですね、東京の人はあれだけで絶対に買います。

浜田町長…銀座にあのパン屋さんがあるのですが、他に東京にレストランなど7店ぐらい店を

持っているのです。この前、銀座のパン屋さんに寄って、牛肉を挟んだミートサンド、それいくらと聞いたら4,000円で、サンドイッチに厚めの肉が挟まっているのが4,000円だって驚いたのですが、銀座ではこうですよと教えられました。

栗田副会長…それでは今でもここの小麦を使ってパンを作っているのですか。

浜田町長…食料管理の制度で東京では美瑛の麦を限定では使えないようです。美瑛の店では美瑛の麦でパンを作っています。

栗田副会長…別なのですね。

浜田町長…そう。ここが難しい。現在は、ゆめちからの生産割り当てで言えば十勝、空知など、ホクレンの系統による管理は強いです。

栗田副会長…そういう中で、農業が産業の中心のところは地域で新しい品目を増やしたいと町長さんがみんな思っています。ところが新しい種を持ってきて作ってくださいと言っても、誰も支援してくれる人いないので、役場が一所懸命にならないと絶対にできないです。

浜田町長…美瑛の農協はそういった面では、考え方も変わってきていると思います。彼らもまた先に進んでいます。

栗田副会長…利益が上がるようになるとだいぶ違います。しかし、そこまで行くのに3、4年がかかります。

浜田町長…農協の施設としてトマトの選果場を持っているのですが、ここにきてトマトの生産量も増えて最近新たな選果場を作ったのですが、今回選果場には、これだけは外さない条件としてトマトの糖度を分析する機械を入れました。良いものを選別できる能力を持たせて欲しいとお願ひしましたが、担当のほうから町長めんどくさいから外させてくれと言ひ出したのです。だから農協さんに補助金を出す以上は何とか導入してくれと頼んだのですが、まだまだ抵抗はあります。トマトは15億円近くの売り上げで、単品で米を抜きました。やはり美瑛が作物の産地だというふうにしないと強くないと思います。

畑作の先進地である本別や足寄の町長さんに頼んで、農協の組合長に会わせてもらって、美瑛の農協の人を連れて行って、十勝でどんな農業をやっているのかを見学しました。加工施設、それこそロッケを作っているところや、デンプン工場とか、それから遺伝子の組み換えのチェックをしているところ、種子の保管・確保、そういうことをやっていて、それこそ私も含めて美瑛の人は驚いたと思いますが、勉強させてもらいながら、私としては方向性を探りながら、今までやってきています。

（消費者から選ばれる品目に仕立てる）

栗田副会長…トップを取ると、自分で出荷価格を決められるようになります。品質と量を確保

しないといけません、それはできていますか。

浜田町長…農作物の流通で必要以上価格が高くなるのは、私は避けるべきだと思います。しかし消費者から選ばれるというレベルでやってくと、適正な生産と適正な利益への対応、その両方が得られるので、企業や消費者が一方的に高いものを買わされて、それを良しとしているうちは良いのですが、まったく違うレベルのものがでてくると、完全にひっくり返ってしまう。そういうゲームのような、10取るか0取るかというような勝負は、特に北海道の農業ではやるべきではないと思つて見ているのです。だから選ばれるものにしていきます。例えば美瑛と他産地のジャガイモが並んでいるときに、北海道の美瑛町のジャガイモを選んでもらえるようになりたい。ただ、例えばトマトでもこだわっているのは、美しい村連合の物産を集めて西武が大阪や東京でセールを仕掛けてくれていて、そこに出品するときは、トマトも糖度選果を通つたレベルの高いものを出すことが産地としてできるような形を取れるようにしたいと思つています。

栗田副会長…北海道の食料自給率を高めて日本の自給率を高めるといふ考え方がありますが、食料自給率だけを考えると、単品の量を増やしていく方向でも自給率は高まります。しかし、それでは最終的な農家の個々の所得は上がっていきかないです。今お話されたように、選ばれる、名前がわかる品物をそれぞれの地域で作っていく方向であればいいと思います。先ほど

半分は農協で半分は美瑛町でという話をされましたが、全体の食料自給率を上げるような量を生産することは農協がやっていく。付加価値をつける部分は役場とともに地元の農協がやるということかと思えます。

「町づくりは人口を定規にするとうまくいかない」

浜田町長「町づくり全般がそういうところがあります。このインタビューの題材から言いますと、人口減少についてですが、この前、北海道開発局の連携会議で、人口を定規にした地域づくり、地方創生の論議は、私達にとってははじめからマイナスから走らせてもらっているみたいなものですとお話しました。この近辺でいえば、旭川近くの東神楽には人口は流れるわけですし、東京近辺の知り合いの市長さんに産業政策はどんなことをやっているのと聞いたところ、産業政策は企業の対応だけで、企業誘致をしていない市もあり、黙っていても企業は来る、土地さえ用意してやれば来ると考えています。地方にいる私達は農業そして商工業など政策全般をやっているわけです。

人口政策でみると都市近辺だとか、例えば飛行場が近くにある、美瑛は近くに飛行場がありますから観光にはプラスで、鉄道や道路がしっかりと整備されているとかによって人口に關する条件はぜんぜん違います。これを、地域づくりの定規として使ったら絶対に間違うと思

います。町村合併と同じことで、こういうことをやるから国や地域がダメになるのではと思います。少子高齢化の論議でも、今美しい村で一緒に勉強していますが、例えばフランスやイタリア、ベルギーでは500人くらいの町や村は当たり前です。フランスは6,000万人しかいないのに、町や村は3万6,000もあります。イタリアは8,000の自治体があります。500人や1,000人の町の何が悪いのでしょうか。もっと多様な地域づくりと町や村の存在を認めていかなければ進むのは一極集中です。

栗田副会長…そうです。人口減少はもうなるに決まっているし、大体昭和50年くらいの人口規模になるのです。昭和50年のときの生活はそれなりに豊かだったと思っています。今はそれよりもはるかに豊かになっていますので、少ない人が暮らすのはすごくいい世界に、もっていき方によってはなると思います。心配しなければいけないのは、最低限の衣食住をどうしていくかが問題で、食は心配ない、それから着る物も買えばいい、住むことだけどうするかと思います。

浜田町長…そうですよ、医療、福祉や教育、そういった基盤を持った生活をどうやって維持できるかということです。異常なのは都市化が進み続けている東京の方だという考えをもたないと。小さな町の人口が減ることよりも東京がこんな異常になったことを一体どうするのかと、論議しないと何も生まれなし、ぜんぜん違う問題を扱っているような気がします。

浜田町長…今日この打ち合わせが終わったら地方創生の最終的な方向性の打ち合わせを行うことになっていきます。

栗田副会長…地方創生の計画を作るのですね。

浜田町長…そうです。今動き始めるのですが、地方創生の良いものは取りましよう、お金もいただきましよう、しかし人口だけを定規にしてはやりませんという方向でやろうとしています。問題をしっかりと整理しないと、そして問題の立て方を間違えると何にもなりません。人口減少に関する不安はありますが、問題の設定をしっかりとしたい。

美瑛町の人口は今1万6000人ですが8,000人でやれる町にしようということ、計画では以前からずっとそう言い続けていますし、今回の10年計画でもその計画をしっかりと打ち立てようと思っています。これだけ日本の人口が減る時代になってきているにもかかわらず、相変わらず将来計画の人口は、例えば20年前の総合計画で美瑛町でも2万人にしようという計画を作っていました。しかし、私はもう増えるのは無理と言っています、今度の計画は減るという前提の計画を立てようと思っています。それをしないと、また同じ計画を作ることになります。

栗田副会長…みなさん人口が増える計画を作りたいたいのでしょうか。

浜田町長…地方創生で補助金をもらうために5,000人の町が6,000人になりますという

計画を作ると思っています。

栗田副会長…それでは、かえって無駄に金使います。それにしたがって全部色んなものの規模を決めることになります。もつとも金かかるところに人口規模が効いてきますから、水道、下水道、医療もそうですし、全部過大な投資になります。

浜田町長…そうです。そこを間違わなければ良いと思っっています。しかし、町づくりに関して人口問題にまったくタッチしないということではなくて、町づくりの成果として人口がどうなるのかというのは成果の大きな指標です。そのことはあるにしても、やはり違った問題の設定をしてはいけないということで動いていこうとは思っっています。人口がある程度減少しても生活が成り立って医療・福祉・教育、こういったものがしっかりやっていけるような町づくりを進めていくことが仕事と思っっています。

それから、経済の関係については縮小していません。農業の売り上げも上がっっていますし、商工業についても減っていません。その点では人口が減っても農業一人当たり20haでやっていたのを40haというような規模でやれば、経済的には何も問題ないです。

問題は今私達が観光をどう捉えるか、そこに実は町づくりの視点が必要です。私にとって観光は、物珍しいところに来てくださいというのでは産業として弱いという気がしています。すぐ飽きられてしまうからです。美瑛町の町づくりそのものをどうやって理解し、楽し

んでもらえるかが実は観光の目玉だと思ってやっています。そうだとすれば観光は町づくりの、人口もそうですけど、観光客がどういうふうに来るかも、実は町づくりの成果のひとつと思っています。人口問題、例えば人口が増える、増えないと同様に、観光客がどういうふうに地域とアクセスしていくか、これも実は地域住民の大きな成果と思います。去年は美瑛町で、数字的には一人一人数えたわけではないのですが、120万人と書いていた観光客が176万人になりました。今年もっと多くなるだろうと言っています。実はその100万人の観光客が一人1万円の売り上げになると100億円なのです。農業の売り上げは120〜130億円ですので、農業があることによつて美瑛町の観光が生まれているから、農業をしつかり基盤にすることはどうしてもやらなければならないことですが、例えばそこから町づくりの成果として観光がそのまましつかりした町づくりの評価指標として扱われるのであれば、ものすごく大切な要素になっていくと思つて見えています。

そこから商工業が、美瑛町なら観光客が来たときに対応できているか、美瑛町の商店はしつかりしたお客さんとの対応ができていくか、また安心して来られる病院、安心して来られる地域づくり、安全な交通体系ができていくかどうか、実はこういうことは観光客との接点の中でもものすごく重要なものとしてあります。この部分をもう一度、町づくりと観光を洗い直ししていかうと思つています。その中で美瑛町の町づくりが観光客にとって本来に来て素晴

らしいし、楽しめて美味しい、美しい、そういう町となる提案をやって行こうと思っ  
ています。それでシェフの養成所や美しい村連合の世界大会を開催しメンバーたちをこ  
こに集めたり、今年は昔買い取った倒産したスーパーの建物をリニューアルして子供  
たちやお母さんに開放して、それから1階は今美瑛町の写真家の写真や住民の作品を  
展示しているスペースとして計画しています。

栗田副会長…そこはシェフの学校ですか。

浜田町長…いや、違います。町の中に今年出来上がった施設で、今は写真を展示  
しています。それは美瑛外から来て美瑛に移り住んだ写真家たちに、あんなに頑  
張ってくれているからやらないかと声をかけてやっています。そういう町づくりが私達  
の町の文化力に繋がっている可能性があると思います。そうすると観光客は、町  
づくりの中で文化力を高める上でも、ひとつの要素になり得るということを考  
えています。例えばお土産作りや食のレベルの向上など、大きな地域づくりの  
要素になるとにらんでやっています。だからどっぷりと、彼らと付き合っ  
てみよう、今やっています。

栗田副会長…そういう方向が一番いいと思います。これ自体が降って湧いたよ  
うな現象です。知事が300万人とか500万人とか言っていますが、去年で外国  
人120万人しか来てなく、この状態です。300万人は2・5倍です。どうなるのかと  
まず心配しなければいけな

いと思います。そのためには本当は町長さんのようなお考えの方が北海道中にいないと受け入れられないです。私達が関係するインフラも、道路、鉄道、飛行場なども、もうパンク状態ですので、一緒に考えていかないとうまくいかないです。

「外貨」を稼ぐのは農業と観光

浜田町長…美瑛町は「外貨」（美瑛町以外から稼いだお金）を稼ぐのは農業と観光と決め込んでいるので、もう10年前に農協さんや町内の農業関係の団体、全部総ぐるみで財団を作りました。それを農協の事務所に置いて、美瑛町役場職員も送り込み、さらにプロパー職員も雇い、農業の中心機関として機能しています。もうひとつ、活性化協会という財団を4年前に作りました。町の活力をつけるために、どういうふうなことをやれば良いか、行政と民間の間で機能する組織として期待しています。私のように民間から出た町長は民間と行政の距離感をどこまで連続したものにできるかが重要なファクターだったので、観光や商工業の活動によって「外貨」を稼ぐために設置しましたが、その活性化協会では今年、4ヶ国語、ロシア語、英語、日本語、中国語と話ができる若い25歳の台湾からの女性を職員にしています。北大の大学院を優秀な成績で卒業してほんとにこんな人が美瑛町に来たいと言っているのかと聞くと、民間の企業も3つ受かっていたのですが、美瑛町の町づくりに参加したいという

ことでした。今ヤフーとも連携事業を行っているので、ヤフーの人達と組み合わせさせてやらせているのです。

「地域の情報を地域がコントロールして、発信していくことがどこまでできるか」

浜田町長…この他に、長く町長をやらせてもらって、どこで卒業式を迎えようかと考えているところですよ。いよいよ仕上げに向かう私の政策の要のひとつに、情報戦略、地域の情報を地域がコントロールして、発信していくことがどこまでできるか、今そこを仕掛けていこうと考えています。

栗田副会長…確かに情報は地域がコントロールできてないですね。

浜田町長…私達がやっていることの本質をしっかりと伝えられるかどうか。私達にとって情報量が不足しています。海外向けでも何でもしっかりした情報戦略、実は自然エネルギーのフォーラムを行ったときにドイツやオーストリアの市長などが来て美瑛町に泊まりました。彼らと話をしている、あなたたちの地域の発展で一番重要なのは何かと聞いたときに、それは情報戦略だよと答えてくれました。飲みながらのディスカッションですが、ここまで行っているのだというのが刺激になりました。飲みながらのディスカッションですが、ここまで行っているのだというのが刺激になりました。そのレベルからすると私達の情報力は、例えば新聞の人に書いてくださいとか、テレビに乗せてくださいとか、ではいけないと思いました。書いて

いただけるのはありがたいのですが、そうではなくともやれるような、もつと当たり前に情報の外に向けて発信できる構造が地域の中に必要なことと思います。今はこれを重要な案件としてい入るのです。いろいろ作戦を立てていて、さほど金がかからず出来ると考えています。

栗田副会長…あまり金をかける必要はないです。

浜田町長…金に頼るのは良くないです。やはりソフトウェアで戦わなくてはダメです。

「建設業は大事な産業としての位置づけをしています」

栗田副会長…建設業はどうでしょうか。

浜田町長…私は建設業とともに大事な産業としての位置づけをしています。戦後今年70年で、戦後の地域、東京もそうなのですが、それぞれ役割を持つてずっと来しました。そして、食料を確保しよう、それから町並みを造ろう、住民の快適な生活をつくろう、下水道などが作られてきて、そして今、次の時代に入ろうとしているときに、私達は先ほど話したように、グローバル化の中でどっしりと対応してみましようというときに、次の時代も町づくりは必要になってい入ると思います。

今回駅前道路も少し整備して、それやスーパー跡地の施設も戦略の中に上げてい入ります。建設業の人にはこれからの町づくりがあるから、去年北大と一緒に景観計画を作ってもらっ

て、今年は、最終段階の観光計画を今後3年でやろうと北大と一緒にやっています。観光計画の中には、将来、美瑛町で多くの方々を楽しんでいただける町としての質の高い観光としてテーマが出来ますので、その中に公共事業や町づくりは確実に入ってきます。そういう話は建設業界に話しをさせていただいています。

美瑛町の道路も、美瑛町独自の規制緩和で、補助工事でも独自の規格を作りました。田舎の道路は歩道を作るという規格です。白線を引いて、ポールを立て、横の2m〜3mの空いたところはサイクリングロードと併用にしました。冬はポールを取れば除排雪のたまり場になるので基本的に田舎の歩道はもうやめました。砂利が30cmか50cmしか入っていない歩道では、すぐ草が生えてきます。だから道路と一体にして、サイクリングをやろうと、北海道開発局にも川まちづくりで、サイクリングロードを白金の方まで上げていただいて、本格的にやらせていただいています。サイクリング大会ももう5回目になりますが、定員1、000人で1、200人応募してきて、カットするような大会になっています。

栗田副会長…富良野周辺はサイクルスポーツが盛んになっています。いいことです。

浜田町長…これからの時代に生き残っていく町づくりという公共的な政策が必要ですし、それに対して建設業の方々に対して未来を作っていく役割は持っていたくこととしています。当然災害対応や普段の町の公共物の維持などは当然ですが、さらになお一層将来の町づくり

に関わっていただきたいと期待をしています。建設業界から聞いたのですが、けっこう若い人も職員として入ると言っています。

栗田副会長…技術者・技能者不足も最近は少し落ち着いてきました。

浜田町長…そうですね。

栗田副会長…それなりの会社のところは担い手不足というのはないのですが、技能系の人たち、型枠や鉄筋工などはやはり不足しています。

浜田町長…よほど便利な工法を作っていないと難しいですね。公共工事で心配しているのは、町長を10何年やっているのですが、一時期、美瑛町の公共事業の入札額が高止まりしていると議会からも新聞からもたたかれました。しかし私は一貫して、公共事業の落札率をもし無理矢理人の手を加えて下げたとしたら、そのしわ寄せはどこに行くかわかっていますかと言っています。下請けのところにしわ寄せが行き、労賃に跳ね返ることが、目に見えているのです。

栗田副会長…労賃にしわ寄せが行きます。

浜田町長…あなたたちは本当にしっかりと事情をわかってそんなことを言っているのかと言っています。一貫して無理矢理手を加えて下げるようなことを私は考えてないということやってきています。しかし、最近、また批判、公共事業パッシングが出てきています。国が公共

事業を減らしたいときに出てくる仕組みとっています。

栗田副会長…公共事業は、少し抑え気味です。

浜田町長…公共事業という性格上、適正な入札価格については是非マスコミなどの関係機関にパッシングが起きないように宣伝や情報発信をしてほしいと願っています。

「昔は、公共事業の世界は別世界であった、これを再び起こさないこと」

浜田町長…それともうひとつは昔の公共事業でパッシングが出たのはなぜかというと、政治家、行政、業者というスクラムがあつて、別世界を作ってしまったことによつて、世間と離れた産業と見られたためとっています。

栗田副会長…世間と離れた産業と見られたということはありません。

浜田町長…このことを再び絶対に起こさないこととなれば公共事業にあたる方々が、いかに社会と幅広く連携できるか、役所とばかりではなく、発注者とばかりでなく、例えば社会弱者の方々とどうやってしっかりした向きあい方をしていくか、私はそういうところが情報発信として重要になってくるような気がしていますので、是非そんなことを、皆さん方の中で考えていただければありがたいとっています。

特に弱者対策、例えば生活環境の整備や支援などや、町の環境美化、これは今やってくれ

ていますが、ぜひ公共性の部分にも幅広く公共事業を受ける方々と、今までのような狭いところからもっともっと広い世界を作っていただければ良いと思っています。建設業は必要と考えていますし、地域に合った建設業を私達もまた維持できるように今年も事業等を確保するために頑張っていきたいと思っています。

栗田副会長…はい、ありがとうございます。

「カジノやIRの誘致は、地域の準備が必要」

栗田副会長…荒井委員から何かお聞きしたいことがあればどうぞお話し下さい。

荒井委員…カジノやIRの誘致も良いですが、かなり具体的な、地に足のついた本当になりそうだと思う行政のほうがいいと思います。

浜田町長…ありがとうございます。例えば、カジノなどは強壮剤と考えています。強壮剤を入れるときに体力が消耗していれば、それだけで終わってしまいます。しっかりした体力の中に強壮剤を入れるところは入れて、それがコントロールできるかどうかという話かなと思っています。カジノやIR誘致がすべて悪いことではないのですが、本当に準備ができているのだろうかというのがあると思います。

荒井委員…宮崎であれば、例えば大手のアミューズメントの会社が核になって、シーガイアな

どのセットを使って、それなりの準備や、下地があります。準備もなにもないままに、大きな会社にやられたりして町づくりがさっぱり進まない、危惧もします。

浜田町長…そうなのです。自分たちで何かをやるうというものが消えているときに外に依存するのです。そのバランスがしつかりあれば良いですが、そうでないと大変なことになります。います。

荒井委員…もともといいい下地があるのであれば、町長のおっしゃるように自前でやったほうがいいと思います。

浜田町長…しかし、どういう形でやるかというのも地域ごとに判断してやっていくと思います。田舎で私達もできるだけのことをやって、そして旭川のサイクリング協会の人たちが手伝ってくれなかったらサイクリングはできてないですしやっていないと思います。サイクリング協会の方々がきて、美瑛町ならやりたいということやって始めてくれました。そのときは函館もサイクリングを辞めていたし、みんな辞めていたときに、私が美しい村連合で知っているから、イタリアから自転車の世界チャンピオンを連れてきて、美瑛町の町をちよっと走ってみてくれと頼んで良いとお墨つきが得られれば、私はやるからと言いました。それで、自転車で回ってくれてこれだと言ってくれて、ツールド北海道の山本理事長さんなどに力になってもらいました。それで動き出したら富良野もやるというので、富良野もどうぞやって

くださいと言ったのですが、美瑛町は600kmの道路があるからどこでもコースが取れる。しかし、富良野はコースをとりきれないので美瑛までつなげさせてくれとなりました。

荒井委員…富良野は平らなところか山しかないので。美瑛みたいに丘があまりないのです。

浜田町長…美瑛で山のほう行つて見てください。みんなエンジン付きのレンタル自転車でも走っています。

栗田副会長…はい、アシスト自転車ですな。

浜田町長…駅前近くの町の角に、美瑛町の新しい施設がありますので帰りに見ていってください。北大にいろいろ注文をつけて設計してもらいました。

栗田副会長…しっかりやってくれましたか。

浜田町長…北大と連携している企業側に設計してもらいました。

〔建設業界と弱者との向き合い方〕

栗田副会長…先ほど公共事業との関わりの中で、建設業界の方が特殊な世界ではなく広い世界と連携すること、弱者との向き合い方ということをお話しておりましたが、弱者の方とは具体的にどういう方たちとお考えでしょうか。

浜田町長…ひとつは障害のある方、高齢者の方、独居である方、子どもとお母さんだけ、子ども

もとお父さんだけという方、それらの方たちを弱者というとおかしいのですが、そういう方々で苦しんでいる方々に、住宅政策などを私達はいろいろやっているのですが、そこに家の周りを少し整備してあげましょう、除雪手伝いましょう、といったレベルで向き合ってもらえば良いと思います。そうすれば地域の財産としての事業になり、建設業者とそういう枠組みができればまだまだ發揮できる力はあると思いますし、建設業界のことをわかってもらえると思います。そういうことをどう考えていただけれるかという気持ちはあります。

〔美瑛町らしい情報戦略の仕掛け〕

栗田副会長…先ほど情報戦略の話をしていただいたのですが、ホームページなどを使って進めるということでしょうか。

浜田町長…美瑛町は青い池などの中心となる観光施設があるので、青い池に50万人が来ます。それから花畑四季彩の丘は農協の組合長がやっていますが、今80万人来ると言っています。私は、美瑛町は観光戦略を考えたとき、最初に来てもらわなくて良いと考えています。2回目、3回目や4回目に日本、北海道に来た人が美瑛に来てくれれば良いのです。そういう戦略を取っています。本来はそれで良いと思っています。そして、そういう観光戦略に適合する情報戦略をやるうとしています。青い池は全部口コミではじまり、インターネッ

トやフェイスブックに流れたりしています。私達の地域づくりにマッチした情報戦略は何かを、しっかりと詰めて行こうということです。

栗田副会長…今日のアポイントは柴田さんという総務課の女性の方からご連絡をいただいたのですが、依頼書を送って1週間以内に役場のほうから連絡をいただいたことはじめてです。さすがに職員の方がしっかりしていると感心しました。

浜田町長…ありがとうございます。この六月に「日本で最も美しい村」連合総会・世界大会を開催しましたが、海外の方も合わせて3百何十名の方が、日本に集まってきてくれてイベントをやるわけです。この人たちがみんなイベントに参加したのですが、一般客でないので、美瑛町の職員と町のボランティアでアテンドをしたのです。去年はベルギー、そして今年日本で開催だったので、その後で彼ら、イタリア、フランスからメールが来て、コンプレートの世界大会をやってくれたという評価を美瑛町の職員がいただきました。そのかわり職員も気の毒で、休みもなにもなくて申し訳ないと思っています。

栗田副会長…長時間貴重な話をありがとうございます。

平成27年8月7日金曜日 11:00～12:00 於…新篠津村村長室

東出 輝一 新篠津村長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

阿部 芳昭 一般社団法人札幌建設業協会理事

栗田副会長…今日は、建設業というよりも村長さんがこの村を経営されている中でどんな課題があるかを中心にお話いただければ、建設業の話にも結びつくと考えています。よろしくお願います。

〔新篠津村のアクセス・公共交通機関〕

栗田副会長…今岩見沢から、新篠津交通のバスに乗って来ました。

東出村長…バスで来たのですか。

栗田副会長…まず公共交通機関でいろんな町村に行けるのかを確認することと、途中の町並みと町へのアプローチがわかるのでバスで来ました。

東出村長…岩見沢から来て街の入り口にある「たつぶ大橋」はいいでしょう。平成16年に出来上がりました。

栗田副会長…あれは道道ですね。

東出村長…はい。前は岩見沢大橋と言っていたのです。昭和35年に造ったのですが、老朽化のため架け替えして、今度は岩見沢ではなく「たつぶ大橋」と命名しました。新篠津村はあの橋がなかったら大変で、陸の孤島になります。いつぞや、橋のケタにヒビが入って、通行止めになったことあります。そうすると月形町か江別の橋でないと岩見沢市に行けないのです。迂回しなければいけない期間は少しでしたが、今新篠津村から岩見沢に学校、病院、日常の買い物などで65%ぐらいの村民が使いますので、重要なのです。残り35%ぐらいは分散して江別市、当別町、札幌市などに、買い物や病院へ行くのですが、大部分は岩見沢が中心です。からまさに不便で大変な思いをしたのです。この道がしっかりと機能しないと新篠津村は陸の孤島になります。今はものすごく助かっています。立派な橋で本当によかったと思います。

阿部理事…前はトラス形式で狭い橋でした。

東出村長…狭くて、冬になると路面がすり鉢状になって、車がすれ違うのも大きい車なら徐行どころか止まらなければならず、冬は譲り合いをしていました。

阿部理事…小型自動車でもけっこう大変でした。

東出村長…そう、大変でした。歩道付きの幅広い拡幅というか広い橋造ってもらったものから、歩道も今3mもありますが、大変助かっており、新篠津村としてはものすごく有効な橋です。江別や月形の石狩川に橋が架かっていなくてもこれが架かっていけば新篠津村は65%、70%の人には影響がありません。奈井江の高校に行っている生徒もいますけど、高校生も6割〜7割が岩見沢市です。

栗田副会長…そうですか。新篠津村から通われるわけですか。

東出村長…そうです。除雪も昔と違っていいものですから、夏冬通っています。昔私も岩見沢の農業高校に通っていましたが、冬は下宿していました。夏は自転車で行くのですが、地元の除雪も良くなかったですから、冬の間、高校生は岩見沢に下宿しました。今はどこの子どもたちも下宿する子なんて一人もいません。上幌向から電車で札幌でさえ通っています。すごく便利になっています。

栗田副会長…新篠津交通というのは民間ですね。

東出村長…JRバスが撤退後、村の事業者を引き継いでいただきました。

栗田副会長…村内事業者に路線バスをやってもらっているのですね。

東出村長…そうです。いい制度があり、田舎の住民の足をしっかり守るということ、道も国も手当てしてくれて赤字が出た分は補填してくれるということになっています。バスと運転

手を確認して、一日10往復しているのですが、採算は取れません。運転手も一人二人では足りないですし、バスもちろん一台では足りないのので三台ぐらい持っているのです。そうすると今の乗車料金では採算は取れないのです。赤字には毎年、道、国で補填してくれる制度がありまして、すごく助かっています。

朝は高校生の人たちは、新篠津村始発で立つときもあるぐらいいっぱい乗ります。朝は3分おきに3便ぐらい続けて出るので、運びきれますが、日中は乗らないのです。この時間なら何人も乗ってなかったでしょう。

栗田副会長…岩見沢市内で降りた方は10人くらいいましたが、ここまで乗ってきたのは3人でした。

東出村長…そうですね。温泉のほうまで行くのですが、あまり乗らないです。

栗田副会長…ほとんどがお年寄りの女性でした。

東出村長…車に乗らない人達です。

栗田副会長…皆さん足膝が悪そうな感じでした。

（新篠津村の乗り合いタクシー）

東出村長…病院へ通うのにこのバスがなかったら大変なのです。それから新篠津村の中では乗

り合いタクシーといって、300円払うと村内どこでも行けるようなシステムのバスを今動かしていますが、それは村の外へは出ないことにしているバスです。村内は温泉に行きたい、農協、ホクレンショップに買い物行きたい、役場に用足しに行きたいという人は、お年寄り、は片道300円出せば何回でも行けます。それは乗り合いタクシーでタクシー会社に委託しています。

阿部理事…電話で連絡して利用するのですか。

東出村長…極力前の日ぐらいいに電話で申し込んでくれればとなっているのですが、お年寄りだから朝になってから急にくるので、運転手が携帯電話を使いながら集めて歩いたりしています。

阿部理事…何時何分ぐらいいに来てくださいということですか。

東出村長…そういうことです。これは重宝がられて、車運転できなくなった人とか元々運転しないという人が利用します。農家も高齢になっていて、農地は周辺の若い人たちが買ったり借りたりしているのですが、住まいはそのままという人がけっこういます。年はとっていきまますし、足の確保が大変になってきて、車でもまだ自分で乗れるうちはいいですが、それも乗れなくなってきました。

阿部理事…料金でも札幌市内でタクシー乗ると基本料金でもう600円、700円ですので、

それから見たらすごく安いです。

東出村長…そうです。村内で走る人は8 km、10 km乗る人もいます。

栗田副会長…何回も乗るわけですね。

東出村長…そうです。300円は、片道ですが、用事が終わったら帰るので、また300円いらしますが、往復600円で家まで帰れます。中には温泉に10時ごろ来て、昼ごはんを仲間であげて、4時とか5時に送るといいうのもあるようです。

（人口減少について）

栗田副会長…人口減少の話で大騒ぎになっていきますけど、どんなお考えですか。

東出村長…増田さんが発表なされたのですが、何も手を打たなければ、手立てをしなければ、あなってしまうという事はわかります。しかし、今私達もやっているし国も今度は力を入れて、人口減少対策あるいは地方創生もやりますから、増えてはいかないですが、減り方の時間は少し先には延びるとい感じはします。国でいっているように2060年ごろに1億人、増田さんは単純にやれば8、600万人ぐらいということですが、それに少し歯止めをかけて、1億人ぐらい確保できるのではないかと思っています。何をやって削減自治体といっているのか、人口減だけで言っているのか、産業構造も含めて言っているのか私は良

くわかりませんが、北海道にも音威子府なども1,000人を切っている村もありますし、市でも歌志内は4,000人しかいません。それでも市は市として村は村として今もやっているわけです。だから何をもちって消滅と言っているのか、データでは北海道も149自治体がなくなるといふことなのですが、私も意味がよくわからないのです。専門家や学者さんはそう言うのですが、人口は減っても自治体の手法、やり方と言うのがありますので、自立、自活していかなければいけないわけで、それを考えてやるわけです。国が地方交付税を含めて手立てひとつもしないと言われたら、正直言つて成り立たないです。そうでない限り、今レベルの手立てを国がすれば、私は地方の自治体は生き残れると思つています。

栗田副会長…交付税は東京に本社があつて、そこで支払う税金を再配分するのですから、交付税はなくなるはずがないのです。

東出村長…その通りで、東京の会社の支店・支社が全国にあり、売り上げは全部東京に一極集中してそこに課税されるわけですので、北海道、田舎は、税収が上がらないのは当たり前なのです。日本の仕組みがそうなつているので、当然の如く地方に必要な交付税はある程度付加しても交付していいと思つています。

栗田副会長…国税としては絶対そうなのです。

東出村長…そう私達は思つていますが、それでも少しずつ減らされています。

栗田副会長…国自体がご承知の通り借金だらけなので、こればかりは仕方がないのでは、ということはあると思います。

東出村長…しかし、誰か国会答弁かインタビュで答えていましたが、1,000兆円を超える借金を自治体と国で抱えていて、そこへ3兆円や5兆円がどうしたといっても、大した問題ではないだろうと言った人がいたようですが、そういうレベルなのです。しかし、借金が1,000兆円で、それ以上国民はお金を持っているのです。

栗田副会長…貯蓄が1,400兆円くらいです。その分を日本の金融機関が全部引き受けているので、借金はないほうがいいには決まっていますけど、外に出ていない限り問題は少ないです。

栗田副会長…資産としてはトータルの収支はまだプラスです。

東出村長…日本は外国から借金してないから、問題は少ないということです。

栗田副会長…そうです。いづれにせよ、そうやって赤字はあるが貯蓄もあって生産量もまだあるうちは、まだ進められるということですよ。

東出村長…そうだと思います。

栗田副会長…村自体の人口の減り方は厳しいとお感じになっていますか。

東出村長…はい、自然減が主ですが厳しいです。その年によって違いますが、ここ数年見てい

ると40人から50人が亡くなって、生まれてくる子どもは20人台なのです。そうするとそこで25人か30人ぐらい自然的に減少します。5年毎に国勢調査があるので、そうすると120人から150人が、それだけで減ります。それにプラスして、雪がここ数年多かったものから、除雪などが大変で、お年寄りを中心に江別や札幌に行く人が出ています。そういった減少と合わせるとけっこうな減り方です。ただ、道内でも減り方は上位ランクではないのです。特に石狩管内は市も含めてそういう傾向なのです。前に新聞に出ていたのですが、減り方の早い町村が出ていて、その中にももちろん入らないですし、新篠津村は144の町村のうち70、80番目ぐらいの真ん中ぐらいなのです。

「農業は好調、農地が売りに出てそれを買い求める人たちが群がる感じ」

栗田副会長…農業のほうは安定していますか。

東出村長…はい、私はどこにでもいって農業のことは、もうすこぶるいいといって自慢して話します。農地を、高齢化や後継者がいなくてどうしても手放さなければいけないときには、それを買い求める人達が群がる感じですが、今もたまたま3件出ているのですが、ある1件は10人が飛びついて、手を挙げています。新篠津村は必然的に遊休地や耕作放棄地はゼロになっています。これは誇れますのでいろんなところでお話しています。

阿部理事…それでは手を挙げている人は比較的若い人なのですか。

東出村長…はい、若い経営者です。

栗田副会長…ここで農家をやっている方が農地を拡張するということですか。

東出村長…そう、拡張、規模拡大です。いわゆる土地利用型というのですが、面積を拡大して、今の若い人たちはGPSもそうですが、ITや機械を駆使して、大型圃場で大規模経営をすることが魅力というか、夢なのです。反面野菜とか施設園芸と言うのがなかなか伸びないのです。米は転作制度があるからいいのですが、今半分ぐらいしか米を作っていません。あと麦、大豆です。芋は新篠津村ではないです。

阿部理事…江別のほうですか。

東出村長…江別はあります。江別は野菜のプロッコーリだとかいろいろ。新篠津村もあります。が、産業と言えるような数字にはならないのです。それからトラクターやコンバインにまたがって作業ができるのが今の若い人たちの傾向です。

栗田副会長…野菜はそうはいかないですね。

東出村長…野菜はうつむいて、収穫をこまごまやらないといけません。そういうのは今の若い人、男の人は特に好まないようです。都市近郊の農業、恵庭、江別もそうなのですが、あの周辺は町の消費者に朝取り朝もぎを届けるといふことで、野菜や花などが盛んになるので

す。新篠津村もないわけではないのですが、ほとんど農家の母さん方の小遣い稼ぎくらいの野菜です。それともうひとつは、農業委員会で調べてもらってもいいのですが、60歳を越える経営者は新篠津村に260戸農家あるのですが、そのうち10%前後、60歳を越えて後継者がいない農家が、毎年大体25戸から30戸の間で推移しているのです。道内で後継者がいないというのが10%前後という自治体はそうないと思います。

阿部理事…低いほうのですか。

東出村長…はい。半分も後継者がいないところもたくさんあります。だからそういった意味では10%前後というのは、誇っていいと思ってお話しています。先ほどお話した遊休地と耕作放棄地がないことと後継者のいない農家が10%程度ということは、他の地域に比べたら格段に良いです。まさに基幹産業は農業しかないのですが、私は水田地帯の農業として誇れると思ってお話しています。村も支援、応援もある程度惜しまないです。去年もGPSでトラクターあるいはコンバインを動かすためにアンテナを立てて欲しいと来たので、すぐ了解しました。この村は平地なので2本ぐらい立てれば全部間に合うので、2本のアンテナを立てました。

あとは国の政策で農地水環境保全、向上対策などがあるのですが、その村負担もすべてやっています。その対象は村の農地全面積です。その新篠津村の持ち出しは7,000万円

ぐらいで、事業費の4分の1に当たります。そして道が4分の1、国が2分の1で、事業費2億8,000万円が新篠津村に何らかの形で投資されます。その事業は地域の環境保全を進めるもので、農家の人たちが中心になって排水路の草刈、泥さらいなど、いわゆる環境にやさしい環境保全のための活動なのです。それに皆さんが本業の農業をやりながら定期的に作業をする事業です。そうすると国から補助金が出るという制度です。排水路などの維持管理を定期的に年に何回か作業するという事業で作業に対する対価として支払われます。

栗田副会長…作業の労賃になるわけですね。

東出村長…そういう制度です。それを新篠津村は全面積で、10a当たりいくらかという計算で補助が出ます。どこの地区でもやっていますが、全面積やっているとこは少ないと思います。保全会という会を作って、新篠津村はこの中央自治区は別として農村部は五つの地区に分かれて自治区になっているので、区ごとに取りまとめて区長さんが代表になってやっています。事務は農協がやっています。

阿部理事…作業するのは農家の人たちですか。

東出村長…農家の人たちも地域の人たちもやります。

阿部理事…収入になるわけですね。

栗田副会長…では区全体で使えるものになるのですね。

東出村長…そうです。個人には行くのですが。  
阿部理事…日当のような形で行くわけですか。

東出村長…そうです。そういう制度が国の制度であります。

〔農業への国の制度はこれからも必要です〕

栗田副会長…農業生産額はどのぐらいなのですか。

東出村長…新篠津村は年間60億円から70億円です。そのうち農業生産物の販売収入は60%ぐらいです。豊凶がありますから、いい年は70億円ぐらいでそのうちの6割、42億円が生産物の販売収入です。あとは国からの休耕処理金や転作奨励金あるいは各種交付金、補助金などが37・8%です。その年によつて数字は動きますが大体はこのような金額です。国の制度が仮にゼロになったら、経営は成り立ちません。

東出村長…そんなことにはならないと思いますが、仮の話です。農産物の販売収入だけで農家を続けるとしたら、何年間は続けられるけれど、将来を考えた機械の更新もできないので大変なことになります。国は農業保護だと言われていますが、主食である米を中心に、日本国民の食糧生産をしているので、国も保護するため補助、交付をしているのですが、これをなくしたら農家は成り立たないという現状です。だから今のTPPの問題も絡みますが、国

は工業生産、例えば自動車を中心に輸出して外貨を稼いで、農業に補助金として分配するという構造は、過去もそうだったですがこれからも基本的にはそういうことでやってもらわないといけないと思います。

TPPも私達は絶対阻止でやってきました。この間からいろいろやっていますが、ある程度受け入れてその代わり事後の補填、政策を打つというところを見出さないといけないと思います。国の政策で国同士12カ国が議論しているのですから、それを完全に否定するかのよ  
うに、農家の重要5品目は絶対譲らないなどと言ったところで、これは国と国の交渉なので、ある程度は折れるところは折れて名より実取るということもひとつの方策です。農業者、農村の私達のような首長は国に、こうなったのなら農家の人たちの補填のために、こういうことをしつかりやってもらわないと困ると要求して、それに対して国が答えてもらうという仕組みにしないといけないと思います。

阿部理事…しかし、そういう話は今の段階では出せません。

東出村長…そうです。ハワイで交渉をやっている最中の7月末も東京に行きましたが、そんなことおくびにも出せません。まだ向こうも決めてないし、これは決まっただからだと私達も話していたのです。

栗田副会長…小麦は9割が輸入です。北海道がその中心なのでどうしても痛手が大きいです。

北海道の麦の生産を見ると、品質自体がだいぶよくなりましたね。

東出村長…そうです。春麦を中心にパン麦が多くなりました。

栗田副会長…強力粉が採れるようになったので、びっくりしました。

東出村長…昔は、中力粉がせいぜいで、まだ今も多いのです。だからパンを作れる小麦ができるというのはすごいことです。カナダ、北米はみんな強力粉ですから、それを作る技術はすごい進歩だと思います。前は麴がせいぜいでした。

栗田副会長…強力粉ができると自分たちの製品になるのではないですか。他から持ってきた小麦が中心ではなくて出来るわけです。

東出村長…地場であるし国産であるから、価格もある程度で買ってもらえるし、今6次産業化といわれているけれど、まさに付加価値高めて高く売れるからいいと思います。

栗田副会長…そう考えれば、北海道の肉も米も心配ないと思っています。

東出村長…米もそうなのです。アメリカから入ってくるのは中粒米、タイから来るのは長粒米が来るので、中粒米は日本人好みです。ただアメリカとこのT P Pの場合に限り、12%はオーストラリアからも入れなければいけない。それも約束事で、連動しています。そうすると、7万トンが7万8、400トンにすぐなります。

「商工業、建設業について、除雪は農家の人の重要な収入」

栗田副会長…商工会、商工業の経営は良くないですか。

東出村長…一言で言って衰退の一途です。会員も減るし売上も伸びません。建設業に限れば売上はそうでもないです。件数は少ないのですが、売上は決して落ちていないし、逆に伸ばしている業者もいます。しかし、サービスなど他の商工業は大した売りもなく、もう閉めるところもあります。これは新篠津村に限ったことではないのかもしれない。

栗田副会長…岩見沢のターミナルから上幌向へ行く経路に大型店があります。

東出村長…いわゆるビックハウスなどが、あの辺一体にあります。ホームマック、ツルハなどで、ああいうところにみんな行きます。ホクレンも二応商工会に入っていますが、ホクレンシヨツプが頑張っているくらいです。あとはコンビニが2軒、セイコーマートとセブンイレブンがあり、特にセブンイレブンはものすごく頑張っています。あとの商工業は、食堂もよくありません。

東出村長…正直言って個人商店もよくありません。建設業は農業土木もけっこう仕事が出てきているので、それに強い業者が多いので、空知のほうまで手広げてやっている業者もあります。暗渠などの農業土木でも特殊な技術を持っている業者がいたので、引き合いが空知からあります。そういうところは売上伸ばしています。

栗田副会長…そうですね。いいですね。その間に人を雇っていただけるとすごくいいと思います。今までずっと人を雇ってなかったですので、そう村長さんからも建設会社に話してください。

東出村長…まさにその通りです。冬除雪も請け負っている業者なので、夏冬で勤めている人もいます。特に新篠津村の農家の人は冬除雪に出る人が100人単位でいます。高速道路に働かに行きます。美唄の拠点に行く人と、札幌の高速に行く人といいます。そして地元で除雪をやる人とあわせると若い人たち中心に100人単位が除雪で働いています。

栗田副会長…それはいいことです。

東出村長…すごい収入があります。12月から行って3月まで、100万円以上稼いできます。月30万円以上になると聞いています。

阿部理事…夜勤もありますね。

東出村長…もちろん夜勤も含めてで、30万円ぐらいの現金収入になって、4ヶ月働きますので、100万円ぐらいです。

栗田副会長…100人で1億円になります。すごい収入です。あと税金を払ってもらえばいいです。

東出村長…それも払ってくれています。ただ、1億円はすごいですが、新篠津村の税収は

微微たるものです。2億7、000万円〜3億3、000万円ぐらいです。そのうち半分1億2、000万円〜3、000万円ぐらいは固定資産税です。残りは、事業税、法人税などです。個人の税金は多くありません。農家の人たちが、ちよつと豊作になった時に2、000万円〜3、000万円税が増えるぐらいのことです。私が議会の頃から20年ぐらい見ていますが、農村の規模として、税収はそんな状況です。後はタバコ税2、000万円〜6、700万円、入湯税が700万円〜800万円、ゴルフ場利用税が600万円ぐらいです。

東出村長…温泉も税収入です。税は、大きな企業でもたくさんあるようなところであれば税収も大きいでしょうが、ここは農業が主ですので先ほどお話ししたような程度です。

栗田副会長…まあそれはしょうがないですね。

東出村長…江別の三好市長とよくお話しますが、市長になって税収が少ないのにびっくりしたそうです。学校などにはありますが、大きな企業がないので12万人の都市の規模にしては税収が少ないと言っていました。地方交付税などは12万人もいるので、多いですが、純粹税収は石狩市や北広島市に負けているそうです。

栗田副会長…今は石狩市がすぐく延びています。

東出村長…高校、大学はたくさんあるけど、ゴミは出るし、そんな税収にならないので、持ち出しのほうが多いと思います。

（建設業の後継者がいない）

栗田副会長…建設業に関しては先ほどもいろいろお話いただきましたが、ご不満はなく、一所懸命やってもらっているという感じですか。

東出村長…はい、そうです。ただ経営者の後継者がいないのです。誰かプロパーの中から代表にするのか分かりませんが、今はもう私達の世代か、もうちよっと年がいった方が代表になってやっているのです。

栗田副会長…それまづいですね。

東出村長…仕事は、それなりにやっていますし、以前はせいぜい5、6億円ぐらいしかやっていなかったのですが、ここ10年ぐらいで17、8億円か20億円に届くぐらい今年もやるでしょう。そして何でもやってくれるのです。農業土木もちろんそうなのですけど何でもやるのです。

栗田副会長…地域の注文であれば、受けてもらわないといけませんね。

東出村長…田んぼの土管が詰まったから、入れ替えしてくれとか、農道に砂利を敷いてくれなど、もう何でも細々と「はい、はい」とやっています。

栗田副会長…それではすごく喜ばれますね。

阿部理事…地元密着ですね。

東出村長…役場に来て入札しに来るばかりでなく、そういうものもやるので重宝がられています。

阿部理事…まさに建設業をなくするわけにはいかないという現実ですね。

東出村長…建設協会と災害協定も結んでいます。

栗田副会長…この辺ですと水害ですね。

東出村長…今一番心配なのは水害です。

「再び商業について、流行っている蕎麦屋さんがある」

東出村長…商工会総体で言ったたら、どこの小さな自治体、市町村もそうなのでしようが、周辺の大型郊外型の店舗に押されていて、よほどユニークな発想でやれば別ですが、ただ物仕入れて売っているようなところはダメです。

栗田副会長…品揃えと価格で負けます。

東出村長…そこに蕎麦屋さんがあるのですが、役場を50歳で退職してから一念発起して2年間修行して、蕎麦屋をやっているのですが、蕎麦屋はもともとたくさん儲ける訳ではないけれど、新篠津以外のリピーターがいて、私達が時折行っても知らない顔ばかりなのです。

栗田副会長…名前が売れているのですね。

東出村長…そうですね。そうやって地道に、蕎麦屋で、億万長者にはならないですが、しっかりと奥さんと少し人を使っていて、昼もたくさん入っています。

栗田副会長…商工関係であれば、そういうような生き方をうまく導いてあげないといけないと思います。

東出村長…そうすれば、地元の人が行かなくても外からのお客さんを捕まえて、口コミやインターネットにも出ているし、けっこういい商売になっています。

栗田副会長…食べ物系だとそういうことが可能ですね。

東出村長…しかし、売り上げはそんなには多くなくて、経費を考えると大変です。

阿部理事…特にそば粉が高いと言っています。だからやっていけないと聞きます。

栗田副会長…そうなのですか。それは厳しい。

東出村長…普通に生活するくらいはあるのかもしれないですが。

### 〈商工会の事業と農商工連携〉

栗田副会長…商工会と村で一緒に支援している事業はありますか。

東出村長…商工会の支援はすごくしています。指導員が一人いますが、連合会から人件費はきます。事務局長の他、女性も2人いるのですけど、それは全部新篠津村で出しています。商

工会の年間の事業予算が3千数百万円で、半分を村が出しています。それから商工連合会から1,000万円ぐらいあつて、自前では何百万円くらいです。会費2万円ぐらいしかとつてないです。

栗田副会長…会費はそのくらいでしょう。

東出村長…事務所も村の建物に入っています。

栗田副会長…一緒にやる事業は、例えばお祭りなどはどうですか。

東出村長…たまたま商工会長は観光協会の会長でもあるので、商工祭りもこの前終わったのですけど、それも一体となつてやっています。今年是新篠津村が開村120周年なので、開基はそれに13年足して133年になるのですが、観光協会と商工会が一緒になっていろいろな事業をやっています。毎年青空祭りもやります。商工会の奥さん方中心に店を出して、焼き鳥、そば、うどん、などを販売して、その前日は花火大会をやります。今年は120周年で、しのつ湖、「たつぷの湯」の温泉でやるのです。それらも観光協会が主催者になっていますが、商工会と村とで一緒になつて、店も出して、準備から手伝いなど全部一体となつてやっています。お金も出していますが、商工会と村が一体となつてやらなかつたら、こんな小さなところは、単体でやろうといつてもできません。村も職員が焼き鳥やそばを売つたりもできないですし、そこはお手伝いしています。それはやはり一体となつて連携してやらないとダメ

です。

栗田副会長…農協とは一緒にやらないのですか。

東出村長…農協ともやっています。それはアグリフェスタというのですが、自治センターという建物が新篠津村の村で一番大きな建物、集会施設があるのですが、そこが青空祭りのメイソン会場です。そこにグリーン広場があるのですが、そこで農協がいわゆる野菜市と、ジンギスカンをやるのです。そういうのはコラボしてやります。それと農商工連携協議会を作っています。私が会長で、農協と商工会と行政と三者で構成していて、その協議会で運営しているのが「たつぷの湯」のところにある産直市場です。あと商品開発などは農商工連携協議会で行っています。4、5年前に立ち上げて、産直市場を運営するのが一番の目的でした。

栗田副会長…それは毎日ですか。土日だけですか。

東出村長…毎日です。5月1日から11月の文化の日ぐらいまでの間です。そこに農家の母さん方が野菜を陳列したり、白菜でキムチ炎の華という商品を作っている業者も売ったり、長沼に次いでどぶろく特区2号を取っているのです。製造したどぶろくを販売したりしています。農商工連携協議会は産直市場を主にして、商品開発で、例えば、米サイダーを作っています。米を使ったサイダーで、産直で売っています。しかし、国でいう6次産業といっても、簡単にはいきません。6次産業化と言われる前から新篠津村も商品開発やっていますが、爆発

的には売れません。「大法螺」と「氣まぐれ」というお酒も2つ作っています。これは旭川の高砂酒造に作ってもらっています。

阿部理事…米を持って行つてですか。

東出村長…そうです。千歳空港で「大法螺」を販売してもらうことになって、もう3年ぐらいになるのですが、ものすごい売れ行きです。村内の全部合わせてもぜんぜんかなわないくらい、すごい売れ行きです。別に新篠津村は儲かりません。高砂酒造が儲かるだけなのですが、酒を専門に売っている店が空港の2階にあるのです。

栗田副会長…この酒米は何ですか。

東出村長…きさら397です。一昔前の米で、それを主原料にして作ってもらっています。村内販売もあります。

篠津運河は、新篠津村の生命線

阿部理事…ここに運河がありましたね。あれが整備されたことの影響はどのくらいあるのですか。

東出村長…あの運河は、大きい影響どころではなく、あれがなかったら今新篠津村の水田がないと言つてもいいぐらいです。ここは、元々ものすごく濃い泥炭地で、水位が高く、篠津運

河というのですが、開削してそこに水を全部流して、泥炭地を乾燥させて畑作と水田を整備しました。これは世界銀行の融資を受けて農地整備公団が実施した事業なのですが、あれがなかったらこの美田はないです。昭和29年ぐらいです。

東出村長…ドブに捨てた800億円とか一時押捻されました。しかし、そうではなく新篠津村にとつてあれがなかったら今の田畑もないし、この村自体もあるかどうか分かりません。畑作では生きていけなかったですから、運河で水田に生まれ変わって、生き延びて、これだけの村になりました。完全に国主導で実施したすごい事業でした。

阿部理事…今も適切に働くように管理しているのですね。

東出村長…管理はしています。今は用排水どちらも利用しています。運河がなかったらどれだけの面積に水が流れてくるか言いようがないぐらい水が寄ってきます。

阿部理事…まさにストック効果が非常に働いているということですね。

東出村長…そうです。ストック効果を、今まであまり言わなかったですが、これから国交省や農水省に行つて、私達も言うようにしています。実際に効果があるのですから予算要望をするときにこういう効果があったことも言いながら、次の事業を要望することにしないとイケないと思います。

栗田副会長…そうですね。しかし、公務員も事業のB・Cを計算するようになってから、だ

いぶストック効果を意識するようになりました。

東出村長…その通りなのです。事業の効果は上がっています。そのことは率直に私達も言っています。

栗田副会長…今日は、貴重なお話をありがとうございます。

平成27年8月19日木曜日 13:00～14:00 於…奈井江町長室

北 良治 奈井江町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

砂子 邦弘 一般社団法人空知建設業協会副会長（現会長）

栗田副会長…基本的には地域における課題をお聞きすれば建設業がどうすればよいか自然とわかりますので、地域の課題を中心にお話いただければと思います。

〔農業、製造業、建設業の3つが奈井江町の巨大産業〕

北町長…私の町は農業を基本として発展してきた町ですが、同時に工業の町としても発展を遂げ、工業出荷額は239億9,000万円で、空知管内では岩見沢市、砂川市に次いで当町が3番目となっています。金属の切削工具を自動車産業向けに主に外国に輸出している北海道住電精密株式会社が当町にありまして、その企業が活躍していただいて、農業と合わせて町の柱となっています。

かつては石炭産業があり、そのつながりで北海道住電精密株式会社に進出していただきまして、まさに奈井江町の産業経済をしつかり支えていただいています。同時に建設業も大きな支えになっているということは言うまでもありません。ですから農業、製造業、建設業の3つがこの町の巨大産業と言ってもいいと思います。

農業予算は約30億円で、基幹産業として育てるといふより、皆で頑張っています。

10年前の当町は7、000人弱の人口となっていましたでしたが、現在は5、800人弱とかなり減少しています。要因としては、少子高齢化と人口減少が同時に進行しており、その影響で農業人口も減少傾向にあります。

奈井江町の農業は米作りが主体ですが、非常に味のいい米を作っていますので、これも政策に相当入れています。一般財源で約1億円用意しまして、様々な分野、環境も含めた環境保全型農業支払交付金や、多面的機能支払交付金、中山間等直接支払交付金、道営水利施設設備事業、種籾を温める消毒施設整備助成など、生産に関わる農業助成を出しているところがございます。特に産地ブランド確立支援事業では490万円を、町単独事業で助成しています、ケイ酸資材、いもち病予防などに力を入れております。平成23年では319万4、000円だったのが、だんだん増えてまいりまして、平成26年度の予算では470万円、そして今年予算は、490万円を町単独で出しております。その期待に応え

て3年間連続で味のいい米が取れました。

「ゆめぴりか」という品種のブランド米確立のため、農家も期待に込めていただき頑張っているというのが実態でございます。

〔奈井江町「ゆめぴりか」は北海道一美味しい米〕

北町長…農地は大規模化して一軒当たりの反数がかなり増えてまいりまして、20町歩を越えるくらいになっています。そうなりますと小さな農家が辞めていくことが起こっています。決して小さな農家を潰すということではなく、大きな農家が育っていくことに対して、協力をしていくということ、離農した農家の農地の評価をして、農業委員会が入って斡旋していただいています。農家戸数もずいぶん減りましたが、力を持つてきたということは事実だと思います。

栗田副会長…今、農家戸数は何戸ぐらいですか。

北町長…統計で言いますと180戸と言っていますが、実際に耕作しているのは140戸ぐらいです。あとは農地を貸しているのです。

栗田副会長…大規模化しているということは、後継者がいてだんだん若い人が増えているわけですね。

北町長…比較的、奈井江町は1回都市に勤めた人が戻ってきました。そういう意味では大変力強く感じています。

栗田副会長…小さな農家が辞めていったときに大きな農家が農地を買い求める形になっているわけですね。

北町長…お年寄りになると後継者がいない人が結構いまして、その分を若い後継者のいる農家  
が買い求めていって、強力な農業を構成しています。「ゆめぴりか」をはじめとしまして、  
大変味のいい米で、三年前まで全道で3年連続チャンピオンを取ったぐらいです。

栗田副会長…「ゆめぴりか」で全道チャンピオンになったら、間違いなく全国で美味しい米の  
5本の指に入りますね。

北町長…そう思います。去年は実質的には2番か3番ぐらいですが、反別収量の少ない市町村  
がありますので、それをカウントするとナンバーワンをずっと続けているといってもいいぐ  
らいです。

栗田副会長…量はあまり作らないけど美味しいのを作っているというところもありますね。

北町長…そうです。非常に質が良く、美味しい米作っていることは、まさに農家の皆さん方の  
努力と普及員と農協、町行政も含め、バックアップがあるからこそだと思います。

栗田副会長…農業への支援金をたくさん助成しておられますが、農家の人たちが農作業以外の

周辺の、例えば排水溝の管理などに支援するお金ですね。

北町長…そうです。農地だとか農業用水の保全などや、もうひとつは農業者全部に化学肥料を低減する減農薬農業を支援しています。中山間地域と直接支払金については、全国で実施していることです。道営水利施設設備事業は、北海道の事業で、要するに短期的に水が流れていくところで排水する施設の整備事業です。

栗田副会長…排水機能を強化しているのですね。

北町長…そうです。

栗田副会長…国営はほとんど終わっているのですか。

北町長…全部道営事業です。土地改良事業では現在、宮村地区と厳島地区に取り組み、今後とも継続していきます。

栗田副会長…排水対策ですか、それとも農地再編事業ですか。

北町長…農地再編事業です。

栗田副会長…あとその2箇所を整備すると全部の水田が大区画になるわけですね。

北町長…はい、そうです。先ほど言いましたように昨年と今年の予算が遅れています。今までも必要額の70%、80%ぐらいでしたが、補正で追加しているのです。

栗田副会長…そうですね。当初は予算が少なく補正で追加していたのですが、今年は補正はど

うなるでしょうか。

北町長…農業は大規模で、しかもさらに美味しく質のいい米がとれていて、若手が入ってきています。

栗田副会長…若手が入ってきているというのはすごくいいことです。中心は米ですか。野菜とか小麦は作っていないのですか。

北町長…米が中心です。転作はありません。

栗田副会長…転作は必ずやらなければいけないことです。

北町長…そうです。

栗田副会長…「ゆめぴりか」を作れるようになっていいことだと思います。昨年まで1年間広島に住んでいまして、広島のおオンで「ゆめぴりか」を売っているのです。そして「ゆめぴりか」は買わないだろうと思って見ていたら、みんな買っていくのです。「ゆめぴりか」をめぐって買いに来て感じる感じでした。ここまで名前が売れるようになったのだなと思います。確かに美味しいです。

〔奈井江町の企業とともに進める人口減少対策〕

北町長…悩みと言えば人口減少傾向があるということです。それに真正面に取り組んでいます。

今、結果が少しずつ出てきているのです。奈井江町の人口は6,000人を割り、5,764人です。一方で北海道住電精密株式会社、北海道電機株式会社などは700人を越える従業員を抱えています、現在その7割が町外からの通勤という状況です。滝川、岩見沢、新十津川、砂川などに住んでいます。

しかし、若い人たちの定住の可能性は非常に高く、可能性は秘められています。他の市町から奪うということではなく、奈井江町で働く人は地元に住んで通勤していただきたいという思いで、昨年から立地企業3社の若い従業員とプロジェクト会議を立ち上げまして、定住をテーマに意見交換をしました。

その結果、制度設計をして、町有地に1軒家を建設した場合は、去年までの最大の助成額が160万円に対して320万円を出すことにしました。中古住宅を購入した場合は60万円から最大200万円に引き上げました。このように助成額を2倍、3倍に強化するなど、今まで取り組んできた住宅建設助成の大幅な見直しを行い、大胆な定住促進を図っています。

また、30歳を越えて社員寮を出なければならなくなった場合に、町内外の家賃がそれほど変わらないので、生活に便利な大きな町のアパートに転出するパターンが非常に多く、先ほどお話しした意見交換では「3〜4万円の家賃であれば奈井江町に住みたい」という声もあったため、会社の住宅手当と合わせて希望の家賃負担額に近づくように、家賃助成制度を

創設しました。

このほか、今までは様々な施策を検討するに当たって、当然町民が有利になるような制度設計をしてきましたが、今回はすでに町外に住んでる人も町内に移動しようと考ええるように、町外の方が50万円高くなるよう助成額を設定したことや、35歳以下の若年世帯もしくは18歳以下の子どものいる世帯には、さらに50万円上乘せすることなどを行っています。これらの施策については町からの直接的な宣伝はもちろんですが、プロジェクト会議の企業に勤めているメンバー、毎年産業まつりにも足を運んでいただいている札幌奈井江会の会員約200人全員にチラシを配布いたしましたして、奈井江町の宣伝マンを担っていただくように、町内外でPRに努めているところです。

こういった取組みの結果、途中経過ですが、今年度の制度の利用状況は新築住宅の建築助成は2件、町有地を購入し建設中が1件、中古住宅の購入助成が2件、家賃助成は12件応募がありました。旧教職員住宅の販売では、3戸の募集に対して20世帯から問い合わせがありました。当選者の中には札幌在住で他市での定住を考えていた人もいました。また、リフォーム助成25件の募集に対して55件の申し込みなど、着実に実績を残しています。

春には新聞で大きく取り上げていただきまして、それもひとつの効果があり、8月に入っても、電話や役場でいろいろな相談が増えております。大きな追い風を感じているところで

す。私のところにも直接電話が来たこともあり、大変反響を呼んでおります。全体では、町分譲地が1件、町外者に売れました。新築建設助成は、町内者で子育て世帯が2件、うち立地企業従業員が1件です。中古住宅購入助成は、町内者2件で、うち立地企業従業員が1件ございます。それから家賃助成は町内者で12件ございますが、うち子育て世帯が7件、若年世帯が5件です。旧教職員住宅は、3戸の販売に対して申込者が8件あり、うち町内者が4件、町外者が4件でした。若年世帯と子育て世帯に優先して販売していきまして、町外者が1件、町内者が2件となっております。

栗田副会長…すごいですね。

北町長…あちらこちらから問い合わせが来まして、まだ新聞発表してないのですが、9月頃までとめて話をしようと思っています。

栗田副会長…そうですね。ニュースにもなりやすいですし、議会開会の直前がたぶん一番いいでしょう。しかし、700人の従業員がいて7割が町外ですから、そういう人たち向けに、もっと職場が近くなりますという政策ですね。

北町長…それで企業も協力してくれるのです。北海道住電精密株式会社の社長が陣頭指揮を執っていたとき、勤務時間中に1時間取っていただいて、職員の説明や私の話を聞いていただいてるので、グリーンと動き出しているのです。

栗田副会長…人口減少対策で何か手を打たなければいけないので、立地企業の従業員をお誘いするのは非常にいいアイデアです。立地企業で700名の従業員と言われていましたが、その人たちの採用は奈井江町も含めて近隣市町なのですか。

北町長…近隣が多いです。大学出の人たちは札幌からも何人か通っています。

栗田副会長…大学で札幌に住んでいた方たちですね。企業も近隣から採用するのですか。

北町長…この間社長さんとお話ししましたが、けっこう希望者が多いそうです。

栗田副会長…そうですね。人気がある企業だと思います。

〔奈井江商業高校で人材の育成、そして企業への就職〕

北町長…その会社が震度7以上でも耐える建物を建てています。

砂子副会長…緊急時の避難所です。

栗田副会長…砂子組が耐震の建物を請け負っているのですか。

砂子副会長…あまり大きくないのですが、それでもこの地区内では極めて珍しい建物です。

北町長…最初は工場を建てると思って聞きましたが、違うと言われました。工場は20億円かけて一昨年に拡大しました。そして去年から今年にかけて会議施設を作っています。

砂子副会長…今年は今までの避難所よりも少し大きいサイズの会議施設を建てています。

北町長…年々拡大してくれていきますし、従業員もけっこう採用しています。私達もそれに応えなければいけないと思い、奈井江商業高校の入学者を増やす施策を考えました。奈井江商業高校は過渡期に来ていました。情報処理科があるのですが、1クラスになったのです。去年は9人しか希望者がいなかったのです。それだけ少子化が進んでいるのです。そして、去年の暮れに、奈井江商業高校の入学支援金として、町外から入学する方には10万円、そのほか通学料は無料にすることを決めました。そして、町内の入学者には入学支援金20万円としました。そうしますと、たくさん入学希望者が集まり、定員40名のところ53名の希望者でした。栗田副会長…しかし役場の予算は大丈夫ですか。

北町長…それは大丈夫です。事業の検証や財源の確保をはじめ、職員にも協力いただき、私達の給料を減額する取り組みをしながら予算をつくっています。それを北海道住電精密株式会社と北海道電力株式会社が見ています。人材育成に本格的に取り組んでいると思ってくれました。そして北海道住電精密株式会社の社長は、この間奈井江工場を拡大しないといけないと言ってくれました。奈井江商業高校も残り、そして人も育ててくれるし、奈井江商業校からもたくさん採用したいと言ってくれました。

栗田副会長…学校への助成と住宅助成はいいですね。

（子どもへの助成）

北町長…これが地域づくりの決め手だと思います。奈井江町は、確かに住みやすさがあります。

医療費は、高校生まで無料で、それと合わせて認定子ども園もありません。

栗田副会長…幼稚園と保育園が一緒になった施設ですね。

北町長…そうです。3人子どもがいれば、認定子ども園に3人入所してなくてもよく、大人になってもいいのですが、ひとつの家庭で3人目以降の子は無料にすることになっています。奈井江に移ってきた若い子育て中のお母さんたちは、まず医療費は高校生まで無料ということは確かですかと、聞くのだそうです。

そのほか、こども園が3人目無料で、5歳児は半額にしています。あと4歳児から0歳児まで、国の基準額より1割安くしています。5歳児は、皆が集団に入って就学に向けられるよう、地元小学校との連携も行えるよう半額に、0歳児から4歳児も5歳児との不公平感がないよう保育料の減額をしています。

栗田副会長…そうですね。これは一番影響が大きいです。認定子ども園は何箇所あるので  
すか。

北町長…1箇所です、今100人入っています。

栗田副会長…すごいですね。

北町長…120名が定員ですが、保育士のなり手不足もあります。部屋の面積や年齢によって保育士の数も決まるので、今後入所希望者が増えるのであれば、定員を増やす等の検討を  
していかねばならないと思っています。

栗田副会長…保育士を募集しても簡単に見つかるわけではないですね。

北町長…今はどこも保育士が足りない状況で、新卒者は都会で働きたいですし、潜在的な保育士はいるとは思いますが、見つけるのは非常に難しいです。

栗田副会長…保育士の方たちも町内の人が多いのですか。

北町長…町内の人がほとんどですが、美唄・砂川から通われている方も数名います。

〔農商連携で駅前の交流プラザ「みなクル」とスーパーの立地〕

栗田副会長…商業や商工会はどうですか。

北町長…商業や商工会に関しては、スーパーなどは、滝川や美唄に大きなのがありますから、どうしても店屋さんが少なくなつて吸収されてしまいます。したがって何軒も残っていないです。ただ、奈井江から砂川まで15分で行きます。商店は少なくなつてきて、農協も一時撤退するような話が出ました。

栗田副会長…Aコープですか。

北町長…そうです。お年寄りは買い物には歩いて行きますし、車でも近くがいいというお年寄りは結構います。私達は、お年寄りに大変な不便をかけることになるので、それは困るとなりました。そこで、Aコープの建設に対して町もいろいろな形で、支援をしています。駅前、交流プラザ「みなクル」を建てる際には、元々農協の土地であり、古い倉庫なども建っていたのですが、建物の取り壊しを含め土地を購入しました。というのは、将来的にその施設とAコープを結ぶように考えておりましたので、そういう形でぜひAコープを残して欲しいと要望しました。そして是非Aコープを建てていただきたいと町民の声として要望し、それに応えていただいて、今年11月の末にオープンできると聞いています。

栗田副会長…地元スーパーですか。

北町長…はい。

栗田副会長…商工会がバックアップしたのですか。

北町長…商工会も中に入って農商が一体になってやろうということで、国から1億5、000万円くらいの補助もいただいています。

そして、これは農商で一体になっている珍しいやり方だと言われました。農工というよりも農商です。商工会もその施設の中に入ってくれます。そしてお年よりも含めて買い物難民がでないように、奈井江町から離れないように、という政策をやっています。

栗田副会長…町議会議員さんの定員は10人ですか。

北町長…いや、9人です。

栗田副会長…皆さん協力的でしょうね。

〔住友電工が「ゆめぴりか」3,000俵を購入〕

北町長…はい、協力的です。地元をよくするために行っていますので、それらには議員さんの協力は必要です。予算も全会一致です。そこが大事なところです。

栗田副会長…奈井江町の建設業は何社くらいありますか。これは、砂子委員にお聞きしましょう。

砂子副会長…40社弱です。その中に塗装などの専門的な業種も入っています。

栗田副会長…多いですね。北海道住電精密の仕事があるのでしよう。

北町長…北海道住電精密があることは、大きいことです北海道住電精密が大きな建物を建てていただいていますし、地元業界を大事にしてくれています。

米に関する話では、私のところに住友電工の本社の社長から電話が来まして、何かなと思っ  
たら、住友電工の大阪本社の工場で委託している食堂から、奈井江の米は美味しいということ  
で、新砂川農協に直接3,000俵の注文の電話でした。私は、新砂川の組合長にすぐ話

しまして、組合長はホクレンとも相談してくれたと思います、出すことになりました。

栗田副会長…3、000俵はすごいすね。

北町長…そんなことまでやっていただいています。

栗田副会長…住友電工が残ってくれてよかったですね。

北町長…そうです。

栗田副会長…一時光ケーブルを作っていましたけれど、それはもう終わったのですか。

北町長…今もやっていますけれど、光ケーブルは北海道電機です。北海道住電精密は切削工具が主たるものです。それは輸出が6割ぐらいです。

栗田副会長…トヨタ自動車向けですか。

北町長…トヨタ自動車が主体ですが、日産自動車にも納めています。

栗田副会長…技術はどの自動車工業でも必要です。先ほどの米3、000俵は美味しければ毎年買ってもらえますね。

北町長…おそらく毎年になると思います。

栗田副会長…値段が折り合えばでしょうが、安定的に出せばいいことです。

北町長…値段も、ほとんど変わらないぐらいと組合長は言っていました。

栗田副会長…向こうで入手するのと変わらないなら、問題はないです。

「駅前交流プラザ「みなクル」は、人の交流が多い」

北町長…駅前の「みなクル」はすごく人の交流が多く、コミュニケーションの場所としては、葬儀も出来る最高の場所になったのです。

栗田副会長…あまりそういう会館がなかったのですか。

北町長…なかったのです。葬儀はお寺でやっていました。しかし、新たに造ったら身近なところでお参りできるということで結構喜ばれております。また、いろいろな買い物は奈井江の店で買ってくれると言っています。

栗田副会長…催事と同じですから、必要なものは周辺で買うという話になりますね。

北町長…そうです。それが地域づくり、町づくりだと思います。

栗田副会長…町の中で地産地消って言っていますが、お金も町の中からできるだけ出ないように回るといふこともある程度考えておかないといけないと思います。

北町長…そうなのです。どう循環するかということも考えることが大事です。私は住友電工本社の社長と懇意にしているのですが、その人が常務時代、部長時代からずっと奈井江の新年会に来ていただいでいて、この米はどこの米かと、食べながら宣伝させてもらっていました。その効果があったのではないかと思います。美味しくしてしかも価格も普通であればいいわけです。

（地方創生計画は町民みんなで作る）

北町長…ある面では農工商連携というのは将来ビジョンです。農業と商業と工業とどのように連携していくかのキーワードはそこだと思います。私は地方創生のビジョンを地域で作ることになっていきますので、総合戦略を作るときは、13名の委員で委員会を作り、そのほか中学生や高校生をはじめ、子育て中の人、企業で働いている人たちにも計画のビジョン作りに加わっていただきます。将来の奈井江について、子どもや若年世代、そして子育て中の女性の方々に、それぞれグループ討議を行ってもらい、奈井江らしい、奈井江だからできるなど、新たな視点・発想から様々なアイデアをいただき、総合戦略の策定に活かしていきたいと思っております。

栗田副会長…砂子委員も奈井江町ふるさと創生有識者会議の委員で入っているのですか。

砂子副会長…はい、これから会議が始まるのです。

北町長…これから立ち上げます。地方創生の今までの取組みでは、国がいろいろな計画を立てて町にこれやらないですかあれやらないですかと言ってきましたが、今回は、町が自主的・主体的な施策を作り上げていくのですから、町民みんながグループ討議して組み立てを行い、その中で国に申し出て行こうと思っています。10月いっぱいで作ると言っていました。私達は年度内で作ることです。今から1ヶ月や2ヶ月で作れるものじゃない

です。みんなの意見を聞いて最終的に議会にかけ、議員の皆さん方とも相談しながら3月末までに作り上げて行きたいと思っています。

栗田副会長…今年の春に話が出てきたのにもかかわらず、確かに以前は10月までと言っていました。

北町長…そうです。具体案が示されてきたのはその後で、つい先日です。それで年度内でいいと了解を取りましたので、その時間を十分に活用して住民の皆さん、各界各層の人たちの意見を聞きながら積み上げて行きたいと思っています。

〔建設業はこれからもさらに重要な位置付けになっていく〕

北町長…建設業は地域を支える主たるものです。例えば災害対策、昨今、局地的な豪雨、大雨、あるいはどんな災害があるかわからないという天候異変の時代に入ってきました。そういうことも含めて普段から建設業の人たちが健全に育ってもらわないと、安全安心に地域を守っていけないです。そういう意味では貴重な存在だと思っています。

栗田副会長…ありがとうございます。これからも末永くよろしく願います。

北町長…こちらこそ、よろしく願います。

平成27年8月20日 木曜日 10:30～11:30 於…豊富町長室

工藤 栄光 豊富町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

中田 伸也 稚内建設協会副会長

栗田副会長…今日は工藤町長さんがいつもお悩みになっている地域の課題を中心に話を伺いたいと思っていますので、よろしくお願いします。

「人口減少と地方創生、国はもっと国を存続するために真剣であるべきである」  
工藤町長…改めて日ごろから大変建設業界の皆様方にはお世話になっております。インタビューの項目を見ながら、大きな市、町の建設業の方々と、町村部、特に小さな町村での建設業の方々との役割というのはまた少し違っているという感じをもっています。稚内の建設業の方々の活躍をイメージしながら、豊富町の建設業はどうあるべきかを、考えさせていただきますました。話の中で建設業に期待することなどでちょっと触れさせていただくと思います。

地域における課題は今人口減少や少子高齢化、それに起因する経済の疲弊、後退という懸念を地域でどういうふうに思い、そして困っているかですが、地方創生会議が発表した増田レポートによって、日本の人口減少問題、また地方の消滅というショッキングな発表があったので、にわかにはショッキングなテーマとして取り上げられてきたということでありました。確かに地方における人口減少の進行による地方消滅は、データからも間違いなく現実起こっていることで、特に小さな町は強く起こっていますが、一方で、冷静に見たとき地方の消滅は、増田レポートのように国の消滅でもあるということ、将来的にはなにもしなければ、4、000万人まで減少するであろうというデータです。

地方の消滅は国の消滅だということですが、もちろん地方も当然今の人口減少の問題を解決するために頑張るべきであります。国の消滅という大きな危機感も本来は国が持つべき危機感であろうと思っております。どうもその国が消滅するという国家そのものの危機感が伝わってこないのです。もつと国を存続するために真剣であるべき、という観点です。地方が頑張らなさい、地方が頑張れば国はその支援をします、という言い方なのです。それは違うだろうと思います。日本創生会議という民間のシンクタンクで発表したレポートでショッキングなテーマとして日本全体が取り上げたのですが、本来国としてのいろいろなデータ分析や政策のあり方を示すべき国の機関が、先に行っているべきで、民間のシンクタンクが発

表したことを国としてどうするべきか、というのは順序が違うのではないかと思います。内閣や国が将来方向をどうするかはもつと先行してデータ分析なりをしていくものであったのではないだろうかと思っています。

以前には、都市と地方との均衡ある発展を国は重点的に進めてきて、いつの間にか、一つの企業が多く、企業を支えていく、そしてひとつの都市が小さな地方を支えていくという一強多弱のような、強いものが勝ち、弱いものが負けるといふ世界を作ってきた国の責任は大きいと思っています。もともと進めてきた都市と地方との均衡ある発展は、基本的に間違っていないかっと思いません。

今この時代になってみると、そうシフトを変えたことが大きな間違いの元になってきたのではないかという感じがして、もつと強者が弱者を支えていく、それから強いものが弱いものを、大都市が地方都市を支えていき、地方都市が地方を支えていくという互助の仕組み作りが、国を存続していく基本ではないかと思っています。

元に戻りますが、人口減少問題もちろん地方にとっては大事なことです、やはり国が地方をどう守っていくことが必要であり、地方を守っていくことが国を守ることにともなるといふ観点にもう一度戻れないものかと思っています。もちろん国の危機感があつて国も無くならぬ、存亡の危機がある、そして地方も一緒に頑張ってくれというのが、国の姿勢のあり方

でないのかと思っています。この考えは、間違っているのかも知れませんが。

栗田副会長…間違っていないと思います。国は東京中心で考えていて、ほうっておいても元気な姿しか目に入らないわけです。でもそれが元気なのは、地方が元気でその力を東京にあげているからということに意識があまりいいところがあります。最近そういう傾向が強いです。

工藤町長…人間と同じように動脈があるし、細い毛細血管もある。それがあって人間の体が成り立っていると同じように、地方の小さな部分も実は国を成り立たせているということからいえば、もっと地方が頑張れる仕組み作りを努力すべきではないのかと思います。地方は頑張れだけではなく、国も同じような危機感を持って半分半分の責任でやるべきで、地方が頑張れ、という言い方は間違っているのかもしれないと思います。

栗田副会長…そうですね。地方創生で当初は秋ぐらいまでに地方計画作るようにと言っていました。今は年度末ぐらいまで作らないといけないという話で、それも降って沸いたような話でした。

工藤町長…そうですね。国の存亡と考えると、黙っておけば8、000万人、さらに黙っているとか、000万人という人口減少を考えると、もっと危機感を持たなければならぬ大きなテーマだと思います。意外と切迫感、危機感や緊張感が伝わってこないのです。国が困っ

ているから国が存続するために地方も頑張つてほしいと頼むというぐらゐの姿勢があつていいのではないかと思います。対等な立場で地方も頑張る、地方が頑張ることによつて国も存続できるということから考えると、もつと虚心坦懐に地方に頼むぐらゐの姿勢があつていいのではないかと思います。

#### 〔地方創生の予算〕

工藤町長…大変な時期であれば、一緒になつて国を存続するために国も頑張るし、地方も頑張つて欲しいという姿勢が大事でないのかと思います。そしてやっていることが、前回の先行型の創生事業の1,700億円は、国が1,400億円、地方が300億円でしたが、今回2,000億円を国が1,000億円、地方は1,000億円を負担してくれとなりました。地方が頑張るために地方も負担しなさいという言い方なのですが、それも違うのではないのかと思います。国が存続の危機にあるとき、大変なら国もこれだけ出すし、町もこれだけ出すのでという言い方ならいいのですが、国と地方が折半するのが当たり前みたいな言い方は、地方の一所懸命やろうとする気持ちを逆なでしているように見えます。

工藤町長…昔からいろいろな地方創生のような事業は地方の頑張る事業ということをやつてきたのですが、結果的にいつの時代も、予算の担保がないままスタートしています。今回、政

府は各省庁が持っている補助金を持ってこようとしたのですが、現実には各省庁の強いガードでできなかったのです。何回もそういう繰り返しだったものですから、実現するかを慎重にみていたと思います。

結果的には財源がなくなりました。それを地方のいろいろな計画を立てて、今度は財源を引き剥がせるぐらいの情熱のある計画を立ててくれと言われています。結果的に裏返すと、国は今までやってきたけども政府は各省庁の持っている補助財源を持つてくることができなかつたので、地方が今度は持つてこられる戦略を立ててくれと言っていることと同じです。財源がないから、今回は1,000億円しか用立てできなかったということでした。冷静にみてきますと、おそらくそうなるだろうとほとんどの方は思っていたと思います。本当に国は危機感を持って、国としての政策を真剣にやろうとしているのかというと、皆さんも冷めてきてしまっていくということがあるのかなと思います。

栗田副会長…結局、他の省庁が持っている予算を地方創生のアイデアにくっつけて予算を使ううとなつていのです。その2,000億円以外で、プランを提案すれば1,000億円のうちから、事業費の半分が来て、自分のところで半分用意して進めることになります。さらに、その周辺事業もそれにくっつけて膨らませることは可能だと思えます。しかし、それは昔から同じことやっていました。

工藤町長…そうですね。それをどれだけ他省から持ってこられるかの勝負だと思います。地方創生としての独自の財源は持っていないですから、ソフト先行でその裏ではソフトの効果を上げるためにはハードがついてこないと、ソフトだけでは息切れします。ハードは必ず付いてくると言うことになりまして、このハードの財源は各省庁が持っている財源からしか、調達できないということですので、このソフトからハードへ移行する計画とそれから各省庁が持っている財源を持つてくるための地方としての戦略性のある計画を立ててくれということです。

栗田副会長…そうですね。しかし、町長さん方が行くとガードを固めず、町長さんのところの事業はいいですとなると思います。

工藤町長…そうですね。でも現実を持つてくるのは非常に困難です。

栗田副会長…制度的にもつて来るといえるのは、予算を当初予算で移す話で、町の中で予算の調整をやつても同じことが起こります。

〔公共事業予算が足りないこと、安定した発注を目指すこと〕

工藤町長…結果的には特に道路などの、ハード事業は当初予算も含めてどんどん落ち込んでいきます。財源調達をやるためには持つているキャパシティは決まっていますので、どこか

から移さなければならぬということ。そうすると今の公共事業から移し替えることになってきます。社会保障費もどんどん予算が必要になっていきますので、公共事業を落とさざるを得ないということが、現実に今起こっていることです。農業もそうですが、補正でなんとかやりくりしていますが、当初予算で確定している予算は5割か6割です。それをみるとやはり公共事業はこれから厳しくなるし、耐震化や長寿命化という大きなテーマがあるにもかかわらず、現実は予算が落ちていきます。社会資本整備総合交付金も、どんどん落ち込んでいます。そうすると、今の単価増を考えますとコストカットは制約を受けますので、事業縮小か事業延長かということしかないのです。

栗田副会長…時間をかけてやることだと思えます。耐震化、国土強靱化は、その対象の災害は今すぐには来ないです。それで時間をかけて、例えば小学校の耐震化は、2年とか3年とか、のペースで進めるといふことだと思えます。

工藤町長…耐震化は今年で制度が終わると言われています。

栗田副会長…何回か延びましたけど、だいたいいいところまで行ったので制度をやめると聞いています。町長さんのところも学校の耐震化は終わったのですか。

工藤町長…実際には都市部は数が多いですから稚内市さんもやっていますが、耐震化率は都市部ほど進んでいないと思います。特に北海道は財政が厳しいですから、全国から見ても耐震

化率というのは非常に低いと思います。そうなるとう教育委員会や市長もそうですが文部科学省に要請しても、稚内市さん耐震化率をもっと伸ばしてくださいと逆に要請されます。しかし、補助率も落ちるので現実はなかなか手がついていかないことです。公共事業費の伸びがここまで鈍化すると非常に厳しいです。しかもさらに公共事業費が落ちることになると、本来今ある建設業そのものも非常に厳しくなっていくということです。しかし、建設業が抱えている地域の経済、雇用、特に小さなところは大きな影響があります。豊富町の建設業で約300人以上の従業員がいますので、非常に大きいのです。ですから安定的な事業確保、予算確保は大事で、行政として冷静に考えていることだと思えます。だからできるだけ毎年でこぼこがないように、年次計画の中で財政計画を立てながら、どれだけ安定的に事業発注できるかということは、雇用も抱えていることを考えると、施策の配慮は避けて通れないことだと思えます。

栗田副会長…そうです。そうしていただきたいと思えます。町長さんだけでなくいろんな人にお話しています。国の公共事業は、当初予算は一応安定しています。その当初予算も大きく下がった後の当初予算なので、もう少し当初予算を増やしてもらうか、足りない分は補正で追加してもらおうかということが続けてもらわないと事業が出来なくなります。町長さん方は今言われましたような道路、農業の予算などに確実に影響を受けているのをお感じでしょう

し、建設会社としても長期的な安定的な会社経営を考えたときに、少し発注量が少ないです。それを町長さん、市長さん、知事さんも国も、みんな考えていただきたいというのが建設業の願いです。

工藤町長…そうなのです。豊富町も農業は大きなシェアを持っていますから、本予算では平成22年以降50%から60%ぐらいまで落ちました。補正予算でなんとか元に戻らずつ戻してもらっていますが、補正予算は非常に不安定で、建設会社の安定的な経営を考えると、雇用も含め安定的な予算確保ができなければ、計画的な発注は難しいのです。大きく予算が増える年と大きく減る年があると建設会社も、受注できる工事と受注できない工事が出てくると思います。年度当初で発注するのでしたら年間の人の雇い方も含めて、計画的に受注の見通しが組めると思います。これが工事を落札したばかりの時に補正がきても、企業経営としてはスリム化をしていますので、技術者などがその仕事にまわせないことになります。受注するキャパシティがないことになるものですから、安定的な年度当初予算の確保をしていかなないと、発注するほうも受けるほうも非常に不安定なのです。

特に農業予算は相手、農家さんあつての話なものですから、例えば1億円の事業費がきていて、さらに1億円きたとしても、経営面積で10町歩を持っている農地で1億円の整備をやるうとしますと、予算の問題だけでなく、草地を更新するために牧草をどれだけ安定的に取

穫するかを考えておかないと出来ません。お金がきたから、すぐいくらでも事業が出来ることではないのです。

栗田副会長…継続的な農業経営を考えての生産調整ですね。

工藤町長…そうなのです。経営をやることになれば事業ができる面積は、その内の1億円だったりします。もちろん農家の負担金問題も出てきます。特に農業経営を考えながら、事業を受け入れていくのは安定的な予算確保でないと非常に厳しいのです。

栗田副会長…実感しています。そういう方向に予算を少しずつ上げてもらって、それでもその年に足りない分は補正でと考えています。そうすると雇用の問題や会社の10年後はどうなるかというのが少し考えられるようになります。

工藤町長…そうです。一度公共事業費が落ち込んだことによつて、経営のスリム化をやつてきていますから、補正も含めて一時的に予算を増やしても何年間続くかが不透明なために、雇用も設備も含めて拡大できるかは慎重になります。それは結果的に経済の活力に影響が出てきます。

栗田副会長…まだそういう考えが残っていると思います。

工藤町長…そうです。この経済が長続きしないだろうというのが皆さん方の考え方で、ひとつの節目として2020年の大きな山で、それ以降は経済を伸ばしていく理由はないです。皆

さんが思っているようにオリンピックまでは何としても国も政府も事業をやらざるを得ないだろう、復興も含めて設備投資はやっていくだろうと思います。しかし、2020年以降は経済的目的が非常に弱いという言い方しています。

栗田副会長…そのあと北海道は冬季オリンピックを誘致したいと札幌市が言い出していますので、札幌市だけでなく北海道のいろいろな地域で競技を開催することによって、連絡する交通網や競技施設と周辺の練習施設の整備などは、そんなに多くはないですけど全体に分散されますので、2026年と言っています。

栗田副会長…そうすると高規格道路で繋がります。

工藤町長…交通のネットワークも非常に大事で、JR北海道さんはどちらかという廃止の方向となつていますが、公共交通のミッションは少し違うのではないかと思います。

工藤町長…特に北海道は鉄道の交通アクセスがあつて、それが地方を支えていく力になっていると思います。一方ではJRや営林署などの官公庁が撤退して、その経済的効果よりも人材の効果がなくなつたことが、小さな町にとっては大きいのです。

栗田副会長…人材ですね。組織があることによって、その人を通じて得られる情報量が絶対に違います。

工藤町長…そういう方々は学歴も高いし、文化的な活動をやってきた方々ですから、地方でレ

ベルの高い野球を教える、レベルの高い文化を教えるという大事な役目を担ってきました。公共機関の撤退は、確かにコストが掛かることはわかりますけど、地方を大きく減退させたことになるのかなと思います。今残っているのは学校ぐらいしかありません。人口減少という大きな課題があり、高校もだんだん縮小されています。高校があることによって先生方が地域への文化面向上などに大きな力となります。

（人口減少対策、奇跡の温泉といわれる豊富温泉の活用）

栗田副会長…人口減少の個別対策は今進められている施策はございますか。

工藤町長…小さな取組みですが、豊富温泉はアトピーや乾癬（かんせん）に悩まれている方々にとって、日本で一箇所しかない奇跡の温泉といわれて日本全国から温泉に来られます。その方々が自宅に戻ると環境の問題などがあって再発するので、移住定住をしたいという方々が少しずつ増えています。実際には移住定住するためには、雇用や住宅の問題、文化教育の面で地元ではそれを充足できるレベルになっていないものですから、周辺の稚内市さんに就職されて、そこから豊富温泉に通われる方や、天塩や幌延に就職口を求められて、豊富温泉に通われる方々もけっこう多くなっています。ほかに実際に移住定住したいという方々のために、地元でも条件整備を努力しています。日本全国から来る方々のための受け入れるための

条件整備をしながら、移住定住の数を増やしていくことは、可能性としては大きいです。実際に少しずつ増えているので、具体的に町で持っている材料として、活用して行こうと、進めています。

栗田副会長…豊富温泉はアトピーに効くのですか。

工藤町長…アトピー、乾癬などに効果があります。劇的な効果で、びっくりされるくらいです。女性の方がアトピーや乾癬になって、例えば顔から体液が吹き出るくらいになっていて、人生を諦めたという若い女性の方々も、この豊富温泉で回復して結婚されて子どもさんも儲けられています。しかし、また条件によって再発して来るものですから、子どもさんと一緒にここに移住するという例も少しずつ増えています。

栗田副会長…住宅対策は行っていますか。

工藤町長…住宅対策も直接的には民間のホテルを町が買収して、短期、中期的に低廉な宿泊料で湯治できる条件を整えています。また、建設業の社長さんが中心になって民間の方々が「やどかりハウス」という長中期滞在型のケアハウスを建設し、そういう方々を受け入れていきます。「やどかりハウス」は、今満室になっていると聞いています。民間の方々も受け入れ態勢をとってくれています。

民間が住宅を建設して、家賃補助を行うことを検討し

工藤町長…まだ課題があつて具体的になつていませんが、民間賃貸住宅建設促進事業を行おうと思つています。公共事業も落ち込んでいますので、一石三鳥を狙つて、民間が賃貸住宅を建てる事業です。豊富町は農機具メーカーや器具メーカーが多いのですが、社員の若い方々が民間住宅に入ろうとすると家賃が5万円くらいと高いのです。そのため民間住宅に入れないという指摘を受けています。それを改善するために民間に住宅を建てていただき、その家賃対策として、町が家賃を低減する補助を考えています。20年ぐらいでの建設費返済に合わせた分を補助することになれば、建設業界の活性化にもなり、入居者の家賃対策にもなるということで一石二鳥。町は公営住宅の管理戸数が減ることになりますから、一石三鳥になると思います。

これから議会で議論していただき、民間のアパートを経営している方々にもお話して理解していただいてから、進めることになると考えています。

栗田副会長…壮瞥町商工会が信金さんからお金を2億円借りて、事業主体となつて20戸ぐらいのアパートを建て、そこに古い公営住宅に入つていた町職員を入れることで町が入居の保証をする事業を行つています。お金の返済を20年間の維持管理と家賃収入で行い、20年が過ぎれば町に財産を渡すことをやっています。そして古い公営住宅は壊して、まだ使える公営住

宅は改修して移住定住の人、子育ての若い世代の人を入れるなどを進めていました。同じような事業です。

工藤町長…そうですね。豊富町は公営住宅の管理戸数が430戸程度です。

栗田副会長…多いですね。

工藤町長…はい、多いです。公営住宅の依存度が高いもので、管理戸数をできるだけ落とし、民間住宅にシフトして行こうと考えています。その代わり事業者は大変ですから、家賃低減という形で補助する制度を検討しました。

栗田副会長…それは、進めるのがいいです。

工藤町長…はい、民間事業であれば割合柔軟に行えます。一長一短はあると思いますが、事業費も民間の場合安くなります。民間がそういう住宅を建てていければいいと思います。いわゆるPFI施工型のような借り上げ方法を取ったりもしています。

栗田副会長…今の話もPFIです。

工藤町長…地元産の木材の導入も、少し時間はかかりますが定住支援センターや昨日オープンした豊富小学校で使用しています。

栗田副会長…時間はかかっても地元の材料を地元で加工し使えば、雇用が出来ます。公共事業の安定とまったく同じです。町でお金を出されるのはそういう方法がよいと思っています。

工藤町長…山林も効率のいい場所は伐採できないことになっています。適齢伐採期のところは切れなくて悪い条件のところしか残らなくなっています。

栗田副会長…木が年寄りになっていくわけですね。

工藤町長…そうです。適齢伐採期のところを切っていけば、その次に植林して、保育するサイクルができます。まだ小さな面積ですが、サイクルが回る仕組みを地元で作っています。

栗田副会長…はい、その発想をいろいろな事業に入れていくことが必要だと思います。

工藤町長…地元で回る仕組みをどう作るかだと思います。農業もそうなのです。

栗田副会長…林業や農家の方は、自分の仕事はわかるけど周りのことはなかなかわからないです。なので、その間に入るのが町長さんと役場の職員さんで、繋ぎ役を絶えずやっておられますね。

工藤町長…建設の方々にとっても農業は大事な産業で、農業も活発になればいろいろな設備、例えば牛舎、サイロの建設など、地域でお金が回る仕組みとして、基幹産業が元気になるとが基本になると思います。道路などの事業も農業があつてということが大きいです。

商業は特に厳しい、しかし若い人達がんばっている

栗田副会長…商工業はどうでしょうか。

工藤町長…商業は特に厳しいです。世代交代でしかも後継者不足もありますが、地域経済が成り立っていないかと商業は成り立ちません。しかも通信販売などが活発になってきて、特に高齢者などの外に出て行けない方々は通信販売に頼ることが多くなっています。商業も訪問販売、いわゆる宅配などを一緒にやれないですかと話はしているのですが、そうはなっていないです。

栗田副会長…宅配などは、町の事業としてやっているところがあります。御用聞きをして買い物して家を持っていくということを商工会が町の委託を受けてやっているとところがいくつかあります。

工藤町長…商業そのものの直接的な活性化は難しく、定住などを進め、どこまで人口減を防ぐかと経済の仕組みをどこまで維持するかを基本に考えながら、商業への影響もできるだけ抑えていくという方法しか今のところないと思います。抜本的に商業を改善することにはなっていないと思います。豊富温泉などには若い方々が少しずつ入ってきていますので、その活力は町の中で少しづつ息づいてきています。マイハートというパン工房は、赤レンガ大賞を平成23年にいただきました。町の中では若い方々が店を出す動きがあつて、古くからの方や後継者のいないところは残念ながら店舗のシャッターが閉まっていますので、さびしいですが、逆に新しい方々がその店舗を引き継いだり、新しい店舗を建てたり、アトピーで移住

する方々がお店を借りて経営するという動きが少しずつ出てきて、変わってきています。

栗田副会長…アトピーで移住された方も店を開いているのですか。

工藤町長…おしるこ屋をやっています。

栗田副会長…甘味処ですか。

工藤町長…そうです。民宿もやっています。

中田副会長…この間の北海道局の八次計画ヒアリングを稚内で開催した時も豊富町から女性の方が来られてお話されていました。

工藤町長…そういう動きが少しずつ出てきていますので、どうサポートしていくかが行政の大きな役割だと思っています。

栗田副会長…そういう人たちが次に繋がることと、口コミです。そういう人たちはマスコミが取り上げやすいです。

工藤町長…官が上から仕組みづくりして、そういう人達が活動始めたわけではなく、その方々は地域、町に助けられたと考えていて、恩返しをしたい気持ちなのです。行政に何かを求めることは思っていないのです。そういう気持ちであれば、逆に行政も何とかしなければならぬと思います。民間の方々が一所懸命やっていることを報道が取り上げ、新聞でも割合頻度多く取り上げてくれています。

栗田副会長…そうするとそれを見た別の若い人に必ず繋がるので、大事にしなければいけないです。

工藤町長…行政もそういった動きに呼応するように少し触発できる動きも必要だと考えています。今、全国の特徴のある泉質の特に特異な温泉、九州の竹田市の長湯温泉、秋田の仙北市の玉川温泉と3温泉で連携して、厚生省の医療費控除を要請しています。温泉療養する方々が、遠距離で来る場合には交通費などの負担がかかりますので、医療費控除ができるように厚生省の認可施設としてハードルを下げて欲しい、幅も広げて欲しいという要請を連携して動いています。

栗田副会長…それは今年ですか。

工藤町長…はい。

栗田副会長…うまく行きそうですか。

工藤町長…自分が行けなかったのですが、厚生労働省の塩崎大臣に先日要請をして反応が良かったという話をお聞きしています。これから息長く努力していく必要があると思います。

中田副会長…最近、若手の後継者が旅館をまたひとつ造りましたが、若い方々が頑張っていますね。

栗田副会長…その方は、もともと地元の方ですか。

中田副会長…はい、地元の方で古くから旅館をやっていました。

工藤町長…北海道新聞や観光新聞にも載りましたが、東京の竹田市の事務所でANAや健康フォーラムが立会してフォーラムを行いました。ANAが関心を持っていて、うまく行けば事業参入したいと、後見人のような形で立会してもらっています。このフォーラムの開催のきっかけは、横田前稚内市長がやっていたPHPの地域創造フォーラムです。

栗田副会長…はい、横田さんはPHPとフォーラムをおやりになっていました。

工藤町長…PHPがきっかけとなり、ここでフォーラムをやったときに繋がりができました。PHPは松下ですから、松下とANAが密接な関連があると思っています。それでANAは関心を持って一緒にいただいています。

〈建設業とともに地域を作っていく〉

栗田副会長…建設業はしっかり地域を支えていただいているということですね。

工藤町長…建設業の力は大きく機動力もあります。目先の利潤だけでなく、一緒に地域を支え地域を作っていく観点で建設業の方々にもご協力をお願いしたいと思っています。

栗田副会長…もう目先の利潤だけの人は地域にいないのではないですか。

工藤町長…昔はそういう方々が多かったですが、今は紳士的な企業の方々が多く、社会的な仕

事もやられていて、そういうことは大事だと思います。一緒に地域を作っていくか、と、結果的には、建設業にも戻ってこないと思います。

栗田副会長…豊富町には建設会社は何社くらいあるのですか。

工藤町長…豊富町の協会で10社くらいです。

栗田副会長…長時間どうもありがとうございました。

平成27年9月7日月曜日13:30～14:30 於：苫前町長室

森 利男 苫前町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

栗田副会長：町や地域の課題で、いつもお悩みになっていることやお考えになっていることを中心にお聞かせいただきたいと思います。

↓町の建設業と役場は連携している↓

森町長：私は建設業界が1社減り2社減っていった場合は、町の工事や日常生活の対応ができなくなることはつきりしています。建設業、建築業、舗装屋さん、2、3人しかいない大工さんの会社もありますが、私はしつかり意見を聞きながら、町も1年間の事業量をチェックして、北海道や国の事業もある程度見ながら建設業などを見ています。全体的なバランスをみて、例えば、板金屋さんが2軒ありますが、一回で全額発注してしまえば、板金屋さんの仕事がなくなるので、年度内でバランス良く発注することなど、町で建設課を中心に考え

ています。建設業は、相当町の力になっていただける業界といつも思っています。当然、私利私欲は別です。それは聞きません。

栗田副会長…はい、それは聞いてはいけません。

森町長…町全体のことを考えてどういうふうに関の整備あるいは進展に協会が役立っているかをチェックしています。入札は全部副町長が筆頭で実施しています。ただ設計などの金額決済は全部私がやります。入札の金額も私が全部書きます。

栗田副会長…それは当たり前の話です。

森町長…私の町ではうまく流れていると思っています。私は3期12年間町長をやっていますが、その間にシャッターを閉めた店がないです。おそらく管内では、そういう町はないと思います。それだけに私も建設業界を大事にしています。

栗田副会長…建設業界も、町を頼りにしていると思います。

森町長…建設業界の希望もありますから、しっかり聞かせていただいて、私の立場で考えながら進めています。

（町の人口減少対策、にこにこタクシー）

森町長…地域における課題は全道一円いずこも同じです。人口減少や少子高齢化の話は、相当

重く受け止めながら念頭に置いて進めています。政策もこれに絡めて苫前町の規模なりに、先駆的に政策を出しています。例えば少子化対策では医療の面、出産手当てなど、住居問題では住宅助成もやっています。高齢化対策も楽しめる町づくりで、例えば苫前町でタクシーは経営状況が厳しいので、デマンドタクシーを、にこにこタクシーといってやっています。町内どこを回っても400円です。4人で乗れば一人100円です。

栗田副会長…1台400円なのです。

森町長…仲間を集めて買い物、病院行くなど、週2回ぐらいのサイクルで回数を定めて、タクシー券としてカードを発行して、それをチェックするという方式です。非常に人気があります。高齢者対策も政策をたくさん出していますが、今一番人気なのはにこにこタクシーと思っています。大型スーパーがあるわけでもありませんし、町にはコンビニは2件ありますが、高齢者は衣類でも何でも品物を見ながら買いたいのです。ちょっと大きい農協スーパーが古丹別にありますから、農家の人達がみんな一緒ににこにこタクシーに乗って行って、例えば昨日買ったらおいしかったので、今度一緒にそれを買っていきましょうとなるように、仲間を増やすように考えています。あまり高齢者が孤立しないように考えながらやっています。だいたい浸透してきたような感じがします。先ほど言いましたように1週間に病院に行く日が1回、買い物に行く日が1回なので、1週間に2回サイクルでそれを365日に回数を掛け

てカードを発行していますが、有効に活用していただいています。

もうひとつタクシーはもともと採算が取れていないので、苦前の市街にしかタクシーがいなかったのです。ここから8キロぐらい離れた古丹別と、苦前町は街が2つに分かれています。古丹別にはタクシーがいなかったのです。それで夜の8時までは両方にタクシーを常駐していただいて、いざとなればタクシーも使えるという安心感もあります。

〔農業、漁業の所得が上がりました〕

森町長…苦前町には保育所が2箇所ありますが、町立でなく民間法人です。当時両方とも定員40でしたが、入所の子どもたちが定員より少ないので、大変だと思っていました。その理由を調べると、近年農業や漁業はすごく所得が上がってきていて、所得が上がると保育料が高くなって、通わせないで家に置いて自分たちで面倒見ていることが分かりました。

所得が上がって農業関係は75%近くの農家が所得税を払っています。漁業も65%近く所得税を払っています。苦前町の一次産業は安定してきていると思っっています。

栗田副会長…そうですね。

森町長…苦前町は変わったのです。私が役場で担当していた12年前は農業でも所得税を払う世帯は30%ぐらいしかなかったです。そして漁業は15%か20%ぐらいだと思えます。ところが、

近年苦前町の所得はすごく増えました。安定してきています。

それで、保育所に通わせると所得に応じて保育料がかかるので、1軒で1ヶ月のうち十何万円になり、2人か3人いると十何万円ずつ払わなければならぬことになっていました。これは大変なことと思ひまして、保育料も1人目を半分に、2人目はさらに4分の1にして3人目は無料にしました。そうしたら保育所に通う子どもが増えて、定員をオーバーしました。やり方によって町民還元できるものがあると思ひています。

〔高齢者サービスと医療体制の整備〕

森町長…高齢者の場合ですが、とままえ温泉「ふわっと」は48・5度の源泉がでていますが、おじいさん、おばあさん達は、1年に1回も温泉に行かないでいる人もいます。それで、1年1回ぐらい閑散期に高齢者を温泉に入れてあげたいと思ひ、いやしふれあい事業として10月以降3月までの間に「いやしふれあいご招待券」を出しています。1泊2日コースでいたい一人5,000円くらいで、老人クラブや町内会でみなさんお誘い合せて、5人や10人のグループになって行っています。ありがたいと喜んでくれます。

苦前町の医療関係ですが、苦前と古丹別に診療所が1件ずつあり、希望があれば在宅医療もやっています。また、すぐ隣8 kmぐらいに羽幌町の道立羽幌病院があり、なかなか採算が

取れなくて、さらに縮小すると困りますので、苫前町の救急患者は全部羽幌病院に運んでいます。そこには療養ベッドはないのですが、ショートステイはあります。また民間病院もあり、定期的な療養が出来ます。また留萌市立病院でカバーしていただくことや、旭川日赤病院から救急ヘリも飛んできてもらえます。医療も整備は着々と進んでいます。旭川日赤病院には苫前町も負担し救急ヘリの運行もしていただいています。地元には診療所2件しかありませんが、脳神経であれば留萌市立病院にもあります。

消防体制も整いました。ほとんどの苫前町内支署職員は、救急救命士です。すごく条件を良くして、救急車も新しいのを10年前に買いました。札幌から離れている小さい地域ですが、不便でどうしようもないことにはなっていないと思います。

栗田副会長…すごく整っていますね。

森町長…その中で、いかに人口を増やすか、町づくりをどうするか、を考えていくことです。子育て対策は住宅対策として新築の場合は1件200万円の助成金を出しています。あとはそれを上積みしていくかどうかです。苫前町は今住宅が足りないのです。公営住宅も着々と作っていますが、前倒しでやらなければならぬということです。しかし、人口が増えていくわけでもなく、自然減になっています。高齢者率も高いので仕方ないと思います。

栗田副会長…住宅が足りない理由は、建て替えではなく別にあるのですか。

森町長…高齢者住宅が必要なことと、もうひとつは今農家、漁業の人は先ほど言ったように所得が高くなってきているので、若者夫婦は市街に住む傾向にあります。

栗田副会長…なるほど。おじいさん、おばあさんと孫が一緒にいないのですね。

森町長…そうです。若い人たちは市街地に出て生活していて、畑、水田のあるところにはおじいさん、おばあさんが生活するということが結構多いのです。

〔苦前町の酪農はクリーン農業〕

森町長…酪農家も最近良くなって14、5軒ありますが、ほとんど後継者が戻ってきました。

栗田副会長…そうですか。ここの酪農は牛乳ですね。

森町長…牛乳です。最近は酪農家もいろいろ工夫して、乳質100%の酪農家も出てきて4、5軒あります。もうひとつは苦前町ではクリーン農業を勧めています。北海道クリーン基準があり、農薬など、全部クリーン基準です。この管内8市町村のうち、苦前町だけクリーン基準に合致させています。すごい売れ筋です。

ちなみに苦前町で取れる農産物は、全部クリーンです。「ななつぼし」は、三重県津市の米屋さんに農協推薦で出荷している米もあります。苦前町産はクリーンなのでそういう面では売れ筋です。一次産業が安定し、酪農も後継者が出てきて、今牛舎を建て替えてほしいと

いう方が多いのです。

栗田副会長…牛は酪農家あたり50、60頭ですか。

森町長…いや、もつと多いところもあります。そして酪農法人が1軒出てきました。4人で経営しているのです。今まで酪農法人はあまり出てこなかったのです。農地は空いているところがないです。農業法人は大きいのが2軒あります。みなさんがお爺さん、お婆さんになって、法人に参画して、自分は出面取りで、土地は法人のものにしています。小さいのは3軒ぐらいです。一次産業が良くなってきたので、運営しやすくなりました。

栗田副会長…所得税を払ってくれることはすごいです。

〔財政の建て直し〕

森町長…そうです。最近苫前町は変わりましたが、なぜこうなったかを、考えました。私今4期目ですが、町長になる前の12年前、私は助役でしたが、町の財政は最悪でした。当時北海道には180市町村ありましたが、悪いほうから10番目ぐらいで、そういう内容が絶えず新聞に出ていました。私も助役で責任があると感じていましたので、借金は町民にかぶせられないと思いつながら、12月に町長への立候補表明をしました。12月上旬になって町議会が終わり、役場職員でないと町の財政は直せないと思い、議会議長からも押されてきましたから、

役場を辞めて立候補しました。財政直すのに6年ぐらいかかりました。

栗田副会長…かかりますね。しかし、6年かかっても立て直したのはたいしたものだと思います。

森町長…私も20%給料を落としました。今でもそのままです。議会議員も10%、職員は組合と話し合いをして5%落としてもらいました。一緒にやらなければうまくいかないとお話して、組合も協力してくれました。その代わり役場庁舎の掃除は全部自分たちでやることになりました。私もこの部屋のモップをかけています。トイレの掃除など、全部自賄いにして、委託していた会社は全部辞め、車も全部軽自動車に代えて、黒塗りの町長車もすぐ売りました。そんなことを全部やって6年かかりました。

栗田副会長…結局、絶対必要と思っている部分を削減しない限り金は貯まらないです。

森町長…町の財政が悪いことを、町民に絶対かぶせないと言っているのですが、例えば町内会の電気料補助を10割から8割に減らしてもらうことなどを、少しずつ無理なくやりました。今はもう元に戻しています。

森町長…町民への負担は全部戻しました。職員の給料も5年間で戻しました。その後は、財政についてどういう対策取るかを考えました。まず貯金をすることからはじめなければならぬので、コツコツ貯め始めました。ところが農業と漁業は生産して生活しなければいけない

ので、町にお願いにきます。農業と漁業の事業関係を優先して、例えば農家であれば、スイートコーンの選果する機械は何千万円もします。半分補助が入り、残りは農協と町で負担です。町も辛抱したくさんの負担をしました。それが積り積もって軌道に乗ってきて、所得が増えたと私は思っています。農協は何でも言ってきましたが、本当にうまくいくのだろうかと思いながら、半信半疑でやっていました。ここは辛抱のしどころだと思っていました。町からの補助金をストップしたら農協もやる気なくします。

栗田副会長…町は最後の頼りです。

森町長…全部町が辛抱して補助を出したので、今ここに來てグリーンと安定しました。農家はいつもニコニコ顔、漁業もおなじです。

〔苫前町の漁業〕

森町長…業種によって違いますが、苫前町の港は、第3種漁港で国直轄事業です。羽幌港湾は、町に負担金がかかりますが、漁港は北海道が管理者で負担金を出してくれます。それを利用して、いろいろな事業を進めました。そのおかげで、今は、ホタテは、全部韓国に輸出しています。稚貝は、全道一円に運びます。特に今年はオホーツクが台風でホタテが死んだので、全部このホタテを持っていきました。この辺は、稚貝がもうないので、成貝、半成貝は

全部韓国で、売値は韓国の単価が急激に上がって、去年の実績をはるかに越えています。

栗田副会長…そうですか。中国ではなくて韓国ですか。

森町長…はい、ホタテは韓国です。ナマコは全部中国に輸出します。ナマコも資源枯渇気味になっているので、育てながら採っています。今年から留萌開建が、留萌管内のナマコの生育調査を苫前町の漁港でやることになりました。上の国町にも先日、私が行って、ナマコ養殖を見てきました。網のようなものでホンダワラなどを餌にしているところでした。そういう養殖を今年から苫前町で始めるべく、国と北海道が予算を使っただけです。それでナマコ養殖が定着出来たらいいと思っています。海老もけっこう捕れます。タコとカレイだけでは、量産できないので採算取れません。価格が安いです。新規漁業者はそういう魚を捕るのですが、採算が取れないので辞めていかざるを得ない場合もあります。漁業者は、さらに高齢になるので、ナマコとホタテと海老を主流に切り替えていきたいと考えています。また管内で昆布を採っているのは苫前町だけです。

栗田副会長…この昆布は利尻系ですね。

森町長…売れ筋です。漁港も拡張していただき、岸壁の屋根も作ってもらい、漁師はすごく喜んでいきます。意気を感じてやっているの、漁師も所得が安定してきていると思います。

（一次産業の農業、漁業と建設業を加えて3柱にしたい）

森町長…苫前町は一次産業の農業、漁業が2本柱です。私は町長に立候補したときからずっと、建設業を加えて3本柱として確立することを主張しています。最大の願いです。建設業を柱とするためにはどうするかを考えると、国・北海道・市町村・民間も含めて事業量を町でチェックすることが必要と考えました。事業の絶対量を考えるときに、地元企業が施工できる内容の工事をお願いしています。道道古丹別・力昼間の道路はJ Rの廃線敷きで、切り土と盛土で施工していただきました。高規格道路などは別でしょうが、一般国道232号などの施工方法についてはお願いしています。それから、霧立峠に行く239号は、土砂崩れで仮道になっっています。

栗田副会長…融雪災害でした。

森町長…その調査費をつけていただくのに地元町長として東京までお願いに行きました。私は、今町村会の会長なので、留萌開発期成会会長の留萌市長高橋定敏さんに一回行ってもらいましたが、さらに、地元の町長も要望に行くことになり、お願いし調査費をつけていただきました。国道239号は、さらさら土質で、切り土するとお金かかるので、トンネルにしたい部分もあるようです。私はなんとか切り土でお願いしますと言っています。地元業者が参画できるようにお願いをしています。

北海道の道路も苫前町は多いです。古丹別の大通りは北海道管理の道路で、流雪溝もやっています。苫前小学校通りも、港に行く道路も道道、羽幌と古丹別を繋いでいる道路も道道で、北海道の工事もけっこうあります。それを補完して町も工事をやっています。また町は橋の補修を順番にやるように計画しています。それも含めて建設業の工事を確保するため、どういう順番で進めるかを今検討しています。建設業が衰退していかないように意識しています。

栗田副会長…ありがとうございます。

森町長…今、建設業界の技術屋さんが足りないのです。

栗田副会長…そうです。高齢化していて、若い人がまったく入ってこなくなっています。

森町長…私は会社の中身によって、若い人が入りたい会社にならないと考えています。社長たちが良い技術者を連れてくることによって、町づくりもすごい進み、きれいな町づくりもできます。良い技術者でなければ会社は維持できないのではないかと建設業界に言っています。

栗田副会長…最近2年ぐらいで、やっと人材育成しなければならなくなってきました。型枠大工さんとか鉄筋工さん、板金屋さんも左官屋さんなど、そういった人たちがやっと人を育てなければならないと考えるようになりました。

森町長…役場でいい技術者を入れたいので募集しますと、苦前町内企業から、役場では採用しないで欲しいと言われます。民間企業の技術者をとらないで欲しいということです。私は町内から技術者を採用しないようにしています。また応募も少ないのです。

町内の人ではなく町外からいい技術者を採用して育て、その人が民間へノウハウを波及しているリーダー的立場になればいいと考えています。去年も今年も一人入れました。

栗田副会長…そうですか。どちらから来られた方ですか。

森町長…札幌です。それと農業技術者も苦前町ではないので、建設担当を農業に回して、最近ダムの資格を取るため、東京に行かせました。苦前町は農業ダムがあり灌漑排水も苦前町は国と一緒にやって工事やっています。ダム管理も委託していますが、それを担当させ、町と委託者の複数で管理させています。さらに、農業ダムに水力発電をつけようと思っっています。国からお話がありましたので苦前町も負担金払いますが、やったほうがいいと思っ

ます。

栗田副会長…農業用水もできるようになってきたのでできますね。

〔苦前町はエコエネルギーの町〕

森町長…苦前町はエコエネルギーの町です。風車から始まって、今は、雪冷風です。漁業も農

業も雪を使って市場の雪冷風をやっています。8月でも、まだ去年の雪があると思います。農家も雪を貯めて豆の乾燥室も7月下旬から8月ぐらいまで雪冷風を使っています。そのほかに風力発電を使って水素ガス化研究もやるのです。苫前町の風車はこの北のほうに3基ありますが、その風車の電気を売ることにして、NEDOの補助を4年間いただいで研究します。施設の地鎮祭も終わりました。東京オリンピックに間に合わせる段取りです。

栗田副会長…風力の電気を売って水素を発生させるのですか。

森町長…はい、そうです。例えば水素スタンドを造る、水素ガスで「ふわっと」の燃料賄う、という研究をします。

栗田副会長…確かに、やはり地域でも何か今風なものが入りますね。

森町長…風車も17年ぐらい経っていて、耐用年数20年ぐらいなので、もうそろそろ建て替える時期にきています。ところが、苫前町の風車は牧場の中に建っているのです、今度農地移転が絡んできます。それも町で全面的にバックアップしてやってやらなければならないことです。

栗田副会長…もう17年ですか。早いですね。

森町長…私も副町長2期8年やって、町長は12年やって、トップと二番目を合計20年やっています。今これからまた4年が始まったばかりなので、考えてみたら長いと思います。

栗田副会長…まだお若いですよ。

森町長…いつまでやるのと言われていたみたいなのです。しかし、やらなければならないことがあるので簡単に辞められないのです。

〔再び財政の建て直しについて〕

栗田副会長…最初の立候補する時のお話にも、自治体の財政を立て直すにはプロでないといけないという話がありました。私もずっとそう思っていました。

栗田副会長…行政の外から来た人が、自治体財政のお金のやりくり、補助金、交付税などの難しさはわかるはずがないと思っています。

森町長…素人ではちょっと難しいと思います。

栗田副会長…さらに今は、国が財政を小さくしようとしている時期なので、なおさら行政の口でない限りできないと思います。

森町長…大変でした。全部、借り入れを引っ張り出してみると、農業ダムの借金は5、6億円ありました。利率5・0%です。

栗田副会長…高いですね。

森町長…当時の利率は、みんな5・0%ぐらいでした。

栗田副会長…そうですね。昔決めたままずっと同じです。

森町長…そこで私は、例えばこんな小さい苫前みたいな田舎町が、農業ダムの借金を利率5.0%で何十年も払っていかねければならないが、これは国として考えなければならぬ問題ではないのかという政策提案を町村会にしました。総務省、財務省を回って要望しました。1年半ぐらいで過疎債に切り換えられるようになりました。全道で5、6箇所ぐらいあったようで、私がやったことよって恩恵を被ったところがありました。過疎債に切り替えても例えば交付税算入率が70%です。3億5、000万円は戻ってくる借金になります。そういうことをひとつずつやってきました。今災害発生の場合の基金があります。市町村が積み立てしていくもので、北海道市町村備荒資金に苫前町は10億円ぐらいあります。

森町長…苫前町は古丹別と苫前に小学校2つあります。その小学校を改築耐震化しながら、貯金していけるようになりました。その代わり起債、過疎債に付けていただく補助金を活用させてもらっています。

栗田副会長…過疎債と災害の金は一番率がいいです。

森町長…私たち、みんなプロフェッショナルと思ってやっています。苫前町は子ども施設の設から先に耐震化をやるうと思っています。小学校が終われば、2箇所の民間保育所です。それも町のほうでバックアップして耐震化します。

栗田副会長…保育所の資本は地元の人ですか。

森町長…苦前の人です。一軒はお寺が中心になって経営しています。もう一つは町の有志です。老人ホームも民間です。あまり町立はないのです。

栗田副会長…それはすごいですね。

森町長…町立は出来るだけ作らないようにしています。

栗田副会長…わかります。

森町長…民間のほうが、施設を直す場合も町が借り入れしやすいです。経営を一所懸命やってもらい活性化していただきました。経営感覚も役所とは違います。保育所2箇所は社会福祉法人、老人ホームも社会福祉法人、介護の施設も最近古丹別にできましたが民間です。苦前「ふわっと」の建物は町所有ですが、指定管理させています。町の行政はそういうふうにしたほうがやりやすいです。町立は結構がんじがらめになります。

栗田副会長…一度補助金が入ると国の補助金の基準と規制がありますから、民間感覚の経営は難しくなります。

森町長…赤字になった時は、町で補填しなかったら潰すしかないのです。それが民間の指定管理者であれば、経営を活性化してもらって、赤字補填をそれぞれ分担できます。そのほうが町の雰囲気も違いますし、処理がしやすいです。

栗田副会長…営業の自由がきます。

森町長…そうです。その代わり、昨日もそうですが、イベントを朝から晩まで行いましたが、町長はずっといなきやダメと言われ、ずっといました。

栗田副会長…大変だ。町長さんのお休みは年間どのくらいですか。

森町長…あまりないですね。私、役職が多いのです。

栗田副会長…ちようど役職にあつた御年齢になっています。

森町長…私、留萌管内の町村会の会長になって、自動的に全道の副会長になりましたが、辞退させていただき豊富町の工藤さんが宗谷の会長なので、副会長を譲りました。しかし、部会が3部会あつて、その一つの農林水産部会長をやっています。

森町長…東京23区の交流を北海道の町村会がやっています。東京23区の区長との懇談会です。先日も東京で行いましたが、終わったあと北海道の国会議員の先生方、市長さん全部集まつて朝食会をしました。そこで部会ごとの陳情をしてきました。農林水産部会なのでT P Pなどで時代が変化していますから、自分の気持ちも入れなければいけないので、要望もけっこう大変です。

栗田副会長…農林水産部会が一番厳しそうですね。

森町長…話し変わりますが、全国の風力発電の市町村の会長もやっています。

栗田副会長…長く続けておられますね。

森町長…12年ぐらい、町長になってからずっと会長です。その名刺は顔写真つきで、国会議員の先生方に配っていますので、顔は覚えられているから助かります。

〔商工業の話〕

栗田副会長…町の商工会はどうですか。

森町長…商工会の指導員が今回変わりました。それから役員が全部変わりました。今度建設界の人が会長、副会長です。建設業も商工会員なので問題ではないのですが、建設業の若手のホープが会長になりましたが、建設業と一般の商業と違うところがあるので、なかなか大変ではないかと思っています。

森町長…時々商工会員と交流をして、商業のあり方などをお話しています。私は商店主が外に出て商いをする時代なので、そうやって欲しいと頼んでいます。例えば、何がほしいですか、届けますかぐらいのことはしてもらいたいと思っています。

栗田副会長…昔のサザエさんの時代ではないですが、御用聞きですね。商店はそういう方向だと思います。

森町長…しかし、そうやることはなかなか大変です。高齢化もあるし、羽幌町の苦前町境に苦前もターゲットにして大型店が集まっています。それはそれでしょうがないのです。しかし、

トドックのように車で配達してグルグル回ると、おばあちゃんたちは楽なのです。それと先ほどのにこにこタクシーで商店に行って買い物をしてもらうことも出来ます。デマンドバスも検討しましたが、主要道路しかバスは走らないので、主要道路まで来るのに家から100mも150mも来て乗るのは大変です。それでタクシーを活用することにしました。

栗田副会長…先ほど特急羽幌で来たのですが、バス停から歩いていたら「大衆ハイヤー」という会社がありました。

森町長…その会社、以前は車1台でしたが、今3台ぐらいあります。それも町で補填して、カードチェックさせてやっていますので、タクシー会社もすごく喜んでいます。

栗田副会長…運転手さんは町内の人ですか。

森町長…町内の人です。二種免許が必要なので羽幌からも頼んできています。町内の方は3人ぐらいと羽幌から1人ぐらいです。

栗田副会長…しかし1台が3台になったのはすごいことです。

森町長…今はタクシーも街をグルグル走っています。だから安心感があります。古丹別の市街は昔前より大きいですが、タクシー会社がもともとないのです。それでは夜も物騒ですので、夜8時まで古丹別にタクシーを張り付けていただき、救急車も張り付けてあるので、お年寄りも喜んでいきます。

「風力発電の送電線整備について」

森町長…最後に、風力発電の送電線が不足しているのので、以前からお願いしていたのですが、送電線整備の国の予算300億円が付きました。

栗田副会長…道北の送電線の経済産業省の予算ですね。

森町長…そうです。それで三井物産・丸紅・ソフトバンクが日本送電という会社を作って、増毛から天塩までの送電線を引くための経済産業省の補助金が付いています。ところが進みが遅いのです。何とか早く進めて欲しいとお願いしています。

栗田副会長…長時間貴重なお話をありがとうございました。

平成27年9月9日水曜日11:00～12:00 於…北斗市商工会会長室

宮崎 高志 北斗市商工会長

渡辺 晃男 北斗市商工会副会長

長谷川 勉 北斗市商工会副会長

高井 茂昭 北斗市商工会事務局長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

砂原 隆 一般社団法人函館建設業協会事務局長代行・事務部長

栗田副会長…商工会活動を進めていてお感じになっている町の課題などをお話いただきたい  
思います。

〔北斗市の建設工事は、新幹線関連〕

宮崎会長…どこの地域も一緒でしょうけど、北斗市も人口減少が進んでいます。10年前に大野町と上磯町が合併して北斗市が誕生しました。その時は4万9、700人ぐらいで、間もな

く5万人というところでした。その時に新聞で、北海道の人口動向が掲載されていました。函館市は人口減になりますが、北斗市は6万人になるということでした。しかし、10年後の今は4万7千人です。人口減少傾向で、他の自治体と比べたら人口減少の幅は少ないですが、隣の函館市は10万人減る、木古内、知内それぞれ半分くらいになるとい話しかから見ると、まだまだ北斗市の人口減少は少ないと思います。

最近は、新幹線関連の仕事が多くて、調べてみると、北斗市の工事量は、発注のピークが平成22年で公共事業費47億円ありました。平成26年は、23億2,000万円です。10年前は13億円ぐらいだったのです。平成17年は13億円、18年には18億円の事業費です。

栗田副会長…23億円でも大きいですね。

宮崎会長…そうです。この工事を建設業の皆さんでやっていますが、それがうまく充当しているかとなると難しいところですね。

渡辺副会長…市内でも合併も目立ってきています。

栗田副会長…何社ぐらい合併されたのですか。

渡辺副会長…大きいところは1社です。合併といっても吸収合併です。建設業が土木と合併するなど、技術的にお互いに補完するメリットを考えた合併は3、4社あります。

宮崎会長…売上げがないと生き残れないでしょう。

渡辺副会長…北斗市のAクラスは土木で16社、建築で6社です。土木が圧倒的に多いです。北海道の参加資格業者は建築で2社ぐらいです。土木は、分かりません。北斗市のCクラス、Dクラスはほとんど仕事がないです。

栗田副会長…小さい仕事はないです。北海道開発局や北海道もA、Bクラスの仕事を中心です。宮崎会長…新幹線関連工事は、新函館北斗まで平成28年3月に開業しますから、今は札幌延伸に向けてトンネル工事をやっています。トンネル工事は、スーパーゼネコンでないとできないです。その下請は、函館にもいます。地元の北斗の会社は、二次、三次下請けです。

栗田副会長…新幹線工事の仕事をしています。

渡辺副会長…やっています。設備を輸送する、資材搬入を請け負うなどの業者はいます。

宮崎会長…その関連では建設だけでなく、地元の作業所で地元の食材、生活用品もすべて使っています。

栗田副会長…実際に使っていますか。

宮崎会長…新幹線の建設企業には地元の食料品などをできるだけ使ってもらっています。

渡辺副会長…油などは当然地元を使います。金額で億円単位になります。

宮崎会長…今は、建設だけでなく、どこの企業も大変です。

渡辺副会長…建設業は資材の高騰が、目立ってきているので、利益率が悪くなってきました。

栗田副会長…まだ資材上がっていますか。

渡辺副会長…上がっています。円安の関係もあると思います。円安は円高と違って、上がれば下がるという傾向が少ないです。資材価格が一度上がると、円高になってもなかなか下がりません。下がっても、せいぜい1割か2割で、元に戻ることはまずありませんので厳しいです。民間事業も当然その影響が出てきています。消費税の問題もあります。消費税が5%から8%になるときは仕事の動きが見えましたが、これからまた2%上がって10%と言っていますが、需要が出るとは聞こえないです。もう諦めているのです。諦めるということは仕事が少ないということです。

栗田副会長…5%から8%が上がったとき、マンションの駆け込み需要がすごかったです。今はそんな雰囲気ではないですか。

渡辺副会長…はい、ぜんぜん聞こえてきません。落ち着いたと言うのか、仕事も計画する方が少なくなってきた、そういうことを見ていくと厳しくなっていくのかなと感じます。

宮崎会長…新築住宅戸数も24年で266戸、25年282戸、26年が228戸、今年の5月で71戸ですが、去年の5月は24戸です。今年は去年より少し伸びています。

栗田副会長…すごいですね。それも新幹線効果ですか。

渡辺副会長…新幹線は関係ないと思います。

栗田副会長…そうですね。しかし、新築で200戸、300戸という数字であれば、すごいです。これは1戸建てですか。

渡辺副会長…いや、アパートも入っているといます。

栗田副会長…他の町とは印象が違います。新幹線開業の効果はありますね。

渡辺副会長…雰囲気にはいいのでしょうか。

栗田副会長…悪い雰囲気ではないですね。

〔人口減少対策、医療費の無料化〕

渡辺副会長…あと北斗市の場合は、医療費は高校生まで無料です。他の地域から見ると、北斗市に若い人が住めば生活費が楽になるといって考えを持っています。

宮崎会長…そういう面では、北斗市では働いていても母子家庭は母親も医療費がかからないのです。

栗田副会長…アパートを探したり1戸建てを探したりということになるでしょうから、建設業と無関係ではないです。

渡辺副会長…そうですね。それから人口減少は、北斗市の場合、他から見ると同じ現象でも少ないと感じます。

栗田副会長…先ほど数字をお聞きした限りでは人口減少の程度は少ないです。医療費の無料化は人口減少対策として効果があります。

渡辺副会長…無料化は一番早かったのではないかと思えます。上磯町のとときから行っています。栗田副会長…上磯町時代からですか。

渡辺副会長…小学生まで無料で行っていました。

宮崎会長…そのとき町長に中学生で医療費無料化の予算はどのくらいか聞いたのですが、上磯町3万人の人口で1,000万円ぐらいだそうです。小学生は医療費がかかりますが、中学生になったら病院にかからないので、1,000万円ぐらいですという話はしていました。今は高校まで無料化しています。福祉的な施策は充実しています。最近では、近隣の町でも小学校までの医療費無料化が中学校や高校までになったりしています。

長谷川副会長…道路の利便性もここはいいです。  
渡辺副会長…あとは企業です。企業がもつと入ってくれば雇用の方も生まれ変わってくると思えます。

栗田副会長…しかし、太平洋セメントがありますね。

渡辺副会長…太平洋セメントは昔からある企業ですから、それ以外の企業にも来てもらいたいと思います。しかし、太平洋セメントも職員は減っているみたいです。そういう大手企業が

もつとあれば雇用も生まれると思います。

宮崎会長…太平洋セメントも機械化する前は職工さんが500人ぐらいで、社宅もありました。今はもう全部なくなりました。

渡辺副会長…前から見たら正社員はかなり少ないでしょう。

栗田副会長…新しい企業立地は今あまりないのですか。

渡辺副会長…ないです。

〔商工会活動、プレミアム商品券実施〕

栗田副会長…商工会の活動で、地方創生のプランを町と一緒にやって作ることがありますが、どんな状況ですか。

宮崎会長…総合戦略ですね。それは市で作成します。

高井事務局長…商工会も経営発達支援計画を、市と連動しながら作ります。経営指導員が作成しています。

栗田副会長…来年の3月まで作るのですね。

宮崎会長…具体的に何をやるかはなかなか大変です。今年はプレミアム商品券を発行しました。栗田副会長…プレミアム商品券はもう終わったのですか。

宮崎会長…終わりました。

栗田副会長…全部使い切りましたか。

宮崎会長…はい。

渡辺副会長…北斗市の場合はプレミアム商品券も、一般の商店と大型店を分けています。ほとんど大型店に流れますので、地域の商店で買える券と半分半分に分けて販売しています。そうすると小さな商店には60%ぐらい流れます。最初に発行したときは、全部で使えることにしたので約90%は大型店で、一般の商店はぜんぜん潤わないのです。それで今は分けて、ふれあい商品券は成功でした。完売率も意外に良かったです。

栗田副会長…ふれあい商品券は地域商店向けですか。

渡辺副会長…はい。

栗田副会長…プレミアム商品券は商工会が中心になって発行するので大変だったのではないですか。

宮崎会長…そうです。それぞれの自治体でやり方が違います。

高井事務局長…北斗の場合は商工会が実施主体となってやりました。

渡辺副会長…以前にも、市のほうから補助金もらって何回もやっています。商工会もいくらか出して、5,000万円ぐらいでやっていますから、意外と慣れていきます。良い方にと考えて、

今回は大体1週間ぐらいではほぼ完売しました。少し余ったので、ちょうど良かったと思います。

栗田副会長…1週間で完売はいいですね。

渡辺副会長…足りなくなっても大変です。税金を使うので、みんなに平等にいかないといけません。今回は残りましたから、みんなに行き渡ったということです。だから大成功かなと思えました。

宮崎会長…人口からみて、何パーセントの人が買ったかです。一人5枚まで買うことが出来たので、北斗市はプレミアムつけまして2億5,000万円でした。

渡辺副会長…1世帯5万円でした。函館は一人10万円まででしたが足りなかったという話聞きました。それで苦情が来たということです。プレミアは20%ですが、2時間並んで買えなかったとか。それで買えなくなることが問題なのです。

栗田副会長…買えなくなると不満が出ますね。

渡辺副会長…税金は平等に使うことが必要ですから不満が出ます。市町村によってやり方はぜんぜん違います。

栗田副会長…北斗の商品券の場合は1割だったのですか、2割でしたか。

宮崎会長…2割5分です。

栗田副会長…それは大きいですね。

渡辺副会長…ただ1世帯5万円ですから。

宮崎会長…ほかは30%のところもありました。

渡辺副会長…七飯は30%ですが、売れなかつたです。一人1万円なので3千円しかメリットないので、買わない人もいるのです。

長谷川副会長…一人当たりの購入金額を多くすればよかつたのです。

〔商工会会員数の減少、建設業と商工会〕

栗田副会長…商工会の会員増えていますか。

宮崎会長…減っています。倒産はあまりないですが、高齢化で廃業です。

栗田副会長…後継者難ですか。

宮崎会長…子どもはいるけど後継者はいないとかあります。

栗田副会長…跡継ぎにさせないのですね。

宮崎会長…そうです。させないというか、しないです。

渡辺副会長…部会は3つありますが、工業部会のほうが商業より若干多いのです。

栗田副会長…商工ともうひとつの部会は何ですか。

宮崎会長…サービス部会です。全体の会員数750ですが、合併時は、860名ぐらいいました。10年経ったら750名です。毎年新規会員はいるのですが、入会が20名なら、退会が30名とかで徐々に減ってきています。サービス部会は100名くらいです。

渡辺副会長…会員は頑張っているのだけど、なかなか増えません。

宮崎会長…そんなことから建設業が一番元氣です。

渡辺副会長…建設業が増えてきたということは、もともとは商業がやはり多い商工会ですが、商業が減って、工業が逆転して会員数が増えています。

長谷川副会長…商店は、高齢化しているから、イベントなどは建設関係にお願いして、お手伝いしていただいで一緒にやっています。

栗田副会長…それは建設業の役割とっています。さらに、公共事業を請け負っていたら尚更やらないといけないと思います。

渡辺副会長…他の町に行くくと建設協会の会員は市の仕事をしている人が中心になっていて、イベント、寄付など協力してどんどんやってくれますが、当然のことだと思えます。

栗田副会長…オーナー企業はすべてトップの意思ですから、その意思が大事です。

栗田副会長…750会員はすごい数です。サービスはどういう業種になるのですか。  
宮崎会長…保険、床屋、パーマ、スナックなどいろんな業種があります。

栗田副会長…物を売らない人たちですね。

渡辺副会長…そうです。

栗田副会長…会費どのくらいですか。

宮崎会長…会費は一般会員月2千円です。入会のときに3千円です。

栗田副会長…そうですか。

栗田副会長…入会するにはあまり抵抗はないということですか。

宮崎会長…しかし、組織率は落ちていきます。今は50%ぐらいしか入っていません。

栗田副会長…入ってもメリットがないと考える人が多いということですか。

宮崎会長…そうです。建設関係でも大きいところは、直接会計事務所へ行きます。あとは労務

管理士に頼むと商工会は必要ないとなります。

栗田副会長…そのサービスを受けなくてもいいということですね。

宮崎会長…建設関係の人で労災の手続きなどを商工会でやる人は必ず会員になります。最近

市長が積極的に入会を進めてくれます。

公共事業のストック効果を考えてほしい

宮崎会長…北海道開発局へ行ってきました。道路を作ることは、今までは経済対策と言ってい

ましたが、そうではなくたとえば道路は物流とか緊急医療で必要など、ストック効果を考えてほしいと話をしました。

栗田副会長…今は公共事業のストック効果を予算の説明にしています。これからもそう考えていただきたいと思います。

（観光協会について）

渡辺副会長…今の高谷市長もイベントや会合がある度に、商工会の会員になってほしいとか、観光協会などにも協力してほしいなどを建設協会に積極的にお願いしています。

栗田副会長…観光協会は商工会長が会長ですか。

宮崎会長…いや、違います。分けています。

渡辺副会長…観光協会も今年一般社団法人にしました。

宮崎会長…そうです。新幹線の開業を機に法人化しました。

渡辺副会長…商工会で事務局やっています。それを今回分けたのです。

栗田副会長…観光協会長は同じ商工会の会員の方ですか。

宮崎会長…理事です。

栗田副会長…活動内容が違いますから、観光協会と商工会を分けたほうがいいと思います。

宮崎会長…今の協会長は菓子製造業です。直接観光に関係した人たちでやったほうがいいと思います。

〔商工会活動、イベント開催〕

栗田副会長…イベントは市や農業と一緒にいうものもありますか。

宮崎会長…毎週のようにあります。

栗田副会長…それは力があります。小さい町ですと年に3回とかくらいしかやらないところもあります。

宮崎会長…春5月の桜のまつりから11月の鮭まつりまで、もうすごいです。

栗田副会長…商工会と市と農協も一緒に入ってやっていますか。

宮崎会長…そうです。収穫祭は農協と一緒にやります。

栗田副会長…収穫祭は完全そうですね。

渡辺副会長…さけまつりは漁組が入らないとできないです。

栗田副会長…農協、漁協と一緒に実施することを嫌がったりしないですか。

渡辺副会長…いや毎年決まっていますので、問題はありません。

宮崎会長…女性部の皆さんも来て一緒にやっています。

渡辺副会長…仕事の割り当てがもう決まっています。

栗田副会長…歴史があるのですね。

宮崎会長…牧場まつりで、きじひき高原を観光で売り出そうとしています。

長谷川副会長…市が主体ですが、実行委員会を作って実施しています。

宮崎会長…そこにそれぞれ商工会、農協などが入っています。

長谷川副会長…漁組も入っています。

渡辺副会長…合併したので上磯町と大野町の祭りがあったので、お祭りは多いです。合併当初はそれぞれ全部残して1回目をやって、それから一本化しています。例えば、商工観光まつりと、八郎沼まつりはどっちもけっこう大きくやっていましたが、それを一本化して、もつと大きくやろうとしています。

栗田副会長…お話を聞いていくと漁組、農協と一緒にやっているところは意外と少ないです。一緒にやることを嫌がると聞きました。

長谷川副会長…どこでもお互いに貸し借りがあるから一緒にやっていると思います。

栗田副会長…なるほど。一方でそういうことも嫌がる理由らしいです。あまりうまくいかないで、一緒にやらないといけないとよく聞きました。農商工連携、6次産業化を進めようとしての話ですが、実際は難しいという話をお聞きました。北斗市は一緒にできるのでいい

です。イベントのときは建物を造るには建設業の人が手伝わないのでか。

渡辺副会長…イベントでは市役所と商工会でテント張りです。ステージは、大野にも会場の八郎沼にあります。

宮崎会長…一番大きいまつりが北斗市夏まつりですが、各部署で役割を決めて、テントはどこ、漁組はこれと全部作業分担を決めてやっています。昔は北寄貝を売っていましたが、この頃は売らなくなりました。1キロ千円くらいで売ったのです。

栗田副会長…どうして売らなくなったのですか。採れなくなったのですか。

宮崎会長…それもあるのでしょうか。

砂原事務局長代行…こちらのホッキ、シャコなど、有名です。

渡辺副会長…シャコも採れています。ただ地元の人には手に入らないです。

栗田副会長…地元ではなくて、どこに売っているのでしょうか。

渡辺副会長…寿司屋にはありました。

栗田副会長…商店ではなくて寿司屋に行くのですか。

渡辺副会長…寿司屋に行ったら前浜のシャコができました。上磯でシャコが採れるのを知りませんでした。地元で有名だけど生産量が少ないので、全部寿司屋に行くのでしょうか。

宮崎会長…それから赤貝は築地にまつすぐ行きます。

砂原事務局長代行…赤貝も生産量が少ないのですか。

宮崎会長…赤貝は数年に一回くらいしか採れません。毎年採れないのです。

砂原事務局長代行…アサリとかシジミも採れるのですか。

渡辺副会長…アサリは今採っています。

栗田副会長…ホッキはケタでとるのではないのですか。

宮崎会長…違います。

渡辺副会長…突くのです。

栗田副会長…挟むのですね。

渡辺副会長…昔ながらのやり方です。

宮崎会長…苦小牧と比べたら漁獲量はぜんぜん違います。

砂原事務局長代行…北斗で大根は有名なのですか。セブンイレブンのおでんでは、ほとんどこ

こが産地とありました。

渡辺副会長…工場があるのです。セブンイレブンの大根は、ほとんどここで生産しています。

宮崎会長…セブンイレブン専門のサングリーンという会社です。

渡辺副会長…大根を持ってきて24時間操作で作っています。

砂原事務局長代行…90%ぐらいはここで作ると聞きました。

渡辺副会長…おでんの大根をほとんどここで作って全国に出しています。

栗田副会長…大根工場ですか。

渡辺副会長…おでんの大根工場で、あれは素晴らしいです。皮の部分もミンチにして、切り干し大根も作っています。すごいと思いました。

栗田副会長…全部屋内ですね。

渡辺副会長…はい、屋内工場です。

〔人口減少対策について〕

栗田副会長…人口減少対策は市と一緒にやっていることはありませんか。

宮崎会長…特に人口減少対策としてはありません。日本全国の首長はどうしたらいいのかと考えるているのではないですか。

栗田副会長…首長さんに話を聞きましたが、昔から人口減少はあってその対策はいろいろ打っていて、急激に人口が減るのは大変ですが緩やかに減っていくのはこれは仕方がないというお話でした。

渡辺副会長…子どもがいません。子どもを作らないですね。

栗田副会長…そうですね。

渡辺副会長…それが今一番の問題です。結婚はしているが、子供は一人とかです。子供が3人、4人の家庭はないです。

栗田副会長…最近子供が3人という家庭は増えています。若い人たちの中では、3人目の保育園が無料になったりするので、そういう政策で売っている町でないと住めないようですよ。

宮崎会長…給食費も2人目が半額で3人目が無料などは市でやっています。

長谷川副会長…それから親元から通ったりしていて結婚しないです。

渡辺副会長…子供が3人いないと増えていきません。

宮崎会長…子どもを作れる環境、育てる環境を作ってやらないといけません。若い人に対しては環境づくりです。

渡辺副会長…生活力があればいいのですが、今の若い人の考え方を聞くと、趣味などにお金を使っています。

栗田副会長…地元にいると収入の問題もあるのですよね。働く場所と収入額ですね。

渡辺副会長…今の人達は昔と違って働かなくなったのではないですか。労働基準法もあるのでしょうが、昔は日曜日でも仕事があれば働いていました。

渡辺副会長…使うより収入が倍になった方が良くという考えでしたが、今は違います。

「労働者という言葉は印象がよくない」

渡辺副会長…建設業で気になるのが、労働者という言葉の色んな場面ですごく使います。その労働者という言葉が気になります。もったいい言葉はないのでしょうか。特に建設業の場合、労働者と呼ぶので若くてもそういう仕事に就きたがらないと感じます。

砂原事務局長代行…確かに労働者とか作業員とか言っています。

渡辺副会長…そういう言葉を平気で良く使います。もったいい言葉に変えていくことが必要です。

栗田副会長…最近、職人系は建設技能者と言うようになりました。技術者と技能者という言葉の方に変わっています。

渡辺副会長…役所から来る文章を見ても、労働者という言葉を使っています。

栗田副会長…言葉の持つ印象の問題も大きいです。

渡辺副会長…印象の問題はあります。

「建設業の人材確保・育成について」

栗田副会長…建設業で新しく採用することは順調にいつていますか。

渡辺副会長…今、職人技術者、大工、左官は減っています。若手がないということらしいで

す。若い人と言うと60代です。仕事ができる人は、だいたい60歳になってきています。それで仕事は忙しいというより、人がいないから結果的にちょうど良くなって来ているという感じもします。

栗田副会長…そうは言っても60代では、これからいくら働いても10年です。

渡辺副会長…私は、建築会社経営で一般住宅も作っていますが、今言われていることは、これから住宅も大工さんを使わないで造る家造りをしていかなないと生き残れないと言っています。

栗田副会長…パネル化のようなことですか。

渡辺副会長…はい、当然パネルもやっていますが、それでも大工を使います。もっと簡単に造れる家造りをすれば生き延びられると言われています。

渡辺副会長…私はアメリカ住宅という輸入した材料で住宅もやっています。外国という建築屋と日本で言う建築屋はぜんぜん感覚が違います。アメリカでは、例えば技術者として、技能をすごく周りが評価します。医者までは行かないですが、そのぐらいの評価をしてくれるのです。

栗田副会長…マスター制度ですね。

渡辺副会長…そうです。日本は大工を職業として下に見ますが、アメリカは上に見ます。

栗田副会長…そういうふうにしていかないとだめですね。

渡辺副会長…そうです。確かに物づくりするので相当技術もいるし、頭も使います。そういう人をネクタイしている人達が馬鹿にすることがおかしいと思います。これが日本の在り方かと思つて残念です。

栗田副会長…実際そうですね。

渡辺副会長…そこを変えない限り、なかなか人は育たないし、就職もしてくれません。ましてやこれからパソコン、コンピュータが入っているので、机に座つて楽してお金をもらいたいという気持ちになります。昔は大学出ると言つたら、それなりに頭が良くなかつたら行けなかつたですが、今は少子高齢化で何も苦労しなくても大学にいけます。

栗田副会長…金さえあれば行けますね。

渡辺副会長…大学出て大工はししないとあります。スコップ持つて土建屋をやることはありません。

宮崎会長…それでは外国人を連れてくることになるのですかね。

栗田副会長…建設業はそういう方向にはいけません。

渡辺副会長…そうです。その方向にはいきません。

栗田副会長…緊急的に必要なら別ですけど、研修制度ですから無理です。

渡辺副会長…技能者の安い賃金の問題もあると思います。もっと単価を上げてやらないといけません。机に座って冷房の入った部屋にいる人より、給料が安いのでは就職はしません。役所の工事でもっと賃金を上げなければいけないと思います。賃金上げるためには予定価格を上げた発注をしないとイケないと思います。

栗田副会長…だいたい労務単価は上がりました。3年間連続で上がりましたが、それでもまだまだ低い気はします。

渡辺副会長…そこで何が悪いのかというと、設計屋の設計の仕方が悪いのかなと思います。安いものを作るというのが設計屋の考えです。そうすれば自分の誇りにもなるし、いい設計をしてくれたと言われます。そうではないと思います。純経費の積算をした見積もりを出してもらわないといけません。

栗田副会長…それはよくないことです。

長谷川副会長…市の積算システムがありますが、それはお金を払って道に頼んでいますね。

栗田副会長…はい、道にやってもらっています。

栗田副会長…結局公平公正が役人に課されますので、仕方ないところはあります。ただ今おっしゃられたように必要な経費は積算しておかないといけないのですが、受注した感覚として必要な経費を見ていないように感じるので。

〔経営審査事項と会社の実力評価について〕

渡辺副会長…入札参加資格をもらうために経営審査事項を出しますね。その後に受注すると、会社の経審の点数と実際の実力の差が分かりますので、経審評価をもっとよくしないとけないと思います。

栗田副会長…もうだいぶ前ですが、経審を導入したとき、建設会社の評価は相対的にできるよ  
うになりました。導入以前はよくわからなかったです。

渡辺副会長…そうです。

栗田副会長…本当は、実力と経審点数との差を行政と十分話して、会社の体質改善をしないと  
いけないと思います。

渡辺副会長…そうです。行政は何も違反しているわけでもないし、その差はしようがないとい  
います。

栗田副会長…はい、違反はしていませんが、いい方ではないです。

栗田副会長…経審点数は、この会社はこういうレベルまであることの証明です。先ほどアメリ  
カのお話をされましたが、評価ができる形で資格を連動させてやっていくことが必要と思  
います。アメリカやヨーロッパは組合になります。左官組合、大工組合があり、その中で見習  
い新入社員から始まって、マイスターまで行くシステムです。日本でもそんなことを見習っ

て作り上げないといけないと思いますが、何十年もかかります。

渡辺副会長…はい、かかります。それと人が育たないということがあります。昔は弟子になって住み込み食べさせてもらって、給料もらうために仕事を覚えるシステムがありました。今はそのようなシステムは機能していません。

渡辺副会長…技能的な仕事ができないので困ります。

栗田副会長…今は採用して、それから会社でお金を出して研修させる、それで覚えさせるやり方です。工業高校出てきても現場ではすぐ使えないので、3年間くらい研修期間みたいに使っているようです。

渡辺副会長…補助金をつけてもらって人を雇って、それで仕事を覚えたら他の会社に行った記憶があります。

宮崎会長…よく言われます。新卒は、3年以内に半分以上やめるといわれています。

栗田副会長…労働局のデータはそうなっています。

宮崎会長…新卒の雇用お願いしますとよくハローワークが来ます。商工会は大きい会社ありますから、どういう形でもいいから教育訓練を受けて基本を覚えた人を雇いたいぐらいです。という話をしました。

栗田副会長…今は雇ってから研修させるスタイルに少しずつ変わってきています。給料分を負

担するなどの補助金が出ます。そうしないと絶対若い人は育たないということを建設業界もやっと目を向けられました。それまではまったくそんな気はなかったですが、ここ2、3年変わってきました。

栗田副会長…どんだんいなくなって困ってきます。

栗田副会長…建設業界が人を採用することや育てることに目を向けなかった理由の一つには仕事もなかったこともあります。

〳土木業は市役所とともに考えていくこと〵

栗田副会長…北斗市のお話聞いていくと、豊かですね。そういう気がします。

渡辺副会長…はい、そうですね。

宮崎会長…豊かかっていうか、良くもないけど悪くもない感じですよ。

栗田副会長…仕事もそれなりにあって一番いいことではないですか。

渡辺副会長…土木業は結構市に依存せざるを得ません。

栗田副会長…民間で土木工事はないですからそれはしかたがないことです。仕事が広く行き渡るように、発注者が予算と入札契約で配慮をしてくれないといけないと思います。例えば、同じ時期に一度に発注しないとか、会社のレベルに合わせて分けて出すのかなどを考えて発

注してもらいたいと思います。

渡辺副会長…はい、もつとこまめにということですよ。要するに単独で大きく発注するよりもJ  
Vを応札対象にするとかです。

栗田副会長…そういう工夫をして、談合という意味ではなくて市に必要な建設業を市でコント  
ロールしていくつもりで考えないと必要な建設業は残らないと思います。

渡辺副会長…行政がもつと考えてほしいということですよ。

栗田副会長…はい、そうです。

宮崎会長…すべての業界で、景気が悪いというか、昔のような旨みはなくなったということ  
ですね。

栗田副会長…そうです。一つの利益が非常に薄くなっています。

宮崎会長…そうですね。

栗田副会長…長時間お話どうもありがとうございました。

平成27年9月25日金曜日 10:00～11:00 於：標津町長室

金澤 瑛 標津町長

佐竹 和己 標津町建設水道課長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

村井 順一 一般社団法人釧路建設業協会理事

栗田副会長…金澤町長には、建設業の他、地域における課題や、普段、お考えになっている地域をどうするかというようなことを含めてお話いただければと思います。

〔建設業は地域の基幹産業と思っています〕

金澤町長…私は、本町にとって建設業は、農業、水産業に並ぶ地域の基幹産業と言っています。

地域における原動力は、人、物、金です。人は雇用です。物を作るのは、まさに建設業です。

金は、従業員の払う給料や作業員に支払われる給料、工事に必要となる資材や燃料の調達などに伴って、幅広く地域経済に貢献しています。税金も町財政に大いに貢献してもらって

ます。

ただ、従事者は、季節変動やその年のバラつきがあります。標津町は多いときは、社長から従業員まで約370人が働いていましたが、今現在は、約270人ですので、この変動は大きいです。これを減少しないように安定していかなければいけません。

人口減少は大きな問題です。ここに残る人が心豊かに住めればいいという考え方もありますが、やはり人口の絶対数がいなければいけないと思います。よく規模の経済というように、経済は人口を原点として決まってくると思います。従って、人口の規模を確保することが必要ですが、基幹産業の酪農と漁業には働く人が来ない。さらに担い手・後継者不足が大きな問題です。

栗田副会長…なるほど。働き手がないのですね。

金澤町長…建設業関係も同じです。かつては地元優先で雇用し、足りない時は町外から雇用していた時期もあったのですが。しかし、このような厳しい状況の中でも建設業界は、人、物、金すべてに大いに貢献してくれています。

たとえば、冬祭りを毎年やっておりますが、標津市街と第2の市街地区である川北市街とで交互に開催します。川北市街で行う年は、地元の建設業者である上田組の敷地内で、同社を中心に雪の運搬から大滑り台や雪像づくりなど、多額の費用をかけてすごい仕掛けをしてくれます。その他にも道路清掃や草刈りなど、みなさん本当に一生懸命地域に貢献してくれ

ています。

建設業若手の会、S K研究会は活発に活動している

金澤町長…中でも、特筆すべきは、標津町にS K研究会という建設業の若い人たちの集まりがあり、今15社17人で構成されています。東日本大震災の時には、標津建設業協会が岩手県大船渡市に仮設風呂を設置するボランティアを行いました。このときはS K研究会のメンバーが中心となり現地で活動しましたし、その後も活発な活動をしています。

栗田副会長…東日本大震災に行つて風呂を支援したのですか。

金澤町長…仮設風呂、桜の木を植える、お寺を直すなどいろいろやっています。

村井理事…図書館を造つて本の寄贈もしています。

金澤町長…すごいですよ。講師を招いてこれからの地域づくりをどうするか議論するということも行っており、私も講師で呼ばれました。その他、子供たちを対象に工事現場見学会を開催し、キャリアアドンプに子供たちを載せて工事現場を見学して建設業に興味を持ってもらい、担い手を育てていこうという取り組みも行っていきます。

栗田副会長…それは、設立してから古いのですか。

金澤町長…できたのが平成24年で新しいですが、活発旺盛にやってくれています。

（人口減少対策、住宅改修補助、保育園幼稚園補助、医療費無料化）

栗田副会長…町全体の人口は減っていますか。

金澤町長…はい。今標津町は5、498人で、まだ減っていくと思います。

栗田副会長…人口減少対策で何か特別な対策はやっていますか。

金澤町長…『人口減少時代に挑戦する政策パッケージ』と銘打ち、様々な政策を行っています。

例えば、子どもが生まれたら、出産祝い金として1人目は5万円、2人目は10万円、3人目以降は50万円差上げます。

栗田副会長…なるほど。

金澤町長…建築関連では、住宅建設費用として200万円を助成します。地元業者を使えば50万円加算します。町外から来てくれる方にはさらに50万円加算で合計300万円を限度に助成します。

栗田副会長…そうですか。300万円もらっている人もいますか。

金澤町長…います。昨年度は、中標津に建てようと思ったが標津に建てますと2軒建てていたいただきました。その他、住宅リフォームに対する助成も50万円を限度に行っています。

栗田副会長…しかし、相当予算が要りますね。

金澤町長…はい、今まで懸命に貯金をしてきましたから、何年も持ちます。

栗田副会長…そうですか。

金澤町長…お金はかかりますが、保育料と幼稚園も無料にしています。これに1番予算がかかります。ご夫婦で幼稚園、保育園に子ども1人ずつ入れると、共稼ぎの世帯が多いですから所得によって保育料が高くなりますが、標津に来たらゼロです。これはすごく大きいです。

栗田副会長…すごいですね。

金澤町長…病院の入院通院も高校生まで無料にしています。標津病院では、お医者さんが4人体制で安定的に確保されています。標津高校の存置対策として、町外から通学する生徒も対象としており、なおかつ通学費も全額支給していいしますので、中標津町から大勢通学します。

〈人口減少対策のパッケージ化〉

栗田副会長…すごく充実していますが、他の周辺の町も同じようなことをやっているのですか。

金澤町長…標津町が1番先行していると思います。

栗田副会長…やっぱりそうですか。

金澤町長…町ごとにバラつきはあると思います。こうやってパッケージでやっているところはあまりないと思います。

栗田副会長…今まで色々話はお聞きしましたが、パンフレットまで作っているのは初めてです。少しは効果が出ていますか。

金澤町長…はい。先ほども申し上げましたが、住宅2軒は中標津に建てる予定であったのが標津に建てました。あるいは、隣町に転居予定であった若い夫婦が留まりました。また、逆に標津に転任してきて、今検討に入っていますという話もあります。

まだ圧倒的な広がりが見えていないわけではないのですが、人口減少に歯止めがかかっていくものと思っております。

栗田副会長…そういう話があればいいですね。問い合わせも相当あるのではないのですか。

金澤町長…発信の仕方がまだ万端に行き渡っていません。生で発信するのが1番だと思ってるのですが、そう簡単にはいきません。やはりソーシャルメディアなどを使って、これからやろうと思っております。

栗田副会長…そうですか、しかし住宅に200万円で、町内の建設業者使うと加えて50万ですね。それでは町内の皆さんは使いますね。

金澤町長…それが、そうでもないのです。

栗田副会長…そうでもないのですか。そうか、ダイワハウスなど大手のハウスメーカーを使うのですね。そちらに先に囲い込まれているのですか。

金澤町長…彼らは営業力もあります。

栗田副会長…はい、営業力ですね。囲い込みはそうやって最初から捕まえますね。P Rが不足しているわけですね。しかし建築をやっている地元の建設会社がこれを逆に自分たちでP Rすればいいのですね。

金澤町長…そうです。町任せではなくて自分たちでP Rしてもらえばいいのです。自分たちでやってくさいと言っています。ただ、リフォーム助成の50万円の方は結構来ています。これは地元業者限定です。

栗田副会長…リフォームはそうですね。

佐竹課長…今年は、予算をオーバーして補正を組まなければなりません。

栗田副会長…すごく引き合いがあるのですか。

佐竹課長…現在でもう42軒くらいきています。

栗田副会長…それは締め切りがなくていつでも受け付けるのですね。今年は予算が無いから来年というようなことですか。

金澤町長…予算は少ななくていいので補正で対応しています。あまりにもたくさん来るようでは、来年ということもあります。

栗田副会長…そうすると、建築の人たちには少し仕事が出てくることになりますか。

金澤町長…平成26年度は、リフォーム件数が30件、工事費ベースで約4,900万円でした。住宅取得とリフォーム助成の効果は、町外転出者に歯止めかけることです。今年度も政策の効果で、中標津に建てる予定であった人が標津に建てるのが3軒あります。

住宅新築は、川北市街が多いのですが、川北は、標津町の第2の市街地で中標津には車で15分です。中標津だと坪約6万円の土地が、川北では約1万円で買えます。

100坪用意しても100万円です。住宅に2,000万円かけるとして、住宅建設に300万円近く補助をもらえ、土地が6万円と1万円の差で、100坪であれば500万円安いですから、トータルで800万円の差は大きいです。

さらに、子供たちがいれば、幼稚園、保育園、保育園料、それに医療費が無料です。親子2人に幼稚園、保育園と子ども1人ずつのケースで比較しましたが、年間のお金の差はすごいです。

栗田副会長…それでは、周りの町長さんからあまり1人で走るのをやめてくださいと言われるのではないですか。町長さん同士になるとそれくらいの話はしますね。

〔基幹産業の酪農、水産加工は人手不足〕

栗田副会長…基本的には先ほどのある程度人口の絶対数がないと基幹産業の担い手がうまく集まらないという話ですね。酪農、水産加工などは、今でも全体に不足気味ですか。

金澤町長…そうです、完全に不足しています。

栗田副会長…完全に不足しているのですか。

金澤町長…人口が少なくなっても心豊かに暮らしていけばよい、絶対増やすんだということではないやり方もあると言う方もいますが、人口が少ないと基幹産業に働き手が来ないので。

栗田副会長…そうですね。ある程度の公共サービスするためには、逆に人がいて税金を少ないが貰って、それでまわっていくていかなんといけません。ある程度の人口が必要という考え方をお聞きしたのは金澤町長さんが初めてです。

人口は減るといけないとは皆さん言われますが、ある程度いないと産業が回らないという話をハッキリおっしゃられたのは初めてです。私もそう思っています、そうしないと中国人、ベトナム人などを外から人を連れてくればいいとなります。しかしそれは2年間、3年間です。また人が変わって一から訓練することになります。それよりは町内にいる人をしっかり確保することがいいということです。

金澤町長…安定的に確保することです。

栗田副会長…雇用として抱えておくほうが産業としては安定します。

金澤町長…鮭漁は、今まさに最盛期ですが、鮭を加工する人手が全然足りないのです。「カスガのシャケバイ」というNHKテレビの30分番組で本町が紹介されましたが、バイクで、奄

美大島の暖かい地方からさとうきび処理などのアルバイトをしながらずっと北へあがってくるのです。それで最後は標津の水産加工のバイトをします。水産加工はお金になるほうです。バイクで来て鮭のアルバイトをする、鮭バイク、鮭バイトという意味で鮭バイといひます。何百人にもなるのです。ところが、東日本大震災と東京オリンピックの影響で、途中で留まるようになりました。人手不足に拍車がかかり苦戦しています。

栗田副会長…そうやってバイトしに来る人を鮭バイと言っているわけですか。バイクで日本中南から来て秋鮭のところまでやってくる人のことですか。

〔水産加工による付加価値向上〕

栗田副会長…そういう意味からも、変動が大きいから町内の人をしっかりと確保していくことな  
りますね。

金澤町長…願わくは、その期間だけではなく数年間、仕事をやってもらえ人を確保したいです。月25万円で年収300万円くらいになります。それで一家を構え人口の増加に繋がって  
いけるようになればいいと思います。今は、季節雇用ですから一家を成すところまでいかな  
いのです。宿題はそういうことです。通年雇用で一家を構えられる所得を得る形態にしていき  
たいのです。しかし、水産加工で一年間扱える資源があるか、ストックしておける資源があ

るかということになるとまたこれは大変です。さらに高次加工もしていかなければならないのです。

栗田副会長…付加価値は昔から言われていますがなかなかうまくいきませんか。

金澤町長…いかないです。

栗田副会長…この辺では缶詰はやってないのですか。

金澤町長…明治時代には大きな缶詰工場があり、鮭、マス、ホッキ貝の缶詰を盛んに製造していました。現在は、民間の缶詰工場はありませんが、町営の食品加工研究施設『ふれあい加工体験センター』が、缶詰を含めた技術研究などを行っています。地元企業に技術指導しながら製品化して、これでいけるとなれば町から手が離れて、自分たちでやってくださいという事です。

栗田副会長…まだ製品化までいっていないのですか。

金澤町長…いや、ようやく1社出て雇用にも結び付いています。

栗田副会長…そうですか。

金澤町長…そこは新潟の村上市に加工した鮭をほとんど送っています。村上市では、その鮭を最終加工して宮家に献上しています。

栗田副会長…そうですか。こちらから鮭を送って村上で加工して化粧しているということですか。

か。

金澤町長…標津で原魚から1次加工、2次加工をしています。

栗田副会長…それでは向こうで何するのですか。箱詰めして化粧して、村上と名前付けているのですか。

金澤町長…最終の味付けや小分け包装などをして、新潟の販売店舗で売るわけです。標津町内で販売しないのは、契約の問題です。

栗田副会長…契約販売ということですか。そのかわり、確実にそれなりの価格で買いますということですね。

金澤町長…そうです。

栗田副会長…それは知らなかったです。献上の鮭を作っているわけですね。

金澤町長…そうです。それから標津町はイクラが最高です。

村井理事…上田組さんですね。

金澤町長…埼玉県のイクラどんぶりです。

村井理事…埼玉で、商売やっています。

金澤町長…二ヶ所です。『いくら井のうえだ』でやっています。

栗田副会長…そうですか。うまくいっていますか。

金澤町長…うまくいっています。フードコートに9店舗入っていますが、上位3番目で安定して推移していると聞いています。

「鮭ぶしの製造、鮭とイクラの品質と目利き」

金澤町長…標津町は、もうひとつカツオぶしではなく鮭ぶしを作っています。田村さんという建築会社が、4年前くらいに商品化してかなりブームになっています。

栗田副会長…そうですね。1本の鮭ぶしもあるのですか。  
金澤町長…あります。

栗田副会長…すごいですね。口コミで、これすごいというのが出てくると少しずつ変わりますね。

金澤町長…鮭ぶしは、大手の菓子業界のブルボンやカルビー、珍味業界の江戸屋、醤油業界のいんべんなどが大変興味を持っています。

栗田副会長…ブルボンといったらお菓子ですね。お菓子で鮭ぶしを使うのですか。

金澤町長…どうなのだろう。お菓子業界は新しい商品開発にやっきになっていて、素材の新鮮さ、新鮮さに魅力があるのでしょうか。先行されたら負けですから、俺も俺もとなるのでしょうか。そこで問題が衛生管理です。食品ですから、衛生管理をしっかりといかないと事故が

起きたら大変です。

栗田副会長…そのくらいになると、ハサップ（H A C C P）は標準になっていないのですか。

金澤町長…大手企業の一部がハサップ（H A C C P）を取得していますが、まだ取得率は低いです。節の原料となる魚は、油やけによる品質低下を防ぐため、脂肪分の少ない魚を使います。栗田副会長…ほっちゃれでないとかダメなのですか。

金澤町長…ほっちゃれは油が抜けていますから最高です。

栗田副会長…今いろんな基準、例えば北海道の基準などは作っていますが、製品に合った鮮度の良い原料の確保が重要です。

金澤町長…標津町では、水産物の品質向上のため『標津町地域H A C C P』の取り組みを行っており、鮭を海から網でとる、船にあげる、氷水が入った船倉にいれる、氷水を張って体内温度をあげないようにする、それを陸に持ってきて、そこにも氷水、タンクを用意して網からあげるのですが、地面に置くことにはないのです。

食べるものを地べたにおかない、体内温度を上げないが、ポイントです。新鮮な、細菌のついてない魚が扱われていることが大事です。イクラは作るとある量を冷凍して出回ります。普通は一回解凍すると使い切ってしまうわけにはならないのです。しかし、標津町のイクラ

は、冷凍解凍を3回繰り返しても品質が落ちません。つまり細菌管理と鮮度管理がしっかりされている新鮮なイクラということです。

栗田副会長…普通、冷凍して解凍するとつぶれて中身が出てきます。

金澤町長…ドリップも出でます。

栗田副会長…それが少ないわけですか。

金澤町長…そうです。決して硬いわけではなく、口に入れたらとろけるということで、そういった魚を選ぶのが難しいのです。銀ざらぎんに光っている鮭は熟成されていなくて、筋子は卵を膜で囲んでいるわけですから、粒が逆にしつかりしすぎています。

金澤町長…イクラはその膜から取って一粒一粒にしますが、これが硬すぎたら口に入れても、膜が邪魔になって口に残ります。いいイクラは口に入れたらとろけて噛まなくていいというものです。あまりもう成熟しすぎると、ぐちゃぐちゃになって、もうダメなのです。粒も揃っていないですし、潰れたような状態で、食べても美味しくありません。それは一級品ではないです。栗田副会長…メス鮭を外側から見たときの目利きの問題ですね。

金澤町長…黒っぽくなっている鮭はBメス、Aメスは光っているのです。Bメスは黒くなってきて腹が成熟しています。それが逆にAメスの光っているのが1番美味しく食べられるかと思つたら、成熟したイクラが入っているBメスが1番食べやすいです。

栗田副会長…魚の見分け方は漁組の人たちが皆さんできるのですか。

金澤町長…漁組の職員はもとより漁師の人たちが現場で、網を上げて陸に来ますと、魚をオスメスはもちろん、AメスBメス、銀とか、一瞬にして仕分けしていきます。このスピードと正確さが問われます。

栗田副会長…間違っていたら大変ですね。

金澤町長…イクラ原料として加工業者はBメスを買います。そこにオスが入っていたらクレームがきます。

金澤町長…マスはオスメスを見分けるのが特に難しい。

〔水産加工は漁獲量の予測が大切〕

栗田副会長…標津町に加工業者は何軒あるのですか。

金澤町長…12軒です。

栗田副会長…皆さん繁盛していますか。

金澤町長…いや、大変なところもあります。加工業は難しいのです。今年は、どのくらいの鮭が標津の浜に上がり、そのうち加工場はどのくらい買えるか予測します。その量に合わせてラインを作って女工さんを確保します。ところが、量が獲れなかったら早く帰ってもらわな

ければならないこともあります。お金を払えないから帰ってくれなどとやっていたら女工さんは今もう来ないです。それで月最低の給料を払って量が出来たら歩合に応じてお金を払っていきます。

仮に全然鮭が確保できないまままで基本給を払っていたり、予定していた量を確保できなくなれば、運搬トラックを手配していますからその分の支払いなど、あつという間に5、6千万円の損になっていきます。しかし、すでに契約している分は作らなければならないので、網走の方から鮭を持ってきて作るようになります。

栗田副会長…他から持ってきて埋めるしかないですね。しかし、味が変わりますね。

栗田副会長…できた製品は根室に出すのですか、釧路に出すのですか。

金澤町長…まっすぐ東京にも行きますし、札幌も含め全国に行きますか。

栗田副会長…飛行機ですか。

金澤町長…陸送です。

栗田副会長…それではどこからフェリーに乗るのですね。

金澤町長…フェリーに乗っているのがあります。

栗田副会長…函館まで陸送でいき、フェリーに乗ってそのまま東京まで行くのが一番早いでしょう。運送業者はこちらの人ですか。

金澤町長…ここです。運んだら向こうで荷を探して積んで帰ってきます。

栗田副会長…向こうで何か荷を掴まないとだめですね。

栗田副会長…運送業界は儲かっているのですか。

金澤町長…かつては儲かっていたのです。鮭そのものの値段が安くなっていますから、今は儲かってないです。

金澤町長…鮭はどうして高かったかというところ存知の通り荒巻鮭が高かったのです。冷蔵庫がなかった時代は生の鮭をさばいて塩蔵して、年を越せるようにしていましたが、こういう新巻鮭は少なかったのが高かったのです。冷蔵庫がなかった時代はそうだったのです。

栗田副会長…そういうことですね。

金澤町長…そのため鮭は貴重な魚で、一匹当時は6千円から8千円の値が付いていました。しかし今は、冷蔵庫が普及して、欲しいときに取り出して解凍して何でもできるわけです。それは鮭だけではなくて、他の魚にも言えるので、季節感が無くなってきました。お正月用のイクラや荒巻を絶対欲しいとなれば産地から送らなくても東京で冷蔵庫から解凍して作ればいいような状況になっています。

冷蔵庫が増えると同時に、鮭の値段も安くなって今は昭和40年代の5分の1くらいでしょう。それでトラックもかつては保冷車1台に何数千円の商品を積んで、運んでいました。5、

000万円積んでいたとしたら、今は1、000万円位まで落ち込んでいるでしょう。しかし運転手の給料やガソリンなどコストはそこまで変わっていませんから利益は少ないです。栗田副会長…それでも経営上厳しい時を通じて生き残っているのが今の人たちと考えればいいのですか。

金澤町長…そうです。

「ホタテ養殖は収入がよくなってきた」

栗田副会長…この辺は比較的海は豊かで漁師さんの所得もそれなりにいいと聞きますがどうですか。

金澤町長…鮭は厳しいですが、ホタテはいいです。

栗田副会長…鮭は厳しくて、ホタテはいいのですか。

金澤町長…去年はホタテの水揚げが16億円です。漁師の数が42人ですから、一人4千万円です。そこから経費は引かれますが、いい収入です。

栗田副会長…税金は払ってくれますか。

金澤町長…完璧に払ってくれます。

栗田副会長…そうですか。昔のイメージでは農家も漁師も税金は払える収入が無いイメージが

ありましたが、払えるくらいに収入が出てきたことはすごいことです。

金澤町長…そうですね。

「酪農は、がんばっているが、後継者の問題がある」

栗田副会長…酪農の方はどうですか。

金澤町長…酪農もしつかりやっています。ただ粗利が7年前くらいまで、約40%近くあったはずですが、今は20%を切って19%くらいです。理由は為替レートが大きいです。酪農はコストの中で農耕飼料、餌代が40%を占めます。このほとんどが輸入飼料ですね。これが10年前までは、1ドル80円くらいで今は120円です。これだけでも、5割高くなっている計算です。

栗田副会長…それでも粗利20%あれば、少しは残るのですか。

金澤町長…逆に、そういうときもあるわけで、それを計算してやり直すればいいわけです。

栗田副会長…そうですね。酪農の人たちは何人くらいいますか。

金澤町長…135人くらいです。

栗田副会長…堅実にやっている人たちが残っているのでしょうかね。

金澤町長…みんな堅実にやっているのですが、担い手がいない場合は離農していくしかありません。あと問題は高齢化です。

栗田副会長…担い手いなければ放棄地になりますが、それを周りの酪農家を買ったりするので  
すか。

金澤町長…周りで買うか借りるかです。

栗田副会長…やはりそうなっているのですね。

金澤町長…それすらもできなくなったらもう終わりです。

栗田副会長…だけど買ってくれるということは、農家に若い経営者がいるところがあるからで  
はないですか。

金澤町長…そうではなくて、酪農規模が大型化しているのです。離農する人がでると、あとを  
継ぐ希望者との間で、資産の継承の協議となりますが、農地が平均で100ヘクタールくら  
いになって、牛が高いですから、合わせて引き受けると1億円以上簡単にいきまします。これを  
銀行から借りて返すとすれば、仮に30歳で引き継ぐとして30年払うと60歳まで毎年300万  
円払っても9、000万円です。これに利子もつきましますから相当の自己資金を持っていなけ  
ればとても払いきれないです。

栗田副会長…払いきれないし、一生借金返して終わりみたいになりますね。

金澤町長…それに加えて、全道のデータでは酪農の労働時間は、8000時間です。労働生  
産性は低いです。

栗田副会長…酪農は生き物が相手だから、労働時間は長いと聞いてはいましたが8000時間は長いです。

金澤町長…普通公務員で1750時間ですから、いかに長いかが分かります。

金澤町長…これは建設業もいえることなのですが、農家の人たちが忙しくて病院に行く時間がないのです。行った時には重症になっているケースも珍しくありません。

金澤町長…腹が痛いから病院行ってきますという普通のことですができません。建設業の人も同じです。工事の最盛期に、腹が痛いから現場に穴開けて病院行つてくるとは言わないと思います。

栗田副会長…言わないですね。今まで酪農の労働時間のことはあまり言わなかったですね。

金澤町長…私達は前から認識していました。

栗田副会長…自分が酪農やっていて、拡張するにはまだいいけれど新規で継承しようとしたら大変なのです。

金澤町長…やはり、5、6千万円の自己資金を持っていないと難しいです。

栗田副会長…そうすると、法人化になるわけですか。法人はいくつかできていますか。

金澤町長…3つできています。コントラクターやTMRセンターを作つて作業を少しでも軽くして、経営の効率化を図ろうとしています。

栗田副会長…共同でできる部分はそうやるのですね。TMRセンターは、町や農水省の補助も入りますね。

金澤町長…入ります。

〔団地造成して町外から70名の住民が増えた〕

栗田副会長…商工会や商業はどうですか。プレミアム商品券はうまくいきましたか。

金澤町長…プレミアム商品券はもちろんうまくいきましたが一時的です。購買力が近隣の町に流れていますし、いわゆるお年寄りの買い物難民などを含め、商業の問題はつらいです。ミニスーパーのようなお店が欲しいのです。

栗田副会長…買い物は中標津に行くのですか。そうするとお年寄りには自分で運転しないとなると、バスで行くのですか。

金澤町長…知人、友人などに頼んで買ってきてもらっているようです。

栗田副会長…トドックともありますね。

金澤町長…平成18年に事業費2億6,000万円をかけて28区画の団地を造成しました。水道、電気、下水道、舗装道路も完備したい団地です。土地代を無料とし、あつという間に埋まりました。

リタイアされた方が何組も移住していますが、たまに顔を出した時に70歳くらいの高齢者の方に聞きますと、高齢になると病院が近くにあつて、医療体制が安定してくれていないと困る、それとやはり買ひ物が不便で参るといいます。中標津まで買ひに行っているのですが、地元の標津で買ひ物ができれば一番いいのです。

栗田副会長…その28区画の団地を町で造成して、無料であげたのですか。全部町の持ち出しですか。

金澤町長…総務省の補助金があつたのです。2億6、000万円の団地のうち6、000万円を町で出して、借金も国の交付税で8・5割還ります。今70人くらい新しい住人が入りました。栗田副会長…町外からの人ですか。

金澤町長…一部町内の方もいますが、ほとんどが町外です。他の町の例で、全部町外の人ではコミュニケーションが取れないので、標津町はあえて土地を持つてない地元の若い人にも開放しました。こういうところからコミュニケーションができるようになりまして、そういう意味ではよかったです。

それで70人の新しい住民が増えました。そうなると地方交付税が1人年間10万円くらい入ります。それが70人で、700万円です。町は団地作るのに6、000万円出していますから、10年もかからずに元が取れる計算です。

栗田副会長…確かにそういうことですね。

金澤町長…その他に建築の経済効果もあります。また、固定資産税の収入もあります。

栗田副会長…固定資産税は入りますね。

金澤町長…議会や町民の皆さんにそういう説明をして理解してもらいました。

栗田副会長…町外の人ならわかりますね。あつという間に埋まったわけですね。

金澤町長…そうです。

栗田副会長…いろいろ詳しいお話どうもありがとうございます。

平成27年9月25日 金曜日 13:00～14:00 於：別海町商工会長室

橋本 淳一 別海町商工会長

五十嵐和夫 別海町商工会事務局長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

村井 順一 一般社団法人釧路建設業協会理事

栗田副会長：商工会を運営されて色々な課題をお感じでしょうから、それをお話いただければと思います。

（人口減少と別海町の産業（酪農、水産、商工、建設）の現状）

橋本会長：別海町は人口1万5,800人、ピークでは2万人強の時代もありました。それは国策で酪農を大型化しようという新酪農村時代で、その当時から2万人ちよつとでした。それから2万人を切って1万5,800人です。人口減少は緩やかに来ている地域と思っております。

栗田副会長…そうですね。新酪農村時代はもう40年くらい前の話ですから、そこから4千人しか減っていないということですね。

橋本会長…どちらかと言えば緩やかです。その要因は基幹産業の酪農と水産がいままも発展している成果で、そこには必ず2代目等々が戻ってきています。その反面、商工業は流通の流れで、大店法が変わって各地域に大型スーパーがどんどん出す時代を迎え、それに伴って小売の方々は別海町でも廃業などがでて、少なくなってきています。将来も見通せないということ、息子さんも地元に戻らないで他に働いているという状況です。これはどこの自治体も田舎はそうなのかなと思っています。商工業にとっては厳しいというのが現状と思っています。

建設業は別海町では一時大工さんという形で、企業と大工さんが商売を起こして何社かあったのですが、30年位前に淘汰されて今残っている方は30年40年やっている会社ばかりです。建設業はここ数年潰れたとかなくなったりとは聞いたことはないです。先ほど話した基幹産業がしっかりしていて、設備投資も行われているので、建築に関して今までは仕事が多かったということも思っています。

今建築、大工は他町からもどんどんハウスメーカーが入ってきて、厳しい状態が続いている時代ですので、地域の建築屋さんにも有利になるように、商工会として町にお願いして地元の建築屋が建設するに当たっては、エコ住宅として建物を建てると町から建て主さんに最大

で50万円補助金を出す制度を5年位前からやっています。それも功を奏してか、地元の建築屋は最近少し仕事が増えていると言う話も聞いております。去年、一昨年は、消費税上がる前の駆け込み事業で地元の建築屋も忙しかったみたいです。

栗田副会長…それはリフォームですか。

橋本会長…リフォームも新築も含めてです。今年また町で応募しますが省エネのLED化も加えると、今の50万円を100万円にできないかと今年も要望します。そんなことを建設業に限ってやっています。

栗田副会長…今、商工会の会員は何人ですか。

五十嵐事務局長…今380社です。

栗田副会長…そうですか。そのうち建設業はどのくらいですか。

橋本会長…建設業協会の会員は40社です。協会に入っていない個人も10社ほどいますので、建設業関係は50社強です。

栗田副会長…その中に橋本会長さんも入っているのですか。

橋本会長…はい、私は建設業協会のほうに入っています。電気工事、建築、土木、設備、測定の5業種は建設協会に入っています。地域によっては電気が入っていない、設備は入っていないところもあるみたいですが、別海町は昔から設備、電気、測量全部含めて建設業協会を構成

しています。

栗田副会長…ほとんど地域の建設業法という建設業はみんな入っていますね。

橋本会長…入っています。そうしてやらないと仕事のたくさんある時代は主張することもなかったのですが、公共事業が少なくなってくると皆さんで地域のことを考えて仕事も増やすようお願いして皆さんで仕事をするということだと思います。

栗田副会長…そうですね。建設業はここから逃げられませんか、自分だけ良くても一時的な話で長い目で商売を続けていって、地域のためになるのであれば協会活動をしつかりやっていくのが一番いいことです。

橋本会長…はい。本当は商売ですから全国どこいっても商売できるので、どんどん外貨を稼いで本社は別海に置いてというのが理想ですが、私もこの町に帰ってきてきて40年弱になりますが、別海の方々はほとんど別海町で商売しずっと生き延びてきています。たまに隣町に住宅建てるというのはあるでしょうが、基本的には管内の仕事で皆さん暮らしています。

栗田副会長…50社で管内、町内だけの仕事で経営できるというのはいいたいものです。五十嵐事務局長…もともと別海は建設業者が多いほうです。

橋本会長…地域としては多いと思います。

五十嵐事務局長…おそらく防衛の関係もあるでしょう。

栗田副会長…矢白別演習場の関係もあるのでしょうね。

橋本会長…そうでしょう。別海町は環境灌漑事業で北海道開発局の仕事ですが、これも当時の新酪農村事業ですが始まってから10年ぐらい経ちます。現在進行形で全体の半分が終わったぐらいです。これらも北海道開発局にお世話になってやってきている事業です。

「基幹産業をしつかりさせることが人口を減らさないようにする基本」

橋本会長…今までは人口減少問題は全国的な問題とと思っていましたが、別海町は減少が微少だということもあって、私はこれから色んな発想をしていくと別海町は人口減少問題の解決可能性があると思っています。

今新聞等々でご覧になっていると思いますが、マイクロソフトと総務省の予算でテレワーク実験を行っています。今年マイクロソフトの社員が8月後半に家族で光進地区の旧廃校にテレワークセンターを作って、教員住宅を改修して、家族で別海に1週間なり10日なり来てもらって仕事するという事業をやっています。これが成功するとそういう移住者も増えてくるといふこともあって、町上げて手掛けています。

先ほど話したように、基幹産業をしつかりさせることが人口を減らさないようにするのが基本です。今TPPとかいふような問題がありますが、そういうことに巻き込まれないで強い

経営をして管内の酪農がいけるように大型化もどんどん進めてきています。離農もあります。牛の数は11万頭から減っていないのです。生乳量も減らしていないのです。これは個人が大きくなっているということです。売上げも落としてない現状を見ると、この辺をしっかりと国なりにこれからも要請して、強い酪農を作っていくことが必要です。

漁師は気象変動の原因か、どういう原因かわからないですが、秋鮭含めてとれるものがない値段で取引されて、野付漁協、別海漁協も始まって以来の売上げであったという現状です。基幹産業をしつかりさせていくことが人口減少を抑えると思います。新たに色んな発想でこちらに住んでもらう人たちが全国から来てもらえるような方法をこれからやっていかなければならないことはたくさんあります。

栗田副会長…ホタテはここでは地まきですか。

橋本会長…そうです。B級グルメのジャンボホタテバーガーを別海町の料理店が開発して、じゃらんと一緒にやりました。おかげ様で北海道では3連覇で殿堂入りしました。それで、佐世保バーガーが全国で有名ですので、鳥取県で全国大会があつて、そこでも2連覇しました。すばらしいジャンボホタテバーガーでホタテの支柱が大きいのです。

栗田副会長…そうですね。大きいのはわかります。

橋本会長…そうなのです。中国は相当世界から買い集めているようです。

栗田副会長…去年オホーツクが時化で全滅して今年出荷量が半分くらいということもあるのでしょうか。

橋本会長…そうです。その影響もあります。

栗田副会長…値も上がっています。

橋本会長…そうです。尾岱沼漁協と野付漁協が鮭も全部入れて年商90億円ぐらいですが、今年  
はホタテだけで100億円を超えたのです。これから鮭が始まりますから、どれだけ上乘せ  
になるかと話しています。

栗田副会長…すごいですね。ホタテで100億円ですか。もしかしたら猿払に勝るかもしれない  
ですね。

橋本会長…この秋鮭しだいでは100何十億になるかわかりませんがホタテはいいです。鮭は  
ずっとよくないです。今はオホーツクのほうがいいです。

栗田副会長…そうですね。日本海もここもよくないですね。

橋本会長…この辺でブリが捕れます。

栗田副会長…こちらに来るブリは美味しいのかと聞いたら美味しくないのだそうです。なんで  
も脂があまり乗ってないと聞きました。

橋本会長…専門的にはわからないですが、形はいいです。食べても私達は今まで食べたブリと大して変わらなく美味しいです。

栗田副会長…私も寒いほうに来るブリですから、脂が乗っているはずで美味しいはずなのに美味しくないと感じましたが、やはり美味しいですか。

橋本会長…味は問題ないと思います。漁師から直接もらっていたきました。

栗田副会長…ここはブリの流通加工がないですから、あとは加工の仕方ですね。

橋本会長…そういうのはないです。

栗田副会長…うまく金に結びつかないのでしょう。定期的に捕れるようになったらブリの加工も行いますね。

橋本会長…はい。

（これからも地域の建設業が生き延びることが必要）

橋本会長…気象変動で去年当たりから、吹雪もあります。そんなに雪が降るところではないのに雪が去年も一昨年も大変でした。今度は浜の高潮も考えられないくらい発生します。

栗田副会長…根室が高潮に襲われたときにこの辺全体も高潮があったわけですね。

橋本会長…そうです。まだまだ海岸は危険な箇所がありますので、公共事業で投資してもらわ

ないといけないと思います。しかし、予算は全国ですから別海町になかなか付かないので毎年中央陳情をしています。この管内を見ただけでもまだまだ公共事業は必要と思っています。町と建設業が防災協定結んでいますので、災害が起ると建設業界中心にすぐ出動できる態勢もできています。そのためにも地元の建設業界は生き延びてもらわないといけません。災害が増えてきている気象環境を考えたときに、ある程度の公共事業を発注していただいて、建設業界がこれからも安定的に生き延びていけるような体制を国も考えていかないといけないと思っています。

今、建設業界の技術者の不足や高齢化が始まっています。これは長年かけて各社が技術者を育てていくものです。それをやるためには安定的に仕事がないとできません。日本で技術者がいなくなつて労働者は全部外国から呼べばいいということにはならないでしょう。

栗田副会長…はい、ならないです。

橋本会長…ましてや日本の規制・基準は厳しいので外国人が対応することは難しいと思います。まして事故が起きたらとんでもないことになります。そんなことも考えると日本の若者の技術者を増やしていくことを考えながら公共事業を発注してもらわないといけないと考えています。

栗田副会長…おっしゃる通りです。

橋本会長…北海道の建設業を考えたときに北海道や北海道開発局で発注する段階で、指名業者は全国の建設業になります。北海道の企業に特定する話にはならないでしょう。

栗田副会長…金額の大きい工事は誰でも入れる形態です。

橋本会長…自治体なり北海道が地方チェンジをして、北海道で公共事業を発注するときに、指名業者に東京本社のスーパージェネコンが入ったときに、そういう方々が優先的に受注することになるとすれば北海道の経済にとってマイナスと思います。

やはり北海道に本社を持っている建設業者が受注することによって、その地域に税金として落ちるわけです。東京の建設業者が受注したら税金は東京に払うわけです。そういうことを積み重ねていくと、北海道の経済を考えたときに道内業者が受注することが経済の循環に繋がっていくと常日頃思っています。そういうことをもう少し発注者側も考えながらやることが地域の建設業が生き延びるためにも必要なことと思います。

栗田副会長…壮瞥町商工会長の堀口さんも同じことを言っています。

〔北海道の中小企業基本条例制定を要望、地域で生んだお金が地域内で回ること〕

橋本会長…商工会の立場で考えると、今言ったような考え方で地域を元気にしていくことが必要なことと思います。私の町では平成21年に中小企業基本条例を制定しました。たぶん町村

では全国で初めてだと思えます。市としては釧路市が先に制定しています。それは域内循環をしっかりとやって行きましょうということですね。発注はできる業者が地元にいるなら地元建設会社向けに発注してくださいということ、今の水沼町長が条例として作りしました。これから町づくりの基本になっていくと思っています。

北海道にもそういうことを念頭に条例を作って欲しいと今お願いしています。北海道に開発予算が来ても、全部東京に持って行かれるなら施設はできませんが、経済を考えるとマイナズだと思えます。スーパーがそうです。大型スーパーが出てきて全部売上げを持っていった元に税金を払わないのです。不動産は固定資産外で、それも不動産会社所有です。

栗田副会長…そうですね。ここで決済しないからスーパーもそうなのですか。  
橋本会長…そうです。

橋本会長…スーパーがあると何でもあるし、安いし、品揃えがありますから消費者の皆さんは喜びます。今プレミアム振興券を全国で盛んにやっていますが、別海町も今までは商工会が町とやったときは大型店を外していました。理由は必ず売上げの6割以上は大型店に行きます。いくらやっても大型店のためのような状況なのです。今回は国の補助金もらっていますから、スーパーも入れてやっていますが、第一弾を見てもだいたい6割以上は想像の通りスーパーに行っています。せっかく予算をもらって地域に金が落ちるならいいのですが、全部売

上げをもって行かれる状況です。経済的に考えると私たちは意味のないことをやっていると思います。

栗田副会長…お金が外に流れていくということですね。

橋本会長…そうなのです。

栗田副会長…確かに地域で生んだお金が地元に戻らないですね。

橋本会長…私は、それができないとすれば税収の在り方を考えて地方で売り上げた分くらいは営業している地域に税金として戻すような仕組みを作ってもらわないと、地元の業者はみんな無くなります。田舎にはそんな税金やらなくてもいいみたいなのを言い出すことになっていきますので、そんなことをやっている、地域は本当に無くなっていくと思います。

今地方創生をやるうとするのであれば、もう少しきめ細かく地域の現状を石破大臣あたりが考えて細かいことも配慮しながらやって行かないと、単にプレミアム券をやるから元気になれるような話では一時のことだけであって、地方が元気にならないと思います。

栗田副会長…やはり税金ですね。

橋本会長…町づくりも税収いかに上げるか、人口をいかに増やすかです。域外のお金をいかに稼ぐかということを考えてやっていかないといけません。別海町は町税だけで21億円そこそこで、あとは国の交付金です。

栗田副会長…全体2万人ですから町の予算は150億円ぐらいですか。

橋本会長…そうです。町村では多いほうです。一時一般会計と特別会計合わせて250億円ぐらいの予算で、根室市と同じぐらいの規模でやっていた時もあります。私今商工会長仰せつかつておりますが、そんなに焦ってはいけません。まだ他から見るとまだ良い方という考えがあります。

別海町は出生率も1.8〜9で北海道では2番目に高いです。富良野、中富良野が1番で、別海町が2番です。イベントやると子ども、若い夫婦が多いのです。このあいだも産業祭をやったばかりですが、1日目は大雨にたたられて2日目はすごく天気が悪くなったのですが、若いご夫婦が多く来ています。そういう場面を見ると出生率が高いのはなんとなく実感できます。そんなことも考えると、落胆はしていなくて将来ビジョンを作って、それに向かって課題を克服すれば、まだまだ別海町は発展できると私もたぶん水沼町長も思っていると思います。

〔経営発展支援計画と商工会について〕

栗田副会長…今商工会で計画を作らないといけないですね。

橋本会長…経営発展支援計画です。根室管内は4町とも来年の1月認定に向けて段取りしてい

る最中です。

橋本会長…十勝の竹田商工会長のところは認定されました。認定された事例がありますので、次作の人たちは参考になります。

栗田副会長…書き方の問題もかなりあるみたいです。

五十嵐事務局長…全国から比べれば北海道の合格率は若干高いそうです。

栗田副会長…そうですか。それはいいことです。認定受けないと補助金が使えないですからね。橋本会長…そうなのです。

栗田副会長…五十嵐事務局長は今年変わられたのですか。

五十嵐事務局長…平成23年から局長で、それ以前は指導員でした。

栗田副会長…それでは職員なのですね。

五十嵐事務局長…そうです。

栗田副会長…補助金の要求や使い方は、すごく難しくて面倒なのですね。だから専門家でないとできないことがあります。職員にプロがいて上司がやるのもいいのですが、本人が分かっているのが一番いいのです。自治体の長を見てもこういうお仕事見ても、専門家でないと難しいと思います。国の補助金は細かいのがいっぱいあります。それを知らないがために損していることがまだいっぱいあるのですよ。

橋本会長…あります。しかも申請期間も短いです。

栗田副会長…申請期間が1ヶ月くらいですね。

橋本会長…そうです。

栗田副会長…その間に書く資料は膨大ですが、それを取れると良い補助金がありますね。

橋本会長…有効利用できる補助金がたくさんあります。ただし逃すのもたくさんあります。

五十嵐事務局長…最近はメールでどんどん流れてきます。

栗田副会長…商工会連合会からくるんですね。

五十嵐事務局長…連合会もありますが基本は各省庁から直接きます。後は振興局からです。

栗田副会長…最終的には外からのお金をいかに引つ張ってきて地域内で滞留して貯めておくこと

いうことと思います。そのためには国からの補助金が一番早いと思います。

橋本会長…別海町はご承知のように、防衛予算は道内でもトップクラスです。

（別海商工会のテーマは街中に人を呼び込む仕組みを作ること）

橋本会長…別海商工会のテーマは街中に人を呼び込む仕組みを作ることです。別海町の中に牛乳や海産物などの地場産品を買う場所がないのです。海産物は30分走った尾岱沼まで行けば売店がありますが、ここにはないのです。それでは観光客など外からお客さんが来たときに

大変なので、街中に物産館を作ることによって商業関係の活性化をしたいと勉強中です。

栗本会長…平成29年から30年まで生涯学習センターを町で建設予定しています。その場所がおそらくこの辺なのですが、それに伴って物産館のスペースを作っていたら、運営は商工会と会員にお願いする仕組みを作りたいと思っています。

栗田副会長…産地直売の店を街中に持つてきて、商店として経営してもらおうということですね。栗本会長…富良野のマルシェに行ってみると思いますが、民間運営ですが行政も巻き込んで、ちよつと旬な感じで流行っています。もともと富良野ブランドの北の国から始まって、ブランド化が何十年もかかってやっているので知名度もあります。中央から近いから交通の便もいいです。町の中に人が入ってこなかったたのであの方向に向かったと聞いています。町の中に人が来ないと地元の商業は発展しません。

栗田副会長…そうです。別海町に来たときに時間調整をする場所がないと思います。

栗本会長…地元は関係ないですが、私達は外部から来られた方がそういう思いをするというのは、私達も外に行く機会が多いので分かりますが、ただ商店の方々がそれを感じているかは難しいところです。

栗田副会長…今言われました地場産品を買う場所を入りやすい形で作ってもらえるといいです。初めて来た町では何があるのかわからないです。

橋本会長…そうですね。牛乳有名ですと言っても、どこで買えるか分からないのです。

栗田副会長…そうですね。普通は道の駅に向かうのです。しかし道の駅は町の中にはないです。

橋本会長…別海町は尾岱沼です。

栗田副会長…町の中に人を呼び込むには道の駅のようなものがないと思います。

橋本会長…委員会で一昨年前から検討して形はきまつて実行するだけです。

栗田副会長…そこに外の人が少し集まるようになってくると、周りの商店も少しきれいになってきます。

橋本会長…富良野マルシェは隣町からケーキ屋がくるなど相乗効果で良くなってきたようです。

栗田副会長…あれは富良野の建設会社で、社長が商工会議所会頭をやっている会社を中心に運営しています。

橋本会長…そんなことをやっていけば別海町はまだまだ生き延びられると思っています。

栗田副会長…そうですね。人口1万5、800人なら分散しているとはいえ買物物はそのようなところに行きます。

橋本会長…中標津のようにまとまっていればいいのですが、どこに1万5、800人いるのか分からないくらい分散している町です。四国の香川県と面積同じで、そこに1万5、800人です。

栗田副会長…確かに香川県は人口100万人で全部住宅だらけです。

〈建設業の高齢化は永遠のテーマ〉

橋本会長…建設業の高齢化は永遠のテーマです。雇用ができなかった時代もありました。いかにコストを削って生き延びるかを考えるだけしかできない時代でもありました。

栗田副会長…今人を採用すると言っても難しい感じはします。少しでも採用できる環境になってきたようです。それであれば、もう少し予算がほしいと言うことです。

橋本会長…今そういう経験している建設会社などのオーナーが多いので、アベノミクスでデフレから脱却するとはいえ、今も私達には不安感があります。本当に投資していいのかがまだ見えません。時間がかかりながらデフレ脱却になっていくのですが、簡単にはいきません。

栗田副会長…行かないですし、補正がないので今年の予算が減っています。補正がもう少しあればと皆さんが言っています。

橋本会長…やはりそうかと思っしまいました。

栗田副会長…先程の通りです。いくら言われても実物がないからどうしようもないです。

橋本会長…全国の企業の社長は人件費を無理して上げました。

栗田副会長…一年目は少し、二年目はもう少し人件費を増やした感じですが。しかし三年目は同じように上げたかはわかりません。

橋本会長…そういうことで時間もかかるし、不安も取れないということですが。

栗田副会長…そうは言っても全産業との競争ですので、個々の会社を責めるのは酷な話です。みんなで考えてやることと思います。

橋本会長…私も会員さんには相談会とかのときには、これから私達社長たちは会社の社長でもあり町づくりの社長でもあって、一緒に町づくりしていかないと自分の商売もままならない時代にもう入っていますと話しています。誰かではなくて、みんなで町づくりに参加して、別海町の営業マンとして一人一人の企業がその意識で商売をやって行かないと、地域は簡単になくなる時代ですと私は言っています。建設業は良い時代があったとすれば町のことはそんなに考えなくても仕事があった時代です。そこが落ち込んで地域は大事だと思いはじめたのも仕事が無くなってきて気づくという話です。今特に若い社長たちは地域を大事にする人たちが増えて来ています。昔は儲かったらすぐ海外へ行っていました。

村井理事…建設業界も、若い人たちは一所懸命地域のことを考えていました。

橋本会長…若い人たちはやっていたのです。

村井理事…今は若い人たちも地域と関わりを持ってやっています。

橋本会長…別海町も、建設業界の若い社長たちはみんなしっかりしています。色んな街づくりに関わっています。本当にしっかりしています。

村井理事…釧路建設業協会の会員では高玉建設と寺井建設です。

橋本会長…10年ぐらい休止していたのですが、別海町も今年から若い建設会社社長の会が復活しました。

栗田副会長…名前はなんというのですか。

橋本会長…釧路開建は建青会でしたか。

村井理事…釧路開建は建新会です。

橋本会長…建新会ですか。それに近い感じですか。

〔別海高校のクラスが減ったこと〕

村井理事…ここは別海高校がありますね。

橋本会長…別海高校は普通科と酪農科で、普通科が残念ながら一組減って二組になりました。今復活要望していますが、一回減ると増やすのはなかなか大変みたいです。

橋本会長…別海町は先ほども言ったように分散していますので、クラブ部活動をやるにも酪農や漁師の人たちは送り迎えが大変です。それであれば他の町の高校に出しても一緒なのです。

そういう事情もあって減ったのです。今町が慌てて寄宿舎を建てるとか検討しています。子どもはいるのです。しかしスポーツなどの関係では釧路でも帯広でもいいのです。金をかけて宿泊や送り迎えをしなければなりません。市内であればバスもありますが、ここはそういう地域じゃないので、親が大変で他の町に行く確率が高いのです。

栗田副会長…やはり寄宿舎ですね。

橋本会長…寮ですね。今そういう計画しているみたいです。

栗田副会長…高校を地域から無くすことのほうがはるかに恐ろしいことです。

橋本会長…そうです。雇用にも悪い影響しかありません。

栗田副会長…高校がなくなったら若手の供給源がまずなくなります。

〔建設業の雇用と育成〕

橋本会長…今の高校生たちは私達の時代と違って地元思考が強くて、他に出ないで親元で生活したい子が多いみたいです。

村井理事…釧路の建設業界でも釧路工業高校だけでなく普通校からも建設業に入りたい子がいます。普通校から入っても教育できれば将来が見えてきます。建設業に関心を持っている子もいますから採用の間口を広げていく必要があります。

橋本会長…昔と違って今の子を育てるのは難しいですね。

村井理事…大変です。

橋本会長…時代が違うとこんなに違うのかと思います。どの業界もそうでしょうが、昔と同じことを言ってもすぐ辞めます。

栗田副会長…優しくする必要はないですが、一人になる時間が要る、休みが要るということです。給料はそこそこあればいいという感じです。大部屋に24時間先輩と一緒にはいけません。

橋本会長…家庭ですつとそうやって育てられてきたからしょうがないのでしょうか。共同トイレなどをもっての他です。

栗田副会長…全体が豊かになった逆の弊害でしょうね。それぞれフルセットを個人にみんな持たせたからですね。

橋本会長…私の会社にも去年若い人が入って、先輩たちが怒鳴りつけるのです。

栗田副会長…なかなか厳しいですね。

橋本会長…自分たちもそうだったからなのですが、今の子達はそれではダメだからもう少し怒り方を考えないと明日からいなくなるぞと言っています。それでも辞めないで休まないでいます。これも3年くらいで変わりますから、そのときに説得しなければならぬわけです。お前長男坊だろう、家庭や家族のことどうすると、それで思いとどまる子もいました。

栗田副会長…そうやってトップから言われれば考えますね。

橋本会長…本当に大変な時代です。建設業は、悪いイメージはありませんが危険を伴う仕事なので厳しくしないと事故を起こします。一般事務とは違います。会社の行き帰りまで心配しなければなりません。現場でぼさつとしていて怪我でもされたら大変ですし、まして死んだらとんでもないことになります。

若い人にとっては厳しい業界かもしれないです。しかし、こればかりは教育していかないとならない業界です。この業界は若い人を使うのは大変な労力がいります。頑張って建設業に入れば報酬がいいとか、せめてそういう価値がある業界にしないとけません。一つの方法として建設業界は厳しいが報酬がいいというそんな魅力のある業界にしていかないとならないと思います。

栗田副会長…色んなパターンがあるのでしようが、単純に上げるのではなくて、ある資格を取ったら給料が上がるようなところが見えていると目標になるみたいです。

橋本会長…私の会社にもあるのです。資格1級取ったら上げる仕組みを作っています。国家試験を取ってなんのメリットもなかったら誰も資格を取りません。

栗田副会長…そうなのです。自分の時間を削って努力したわけです。そういうのが採用のときにはつきりしていて、先輩方に聞いてもその通りこの会社はやっているというのが大事みた

いです。あとは休みです。休みは現場が上がったら休ませればいいのではないですか。年度末になると工期が迫って、土日働かなければいけないようになるでしょう。それで、3月に仕事が終わったら、そこからまとめて有給を取りなさいという会社の風土になっていけばいいのかなと思います。労働基準法に従いながら会社で考えて休みを取ればいいと思います。

橋本会長…ぎりぎりの人数でやっているので、現状は難しいです。役所はもう少し単価を上げて利益が取れるようにしてもらいたいです。

栗田副会長…今労務単価を3回上げてもらったのです。実際に払っている調査をするのですが、実際に払っている内容をうまく書いてくれないのです。例えば鉄筋工の定義に当てはまらない若い人を鉄筋工として書いたら、払っている賃金は若い人なのではるかに低くなります。そうすると鉄筋工には低い賃金を払っていることになって下がります。その結果を国土交通省が見ると来年鉄筋工は労務単価を下げるかとなるのです。

橋本会長…そうですね。

橋本会長…今職人さんがなくて少し多く出さないと来ないです。

栗田副会長…本当の職人たちはそうなので、そういう人は高めになっていけばいいのです。

橋本会長…そうしないと将来自分の首締めるわけです。

（地域内で色んなものを循環させること）

栗田副会長…地域で色んなものを循環させるというお話がありましたですね。食べ物という地産地消そのものだと思います。人、金、それから物、資材、資源、ぜんぶ地産地消の発想で地域を動かせられるようになれば一番いいと思います。

橋本会長…それが一番です。地方創生の原点だと思います。

栗田副会長…外からのハウスメーカーの話ですが、外から買うと確かに安くしてそれなりかもしませんが、少し高いが地元の大工さんを使うといつでもメンテナンスもできますとか地元ならではのメリットを生かしてもらうのが大事だと思います。標津町長のお話ではハウスメーカーが入ってきてなかなか地元を使うことにはなかなかならないのですと話していました。

橋本会長…標津町も土地を提供して1年ぐらいで家を建てれば土地代無料です。標津町は標津町で頑張つてやっています。羅臼町、標津町は5、000人ですからもう必死です。

村井理事…標津町も高齢者主体で移ってきているので、5年後10年後はどうなのかの心配はあります。将来逆に医療費のほうが高くなるかもしれないです。

栗田副会長…長時間いろいろなお話ありがとうございました。

平成27年10月20日火曜日 10…30、11…30 於…上ノ国町長室

工藤 昇 上ノ国町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

砂原 隆 一般社団法人函館建設業協会事務局長代行・事務部長

栗田副会長…普段町政を切り盛りされて、お悩みになっていることやお考えになっていることを中心にお話下さい。

〔農業を守る、漁業を守るためには建設業が必要〕

工藤町長…私の持論は、上ノ国町では農業、漁業を守るためには建設業が必要だということですね。十勝と違い、耕地面積は40町歩、50町歩もないので、専業でいたい5町歩、10町歩くらいです。昨今、田んぼ10町歩で米を作っても食べていけないものですから、1種兼業、2種兼業にならざるを得ません。それを補完するのが建設業でありますので、私は建設の仕事は絶対作ると公言しています。それは日本の第一次産業を守るということに繋がるからであ

ります。

2つ目は、もし災害があつた場合に誰が対応するかです。例として、役場職員時代に経験したことです。大雨が降って、川からあふれ出た水が道路まで流れてきたときに、私の膝の高さまでになりました。私達は素人ですから危機感はなかつたわけですが、それを見ていた当時の建設課長に、膝上まで水が上がつたら危険だから逃げなさいと注意されました。そのときに、役場の職員はいくらがんばつてもアマチュアだなどと思いました。建設業者であれば、全部知っていますから適切な対応をとることができます。

また、ダムの必要性も感じています。ダムができる以前、川が増水すると民家まで水が行く可能性のある地区がありました。ダムを整備したおかげで、災害時にはその地区をまったく気にとめなくてもよくなりました。私がつくづく確信したことは、コンクリートは人の命を守ということです。

上ノ国町を含む道南に、ドクターヘリが整備されました。檜山地域の二次医療圏は江差ですが、重篤患者はどうしても三次医療圏の函館に行かざるを得なくなります。役場所在地から25キロ離れたところに小砂子という集落がありますが、そこで重篤患者が出ると函館まで搬送されることになります。1分1秒を争うときに函館まで2時間半から3時間かかります。今まで私が檜山管内の期成会会長を仰せつかつておりましたが、平成31年までに高規格道路

が木古内まで開通する予定という情報を得ましたので、江差が中心となって新たに高規格道路延伸期成会を作りました。ドクターヘリは、悪天候や夜間には運行できませんが、高規格道路が整備されることによって、救急車を利用したとしても、函館までの時間は半分になります。

栗田副会長…アメリカのオバマさんもイタリアのレンツイ首相も、公共事業という言葉使わないのです。社会資本整備と言います。彼らは、社会資本整備は国の原点なので、そのお金は確保するとハッキリ言っています。

工藤町長…私達、特に町村長は常に現場を重視します。町民の命と財産を守ることが第一条件です。万が一津波が来たときに町民の命をどうやって守るかといったら、今回上ノ国町が14億円で役場裏に整備する体育館を避難場所にします。この津波予想高は4メートルか5メートルであり、役場の周りには中学校、小学校が点在しておりますが、広い低地となっているので、万が一の際に逃げる場所がありませんでしたが、体育館整備後には避難場所が確保出来ます。

そうはいっても津波は何年に1回来るのか誰も予測できません。しかし、50年に1回かもしれないからといって、無用の長物と言ってはいけないと思っと思っています。無用の長物でも作らなければならなくて、私は絶対必要だと言っています。無駄というのは当事者でない人の

言葉です。まったく違う話ですが、救急車のコンビニ診療をやめてくださいということが言われます。しかし、それは診療が終わった後にコンビニ診療とわかるのであって、当事者にするとは緊急なことです。だから、当事者になって判断するか、客観的に評論家的に判断するかの違いです。

栗田副会長…ビジョンの中に書こうと思つていますが、建設業は、警察、消防など同じ役回りがあつて、人を助けるのは警察、消防、自衛隊かもしれませんが、街を守るのは建設業しかないと考えています。建設業は悪く言われることが多いですが、公でしっかりした行動をとつていけば、生き延びる業種と思つていきます。

（公共事業の発注について）

工藤町長…議会で、上ノ国町は職員を守るために予定価格を全部公表しています。議会から何回も落札価格が高すぎる、適正な落札率でないといわれましたが、上ノ国町議会は反問権があるのですぐ反問しました。質問議員の言う、適正な落札率と、その根拠を教えてください。結果的に、残念ながら議員からの答弁はありませんでした。当然ながら設計書を作る段階では適正な予定価格を決めたわけですから、落札率が高い、低いとかということは論外です。

栗田副会長…建設業から言えば、基本的にはいわゆるネゴシエーションで落札価格を決定する

ことがいいと考えています。目的物がまったくないときに値段をつけるのが建設業ですから、ハッキリ言えば完成したときの値段がわからないのです。工期が半年あり、途中で資材が上がったり、作業の人が不足したり、災害があったら、設計変更はありますが、日常茶飯事で細かい変更がいっぱいありますから、その不測に発生した価格は工事を始める前に見積ることとは不可能です。それで国交省で一応標準の歩掛を作って、それをみなさんお使いになって価格を決めているというだけです。出来あがった製品に価格をつけて売ることとまったく違います。

工藤町長…そこがみんな勘違いしています。私は自分の基本的な考えでやっています。

（人口減少対策は産業基盤をしっかりとすること）

栗田副会長…町の課題として人口減少がおりだと思えますが、対策としてお考えになっっていることがあると思えますがどのようなことでしょうか。

工藤町長…抜本的な方法論はないです。あるのであればずっと前にやっています。

栗田副会長…今人口減少といいますが、北海道の町村の人口はずっと減り続けてですね。

工藤町長…例えば、5年で1,000人減るところを、なんとか10年に遅らせることくらいしかできません。私達はさまざまな政策を打ってきています。上ノ国町の独自事業では、全国

で始めての18歳までの医療費無料化と保育料、給食費、学童保育費の全部無料化です。保育料の無料化につきましては、去年6月頃の増田レポートが出た次の日に決断しました。子どもたちが住みよい、そしてお母さんお父さんが安心して育てられるためです。

しかしそれは二次的で、やはり第一次は産業基盤です。どこでも議論している後継者問題も、一人当たり所得が1,000万円もあればひとりで解決します。そのためには産業をどうするか、またはそれに付随して子育て環境、医療の関係をどうするかですが、様々なことをトータルでやっていくことが大切です。そのトータルでそろっているのは、なんとと言っても東京、札幌くらいです。上ノ国町のような町は、なんとなく末端だと思っているようですが、私は先端だと公言しております。人間の体に例えると、先端から毛細血管を通して血を送らないと、中心部の東京や札幌には流れていけません。今、4年制大学に通わせるためには最低で1,000万円かかります。その何千万円もかけた子どもは全部東京や札幌に行ってしまう。それでいて、東京に住んでいる人は、北海道のような過疎のところには新幹線いらない、高規格道路はいらないといっていますが、全く本末転倒です。先端の町から自分たちが恩恵を受けているのに、その恩恵をわかっていないのです。自覚してないのです。

栗田副会長…住んでいる人がそこで暮らせることが一番大事なことで、そのことはお金が高い

安いと言うことではないです。ここであれば農業と漁業の生産物ですが、地域資源をうまく売って生活が出来る、函館に1時間半で行ける高規格道路を東京の金を使って作ってくれということですね。

（昔の上ノ国町）

砂原事務局長代行…上ノ国町は松前町よりも歴史がありますね。

工藤町長…はい、古いです。

砂原事務局長代行…かなり昔は鉱山ですか。

工藤町長…はい、ありました。ただ上ノ国町に炭鉱はなかったのです。マンガン、鉄鋼などが多かったです。昭和35年当時は人口15,000人でしたが、今や5,000人です。1番びっくりしているのは、当時、生まれた子どもの数が年間450人ということです。今年はいままで7人です。だいたいこのままいくと今年は15人くらいにとどまる可能性があります。昭和35年の30分の1ですよ。

砂原事務局長代行…昔背広作る工場とかもありましたね。

工藤町長…紳装がありました。

砂原事務局長代行…それと有名なブラックシリカがありました。今でもありますか。

工藤町長…あります。

砂原事務局長代行…そうですね、紳装もありました。

工藤町長…今紳装の社長が、たしか小樽ワインの社長です。醤油で有名な会社はどこですか？  
栗田副会長…ヤマサ醤油ですか。

工藤町長…ヤマサ醤油だったと思いますが、確かではありません。その会社では年間1、000種類の新商品を出すということでした。ところが、そのうち3つくらい当たればいいほうだと思います。作ったものが全部成功することはあり得ません。野球も10回打って3回打っただけでいいので、7回失敗しています。みんなその理論がわからないでいます。美空ひばりも千何曲歌っていますが、何曲覚えていきますか。せいぜい20〜30曲です。

栗田副会長…そうですね。

〔河川整備が喫緊の課題〕

工藤町長…今は相当な大変な時代ですから、上ノ国町がインフラ整備しなければならぬのは、河川です。爆弾低気圧が来たら今の河川でいいのかと、北海道の河川課にお願いしたらすぐに河畔林の伐採をやらしてもらいました。しかし、まだまだ上流の整備も必要です。万が一、雨が200ミリ降ったら、流木が発生し堤防決壊の可能性が十二分にあります。40年位前の

冬のとときにあったのです。2月か3月だと記憶していますが、川と海の境に氷が詰まって、融雪水があふれ全部水浸しになりました。町の中心を流れる二級河川の天の川の土手が決壊した経験もありました。当時、今のような大型台風や960ヘクトパスカルの爆弾低気圧などはありませんでした。それが去年のように1週間おきに来ると不安です。

栗田副会長…あれは異常ですね。

工藤町長…NHKの災害特集で、これからああいう低気圧が続くといっていました。

栗田副会長…太平洋の水温が上がっているのです。

工藤町長…私達が異常気象と言っているのは、何百年単位で考えてですが、何千年単位で考えたら普通なのです。この前のNHKでは、もっと大きい低気圧が来るだろうと言っています。私達が小さい頃竜巻は学校で習っただけです。

栗田副会長…竜巻も目の前の海で起こります。

工藤町長…それだけ違います。私も東京から来た人に言うのです。私は昭和28年生まれですが、小学校の頃に気温が28℃になると学校を途中下校させました。ということはそれだけ温度が上がらなかつたということです。30℃の温度なんてものはハワイだけかと思いましたが、ここから、これからそういったことに対応する町づくりをしていく必要があります。この隣に小さい川がありますが、今から3年前にこの川の付近だけ雨が降って、もう少しで床下

浸水までいくところでした。ところが、普通河川は、工事をやるにも国の補助がないので、私達は町村会で常に要望しています。どんなに二級河川を直しても、支流が溢れたら同じです。普通河川にも予算付けして欲しいと、要望しています。

栗田副会長…確認したわけではないですが、北海道の歴史が浅いことがあると思います。私は生まれも育ちも東北の山形ですが、山形の市内見ると普通河川は農業用水と飲料用水で江戸時代から全部整備してきています。だから、それなりの水が流れる形がもうできています。明治以降に日本になった北海道では本当は普通河川も補助がいるはずですが。そういうことを熟知して要望をしない限り、うまく予算は付かないと思います。本州の方で普通河川に予算付けてくれという人はいません。自治体の単独費でできることとなっています。普通河川は全部出上がっています。

工藤町長…そうですね。3年前に車で来た御夫婦が大雨で普通河川が増水して被害にあい後日亡くなったのです。それでは北海道の歴史的なものなのですね。

栗田副会長…そう思います。直轄明許排水という農業排水路の事業がありますが、あれは北海道だけにしかない制度です。本州は江戸時代から作っているから、明許排水はいろいろなわけです。

工藤町長…同じような理論で今日本では、高速道路整備率が本州は8割、北海道が6割なので、

私達は作って欲しいと言うのですが、本州ではもういらないう議論があります。それをどうやって覆っていくかを考えています。1つの例として、ここで獲れた魚を本州に送るには函館からフェリーに乗せるわけですが、フェリーの便は決まった時間しかないのです。その便に乗せるためには、現在の一般国道では間に合わないのです。それを、ただ単純に早くしたいということだけです。

栗田副会長…そういうことです。便数に合わせて、築地に何時に着くかが一番大事なことです。そうすれば、その日の内に着いて新鮮で高く売れます。

工藤町長…そうです。そういうことを考えています。ただお願いしますではなく、こういうメリットが産業にあります、人命ではこうですと積み上げていく必要があります。

工藤町長…上ノ国町は道路が必要です。

栗田副会長…それはそうだと思います。最近、国土交通省がストック効果という言葉を使い始めています。公共事業は手段ですから、出来上がるのは社会資本です。それが出来たことによつてこう便利になった、お金が儲かるようになった、雇用が増えたということは全国にたくさん例があります。今までは公共事業はフロー効果の話ばかりで雇用対策で事業を行っているような話しか言わなかったのです。経済学者の論調を聞いていても新聞に書いてある内容も公共事業のフロー効果しか見ていません。

工藤町長…本当に建設業は悪者になっています。私の知り合いの社長が立派な車を持っているのですが減多に乗らないのです。それは土建屋がまた立派な車に乗って歩いたとなるからだと思います。国民意識では建設業は税金で食っていると見られます。公務員と同じでかわいそうなのです。

栗田副会長…見られ方が公務員と同じくらい建設業はかわいそうだと思います。昔はそういうのも許されましたが、今は絶対に許さないです。しかし、時代の流れで少しずつ建設業の人たちの意識も変わってきています。建設業は公共的な仕事で、町を守っていることはみなさんお分かりになっていると思います。

工藤町長…若い社長たちの感覚がお洒落になってきています。

砂原事務局長代行…最近は上ノ国町の建設業の方がドッグランを作ったり学校の草刈をしたり、いろんな活動が新聞に出ています。かなり地域に貢献しています。

工藤町長…地域性が出てきたのです。

砂原事務局長代行…ドッグランはこの近くですか。

工藤町長…ここから2キロくらい離れている道の駅です。相当意識して地域貢献をやっています。本当は、最も人を雇用してありがたいと思われなければならない業種だと思います。なんだかわいそうなのです。

（町の産業振興対策、総合的な補助金の創設）

栗田副会長…話は変わりますが、町の中で商業はどんな感じですか。

工藤町長…あまり効果的な対策はありません。今は上ノ国町でスーパー2つです。昔はたくさん各町内会にあった店がほとんどありません。その2つに集約されました。それでも何か冷蔵庫など大きなものを買うときは量販店に行きます。これは流れですから仕方ないです。

栗田副会長…大量生産の工業製品は、大きいところには敵わないです。

工藤町長…スケールメリットにはかないません。こういう田舎の町で何かやる場合は、先ほどお話しした1,000の業態があれば、2つか3つを狙うことです。

栗田副会長…動けないおじいちゃんやおばあちゃんたちが、どこに買いに行くかの問題はありますね。

工藤町長…2つのスーパーは迎えるバスを出しています。さらに1つはバスを出しながら車で荷物積んで売り歩くことまで行っています。

栗田副会長…家の前までトラックに積んで、そこで売るわけですね。

工藤町長…上ノ国町は先駆的です。今の商工会長はスーパーをやっている方です。

栗田副会長…2つのスーパーは大手でなくて地元ですか。

工藤町長…全部地元です。

栗田副会長…それはいいですね。スーパーの大手の店は地元で税金を落とさないで良くないという話を聞きました。

工藤町長…他町の話ですが、みんな地域外の資本のお店ばかり使って、全部地域外にお金が流れてしまうというのです。しかし、昔の蓄えがあるから、冒険はしたくないといいます。上ノ国町はどっちのスーパーもがんばっています。

もう一軒のスーパーの社長はナマコ養殖を、大々的にニチロと連携してやっています。結構人も使って稚ナマコも作っています。中国人を呼んで、日本で成功していないことをやっています。その他にハウス30棟で30人くらい雇ってトマト栽培もやっています。今度さらに70棟を追加すると来ていました。また、上ノ国町の廃校になった学校を使って植物工場を作りたいと走り回っています。

栗田副会長…そのスーパーのオーナーがナマコの養殖を手がけているのですね。うまくいっているのですか。

工藤町長…まだデータが不足しています。

栗田副会長…そうなのですか。

工藤町長…データ不足ですが、それが不成功ではないのです。ただデータが無いだけということです。

栗田副会長…そうですね。トマトハウス30棟もすごいですね。

工藤町長…もう、すぐ実行しました。上ノ国町は町内の農家を対象に機械購入費の半分上限150万円を補助します。2台買ったら300万円です。3年間で3億円くらい補助します。漁業も同じです。1農家で1,000万円補助しているところもあります。

栗田副会長…150万円の補助は町の単独費ですね。

工藤町長…私は農業、漁業で食える町とキャッチフレーズ作りました。私が町長になったときに12億円だった基金が、今46億円まで増えました。私は町の力は行政の力もあるし民間の力もある。この2つの力を合算して町の力だと言っています。この補助により、効率が良くなった、人手がからなくなったなど様々なプラス効果が表れています。

そのほかに、商工業者にも補助をしています。ガソリンスタンドには、2分の1補助で上限1,500万円補助、スーパーも同じく1,500万円です。理容業であつても最高250万円の補助です。外から来た業者は売り上げがよくないとすぐ出て行きます。しかし、昔からここに住んでいる人たちは、人口15,000人から5,000人になつても理容業で頑張っています。そして税金払っていますから、それを大事にするべきだと思っています。

ここの修理工場も、オーナーは建設会社ですが、中の改装のために1,500万円の補助を受けています。製材工場も倉庫などの設備投資で補助を受けています。私は担当者には、

水産加工も含めて補助を出さないようなことはすると言っています。行政は補助金を作っても出せないようにするのです。

栗田副会長…行政はいろんな制約を作ります。

工藤町長…私は一切制約なしとっています。上ノ国町の担当課長が関連の社長を集め補助金の説明をした時に、町長から制約を作るなどいわれていると言ったようです。そこまでやるのかという声はあります。しかし、その補助金によって漁業では今までエビ漁をやっていた辞めた人も、船を買って今年また始めました。私達は10やっても20の効果は出ないのです。10やって、1か2の効果です。

栗田副会長…それでいいのです。間接ですから、実際にお金使って儲けるか儲けないかはその人次第です。

工藤町長…農業、漁業、中小企業は、町に対する不満はゼロです。担当からも、今どこに行っても町に対する不満は何にもないそうです。

栗田副会長…そうです。普通は補助金には制約がつきものです。

工藤町長…私も元々公務員でしたが、何かあったら困るというリスク管理ばかりやっているうちに制約をつくって出せないようにするのです。

栗田副会長…はい、そう思います。役人は心配事が先に立つことが多いです。

工藤町長…あのトラクターは本当に300万円したのか、ひよっとすると250万円かもしれない、とかです。しかし、そんなことやっても切りがありません。

栗田副会長…300万円貰ってトラクターを買ったというけど、実は150万円で、残り150万円で競馬に行っているとなるといけません。

工藤町長…そうです。ただ農業、漁業、商工業者、子どもたちへの補助金ですから町民は誰でも使っているのです。

栗田副会長…なるほど。みんなに補助金が入っているから不満はないと言うことですね。

工藤町長…保育料を無料にする前に、保育所に入る人数が80人でしたが、今130人で50人増えました。去年10月から始めたばかりなのにどうしてなのかと調べると、娘がどこかで結婚したが別れて子どもがいると、親は上ノ国に帰ってきたさいと呼ぶそうです。町の担当者が上ノ国町でやっている保育料、給食費を全部使うとどうなるかというシミュレーションを作ったところ、400万円の収入のある人は生涯300万円の負担軽減になるとなりました。

上ノ国町はどうしても所得水準が低く、おおよそ都会の3分の2くらいだと思います。建設業者の平均でも300万円くらいではないでしょうか。どうしても冬もありますので、収入は限られてきます。また、子どもを大学に上げると、札幌、東京にいる人は自分の家から通えますが、上ノ国町内の子どもは、生活費を含めると卒業まで約1,000万円かかり

ます。子どもを勉強させるために補助しているようなものです。

栗田副会長…年収400万円の世帯で、生涯300万円の負担軽減は可処分所得がすごく増えます。町全体の税収はどのくらいですか。

工藤町長…3億円ちよつとです。残念ながら8%自治です。

栗田副会長…残りは交付税が大半ですか。

工藤町長…24、5億円くらいで予算全体が40億円ちよつとですから、6割近くいきます。

栗田副会長…地方交付税は、東京からの配分で大企業が儲けた税金を配分する仕組みですから基本的には国のお金です。

工藤町長…考えてみればその大企業の商品も全部買っていますから、循環しているのです。私達がいなければ、トヨタもソニーもないです。

栗田副会長…そう思えばいいのですね。

栗田副会長…これは期限無しで続けるのですか。

工藤町長…ずつとやるつもりです。そのために基金を5億円積みました。5億円で今の計算でいけば、14、5年続けられます。私がいなくても続けられます。

工藤町長…こういう既得権は1回やると辞めません。今逆に国が準拠して徐々に進めてきています。

栗田副会長…そうするとその分が補助として入りますから、大分違いますね。

工藤町長…先取りのような形です。

〔地域創生の総合戦略計画の策定〕

栗田副会長…町と商工会で計画を作って出さなければなりませんね。

工藤町長…明後日も会議です。地方創生と言いながら私達はそれとは関係なく、町づくりは喫緊の課題です。いいきっかけにしたいと思っています。

栗田副会長…町の将来計画を作るのは、大事なことです。

工藤町長…民間の人たちを15人くらい集めて協議することによって、何か違う角度で新しいものが出てくればいいと思っています。

栗田副会長…民間の人を15人集める段取りはもう終わったのですか。

工藤町長…もう10回目です。それに函館のJTBと道新に入ってもらって、まったく違う角度から見てもらうことで進めています。

栗田副会長…JTBの人に入ってもらう目的は観光振興ですか。

工藤町長…そうです。観光という観点から意見をもらうつもりです。新幹線も来ることでですから、私達も活用したいと考えています。

砂原事務局長代行…100年以上の歴史がある笹浪家などもありますね。

工藤町長…しかし、私達はアマチュアですからその生かし方を知らないのです。私はいつも感じるのですが、公の施設に行ったときと、民間の施設に行ったときの違いです。民間施設に行くとも黙ってもお金が使いやすくなります。公の施設は使わせないのです。これが民間と公の違いです。民間であれば、施設をうまく使うのです。私達は逆立ちしても敵いません。私達はそこでお金を貰わなくても給料をもらえます。自分の給料をそこで稼がなければいけない人は考えます。残念ながらその差があります。

栗田副会長…自治体の長、いわゆる町長、市長を見てみると、これからいかに国から金を持つてくるかという根本が分かっている人、いわゆる行政のプロでないと町の運営をうまく出来ないと感じています。お話を聞いていますと町長さんはプロですね。

工藤町長…いや、あまり分からないので全部職員に任せっきりです。ただ、1つ恐れていることがあります。国の新しい補助金が出たと言ってみんなが群がりましたが、終わった後に何にも残らないのです。みんな私達も含めて目的と手段を履き違えて補助金があったからその事業をやっていたのです。本当は何をやりたいかです。いままでゴールを全部スタートから見ているのです。本当はどこがゴールでゴールから見るときに何が必要かという発想が無いのです。昔の一村一品のように作っても売れないで終わります。本当は消費者ニーズが何か

で、ゴールからスタートするのです。

栗田副会長…この補助金があるというだけで作ったものがすごく多いです。

工藤町長…ゴールから物を見ないといいけません。みんなスタート地点から物を見ます。それで失敗しているのです。自分の自戒を含めてのことです。

栗田副会長…あつという間に1時間経ちました。詳しいお話をありがとうございます。

平成27年10月20日 火曜日 13:30～14:30 於：上ノ国商工会

小林 恭平 上ノ国町商工会長

岩坂 與一 上ノ国町商工会副会長

小林 誠 上ノ国町商工会副会長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

砂原 隆 一般社団法人函館建設業協会事務局長代行・事務部長

栗田副会長：地域の課題をお話していただければと思います。最初に人口減少について上ノ国町はいかがでしょうか。

（人口減少と産業発展のための高規格道路整備）

小林会長：昔は鉾山が2つあり1万人の人口でした。それが、5、300人くらいと減少してきました。どの地域見ても、3千人2千人の町で、ここばかりでなくて北海道全体でその流れになっていることは、間違いないと思います。それとともに、高齢化、少子化の問題があ

り、それではその対策はどうするのとなつていのが現状でしょう。それに、人口が減ることになれば、他の産業、お店、ペンキ屋、呉服屋にしても、どんどん衰退していきます。上ノ国も檜山全体でもすごい勢いで進んでいることは間違いないです。同時に、日本海では魚、ここは特にイカまで減少しています。

それでは何が策かというの特効薬はないのです。北海道経済にしても、国の政策も、今は予算縮小の方について当然で、高齢社会を迎えるということを進めていくことでしょう。上ノ国町では建設業に依存することが多いです。今大体300人くらい雇用しています。農業、漁業にして兼業です。ほとんど建設業に頼らざるを得ないです。そうやって上ノ国町は栄えてきたのですが、どんどん流出していくことになると、建設業も農業、漁業もダメになることが拍車を掛けてくるというのが実態です。この辺で政策的に将来のビジョンを作れる町、国の政策、道の支援と基本的な考え方をもう少し明確にしてみたいと考えています。

上ノ国町で考えるとどうするのだということになると、漁業生産物を早く届ける高規格道路の整備を考えています。道路はいろいろな問題がありますが、新幹線が来るときになつても、道路の改良もまだされてないです。木古内までは整備が進んでいますが江差線になつてはるはずでしたが着手してないです。江差まではどうするのか、檜山地域は物流的にもまだまだ遠い状況でいなければいけないのでしょうか。私達とすれば、物流時間の問題で早く解

決して欲しいというのが実態です。

栗田副会長…町長さんが期成会の会長ですか。

小林会長…江差町長が期成会の会長です。

栗田副会長…道路整備も地域の声が必要で。

小林会長…私達商工会の決議案は早く着工してくださいということです。北海道開発局との会議でも言いました。フェリーの出港時間を考えると高速道路でないと40分以上遅いです。フェリーの便も昼から出港するとなるとまた違う角度から考えるのですが、今は加工まで考える状況ではないので、とりあえずは新鮮なものを早く送るしか方法はないです。

栗田副会長…水産加工はあまりないのですか。

小林会長…イカが多いのです。この沿線から松前にかけてイカにするめは多いです。後はそんなにありません。乙部町に昨年、釧路の水産加工会社笹谷が化粧品会社の撤退した工場跡にきました。農産物もスピードアップして出荷することを考えていかなければいけないです。檜山のために高規格道路を江差まで早く整備が出来るようによろしく願います。

栗田副会長…公表されている予算全体を見ると、道路整備は全体が少ないことにあります。それをなんとかしないと解決に結びつきません。今、予算をつけているのは白糠から釧路の方と、あとは足寄から北見、それと名寄、音威子府です。その三地域と函館までの高速道路を

今やっているので、それ以外のところに手を出せない予算しかないのです。

小林会長…函館江差道路と決まっていながら片方だけやるのは、逆に過疎に拍車を掛けることになると思います。それはいいことではないと思っています。とにかく調査費でもつけていただくことが順序でないですか。調査費もついていないのでは納得がいきません。新幹線が来るのでそちらに、お金が掛かるのかもしれませんが、私達は農業にしても漁業にしても物流のスピードを上げることが早くやらないと生きていけないと思っています。

栗田副会長…おっしゃる通りです。

小林会長…そんなに予算を多くくださいとは言っていないのです。地元の建設業者でも取り掛かれるような少しの予算でも構わないので欲しいのです。

栗田副会長…しかし、そういう予算のつけ方はしないのです。実施するときは一気にやるということなので、少しずつはやらないのです。4、5年で10キロくらいずつ供用するやり方です。小林会長…そういうことも確かにあるのでしようが、雇用の問題からいうと地元はどうすればいいのかということも頭に入れてくれないと困ります。将来地元が生きのびられるのかを考えてもらいたいと思います。こういう予算があつて、道の予算もなく国も一緒では困ります。町の建設業者に300人以上いるのですから、基礎的な作業が必要です。大手業者は大事でしょうが、地元の雇用はより大事です。国、道、町の人にとっては予算の取り方があるので

しようが、こういう意見を参考にしてお願いたいと思います。

栗田副会長…予算は事業が終わると地域配分が変化します。公共事業を受注して会社を営営することを考えると、毎年収入の変動が大きくて大変なのです。それは、いつかの時点で安定しないといけないと思っています。

↓地域の商業について↓

栗田副会長…会長さんはスーパーを経営されているとお聞きしましたが。

小林会長…はい、隣にあるスーパーをやっています。人口が3千人、2千人になったときにスーパーが成り立つかということまで考えます。大手スーパーが出店すると、町の人が一生懸命やった何十年、何百年続いたお店屋のシャッターが下がってしまいます。これからもう一度シャッターをあげることが出来ません。室蘭にしても、イトーヨーカドーが引いた後に残るのは、店のシャッターが閉まっている町です。大店舗法も改善され緩和してどんどん出店しないという時代があったのですが、そういうものが今の状況になっている一因かと思います。

栗田副会長…先ほども工藤町長さんのお話では地元の資本ですので、それはいいなと思いました。いろいろな地域に訪問しますとフクハラ、アークスなどが出ていますが、町に税金は払ってられません。店舗の固定資産税だけなのでしょうから、雇用はあるにしても、いくら売り

上げがあつても町は税金を取れません。小林会長は上ノ国町に税金をお支払いになっていると、町長は喜んでいました。

小林会長…今のところはちゃんと払っています。

栗田副会長…そのお話を聞いたときに、すごく大事なことだと思いました。外からの資本が来て、しかしすぐ逃げるのはおっしゃるとおりです。

小林会長…そういう現象が函館でも現れていて問屋業が無くなっています。もう札幌との商談ということになります。呉服屋にしても、大手とは札幌との商談だから函館はいらぬので函館支店は縮小となります。副会長は呉服屋ですから、函館市内で元々の問屋業は今何軒くらい残っていますか。

岩坂副会長…今は、衣料品で4軒くらいです。最盛期には大小合わせて34軒くらいあったのです。どんどん縮小していつて、廃業も出てきています。私達は札幌となると距離が遠いのですごく時間の制約があります。函館ならその日の朝頼めば早ければ晩まで商品が来ますが、札幌では1日、2日かかります。

栗田副会長…お客さんの対応にそれだけ時間がかかるということですね。衣料品系は札幌から送られてくるのですか。

岩坂副会長…札幌も少なくなってきました。

栗田副会長…そうですね。フェリーで送られて来るのですか。

岩坂副会長…問屋自体が少なくなってきたので、衣料品業界自体が縮小してきています。特に渡島、檜山はたいしたことが無いので札幌からもあまり営業に来ません。以前は1ヶ月に1回必ず来ていましたが、今は2ヶ月に1回くらいになっています。

岩坂副会長…来ても、その経費に見合った売り上げが出来ないので、2ヶ月に1回などになってきています。

栗田副会長…来られるときは、新しい商品が入りましたと営業に来ることですね。

岩坂副会長…大体1ヶ月に1回ずつは札幌から来たのですが、この頃は函館にも来なくなりました。札幌に出てきてくださいと言われます。結局件数もないので出て行くことになるのです。これからは、本当に商売をつづけるのなら、新幹線出来たので直接東京に行つて仕入れなければならぬと思います。しかし、人口が減ってきて私達も高齢化してきているので、億劫になってくるのです。

栗田副会長…息子さんは後継者ですか。

岩坂副会長…息子は全然違う職場に就職しています。男の子が3人いますが、誰も継がないので、いずれは頃合見てやめることになります。

栗田副会長…町長さんのお話をききますと新しく設備投資をするのであればお金を補助します

ということでしたがお使いにならないのですか。

岩坂副会長…上ノ国の場合は、小砂子から神明の先まであまりにも集落が点在しているのです。同じ2千人でも、分散しているのとこの駅前地区にまとまって2千人住んでいるのでは全然違います。この辺に2千人ぐらいいれば結構面白い商売ができるかもしれません。現実には分散しているので大変です。

栗田副会長…車で売りに行くことは行っていません。

〔水産加工が衰退したこと〕

岩坂副会長…昔はやっていました。水産加工があった時はよく出張販売や注文があって、持って行ったりしたので、水産加工が無くなったので行っていません。

栗田副会長…水産加工が無くなって来たのですか。

岩坂副会長…水産加工場があった頃は女の人方から電話が来て、何々を持ってきてくれとある程度のもを持って行って商売していたのです。

栗田副会長…加工魚はイカですか。

小林会長…昔は海から獲れたものをそこで腹を割いてイカのゴロを海に捨てました。それが公害になってしまいました。自然界の中から捕ったものを元に戻しているのに公害という認識

になり問題になりました。

栗田副会長…そういうのが原因で設備投資ができなかったということですか。

小林会長…結局、イカを作ってもゴロの処理で函館まで運ばなければ処理できなかったのです。化学薬品を使っているわけでもないのですが、法律で産業廃棄物になって、昔はイカのゴロを撒くことよって小さな魚がいっぱい寄って海藻もありました。自然界の中でそういうものがダメになったことが、磯焼けの1つの要因とも思っています。水産加工場の裏に行くとき昔は海藻がいっぱい生えていました。それは紛れも無い現実です。今はゴロを海に捨てることは禁止され、函館まで経費をかけてゴロを運んでいって処理するとなれば水産業界もイカが獲れなくなってきた、コストがあがって続けられなくなりました。

栗田副会長…そういうことがあるのですか。

小林会長…でも法律ではダメなのです。

栗田副会長…イカのゴロが廃棄物に位置づけられているのですね。

小林会長…科学的に本当にダメなのか、自然界に悪影響与えるのかということも調べる必要があると思います。洗剤が禁止になるのは分かります。しかし人間がゴロ食べるにもかかわらず、自然界のイカが禁止されている話です。

栗田副会長…イカのゴロを養殖に使うといった努力は多分したのでしょね。

小林会長…今でもイカゴロをつけて塩辛も作っています。それを人間が食べるには問題がなく  
て、捨てるのは禁止ということですが、自然界のサイクルを壊しているような気がします。

栗田副会長…撒き餌にも使えると思っています。

小林会長…使っているところもあると思います。逮捕者が出た事実があります。日本海はイカ  
に依存する率が高いし、この沿線は加工業者がいたにも関わらず、それが原因かどうか分  
りませんが、今は水産加工が減りました。スケソウも獲れなくなっただけあるのでしょうか。

〔商工会と経営発展支援計画の作成〕

栗田副会長…商工会のメンバーは何人ですか。

小林会長…今は、143人です。

栗田副会長…減っていますか。

小林会長…はい、減っています。

栗田副会長…会費は他では数千円と聞きましたが年にいくらですか。

小林会長…皆さんが事業縮小していますから、単独の会費の値上げは出来ません。人件費の  
補助と、不足分を町の補助と会費でまかなっています。どの協会も同じかもしれません。

栗田副会長…これから経営発展支援計画を商工会で作るのですね。

小林会長…法律が変わりまして、計画を作らなければいけないのです。行政にも条例を制定してもらわなければいけません。

栗田副会長…行政も将来計画を作って、その枠の中で商工会が計画を作るのですね。

小林会長…北海道は12月いっぱいまで条例化する予定です。各市町村は、まだ遅れています。町で条例化しないと、法律に該当するメニューが、商工会自体で使えなくなるのです。

栗田副会長…条例化が必要なのです。

小林会長…中小企業基本法です。

栗田副会長…商工会の計画は、確か来年の3月までに作るのですか。

小林会長…行政で言うなら地域創生みたいなものです。全国連合会の関係でいろいろ補助のメニューがありますが、小さい商工会にあまり該当しないのです。1億円とか2億円とか億円単位に限定した枠が出てくるのです。北海道の補助金はそうです。もう少し小額に緩和して欲しいと言っています。

栗田副会長…多分経産省の補助金がついているので、利用するときには制約があるのでしょうか。北海道の単独費であればいろいろ出来るのでしょうか。

小林会長…もう少し小さい地方の商工業者が使えるような補助制度を作ってもらえればいいのですが、事業費が1億円、2億円となると、こういう地域の商工事業者は1億円や2億円の

事業はできないのです。

栗田副会長…そうだと思います。

（上ノ国町の補助制度について）

栗田副会長…上ノ国町が数百万円の補助金を出していただいているのはすごいことと思って、聞いていました。

小林会長…上ノ国町はすごいです。なかなかないです。

栗田副会長…こういった補助金をお聞きしたのは初めてです。しかも全部町の単独費ですから、さらにすごいと思いました。

岩坂副会長…うちの店もすぐ商品を買いました。

小林副会長…本当に商工業者は潤っています。

小林会長…国の電気への補助があるのですが、申請資料が膨大なのです。資料作りにコンサルタントを頼まなければいけません。その資料作りに何百万円と取られます。たまたま町の補助金が出来たので、すぐ電気をLEDに変え、機械も入れました。

岩坂副会長…3年間続きましたが今年度で終わります。

栗田副会長…先ほど町長さんはまだあと十数年はやると話していました。

小林会長… 枠を少し多くしてくれれば、やる人がいっぱい出来るのですが。

栗田副会長… お金続くのですかと質問しましたが、大丈夫とお話していました。

小林会長… 私たちはまだ聞いていないので、個人的な思いでしょう。

小林副会長… 隣町から移住して来るので、町長も保育所、医療費が無料は近隣の町の人口を取り上げるように思うようです。

栗田副会長… 隣が大きい、例えば隣が何万人の町であれば移住してもらっていいですが、同じ規模の町が繋がっている地域であれば切ないです。

〔地元就職できるようにするために高校と連携していく〕

小林副会長… 私達も午前中少しお話したのですが、地元で高校作るという北海道の政策で、各所に道立高校ができました。それが今は廃校になる可能性が高い高校があまりにも多くて、当町もその危険性が高いところです。その高校生の進路を、最初高校が出来たころは随分追跡調査したのですが、人口減は止められないという諦めか、最近は高校の方にあまり足運んでないので苦笑いしていたのです。次いで廃校の可能性があるので農高です。何年間後にはキャンパス校になるのだろうかと話しています。

栗田副会長… もう決まったのですか。

小林副会長…江差高校のキャンパス校になる可能性は大きいです。

小林会長…奥尻町が町営にして、せたな町も1校になりました。

岩坂副会長…その辺は、卒業生がどういう現状なのか、高校とコミュニケーションを多くとっていく必要があります。人口減対策の1つとして、高校に足運ほうと話したばかりです。この町の補助金メニューを見て、高校卒業生を地場で両者が納得の上で就職できる機会が上ノ国町に出来るような良い補助金メニューが作れないものかと話してきました。

栗田副会長…就職は上ノ国町にはしないのでしょうか。

岩坂副会長…その前に私達は就職する場がない、雇用の場が無いので子どもたちは町から出ていくと思っていますので、どちらが先か分からないような会話になってしまいます。

栗田副会長…就職担当の高校の先生にこんな仕事があるのでという話しをするしかないと思います。どんな職業あるのか生徒は分からないですから、先生が就職先を教えます。

岩坂副会長…そこが少し遠のいているかなと思っていました。人口が激減している時代ですから、無理してでも使おうかと考えて、そういう助成を地域ぐるみで出来ないかということ、一方で、高校と情報交換していないので、助成金のあるなしではなく、町のためという気持ちになれば解決かと思っています。

小林副会長…NHKのテレビでやっていますが、隠岐の島の、ユニークな学習と体験学習、

農業漁業そういうのを体験して地元就職をする話でした。

栗田副会長…隠岐の町長が、地元の人ではなくて外からスカウトして町長になってもらって、それで全部直して行ったのです。多分、この上ノ国町は、先ほどお話しした町長なら一緒にできそうな気がします。会社で新人を町内から採用したら、給料の半分を補助するなどは考えられる気がします。ここまでお金を出せる余裕と腹があれば、出来そうな気がします。

町に何人残ってくれるかです。例えば高校生が1人残って、嫁さんを外から連れてきたら、子供2人ですから、それで4人になるのです。1人でも2人でも採用したら、給料の半分くらいは助成するという施策は出来ると思います。しかし、助成金が無くなったらすぐやめさせるわけにはいかないので、そこをカバーする仕組みを考えておく必要があります。

岩坂副会長…60歳以上、65歳以上の高齢者を再雇用している建設業もありますし、逆に世代交代と称して、高校生を受け入れる基盤はあります。

栗田副会長…今は町外に行ってもそこで居つくかどうか分からないので、それであれば親元で就職できるのであれば給料は少々函館、札幌より安くても、生活費はこのの方がかからないです。

お金かけて高校まで出して、他の町に行って働くのと、ここで働けば給料から所得税と地方税を払います。多分数年すれば家も持つことになるでしょうから、だいぶ違います。

（江差高校の女生徒が上ノ国の建設会社に技術者として就職した）

岩坂副会長…今年江差高校卒業した女生徒が、上ノ国の建設会社に、技術者になりたいといつて就職しました。そういう子はまだいます。画期的です。実務経験の期間がありますからすぐには取れませんが、研修や講習を受けていろいろ資格を取ってもらえればいいと思います。

栗田副会長…建設業もとにかく人手不足です。しばらく前は給料を払えないので人を雇わなかったことは事実です。

岩坂副会長…町内の建設業者は、人手不足で嘆く業者は意外に少ないです。高齢者も使っていることもあります。建設業に依存度の高い町ですから、継続して雇用されている人が多いと思います。

栗田副会長…そうでしょうね。地方の建設会社ほど、雇用を非常に大事にしますから少なくとも決められた定年までは絶対やめさせないと頑張っています。そのかわり、会社全体の給料を下げたりしています。

岩坂副会長…親となった立場の人が、共稼ぎとはいえ高校卒業して、子どもを専門学校に行かず財力はないです。測量、土木でなく絵画の専門学校でしたが、行かせても途中で頓挫して帰ってきます。色んな専門学校に行く子どもが多いです。一流大学は残念ながら私達の高校からは少ないですが、資金的に困る親御さんが多いらしいです。

栗田副会長…札幌の専門学校へ行かせてということですね。

岩坂副会長…東京にも行きます。

栗田副会長…東京に出したら、生活費で200万円かかります。それに学費です。年間300万円から350万円くらいかかります。

小林会長…少なくとも250万円はかかります。副会長の2人とも大学卒業した子どもがいた人達です。私はまだ大学4年生ですのもう少しです。

岩坂副会長…私達の若い頃と時代が違って、私達の頃は3畳一間などでしたが、今の子どもたちはワンルームマンションです。

小林会長…そういうところしか無くなってきたのです。

栗田副会長…東京ではそういうところしかありません。不動産屋が進めてくるのがそんな物件ばかりです。

小林会長…とりあえず、ネットができる机が入っているとかです。

小林副会長…情報化時代ですから、行ってみたい気持ちの方が勝つのでしょうか。子どもたちには、東京、札幌には怖い場面がいっぱいあるという情報は入っているのです。ところが地元就職できないと言われれば、私達は沈黙していられないことになります。人口減少の世論がご承知のようになってきているものですから、役場は真剣に過疎、人口減少対策を考えなければい

けないです。解決策はないですか。

栗田副会長…人口減対策は町外に住民が出て行かないで、ここで暮らせる環境を作る発想だと思っっています。日本全体が人口減になるので、これはどうしようもないです。上ノ国町の人口減少は今始まったわけではないので、戦後すぐから人口が減ってきたので、増えたのは大きい町だけです。町村はほとんど人口が減ってきています。ただいよいよ踏ん張り時だというのが今かなと思います。

岩坂副会長…難問中の難問を与えられたのですね。

栗田副会長…そうです。ほとんどの町長は、それは昔からの問題ですと話しています。一生懸命いろんなことやってきた話も含めてです。しかし、対策をしないと減ることも事実です。人口減少は今更取り立てて話す話ではないと、私は思っています。それが、町のメインの行政です。

小林会長…その通りです。昔は自分の兄弟は5人くらいで、父親の兄弟も7人いました。夫婦2人から子どもを入れて7人になった、次は5人になった、それでは私達は3人になったと、自分自身もそうなっていますし、世の中もそういう傾向にあります。それを今どうするかと、いっても難しい話です。特效薬はあるかといっても、個人的な問題まで関わってきます。栗田副会長…特效薬はないです。ただ、対策をやらなければいけないことだけは事実です。

小林会長…個人的にいうと、3千人が暮らせる町をどう作るか、所得をどう生み出すかということではいかなければならないと思います。だからこそ環境整備を早くしてくださいと話しています。

栗田副会長…それは役場に、国にお話しすることです。

小林会長…アクセスの問題は都会が先に取り上げられますが、田舎を先に整備すれば、今のようない問題もこともなかったかもしれないと思います。

（商業の競争は大手にはかなわない）

岩坂副会長…だが不思議ですね、戦後は敗戦国で皆貧乏でした。しかし、人口だけが増えてきました。食べる物もないのに、子どもが5人6人いて当たり前でした。今は考えられないです。先ほどおっしゃったが、アパートの6畳一間に3人くらい入っていました。ベビーブームがあつて子どもが溢れていました。

小林会長…日本人の頑張るといふ勤勉が、敗戦を迎えて初めてやるしかないという根性でしょう。いい意味で手本を見せてくれたのですが、その次私達の時代、今の60代の人たちが先代のことを、聞いていなかったかもしれないし、違いがあつたかもしれないです。例えば私は小売業ですが、専売特許が規制緩和でなくなりました。以前は酒だけ売って生活できたので

す。塩と酒とタバコがあれば、地域に密着できました。今はコンビニができる、酒屋は経営できません。間違いなく価格競争です。今は大手が酒などみんな免許持っています。コンビニでは以前は売れなかったのです。それだけが原因ではないでしょうが、競争と言えばそうですね。競争は弱い人が落ちていくことになります。

岩坂副会長…そうです。おっしゃるとおりで、平成に入って競争が激しくなりました。

小林会長…大手だからコンビニが潰れるわけがないです。ダイエー、ヨーカ堂の大手がほとんどです。競争しても潰し合いがです。価格競争になるとやっつけていけないです。必要枠の中でお互いに既存の商売が生きるための知恵なのです。お互いに生きていくために考えているのですが、違う解釈があつてときどき問題となるのです。

岩坂副会長…いろんな面で最低制限価格が原価ですということをやるべきです。

小林副会長…現在は値段あつてないようなものです。私達の商品でもスーパーで売っている価格と雲泥の差です。差が10円か20円であれば配達したりしてサービスすることもできるかも知れませんが、100円も200円も差がついたらどうしようもないです。

（田舎では建設業は、何でも頼られます）

小林会長…今アクセス改善が必要で国の予算をこの地域に集中できるのかということ。こ

ういう田舎では建設業は、何でも頼られます。その1番大事な産業を、見捨てるということなのかとも思います。最後には建設業に何とかしてくれ、手伝ってくれ、ということになります。災害が起きれば頼む、重機を貸してくれとなるでしょう。災害が起きれば先に建設業が出て行きます。消防隊員だっていけません。重機を現場に持っていけとなると地元では建設業に頼らざるを得ないです。

栗田副会長…なんとか建設業は残してもらいたいと思って、町長に話をするとどこの町長も建設業は、しっかりしてくれないと町は無くなると必ずお話ししてくれます。まず地域で最大の雇用先です。そこはみなさん認識されていますので、町で出すお金はある一定の金額を安定的に考えて事業を進めますという町長が多かったです。

先ほどの高校生の地元就職の話はぜひ進めてもらいたいと思います。全員は無理でも1人でも2人でも地元に残る人を作るのが1番大事です。

岩坂副会長…3年くらい勤めたら補助を出すという事業をやっているのではないかと思います。しかし、その話をハローワークと高校の校長は何にも言わなかったです。それに近い制度あるのですかと聞きましたが答えはありませんでした。

小林副会長…ハローワークはそういう制度があります。

岩坂副会長…高校の先生とハローワークの職員と一緒に檜山建設業協会に来ました。どこかの

企業が補助金を貰って新入社員を雇用している情報はあるのですかと質問したのですが答えはなかったです。終わったのですか。

小林会長…ハローワークは、1年雇用への補助金はありますね。

小林副会長…確か江差町でやっています。私の息子が就職したとき補助金が出ると聞いて、一  
定期間勤めた時点で補助金出すことだったです。

〔冬季の沿岸の越波の激しさ〕

岩坂副会長…まったく違う話ですが、自動車整備工場をやっていて1番気をつけなければいけないことで、日本海側から来る車は中古で買うなどという合言葉があるのはご存知ですか。

栗田副会長…それは海水の塩分で錆が進んでいるからですね。私も留萌に勤務しましたので、1年で錆がフレームまで進んだ経験をしました。今も除雪の融雪剤は全部塩ですから大変だ  
と思います。

岩坂副会長…それに沿海ですからね。

小林副会長…景観の問題もあるのでしょうが、海の見える透き通ったフェンスを最近作るよう  
になりました。朝に上ノ国から江差まで行く間の越波はすごく閉口します。

栗田副会長…この辺も冬の越波はすごいですね。

岩坂副会長…離岸堤は効果あるのですか。

栗田副会長…離岸堤はすごい効果があります。ただ道路予算では離岸堤は出来ないのです。離

岸堤は海岸事業の予算です。海岸事業の場合は守るべきものが道路だけならできないのです。そこに民家や工場などがあればできます。

岩坂副会長…函館であれば石川啄木の碑がある大森海岸は砂浜が蘇っています。

栗田副会長…大森海岸は守るべきものがあります。道路を守るなら道路予算で実施する必要がある。道路に波消しブロックを入れて、それでも止められなければフェンスをつくる方法です。

小林副会長…上ノ国で、昔は海だったところが、港ができて砂浜になってきました。今は畑を作っています。

栗田副会長…水深10mくらいまでは海岸に並行に砂が動いているのです。そこに突起をつくと、どちらかに必ず砂がつかってきます。海の施設を作るときはそのことに気をつけないといけません。

栗田副会長…長時間ありがとうございました。

平成27年11月16日月曜日11:00～12:00 於：新冠町商工会会議室

橋本 正美 新冠町商工会長

坂口 智幸 新冠町商工会事務局長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

「町の課題は人口減少、産業がしっかりして働く場所があることが一番大事」

橋本会長…商工会や町の課題は人口が減ったということです。人口が減るとすべてのことに影響してきます。物販の販売の低下、知識、頭脳も流出していきます。私はコンビニを経営していますから、人が減ることは大変なことです。しかし、日高管内の中でも流出する率は新冠町が一番低いのです。

栗田副会長…町長もそう言っていました。

橋本会長…そうですね。町長も第一に人口の流出対策で、移住定住を増やして、出て行くのを防ぐということは町の大きな課題です。新冠は管内の中では流出率が少ないですが、手放しに喜ぶわけにはいけません。どんどん増えるくらいの勢いがあれば良いと思います。

栗田副会長…町長のお話では、農業研修など何でも受け入れて、移住してもらう人を増やそうとしていると伺いました。

橋本会長…特に一次産業の農業研修の人も、農家の土地もたくさん余っているので受け入れたいですし、この辺も通りは新しいのですが、実際には住んでいない人もいますので、空いた住宅をどのようにして埋めていくか対策を立てることが必要で、農地にしても同じです。そこに若い人で、子育てしながら農業をやってくれる人たちが来てくれる事を一番町は望んでいると思います。

栗田副会長…そうですね。家族で来てもらい子どもを育て土地を守ってもらうことですね。

橋本会長…そうです。大手の会社に来てくださーいという大きな農業もあるでしょうが、町が望んでいるのは私が今言った農業者が増えることを一番望んでいることと私は思います。

栗田副会長…昔企業誘致は工場誘致を考えて、成功したところもあれば失敗したところもありますが、工場は業績が悪くなるとすぐ撤退します。言葉は悪いですが、食い散らかして逃げようなことになるります。そういうやり方では、地域は良くならなるとみなさん話していました。

橋本会長…企業誘致というと、町の食肉センターは80人から100人ぐらい働いています。それによって定着している人たちもいますし、他の町から来て就職している人もいます。それ

は一次産業に関わる工場ですが、何にしても産業、つまり工場や会社がなければ人も来ないと思います。ですから人と地域と産業の順序で行くのですけど、産業が最初でないかと思っ  
ています。産業があつて人が来る、定着してくれると私は思います。どんな企業でもいいか  
ら来てもらえば人は少しずつ増えていくと私は考えています。

栗田副会長…そう思います。産業とおっしゃられました、雇用、働く場所ですね。  
橋本会長…そうです。

栗田副会長…働く場所がないと人は来ないです。当たり前ですね。

橋本会長…それを私が最初に願うことです。

栗田副会長…皆さんそう言っていて、商工会長さんには申し訳ないですけど町長さん方は、基  
幹産業は一次産業と言っています。

橋本会長…これはどうしようもないです。いくら商工会を先頭に持っていくと云われて  
もそうはなりません。

栗田副会長…やはり人がいて、会社が動いて物が動くことになりますね。

橋本会長…私達はどうしても最後のほうに来ます。

（昔の中心商店街は高齢化で衰退しました）

栗田副会長…ここが中心の商店街地区になるのですね。

橋本会長…昔は中心だったのです。私達が生まれ育ったときはここが国道で役場があつて、商店が張付いていて中心だったのですが、バイパスができて国道が移り、同時に向こうにどんな人口がいつて商店も張付いていきました。実際ここはこの商工会とうちの店とカラオケ店と、裏に食堂が何軒かある程度です。昔は町の人も新冠の商店街はこの辺だという意識があつたのですが、今はまったく無くなりました。国道には農協、レコード館、農協のスーパー、それからセイコーマート、セブンイレブンがあつて、郵便局も向こうにあります。中心はここではないです。ここは道道の拡幅をお願いして工事が行われて、建物はきれいです。

栗田副会長…そうですか。尖がりの屋根があつて、シンボルに見えます。

橋本会長…そうです、同じパターンでつくりました。

栗田副会長…昔道路拡幅を行つたと思ひました。

橋本会長…道道の拡幅がなければ恐らくここはゴーストタウンになつていたかもしれませぬ。

私の店も移転していたかもしれないです。

栗田副会長…道路拡幅があり、建物がある程度新しくできたので、ここでもう一回商売をやるうという人が残つたのですね。

橋本会長…そう残つたのです。しかし、その残つた人たちもある程度の年代で辞めていった人

が半分くらいいます。

栗田副会長…それは高齢化ですか。

橋本会長…高齢のためか子どもさんのところに行くなどの理由でやめていきました。ここで実際に営業しているお店は少ないです。

栗田副会長…そうですか。見たところスナックがたくさんあると思って見ましたが。

橋本会長…それが、残念ながら1軒しか営業していません。

栗田副会長…看板はあるけど営業していませんね。

橋本会長…はい、夜は営業していません。ご高齢で辞めた方もいます。

栗田副会長…国道からここに歩いて来たら町らしいと思って見ていたのです。もったいないですね。

〔新冠町の人口は最近減っていません〕

栗田副会長…新冠の人口は、5千人ですか。

橋本会長…5,700人です。去年から減っていません。日高の町にしてみれば減ってないのがうそみたいです。どの町も軒並み減っているのです。

栗田副会長…後継者が、高齢化して跡継ぎがいなくて辞めて行って、その辞めていった方はた

ぶんこの町から出て息子さんのところに行くとなると人口が減ると思います。それで減っていないのは新しい人が入ってきていることですね。

橋本会長…そういうことです。産業を興しているからではないですか。町長が話していた農業の担い手、新しい人たちが来てくれることも人口にプラスになっていると思います。それから新冠と静内の間、温泉がある奥に団地を造成しました。

栗田副会長…レコードの湯のほうですか。

橋本会長…レコードの湯の少し新冠寄りで、同じ道路沿いに、町で土地を民間の業者に開放して、民間の人たちが宅地造成をしたのです。そこは全部家が建ちました。

栗田副会長…そうですね。住んでいるのですか。

橋本会長…それが、町の読みとしては造成をやっても、例えば退職した方が家を買うのではないかと予想していたらしいですが、予想に反して若くて子育て世代の人たちが非常に多く入ってきました。それが大きく人口増に繋がっていると思います。この辺はぜんぜんいいのですが、新しい団地には子供さんたちが多いらしいのです。

橋本会長…レコードの湯の方に入っていて、左側にあります。

栗田副会長…その人たちはどこから来ているのですか。

橋本会長…日高管内から来ていると思います。恐らく職場は新ひだか町、日高町で新冠に安い

手頃な土地があったのでそこで住むことにしたのかなと思います。私達がそこへ行って名前を聞いてもこの辺の人でないような人がいっぱいいます。

栗田副会長…苗字がこの辺の人でないのですね。

橋本会長…はい、狭いので新冠町の人の苗字は大体わかります。そういった点では、思いがけないことのような気がします。

栗田副会長…そうですね。それはすごいですね。

橋本会長…また食肉センターも去年オープンしました。その人達が住むマンションなどは新冠の土木建築屋が建てていると思います。

栗田副会長…会長のお店も売れますね。

橋本会長…人口が増えればいいのです。1万人を越していた時代、私達が小さいころですが、そのころと比べると、例えば学校の運動会などの祭事は人が少なくなりました。学校のクラスも少なくなりましたし、昔から見たら半分です。

〔商工会青年部は活躍しています〕

栗田副会長…商工会のメンバーは今何人ですか。

橋本会長…会員は今160人です。青年部員が頑張っています。例えば町のイベント、お祭り

から始まって色んなイベントがありますが、その活躍を見ると農業青年、軽種馬青年、漁業青年とかと比べて青年部らしい青年部は商工会青年部で、一番人数が多いと思います。

栗田副会長…青年部は何人くらいですか。

橋本会長…24〜25人ぐらいです。行政側からも、青年で行う行事には必ず商工会青年部が最初にお呼びがかかります。行政とも綿密に話し合っていてやっている現状です。

栗田副会長…それはいいことですね。

橋本会長…はい、何にしても一番、二番で商工青年部に声がかかります。やる気のある青年部です。町の産業課、教育委員会などと連携して色んな行事やっています。

栗田副会長…商工会が行政と一緒に単独で行う行事は年間どのくらいあるのですか。

橋本会長…青年部の行事は、研修会、お祭りなど年中あります。例えば何年か前に町長の発案で新冠の奥に飲み水ですごく良い水があると昔から言われている場所があるのです。青年部が探検して場所を見つけてどのぐらいの湧き水なのかを行政と一緒にやって、日高の山の中に入って水探しを率先してやったこともありました。

栗田副会長…商工会青年部は最近ではないところもありますね。

橋本会長…日高管内でも3人、4人とかのところもあるようです。

栗田副会長…それでは活動できないですね。

橋本会長…はい。新冠は商工業に後継者がいます。青年部の定年は40歳ですが、このままなら少なくなるので特例でローカルルールを作って3年延長することになっています。皐月の鯉のぼりを立てる、北海道競馬の支援事業で応援に行く、町の青年連絡協議会の開催、これは商工会青年部が主たるメンバーです。お祭りのビアガーデン、七夕、新冠のお祭り、盆踊り、12月にレコード館でイルミネーションをやります。行政と一体となって青年部が頑張つてくれます。

栗田副会長…しかしそんなに活動したら社業がおろそかになって怒られないのですか。

橋本会長…うちにも息子が2人いますが、青年部です。次男が部長を今やっています。長男は終わりました。行事をやる時には商売をぶん投げてやっています。

栗田副会長…そうなりますね。

橋本会長…私達もやってきましたから、それぐらいはやってくれないといけません。

栗田副会長…寛大な先輩が多いのですね。

橋本会長…はい、そういう人が多いです。

栗田副会長…今は商工会の青年部のお話ですが、先程言われました軽種馬青年部や農業青年部、漁業青年部などの、一次産業の人たちと連携しないのですか。

橋本会長…青年部同士の交流はあまり無いです。

栗田副会長…そうですね。確かに高齢化していますね。しかし、この辺の漁業では若い人が相  
当戻ってきていると思っていました。そうではないのですか。

橋本会長…襟裳のほうでしょう。

栗田副会長…この辺の昆布は良くないのですか。

橋本会長…採れないことはないのです。岩場もありますから、昆布採りは毎年やっています。  
しかし、昆布は襟裳が主です。秋鮭にしても少ないです。すごく栄えていたときもありました。  
橋本会長…昔、最盛期には新冠町に鮭のふ化場もありました。

〔観光協会で地場農産物の商品開発販売〕

栗田副会長…最近の農商工連携、六次産業化という話であれば連携しないとうまく行かないで  
すが、商工会と農協とで連携するのですか。

橋本会長…いや、あまりありません

坂口事務局長…そうですね。あんまり進んではないのですけど、観光でここはピーマンを活  
用しています。

栗田副会長…このピーマンはすごく良いと聞きました。

坂口事務局長…ピーマンを使ったソフトクリームなど色んな料理に使っています。観光協会と

商工会と関わりながら役場中心に作成して、道の駅でソフトクリームを売っているところですよ。その他ピーマンを使った羊羹、ピーマン煎餅などを商品化して、六次化へ活動しています。

橋本会長…それから酪農家が牛乳とプリン、チーズを作り道の駅で販売しています。

栗田副会長…多くの町で農産物、水産物の直売所を商業の人と一緒にやってやろうという話があります。こちらはいかがですか。

橋本会長…それは、道の駅の販売所で売らしてもらっているか、軽トラック市で地場の野菜を年に10回くらいあります。

栗田副会長…それは一緒にやるよりも農協の事業としてやっているのですか。

橋本会長…それは観光協会の仕事です。農協は、農協ストアではそういったものを売ってないと思います。観光協会が事務局になって軽トラック市を盛んにやっています。

栗田副会長…観光協会の事務局はどこですか。

橋本会長…レコード館の中です。

栗田副会長…商工会から離れたのですか。

橋本会長…昔は商工会にありました。

栗田副会長…そうですね。

橋本会長…商工会にありましたが観光協会と商工会を一緒にやるのは、観光事業としてはいか

がななものかとなりまして、レコード館に移して事務局も国の人材に関する補助金を使って職員を2名雇っています。

栗田副会長…観光協会は独立したわけですね。

橋本会長…独立しました。その会長は私がやっています。

栗田副会長…そうですね。じゃあ観光協会がお祭りのなものを中心にやるのが多いのですか。

橋本会長…そうでもないです。地域でふるさと祭りというのがあって、ふるさと祭り実行委員会という組織が出来上がっていて、そこでやります。商工会も観光協会も青年部も自治会も全部一緒にその実行委員会に入ってやります。町から500万円から600万円を助成してもらい歌手を呼んだりしています。去年は新沼謙二が来ました。割と名前の通った人と呼ばれる、皆さん楽しみにしています。

栗田副会長…人口減少が納まってきて、商工会の青年部も活動して盛り上がっているという状況ですね。

橋本会長…他の町から見ると新冠は人口減がよく止まっていると言われます。

栗田副会長…穏やかですね。冬も、ここは気温が零下にならないですね。

橋本会長…そうですね。雪かきがいらないです。

建設業は町のために貢献している」

栗田副会長…建設業はここに来る途中に二軒見えて、たくさんあると思いましたが、建設業は多いのですか。

橋本会長…建設業は多いです。社長がいて従業員がいて、それで季節の働く人がいるので、建設業は町のために貢献していると思います。

栗田副会長…お祭りの時に手伝いますか。

橋本会長…それぞれの自治会に入っています。お祭りのステージ作りは地域の建設業の方が主になってやっています。お神輿作りも建設屋の職員がやっています。もちろんお祭りの電気は地元の電気工事屋さんがやります。地域の事業として地元の建設業の電気工事屋、建設業の方ががんばってやっています。

栗田副会長…建設業も商工会のメンバーですか。

橋本会長…もちろんそうです。メンバーで建設会社は工業部会に入っています。

栗田副会長…部会は二つですか。

橋本会長…二つです。

栗田副会長…商業部会と工業部会ですね。

橋本会長…そうです。

栗田副会長…ここも建設協会がありますね。

橋本会長…そうです。建設協会の会議は多いですけど、問題が発生すると工業部会で解決するようになっています。

栗田副会長…そうですか。

橋本会長…定期の例会があるわけではありません。商工会として土木建築に関する問題などで考え方を一つにまとめなければいけない時は工業部会にお願ひしてやるシステムを取っています。建設協会としても商工会に入っていたら、商工会としてはその事務局も引き受けて、協会のほうから予算をもらっています。

栗田副会長…商工会で建設協会の事務局もやっているのですか。

橋本会長…そうです。委託費をいただいています。そうでないと、別々に動いていたら町の仕組みにならないです。

栗田副会長…はい、ならないと思います。それで先程一次産業の人と近いのかなと思ったのです。

「昔やっていた駒祭りも軽種馬青年が少なくなりました」

橋本会長…昔駒祭りをやりましたが、その頃は軽種馬業界にも農業青年も大勢いました。

青年部同士の連携した活動ができたのですが、他の青年部員が減少し活動ができなくなったのが現状と思います。

栗田副会長…そうですね。もうその駒祭りは無いのですね。

橋本会長…駒祭りは辞めて10年ぐらい経ちました。私達が青年部の時ですから30年ぐらい前から20年ぐらいやったと思います。

栗田副会長…外から来た時の町の印象としてここは馬がメインですね。

橋本会長…駒祭りを始めたときの町長は軽種馬業界の方で、馬の産業振興で始めました。人もたくさん来ました。結局は軽種馬青年部員が少なくなり役場の職員が仕切るようになってだんだん衰退していったような気がします。

栗田副会長…もったいないですね。

橋本会長…もったいないですよ。

栗田副会長…この管内で馬に関するお祭りやっているとところは他にありませんか。

坂口事務局長…浦河は駒祭りとは言わなかったですがシンザンフェスティバルをやっています。

橋本会長…シンザンフェスティバルは今でもやっているのかな。

坂口事務局長…やっています。7月の終わりくらいか秋です。ここには、観光としての乗馬ク

ラブもあります。

栗田副会長…町長さんが乗馬クラブの経営は大変だけど維持しなければいけないと言っていました。

栗田副会長…乗馬クラブでは人を雇う経費は夏には稼げるが冬の収入がないのが大変だとお話していました。乗馬クラブはこの売りですね。

橋本会長…日高は馬・サラブレッドが対外的にも観光面から見ても売ります。半農半漁の町ですと言っても観光にはなりません。やっぱりサラブレッドです。

栗田副会長…とにかく人が来てくれないと、そのあとの波及は無いですね。

橋本会長…観光で活性化できると裾野がすごいです。物を作る人、売る人、世話をする人が関係します。

「お年寄り見守り・買い物サービス「らくらく号」の運営」

栗田副会長…お年寄りの生活に関して、物を宅配するとか、そういうサービスを、行政と商工会が一緒になっておやりになってはいませんか。

橋本会長…やっています。

栗田副会長…やはりやっているのですね。

橋本会長…「らくらく号」という名前で軽トラックを運行しています。町の保険福祉課から依頼があり4年ぐらい前に始めました。商工会と農協と1週間ずつ分担して、主たる商品を農協の週と商工会の週とに分けています。車、人材の予算は全額役場で出してもらっています。週毎に分けて商品を積んで、1週間毎に地域も分けて女性二人で回っています。今会員は100人を超えています。

橋本会長…玄関先まで品物を持って行きますので、軽トラックに冷蔵庫を積んだタイプで行っています。

栗田副会長…最初に注文受けてから、持っていくのですか。

橋本会長…両方です。当日積んでいって、見ってもらって買う分と予約で持っていくのとその両方です。

栗田副会長…全体の100名のところを1週間で回るのでね。

橋本会長…そうです。ヘルパーさん方から最初にここに買い物困難なおばあちゃん、おじいちゃんがいると教えていただいて、会員になっていただいて訪問していくようにしています。町の保健課と一体になってスタートしました。他の町からも視察に来ています。おかげで各物販の店は手数料を1%取られますが、それでも売り上げの助けになります。

栗田副会長…固定収入になりますね。

橋本会長…黙っていたら絶対買物に出来ない人たちですからありがたいです。

坂口事務局長…この主目的は売ることよりもお年寄りの見守りです。

栗田副会長…そうですね。見守りですね。それは行政のほうの目的ですが、会長さんとしては売れた方がいいですね。

橋本会長…私達は物売りです。「らくらく号」の二人には、会員さんの体調が悪くないかとか様子が変わったことがあったらすぐ事務局や保険福祉課に連絡するような体制取っています。全道的にも先進町だと思います。

坂口事務局長…そうですね。けっこう視察に見えています。

橋本会長…視察に来るときも、全額町にお願いしなければ失敗すると言ってあげています。

栗田副会長…これは福祉の話ですから、経費は町で持つてもらおうということですね。

橋本会長…福祉を前面に出してやっています。これは新冠の売りの一つです。

坂口事務局長…民間でやっているところもあります。

「プレミアム商品券は成功した」

栗田副会長…今年プレミアム商品券がありました、うまく行きましたか。

橋本会長…うまく行きました。1回目の春はあまりにも早く売れ過ぎてクレームがきました。

当たんない人がいると売り方を間違っているのではないかと言われました。新冠は春にやったので北海道からもう一回やらないかと話があり、2回目を今やっている最中です。

栗田副会長…そうですね。

橋本会長…今度は町民全部に当たるように考えています。

栗田副会長…それは金額制限ですか。

橋本会長…金額を制限して全戸にハガキを出して、そのハガキを持つてくると必ず当たるようにしています。

栗田副会長…これは商工会が中心になってやらないといけない事業ですね。

橋本会長…商工会中心で、あとは町の産業課に相談しながら進めています。全道でも2回やるところはそうはないと思います。

坂口事務局長…そうですね。最初に予算を2回に分けてやるところはありました。うちは別々にもりました。

栗田副会長…それは良かったですね。

橋本会長…良かったです。

栗田副会長…それでは早く売り切れて良かったですね。

橋本会長…そうですね。この事業はどこも損するところがないです。持ち出しが無いですから、

上手に利用しないとつたいないです。

栗田副会長…国の補助金で全部やっていますからね。

橋本会長…それで加盟店にお金が入るのが遅くなるのが一番の問題です。それをうちの坂口事務局長は元銀行マンですので、最高に早く支払いが出来るように仕組みを考えてくれました。加盟店も1回目よりも2回目のほうが増えていたと思います。

栗田副会長…そうですか。

橋本会長…1週間遅れても遅いと言われます。二日か三日ですぐ現金になりますから有難いです。

〔商工会事務局職員は優秀である〕

栗田副会長…坂口事務局長さんは札幌からの単身ですか。

坂口事務局長…いえ、私はこの日高信用金庫に勤めていました。

栗田副会長…今何年目になるのですか。

坂口事務局長…3年目です。

栗田副会長…ただ商工会のシステムは全道統一試験と統一人事と聞いていましたが、その中には入られていないのですね。

橋本会長…うちの坂口事務局長はそれには関係ないのです。

栗田副会長…そうですね。

坂口事務局長…一応それはあります。あるんですけど、ただ民間会社での経験で、例外的に認めるケースもあります。私はそれに当てはまり、私の人件費は道から一切出てないのです。

橋本会長…町から助成していただいています。

栗田副会長…そうですね。

橋本会長…日高では新ひだか町も同じです。

栗田副会長…それはそのほうがいいですね。

橋本会長…私は全道の商工連人事協議会会長をやっています。

栗田副会長…人事の調整をしなければいけないのですね。

橋本会長…事務局の提案を良いか悪いか決めるのです。1年で50人ぐらい移動します。

栗田副会長…そうですね。

橋本会長…春から一年掛けて50人ぐらい異動するのです。会議は4回ぐらいあります。

栗田副会長…人事は個人の不満が残りますから大変です。

橋本会長…会長は良い職員は何年でもいてもらいたいのです。動かさなければいけない年代に入っているけど動かしたくないですし、態度が良くない職員は早く移動させたいとなります。

栗田副会長…そうなりますね。お話変わりますけど、経産省に出さなきゃいけない経営発達支援計画がありますね。

坂口事務局長…もう提出しています。日高管内6商工会のうち、4商工会が二次申請しています。

栗田副会長…今申請している最中ですか。

局長…はい、そうです。認定されるのが12月と聞いています。

橋本会長…何も作らなかつたら補助金が使えないので大変です。

橋本会長…うちの局長も優秀で指導員も優秀です。全国試験で1位なのです。

栗田副会長…それはすごいですね。

橋本会長…何千人の中の1位です。

坂口事務局長…毎年いわゆる習熟度テストをパソコンで全国一斉に同じ時間帯でやります。それで満点なのです。

橋本会長…すごいと思います。新冠に全国1位の人がいるのです。

栗田副会長…すごいですね。それは指導員の方の試験なのですか。

局長…基本的には指導員が対象ですが、指導員にならなくても指導員になれる資格を持っている人も参加できます。また一般職でも自分で勉強して参加することは一応可能です。新冠は

会長の方針で、職員のレベルを上げるということで全員受けさせています。

栗田副会長…なるほど。

栗田副会長…ここの商工会の職員は事務局長をいれて5人ですか。

坂口事務局長…はい。

栗田副会長…定型の職員配置ですね。

坂口事務局長…はい。

〔新冠町戦略会議への参画〕

栗田副会長…人口減少と高齢化について増田委員長の日本創成会議で消滅都市と言っています。が、この辺みんな消滅する話になります。そのことに関して他の町長、商工会長は今までずっと人口減少で苦しんできてずっと戦っていると言っていました。

橋本会長…あんなに劇的なことにはならないと思います。ちよつと地方を刺激して発奮することを狙ってのことかと思いました。人口減少のことを言えば、北海道では札幌が出生率を上げることを頑張ってもらわなければなりません。いくら田舎が頑張っても札幌が一番人口が多いところなのに出生率が低いのです。札幌市長に頑張ってもらわないといけません。

栗田副会長…札幌が出生率を高めない限り人口減少は止まりません。日本でも東京が低いです。

橋本会長…新冠町も戦略会議を今やっているところで私が座長です。

栗田副会長…町の長期計画を今作っているのですね。

橋本会長…そうです。3回ぐらい会議をしました。町内と外部の人、日高振興局の人や専門的にやっている人もいます。

栗田副会長…たぶん北海道が専門会社を国から紹介されて、その中からアドバイザーとして委員になってもらっていると思います。データを作る人が必要です。

橋本会長…分厚いデータをこの前の会議に持ってきて、それで札幌の出生率のことが分かりました。札幌に何とかしてもらわないと難しいと感じました。

栗田副会長…計画策定は3月までですか。

橋本会長…そうです。あと1回か2回です。

栗田副会長…何人ぐらいの会議ですか。

橋本会長…10人くらいです。商工会、農協、自治会長、それから学校関係1人、主婦の方が1人、外部から3人、大体10人ぐらいで構成しています。

坂口事務局長…地方創生版の戦略会議で、私たち商工会は経産省、資源エネルギー庁、中小企業庁の指導を受けていますので、経営発達支援計画も総務省の戦略会議との整合性を図る必要があります。

橋本会長…それとかけ離れたことはできないです。

栗田副会長…町がこういう戦略を立てるので、その一翼になる商工会が町の戦略に沿って発達支援計画を作るといふ仕組みですね。

橋本会長…そして予算もつける。しかし町は予算もつけるけど効果の検証もするということが  
す。

栗田副会長…長時間どうもありがとうございました。

平成27年12月4日金曜日10:00～11:00 於…浜頓別商工会

中村 忠勝 浜頓別商工会長

丹羽 幹典 浜頓別商工会副会長

佐藤 幹夫 浜頓別商工会事務局長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

中田 伸也 稚内建設協会副会長

老田 秀樹 稚内建設協会常務理事事務局長

（人口減少と対策）

栗田副会長…最初に浜頓別の景気はいかがですか。

中村会長…景気が良いのは都会、札幌や旭川近郊ぐらいしかないと思います。ここも少子高齢化や人口減少で、アベノミクスが私達のほうまで来るのかなと思いました。まだ来ないうちに消費税が上がると、また景気が落ちていくという感じは今受けています。政権が打ち出した地方の再生では、平成40年か平成50年にこの辺は消滅自治体に入っているのです。道内町

村はだいたい入っていると思います。あれによってショックを与えられ、今回の地方再生戦略会議では人口減少に特化した施策を町が出てきています。それによるとやはり良かったのかなと思います。このままなら本当に消滅するのかと思いましたが、なんとか少しは地方再生でやってくれるのかなと受けています。

栗田副会長…町の政策はどんな政策ですか。高齢化、それよりも移住政策ですか。

中村会長…移住などいわゆる人口に特化して人口減少に歯止めをかけるものですから、今までも政策はやっているのです。どこの自治体も何十年も人口減少で困っているのです、それなりの政策は出してやっています。ああいう刺激を受けることによって、現実味として受けて、何とかしなければならぬと一歩ギアが入った感じは受けています。政策的にはそう変わった政策があるかは難しいですが、それでも移住の関係も力を入れる、子育てへの支援が各地区多くなりました。子ども園がここは1箇所で定員90人で、待機者はいないのですけど、三人目も無料にしてもいいけれど、3分の1ぐらいの保育料とか、入園料だけでいい形です。以前は二人目からは若干の補助はしていたのですが、今は半額補助にしました。三人目は若干もらうという形です。今は子育て支援が多くなりました。

栗田副会長…医療は無料ですか。

中村会長…はい、そうです。

栗田副会長…中学までですか、高校までですか。

中村会長…今は小学校までですが高校まで無料化をしようとしています。来年ぐらいから高校までという考え方が、町の戦略会議の中にも出てきています。

栗田副会長…中村さんもその戦略会議の委員ですか。

中村会長…委員ではないですが議会議員ですから内容は知っています。

栗田副会長…会長は議長をおやりになつていたのでしたね。

中村会長…昭和38年ぐらいが人口のピークで8、000人ぐらいいたのですが、現在3、900人で約半分以下になりました。それでも周りから比べると減少率は少なかったです。それで管内では過疎地指定になつたのが一番遅いです。10年の国勢調査で計算しますので、ここが一番遅かったです。

〔浜頓別の産業は漁業と農業で、ホタテと牛乳です〕

中村会長…産業も漁業と農業ですが、昔は林業も主要産業でしたが衰退しました。これからまた復活するかという感じはあります。まだ林業は難しいですが。昭和30年代は林業の町でした。今は漁業のホタテです。この辺は全部ホタテです。

栗田副会長…ここも地蒔きですか。

中村会長…はい、そうです。オホーツク沿岸はみんな同じで地蒔きです。

栗田副会長…去年の12月に暴風で被害を受けて生産量がすごく減っているのですね。

中村会長…ここは例年の3分の1です。町でも基幹産業を守るということで、漁組に1億5、000万円ぐらい、それからホタテ加工業者に8、000万円ぐらい、合計2億数千円円の補助をしました。

栗田副会長…漁組にも補助したのですか。

中村会長…漁場を整備するために補助金を出しています。浜の前側に漁場があったのですが被害を受けて、沖出しするにしました。その漁場整備にだいたい1億5、000万円、今年と来年で出すということです。

中村会長…沖に移すとある程度の波が来てもやられないという考えです。ただここは沖にいくとけっこう水深が深いので、生育できるかという問題も若干ありますが、やったほうがいいということですよ。異常気象で今年もこの前少しやられています。浜頓は海域の幅が狭いのです。南の枝幸町の境界がカムイ岬のところ、北はクツチャ口湖からもうちょっと行ったところの道路の手前です。

中村会長…あそこから陸地に入るとまだ奥のほうまであります。林業が主で山側を広く境界としたとも言われています。海岸線が短く猿払の4分の1ぐらいです。猿払村は東浦から浜頓

別までです。それから比べるとはるかに短いです。それでも今年はホタテの値段は倍ぐらいになりました。それで若干息はついたみたいです。

栗田副会長…引き合いがあるから値段は上がりますね。

中村会長…そうです。ただこれだけ高くなると今度反動で来年は食べなくなりますので心配です。

中村会長…この輸出は今EUよりアメリカのほうが輸出は多いです。

栗田副会長…アメリカのハサップを取っているのですね。

中村会長…そうです。トンネルフリーザーを入れて瞬間冷凍させて、商社に卸して輸出しています。

栗田副会長…瞬間冷凍は何度ですか。

中村会長…マイナス70度以下でないですか。トンネルを10分くらい通ると冷凍で出てくるのです。今EU向けのハサップを取ろうと漁組で検討していますが大変そうです。捕るところから木造船はダメでアルミやFRP船で揚げる時も屋根付きの通路などが必要ということのようで今研究をしています。猿払はやるみたいですが、浜頓別も試験的にやっています。ここは浜と酪農とが元気な産業です。酪農だけでしたら大変ですが、漁業があることで一次産業に二つで2大基幹産業という状況です。

栗田副会長…酪農は牛乳ですね。

中村会長…牛乳だけです。酪農だけで畑作はほとんどやってないです。全農家が酪農1本で大型化しています。新規就農の来る人が本州で考えている酪農のイメージとこっちに来て実際の酪農を見るとイメージが若干違うみたいです。

中村会長…大牧場の中に牛を放しているイメージのようです。ここは牛舎に入れて管理してやるのがイメージと違うという話を聞いています。まあイメージだけで来られても困るのですけど浜頓別は新規就農が若干少ないです。

栗田副会長…どこでも酪農はそのパターンですね。自然放牧でやっているところはほとんどないですね。

中村会長…そうです。道東のほうは雪が降らないので放し飼いしているところもあるのですが、ここでも1、2軒はありますが、個人でやっているので乳量は落ちます。

栗田副会長…自然放牧ですと乳量は落ちます。

中村会長…今は牛乳生産工場みたいなものです。全部自動です。そういう農家は安定してきています。

（建設業界にはいろんな面で仕事をやってもらっています）

中村会長…浜頓別は農道も作るし、漁業でも築港は10年以上かかり拡張しています。建設業界にはいろんな面で全部の仕事をやってもらっています。ここは下水道整備が管内では早かったのです。市よりも早く町村では一番目にやったところですが、水道も早かったです。下水道は10年以上かかっています。最初に都市計画決定をすぐやったらしいのですが、一向に予算がつかなくて進みませんでした。それでも供用開始が平成元年ですから早いほうです。ただ昔は多いときなら町の公共事業が10億円ぐらいありました。今は1億円ちよつとで10分の1ぐらいです。

栗田副会長…それは北海道と国の事業も合わせてですか。

中村会長…いや、町の事業だけで土木と建築あわせてです。建築は公営住宅があれば多くなりますが、公営住宅とか建物がなくなったので今はほとんどなくなってきました。

栗田副会長…そうでしょうね。ただ町長は建設業の予算もある程度安定しなければいけないのでそれなりにはお考えになっているのではないですか。

中村会長…それは仕事を確保するという考え方と、国、北海道の仕事に地元の建設業者が入っていけるようなことを今の町長が一番やっていると思います。歴代町長はいろんなところへ足を運んでいます。ただ町の仕事となると、一時これも不採算の自治体に指定されたものです

から抑えています。それで夕張市が財政破綻して以降公債比率の基準が厳しくなったものですから、抑えてそのとき仕事を減らしています。それからだんだんやらないような形になりました。それでも今考えていますのが林道整備を町長も考えています。一時林道はほとんどやらないようになりました。3年前に北海道の施策で国と北海道が負担して全額補助で林道をやりましたが、それが終わった途端にやめることにもなりません。ここはまだ山林もたくさんありますのでそこに林道をつけて、林業再生という形でやっています。

栗田副会長…建設協会の会員は何人くらいですか。

丹羽商工会副会長…今14社です。

栗田副会長…丹羽さんが会長ですか。

丹羽商工会副会長…そうです。

中村会長…丹羽さんが会長で、商工会の副会長もやっていたいています。

栗田副会長…水道業、設備業、電気工事も入っていますか。

丹羽商工会副会長…入っています。

栗田副会長…商工会の部会は二つですか。

中村会長…部会としては大きく分けるとそうなります。工業の人も町づくり委員会などいろいろな委員会に入ってもらってやっています。昔であれば商工会のメリットが何かと言われたと

き、建設業の人も私達は関係ないというような話もあったのです。

栗田副会長…今そんなこと言えばこの町に住めないですね。

中村会長…お互いにみんなで頑張って町づくりをしなければなりません。町づくりの観点から商工会にも加入していただいて、やってもらっています。まあ私達商業も結局メリットないという話もありますが、ただ町づくりを一体的にやるとなればみんなで協力しながらやっていくというのが現状です。これで人が誰もいなくなったら商業だつて必要なくなります。今北海道商工会連合会の理事を見ても建設業の人が半分ぐらい理事になっています。北海道商工会連合会会長に下川町の建設会社の方や白老町の川田さんになったこともあるのです。

栗田副会長…川田建設です。

中村会長…川田会長の後任が今の荒尾会長です。

〔商工会の事業と経営発達支援計画の策定〕

栗田副会長…商工会のメリットはやはりないという感じですか。メリットというよりも皆さんがまとまっていけないいろいろな補助事業ができないですね。

中村会長…それで昔は会計処理と融資があったのですが、今は融資だけで会計処理は自分でも

できるようになってきています。今融資も簡単に貸してくれないのが現状です。

栗田副会長…融資は難しくなっているのですか。

中村会長…そうではないですが、利子補給など政策で有利になってきていて、その場合はいろいろ条件がつきます。

栗田副会長…新しい経営発達支援計画はもうお作りになったのですか。

中村会長…今出しているところで、今月中頃に認定が来ることになっています。事務局長が一所懸命作って私達と協議して作って出しました。稚内商工会議所は今回で11月に早々と通りましたね。1回目に出したのですね。

中田副会長…春からやっています。

中田副会長…北海道で1回目に出して今回通ったのは4か所ぐらいです。

中村会長…私達は12月に2回目に出したので、12月の中頃という話です。出さないと今後利益を被る形になります。

栗田副会長…補助金が使えないと聞きました。

中村会長…そうです。

中村会長…3回目は1月で、来年2回ぐらいで終わりと思います。

中田副会長…予算は1,000億円ですね。

中村会長…でも全国の全商工会、全会議所が取らないと、差がついたときに合併するなど辞めていく商工会が出てきます。今の支援事業の計画はしっかり立てないといけないと思っています。今までもやっていない訳ではないですが、町の計画と同じで計画を実行することが難しいです。

栗田副会長…町の戦略会議の案は3月ぐらいまでに作るのですか。

中村会長…12月にもう一回会議を開き年度末ぐらいまで作ることにしたいと思います。

栗田副会長…地方創生計画という名前ですか。

中村会長…名前はまだ決まっています。今のままいくと、「ひとまちしごとづくり」となります。再来年に町づくり計画がちょうど10年になります。

栗田副会長…町の総合計画ですね。

中村会長…総合計画の策定を来年からすぐ始めなければならないのです。それとリンクしながら、人口減少に特化してやっていますので総合計画に入れていくという形になると思います。前回会議では人口2、600人ぐらいでなんとか保つという数字が出ていました。

栗田副会長…人口ですか。

中村会長…日本創成会議のビジョンでは1、000人以下になることになっています。

栗田副会長…そうはならないですね。

中村会長…あれはみんな一瞬驚いて刺激にはなりました。国も人口減少対策を行い、自治体もこれではいけないと無視するわけにはいかなかったと思っっています。

〈高校で地元の魅力郷土愛を話す出前講座を考えています〉

栗田副会長…ここは高校がありますか。

中村会長…高校は1校です。昔は普通科と商業科がありましたが、人口の関係で商業科がなくなりまして普通科2クラスです。昔は3クラスあり、120人から150人いました。進学率はよかったです。北大など国立大学へ行っていました。お寺の住職で東大卒の高校の先生がいて、父親が亡くなりお寺を継ぐために帰って来たのです。東大卒ですので高校の教員免許を持っていてお寺のほかに高校の先生をやっていました。私も習いましたが、進学コースを作り熱心に勉強を教えてくださいました。

丹羽商工会副会長…優秀な浜頓別出身者が稚内で活躍をされています。

中村会長…進学は多かったのです。今は当たり前ですが英語と数学の講義内容を進学コースと一般で分けるのです。ああいうことをしたのは管内になかったです。そういうことをやっていました。最近は入試のボーダーラインが下がり入りやすいです。

栗田副会長…高校の定員は80名ですか。

中村会長…はい、40名を切ると1クラスになります。

栗田副会長…定員維持をしないとだめですね。生徒は町の中からが多いですか。それとも周辺の町からも来ていますか。

中村会長…猿払村と中頓別町には高校がないのです。中頓別町は昔農業高校がありました。がなくなりまして。

栗田副会長…その3つの自治体から生徒は入ってきているのですね。

中村会長…はいそうです。それでも100人ぐらいになります。猿払村は今地方に出る人が多くなりました。稚内や札幌近郊の高校に進学して行きます。浜頓別町もスポーツのクラブ、今はやりのサッカーと柔道では高校は地方に出ることがあります。柔道は指導者がよかったです。小学学校から少年団で柔道やらしていて優秀な選手は地方の高校に出て行きます。

栗田副会長…町を出て行くと戻ってこないのではありませんか。

中村会長…そうです。この前丹羽副会長とそのことを話していたのですが、浜頓別高校へ行って地元の良い所を教えて、郷土愛を育むことをやるのがいいのではないかとという提案が副会長からありました。

中田副会長…建設協会はそこに出ないのですか。

丹羽商工会副会長…建設協会は出ますが、建設協会だけで行くと建設業の話しだけになるので、

町も巻き込んで建設業界以外のことも出前講座でやろうと考えています。

中村会長…そういう提案がありまして、町長も良いことと考えてくれています。建設業界は人手不足でマンパワーがなくなつて、お互いに人を奪い合うようなことになっていきます。技術者が足りないのです、高校に行つて話をして地元に着用を持つてもらい、町を出ても帰つてきてもらえる、できれば就職も地元でしてほしいと出前講座の提案がありました。来年度やろうと考えています。商工会と町が主催してもいいです。

栗田副会長…ぜひやつてもらつたほうがいいと思います。

中村会長…商工会も高校生のインターシップを受け入れています。商工会に受け入れの打診がきて各業界に案内して、受け入れる形式で昔から行つていきます。高校とはコンタクトが取れていて新しいこともやれるような状況にはなっています。

栗田副会長…地元生まれ育つて地元就職すると他の町のことを知らないことになります。ただ1回町を出て行くと人間としては育つかも知れませんが地元には戻つてこないとなりますので、微妙なところです。

中村会長…私もそうですが、すぐ親の跡を継ぐのが嫌で4年間大学に行かせてもらいました。金もあまり無いのでアルバイトを自分でもするようにしました。いろんなアルバイトを、商売上も関係あるのでやりました。そういう点では勉強にはなります。ずっと北海道の北の

端で過ごすのも嫌だと思って、日本の首都に一回行ってみたいと東京に行ってきました。若いころは役場の人間も一回ぐらいいは東京に行かないとだめだと言っていたのですが、今は行ったら本当に帰ってこなくなります。だから役場から行かせなさいと言っています。若い人や中堅でも、実習で東京の自治大学校に1か月ぐらい見物でもいいから行かせたほうがいいと思います。

栗田副会長…それは町の職員ですね。

中村会長…はい、町の職員をそのぐらい教育しないと良い職員に育たないと思います。今は大  
学出も採っていますが、前は高校卒だけだったので浜頓別高を卒業して就職した職員が長く  
いました。

〔商工会の運営は大変厳しい〕

栗田副会長…事務局長の佐藤さんは浜頓別町生まれですか。

佐藤事務局長…私は旭川生まれで定年退職をして再雇用していただいています。

栗田副会長…浜頓別商工会の専属ですね。

中村会長…そうです。

栗田副会長…商工会の事務局運営は大変ではないですか。

中村会長…運営費のことが一番大きくて、大きい商工会は別ですが官庁などの定年退職した人に事務局長をお願いしているところが多いです。120会員がいると事務局長を置けるようになっていきます。この辺では浜頓別、豊富、枝幸だけが事務局長を置いています。猿払、中頓別は置いていません。

栗田副会長…それは規則などで決まっていますか。

中村会長…はい、北海道の補助要綱で決まっています。昔は国から直接北海道商工会連合会に補助金が来たのですが、今交付税措置になって北海道に一回入ります。

中村会長…少しずつ減っていますが、北海道ではなんとかお互いに協力し合っています。

栗田副会長…浜頓別町の会員数は何名ですか。

佐藤事務局長…133会員です。

中田委員…多いですね。加入率はどのぐらいですか。

佐藤事務局長…68%です。

中村会長…そのぐらいに持って行かないといけないと思っています。

栗田副会長…会費はいくらですか。

中村会長…昔から1級から今9級までの段階制です。一律では高い金額になります。だいたいこれなら辞めていく水準もあるので1級から9級までとしています。9級は700円、年間

8、4000円です。

中村会長…今は会費も上げられないです。下げるならいいが、上げるならダメという状況ではお金の関係で厳しさがありません。今は商工会も収益事業を少しやっていますとなくなっていますが、業種で地元の人と同じものはできないです。それで町から委託を受けてやる形しくなくなります。会館ももう30年過ぎて古くなっていますが、会館も自ら維持できなくなる状況です。

栗田副会長…他の町では町が作ったバスターミナルや公共施設の兼用でつくった建物に入って建物の指定管理者になっているのが多いです。

中村会長…私たちも建物が建てば考えています。

栗田副会長…バスターミナルに行ってみてきましたが、使えると思っていました。

中村会長…あの建物は今上を図書館にしています。建てた時に上に食堂など考えましたが、町で仮に図書館にしたのですが、今は仮住まいじゃなくて本屋になりました。

〔地元産品の商品開発を調理学校、酪農家と行っています〕

中村会長…ここは道の駅がないのです。道の駅を兼ねた交流館を建設したいという考えを持っています。それをどこかに委託管理することになります。

栗田副会長…道の駅の話はもう手を挙げられたのですか。

丹羽商工会副会長…検討委員会で検討中です。今は販売する品物を何にするかを検討しています。

栗田副会長…そうですか。

中村会長…ここは物産がないのです。ないと言ったらおかしいですが、海産物しかないのです。沿岸が全部同じです。特殊なもの、水産加工業もホタテ、秋鮭を扱えば良いのであまり手を広げたくない、酪農も同じような品物ばかりです。結局牛乳しかありません。畑作でもあれば農家の人が自分で作ったものを売るといのは他の道の駅ではあります。ここは牛乳とチーズとアイスクリームぐらいしかなくなります。あとここで採れているものがホタテと毛ガニと鮭です。

栗田副会長…しかし贅沢な悩みです。牛乳、チーズ、アイスクリーム、ホタテ、毛ガニ、鮭、すごいです。しかしちょっとしたものでいいので商工会で商品開発をやる必要がありますね。中村会長…商工会にも商品開発の補助金があります。最近は多くなりました。

丹羽商工会副会長…ホテルの調理師とか、水産品を食材に使う商品は商工会の地場産品開発で協議しています。北海道のグリーンツーリズムに加入されている酪農農家の方が趣味でやっているチーズ、ジャム、アイス製造などを商工会の会員になってもらって、商品のアイデア

を出していただいています。

観光協会とタイアップして札幌の調理学校と商工会も入って、浜頓別の地場産品を学校の調理に使ってもらって巣立った時に浜頓別の食材を使ってもらう、また食材としてのアイデアを学校の生徒さんたちに作ってもらうなどの事業を去年からスタートしました。

栗田副会長…そうですね。

中村会長…その調理学校の先生に、浜頓別出身の方がいて、ここからホタテ、鮭を持って行って提供しています。一匹のさばき方を浜頓別の漁師の奥さんが教えています。

栗田副会長…奥さん方が行って教えることはいいですね。

中村会長…奥さんと生徒が交流して今度は料理をしてもらいます。まだ学生なのでホタテのむき方もわからないです。それを教えています。去年は浜頓別で開催して生徒と交流をし、来年は浜頓別の開村100周年ですから観光協会も一緒になって実施する予定です。

栗田副会長…交流すると、商品開発にも繋がりますね。

中村会長…つながると思います。そこを今期待しています。それと将来いいコック長になってもらって浜頓別の食材を使ってもらって広めてもらう考えでいます。

栗田副会長…だけどそれはいいかもしれないです。

丹羽商工会副会長…夜間授業もやっているの、若い学生であれば相当時間がかかるから、夜

間には調理師の免許を取ってすぐにやろうという人たちがいるので、教授たちからそこ話と食材を持って行ったほうがいいと話がありました。去年冬にやったらいいです。

中村会長…それは早くやったほうがいいです。

〈観光協会の体制を充実していく〉

栗田副会長…観光協会と商工会は一緒ですか。

中村会長…一緒ではないですが、だいたい人材が同じです。商工会の理事が今観光協会の会長で、建設協会のほうから丹羽さんも副会長で観光協会に入っています。

栗田副会長…観光協会の事務局は役場にありますか。

中村会長…まだ役場にありません。もうそろそろ役場から離れたほうがいいとなっています。

栗田副会長…離れたほうがいいと思います。

中村会長…役場も大変ですので離れたほうが良いと思っています。

栗田副会長…役場から離すと、人を雇う助成金も出ます。

中村会長…応援隊、地域協力隊の形で協力してくれる人を事務局で一度やってもらって、その

あと一緒に地元の人とやって、それから事務局を作ってもいいと思います。

丹羽商工会副会長…計画は考えてあります。

中村会長…早めにやったほうがいいと思います。

栗田副会長…役場と離れたほうが即断即決になるからいいです。

丹羽商工会副会長…それには交流館、道の駅をもう少し形を作ってからと思っっています。まだその整理ができないです。

中村会長…事務局を持っていると行政も負担です。

栗田副会長…すごい負担だと思います。

中村会長…ただ行政から外れると色んなイベントのときに行政の協力がいいのではないかと  
いう不安も、まだあります。

栗田副会長…役場には産業振興担当の課がありますので、そこは関わらなければいけない部署  
ではないですか。

中村会長…そうですが、浜頓別町の場合は全町あげてやっています。全町あげてやるので民間  
があまり出ていかないこともあります。私達が行かなくても役場がしっかりやってくれ  
ると  
いう気持ちもありますから、反対に役場はいないほうがいいのかもしれないという話も出  
ています。

〔北オホーツク100kmマラソンが全国ランク第5位〕

中村会長…しかし100キロマラソンは別です。全町あげてやらないと無理です。

丹羽商工会副会長…浜頓別町の職員にかぎらない地元民間人材の活性化でマラソン大会がスタートしました。今年は5回目です。

丹羽商工会副会長…参加者には交通費がネックになっています。でも全国ランクは今もまだ5位です。専門誌のランナーズでインターネットを使って、ハーフマラソンからフルマラソン、ウルトラマラソンを全部入れたマラソン大会の全国評価があつて、今まで入ったことはなかったのですが、今年7月に大会を開いて9月にいきなりランクが上がってきました。

中村会長…ランナーズという専門誌はみんな知らないのです。言われてやっとみんなわかってきました。

丹羽商工会副会長…ランナーの方が評価します。

中村会長…今、丹羽副会長が100キロマラソンの実行委員長です。丹羽副会長は気にしてそういう専門誌を見ているますが、あとの人はあまり見てないのでランナーズって何という感じでした。

老田事務局長…参加者は何人ぐらいですか。

丹羽商工会副会長…600人ぐらいです。

栗田副会長…100キロはどういうコースですか。

中村会長…最初はエサヌカという、猿払村にちよつと入る直線の道路があります。周りに電柱もない酪農の牧草地で、そこに昔は舗装もしてなかった道路があります。その頃に日産自動車のコマーシャルに使った道路です。何年前前にはトヨタ自動車やバイクのコマーシャルでも使われて、私達が知らない間にコマーシャル撮影をやっているみたいなのです。

中村会長…一切電柱もないのでコマーシャルで見たけどアメリカの大平原に行っているような風景です。

丹羽商工会副会長…道外の方がツーリング、車も含めてすぐ来ています。浜頓別町と猿払村にまたがっているのですが、どちらかという猿払村のほうが直線は長いのです。ランナーもそれがコースの一つの楽しみになっています。

中村会長…町の中を50キロ、その直線道路などでほしい50キロになります。50キロと100キロの二つのコースを作っています。

栗田副会長…コースはだいたい町内なのですね。

中村会長…はい。参加者は600人来て、泊まりになります。

老田事務局長…本州のかたもいらっしゃるのですか。

中村会長…います。

丹羽商工会副会長…今、半々ぐらいです。はじめは6割が本州でしたが、8月開催を7月にしたのです。そうなると道外でのウルトラマラソンなど大きな大会が集中して7月に開催になるとちよつと減ってきました。ただ、いい評価が出てきたことで、また来年に期待しています。ボランティアのおもてなしが他の大会より高いということでした。

中田副会長…実行委員は大変になってくるのではないですか。

丹羽商工会副会長…はい、前夜祭もあるから二日間ですが1年いっぱい考えなければならぬです。

中村会長…来年開村100周年ですので、それに100キロをかけて来年は少しがんばつてやるかと動いています。ボランティアも少し増えるかと思っています。

丹羽商工会副会長…北海道開発局からも相当な人数がボランティアで来ています。

丹羽商工会副会長…38名ぐらい来ていました。

中村会長…今はボランティア700名近くです。ランナーと同じくらいのボランティアが必要になります。それでなんとか来年はボランティア1,000人を目標にしています。

栗田副会長…費用は町から補助が出て、あとはみんなで少し集めた寄付と参加費でまかなうのですか。

中村会長…そうです。

丹羽商工会副会長…参加費は100kmで1万7,000円です。

中村会長…参加費にはいろんな記念グッズや保険料、飲食代も入っています。

丹羽商工会副会長…完走率は80%ぐらいです。

中村会長…はじめはそんなに参加費が高いとは思っていませんでした。JTBから話があつて、ちようど商工会に来てその話をしたときに私がいて「やったほうがいい」と簡単に言ったのですがそれから大変でした。後で登録料を取ると聞いて金を払ってまで走る人がいるのか、そんなの人が来るのかと言っていました。全国でも参加費を取っているから大丈夫ですとは言いながらも、一回目は不安でした。

栗田副会長…今年5回目で毎年1回の開催ですか。

丹羽商工会副会長…毎年1回です。ランナーも今年600名なので地元だけの受け入れは無理で、近隣町村と稚内は大岬のほうに泊まっているみたいです。稚内も7月の観光シーズンなので難しい所もあると思いますが、宗谷の観光連盟も空室情報を流してもらえるとありがたいです。

栗田副会長…稚内もちようど多いときですね。

丹羽商工会副会長…そうなのです。

老田事務局長…クツチャ口湖のオートキャンプ場も満杯になりました。

丹羽商工会副会長…マラソンのコース後半にクツチャロ湖周辺を入れました。クツチャロ湖はラムサール条約に登録されていて、はじめ動きは遅かったのですが、マラソンコースに入ることでオートキャンプ場の利用者も増えてきました。

老田事務局長…リピーターが多いと聞いています。クツチャロ湖には野鳥も来ますね。

中村会長…白鳥と大鷲です。昭和30年ころはここが中継地でした。最近はいろいろなところで餌付けをしています、そのころはここだけで、餌付けをしていました。稚内の大沼も餌をまいて呼んで成功して今は反対に大沼のほうが中継地のようになっています。

### 〈建設業界と災害支援活動〉

栗田副会長…産業があつて雇用があつてそれで建設業があると考えています。

中村会長…浜頓別は建設業界の方にもいろいろやつてもらっています。例えば除雪でも、直営で除雪やっているのは今では浜頓別町と中頓別町ぐらいですが、経費の関係で町の持ち出しが少なく済むということをやりましたが、運転手、オペレーターの人材も集まらなくなりました。漁師の人が来ているぐらいです。一部委託しているのですけど、もうそろそろ委託しなければならぬと考えています。この前ここで防災訓練やりましたが、北海道開発局で旭川、北見、札幌から防災に関する作業車が6台くらい来りました。そのときに北海道開発

局で災害があったときに要請すると全部持つてきてくれて全部やってくれるのですかと質問をしたのですが、貸しますが作業は地元建設業界にやってもらう形ですと言われました。建設業界の人も少なくなると、災害のときも困ると思いましたが。災害が起きると建設業界に頼るところが大きくなっています。建設業界が生き残る政策、施策を町が持つていないとまずいと考えています。東日本大震災のときだって、建設業界の人はあまり表に出ていませんがだいぶ支援に行っていると聞いています。

栗田副会長…あのときの災害は建設業界と一緒にやらないとできないのです。自衛隊とか消防の人たちだけでは瓦礫を取り除けません。

中村会長…重機も持つてこないとだめです。

中村会長…建設業界は、地元に結構貢献してもらっています。町長と話し合ってそういう人が生き残れるような施策をしないといけないと考えています。今の町長も業界に関して話し合いに乗ってくれます。商工会と建設協会とで行政と懇談会を年一回やっています。

丹羽商工会副会長…去年から商工会議所では市長と商工会議所建設部会で懇談会をやっている、浜頓別でもお願いしました。

中田副会長…地域でまとまった要望を稚内商工会議所でも毎年お聞きしていますので、そこに浜頓別の要望もあげてもらえれば、建設業界から商工会に上がります。

中村会長…今度一緒に持つてく要望書にあげます。

中村会長…町長は必ず札幌、稚内に行ったときは必ず北海道開発局と北海道庁に顔を出してきます。やはり要望活動をやると実現しています。そういう点では要望活動は必要と考えてやっています。

栗田副会長…長時間お付き合いただき、どうもありがとうございました。

平成27年12月7日月曜日10:00～11:00 於…長沼町商工会

岩城 榮市 長沼町商工会長

相澤 昌之 長沼町商工会事務局長

池内 昌之 長沼町建設業協会事務局長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

砂子 邦弘 一般社団法人空知建設業協会副会長（現会長）

栗田副会長…地域の課題をお話してください。よろしくお願いします。

（空知は全道でも元気な地域のトップに入る）

岩城会長…最近感じていることは、岩見沢と美唄の国道に極端に狭くなるところがありますが、冬はまことに不便なのです。私も雨竜に行くのにそこで2時間ぐらい待たされました。新年交礼会に2時間余り遅れて出まして、すごく響響を買ったことがあります。それ以来あの道路を早急に拡幅してもらいたいと思っています。

北海道には14の管内商工会連合会がありますが、この空知は全道でも元気な地域のトップに入ると思います。なぜかという旧産炭地で落ち込んでいるところは落ち込んでいますが、それなりに皆さんいろんなアイデアを出し合いながら生き残りをかけております。ワイン生産、学校や産炭地をなんとか利用して見てもらおうという活動をしております。そして空知に16商工会がありますが、約2、200名の会員数です。これは北海道の中でも多いほうです。

商工会議所は別で、会議所を入れたら27です。リーダーもまた若いです。商工会長は私が68歳で70代が二人で、あと12名の方が50代60代です。その中には議員が6名います。これもちよっと変わった地域と思っております。そういう方々が実行部隊で頑張っております。さらに議員の中に建設会社が4軒おります。

みんな大変だと言いながら頑張っています。空知は頑張りがいのある地域でもあると思っています。ご存知の通り、農地再編の長沼国営事業で約100億円の事業があり、奨励金80億円から100億円の仕事をこなそうという意気込みで今やっています。今、十数社がその工事を行っています。

そのおかげで長沼建設業協会の方々はもちろん地方から入ってくる建設業者の方々も一緒に月に1回の手作りの祭り、夕やけ市をやっています。今年でもう20年になります。

栗田副会長…月に1回ですか。

岩城会長…5月から9月に月1回で年5回です。それに関して国営事業をやっている建設業者と長沼町の建設業界の方々が、手弁当で応援いただいています。さらに夕やけ市のための通行止めなどいろんな面に協力してくれるようになりました。これには本当に感謝しています。

栗田副会長…そのお祭りはどういってお祭りですか。

岩城会長…夕やけ市という、商店街の店先でやっていますでしたが、去年から警察の理解を得まして国道を3時間通行止めにして実施しています。理由はたくさんの子供たちが参加するので事故発生の可能性もあるということです。私も長年歴代の警察署長と話し合いをしてやっと理解をしていただきました。

栗田副会長…ありがたいことです。

岩城会長…国道を通行止めすることは大変なことです。

栗田副会長…最近はあまりやらないです。

岩城会長…お金をたくさん出すのではなく、地域で手作りの町おこしをどこの町も手がけてきていると思います。ただ成功するか成功しないかはありますが空知には手作りのお祭りがありますので、各団体がみんな協力しています。

「国が人口減少の不安を煽っています」

岩城会長…私は人口減少とは当然来るもので、あまりそれを気にしないで自分のスタイルで進んでいくことをみんな理解してくれると思っています。

栗田副会長…そうですね。

岩城会長…絶対にお年寄り体が不自由になるので、その人たちに上手に仲間に入ってもらうようにしてやると私は今皆さんに話しています。

栗田副会長…人口減少は、もともと都市以外は進んでいました。それなのにどうして急に国が言い出すのだろうかという感じですよ。

岩城会長…そうですね。20年後にはこうなりますと、国が不安を煽っています。

栗田副会長…たぶん商工会長が今苦労されていると思いますが、経産省がやっている計画づくり、経営発達支援計画に反映させたいのだろうかと思っています。

岩城会長…プレミアム商品券のように一時的なものでやっているのと、何がなんだかわからないうちに終わってしまい、後ろを振り返ったらなにも残りません。昔は建設業界が潤わなかったら絶対地域は潤わないと言われていたし、地上げがたくさんありました。今もそういう人たちが潤わなかったら地域の潤いは難しいと思います。人口減少と同じで課題のもう一つは働く人の不足です。これは建設業もサービス業もそうですね。整備工、介護士、理容師、スー

バーのパートがほとんど町から姿は消えています。

栗田副会長…スーパールのパートがないのですか。

岩城会長…いいいです。うちで働いている人もそうですが平均年齢が高いです。そういう人たちを大事にしていて仲間づくりをしていかないと、企業は残れないでしょう。まして長沼町は空知では人口がトップのほうですが、やはり人口1万1,300人の町では大変です。

そして隣同士の町が良い悪いは別として、何かで手を繋ぎながら前に進んでいかないとけません。これはもつとも大切なことです。俺は俺と言っても、所詮俺でしかありません。

栗田副会長…そうですね。自分のとこでできる範囲はそんなに多くないです。

岩城会長…一番変わったのは、昔は同業者同士がいがみ合っていました。今は仲良くせざるを得ないです。仲良くしないともろいです。

栗田副会長…少なくとも同業者の中では仲良くすることですね。

岩城会長…どうしても意見の合わない人はどうにもならないですが、ある程度みんな腕を組み合って行かないと私のような特にサービスマン業はやっていられません。

栗田副会長…会長さんは食堂なのですか。

岩城会長…そうです。私は昭和39年に16歳、高校1年でリアカー引つ張って行商を始めて2年、その後雑貨屋を13年やって昭和50年から食堂を始めたのです。ずぶの素人でしたが、いい人

に恵まれて「赤字井」の商標登録を取ったのが18年ぐらい前です。まず接客が大事で、そして人に恵まれていることで、お客さんがすごく宣伝してくれます。インターネットに50万件、電話で20万件入っていると言われていきます。ホームページは持ってないのですが、お客さんの書き込みです。1日4時間の営業で週4日、22,000人のお客さんが来てくれます。年間800時間の営業です。知らないお客様が1日平均して100人は来てくれます。知らないお客さんが90%です。ネーミングで来てくれるのでしょうか。なぜこんなに流行るかというたらやはり札幌があるからなのです。千歳、札幌、恵庭、北広島に近い、大消費地を構えている、千歳空港がある。それでお客さんが入ってくるのです。

今、田んぼを大きくしていて、よくお客さんに広いですね、なんであんなに機械が入っているのですかとよく言われます。ただでさえ大きな田んぼをまた広げているのですから北海道でもこの辺以外ないでしょう。

栗田副会長…北海道の中でも水田の広さはここが一番です。

（長沼町にはサミット、町長、副町長、教育長、議長、教育委員会委員長、農協組合長、土地改良区理事長、農業共済組合長、農業委員長、農民協議会委員長、商工会長だけが出る会議がある）

岩城会長…そうでしょう。でも町も一番だと思っています。長沼町は町と農業と商工会と土地改良区と協会が、いろんな事業にお互いにつながり組んで一緒になって進んでいます。お祭りもみんな協力し、それぞれ協働しています。長沼のサミットって言われる常勤者会議というのがあるのです。これも全道では長沼だけです。

栗田副会長…それは長沼町の中の会議ですか。

岩城会長…はい。年に2回くらい開催します。長沼の組織団体のトップでないとは出られないのです。代理は認めています。私が全道商工会連合会の役員をやって、監事3年、理事4年目ですが、役員の方に聞くのですけど、こういう会議は長沼町だけです。

栗田副会長…たぶん町では初めてでしょう。

岩城会長…179市町村あるけど、長沼町だけです。

栗田副会長…そういうのはないでしょうね。商工会長、議長になったらそこに絶対呼ばれる会議などを作ると、あそこに出たいという気持ちが出るのでしょね。そこに出たら長沼でトブだというステータスですね。

岩城会長…会議に出られると、長沼町のリーダーです。

栗田副会長…町が事務局をやっているのですか。商工会ですか。

岩城会長…町です。町長、副町長、教育長、議長、教育委員会委員長、農協組合長、土地改良区理事長、農業共済組合長、農業委員会長、農民協議会委員長、商工会長です。

栗田副会長…すごいですね。年に2回開催ですか。

岩城会長…1、2回はあります。農協総代会に商工会会長が呼ばれます。商工会総代会にも町長が出てくれますし、農協組合長も出てくれます。こういう関係が見えないところで強い街づくりになるのです。

栗田副会長…それはすごいですね。農商工連携などとわざわざ言わなくてもやっているということですね。

岩城会長…私はやっています。ただ本当に町おこしに大きな旗を揚げられるかと言ったらまだそこまではいっていません。大きな仕事、例えば2万人集まるお祭りにもみなさん出てきてくれるし、店を出したりしています。夕やけ市でも8、000人から1万人ぐらいお客さんが来ますが、子供さんもたくさん集まってきました。長沼町にそんなに子供なんていないですから、どこからこんなにも集まってくるのかと思います。農業団体の方々が空き店舗を使ってお店出してくれます。建設業界は、とにかく横にいるのが当たり前という風景になってい

ます。

栗田副会長…そのサミットのメンバーの方たちが声を掛けるのですね。

岩城会長…それと職員の人たちもみんな参加します。

栗田副会長…トップがそうなるとうなりませぬ。

岩城会長…一回出たら、出ないわけにも協力しないわけにもいけません。これは空知でも長沼町だけです。

栗田副会長…夕やけ市は何年前からやっているのですか。

岩城会長…20年前です。今年で100回目になりました。

栗田副会長…100回目。すごいですね。

岩城会長…年に5回ですから。

栗田副会長…サミットは何年前からですか。

岩城会長…サミットは板谷前町長からで、私が商工会長やらしてもらってから11年目になりますから15年目ぐらいです。私はこの商工会長に手を挙げて立候補したのです。

栗田副会長…珍しいですね。

岩城会長…先輩から怒られ響盛を買いました。若い人たちが応援してくれましたが、4、5年は響盛を買いました。今でもその名残りがあるのではないですか。何かをするためには必ず

いろんなことあります。犠牲になっっている人もいるだろうと思います。

栗田副会長…半分以上は引き下がらないとうまく行かないです。

岩城会長…もう一つは建設業界ですが、地元に発注はなかなか難しい話ですが、今札幌市長が新しくなって、新聞で見ますと街づくりの意欲を出しているように感じます。あれであれば地域の業者の方々も力がつくのではないのですか。

やはり地域、なるべく自分の町から近い仕事をやってあげる、北のほうから仲間が来てくれる人もいるから、それなら経費を考えてあげなかつたらいけません。そういうところが話し合いが必要だろうと思います。

生き残るためには元気で前に進んでいる姿をみんなに見てもらわないといけないと思います。病院に入院している方々でも雰囲気元気かどうか分かります。商工会の理事会もそうだけど、だんだん物を言わなくなってきましたし、参加型でなくなってきました。今の特に若い人は一緒に飲んで歩きたがらないです。昔みたいに俺に着いて来い、行くぞと言う人もいなくなりました。一緒について行っても割り勘なら冗談じゃないとなります。

栗田副会長…割り勘なら冗談じゃないというのですか。

岩城会長…言います。出てこなくなります。なんで仕事の延長で付き合わなければいけないのかとなります。

岩城会長…商売の話に戻るのですけど、学がなくても人がいたからここまで来られたと思います。みんな苦勞させていますが、一番苦勞させたのは妻と家族です。3年前に天皇陛下から褒賞をいただきました。これは、ついているなと思いました。

栗田副会長…ついでにすることもご自身の努力がないとそうはならないです。

岩城会長…私の持論ですが、人は優しくしてあげたら必ず優しくしてくれます。その繰り返しだと思います。毛嫌いしていたら絶対近寄ってこないです。会議でも飲み会でも必ず合わない人が近くにいるのです。この2時間もつらいけれど相手だつてつらいと思います。

栗田副会長…そういう人にも丁寧に対応するわけですね。

岩城会長…最近はそうします。

〔商工会も農協も後継者はいます〕

栗田副会長…長沼町商工会の会員は何社ですか。

岩城会長…240社くらいで空知の商工会ではトップです。後継者も多いです。長沼の農家の

後継者、新規就農は今年17名いました。毎年十数人ずついます。これも全道で珍しいことです。

栗田副会長…農業で今年17名の新規就農者ですか。

岩城会長…必ず毎年います。そして商工会も出てみんなでお祝いをしてあげます。

栗田副会長…農業の後継者が出た時に、お祝いの会に会長さんが出るのですか。

岩城会長…はい、長沼町商工会も出るし、青年部も女性部も出てくるし、議員も出てきます。

町のそういう人たちが全員参加で2時間ぐらいお弁当を食べながらお祝いします。

栗田副会長…その16、7名とみんなが顔合わせをするわけですね。

岩城会長…これも全道的にやっぱり珍しいと思います。

栗田副会長…ほかで今までインタビューをしてみましたかそういう話は初めてです。

岩城会長…そうですね。

栗田副会長…商工会と農協と連携していますかという質問を必ずするのですが、これからですという地域が多いです。

岩城会長…まだ農業はいいほうです。漁業、林業もありますから、それぞれ個性があるので大変だと思います。

栗田副会長…町長は連携しないとダメだという方はすごく多いです。役場の職員が一所懸命立ち上げて、やっと進んでいるところがかなり出てきていますが、最初から役場の仲立ちがなくて連携しているという地域はないです。

岩城会長…これはやはりこの15年から20年ですね。それ以前は選挙で町を半分にして戦ってました。

栗田副会長…どこでもそうですね。

岩城会長…それが若い人もこうじゃいかんということで、時の町長がその言葉に耳を傾けていったことは大きな変化だったと思います。

〔長沼町は住みやすい町です〕

岩城会長…今長沼町は融雪溝が走っていて、冬になったら雪を融雪溝に入れればなくなるのです。ただ老齢化してきていることとお金があるから仕事を今以上しなくていいと考えて後継者もない商店もたくさんあります。だけどスーパーができて、そこで消費してくれるし、近くに個人の大きな病院ができて、いろんな地域からバスで送迎してたくさんお客さんが入っています。そしてJRバスは札幌から1時間に1本、北広島からきていますので、ここから北広島まで15、6分です。北広島から快速と普通と30分に2本ありますので16分で札幌駅に行きますので交通の便がいいと思います。学校の先生、うちの職員もですがこのエリアから出たがらないです。南幌、北広島、長沼、由仁、ここは住みやすい町です。繰り返しますと、長沼町は学校、病院、買い物、交通、千歳が近い、雪が少ない町ということです。砂子委員…そうですね。雪は本場に少ないですね。

岩城会長…雪は美唄の半分です。昔から暮している人たちは当たり前だと思っ

栗田副会長…職員の人たちはここにお住まいじゃなくて札幌から通っている人のほうが多いのですか。

岩城会長…職員はほとんど長沼町です。はじめから雇用の時そういう条件にしています。地元に住んでくれること、地元で一所懸命やつて指導員などの1個資格を取って、そして良い職員と言われて人から欲しがってもらえるようになること、そして結婚することです。

栗田副会長…転勤がありますね。

岩城会長…人事交流です。異動ではないです。今採用している人たちが人事異動になるとき、必ず5年たったら交流という条件がきます。昔採用になった人たちは新しい制度にして、市町村財政が良くないこともあり、いろいろ問題は起ります。

栗田副会長…そうですね、わかります。しかし職員の方が地元に住んでいることは珍しいです。岩城会長…私の合言葉は、元気で前に進むしかない後ろ見ても所詮後ろだ、ということですよ。

栗田副会長…話は変わりますけど、経営発達支援計画はもう取られたのですか。  
相澤商工会事務局長…今申請しているところです。

栗田副会長…12月に認められるのですね。

岩城会長…作成は大変でした。空知で八つ、九つくらい出していますが、まだ認可は空知ではなっていません。全道で152あるけど12、3が認可になったと思います。

栗田副会長…そのように聞いています。最終的に3月までに認可になるのでしよう。

岩城会長…なったら毎年改定していかないとイケません。

栗田副会長…ローリングしなければいけないですね。

岩城会長…そう。そのぐらいは勉強しないとイケないと思います。

（グリーンツーリズム、農家宿泊で修学旅行生4,000人がきてくれます）

岩城会長…私は今の土木建設業の方々がどんなふうな歩みをしているか、北海道新聞でもいいので建設業がやっていることを書いて知らせてもらいたいと思います。商工会とかの記事はお祭りなどが出ていますが、建設業は悪いことやった人しか出ないように感じます。

栗田副会長…そうですね。私が書いている中にもやっていることをいっぱい書いてあります。来年の10月に印刷ができますからお送りします。それよりも前に作った北海道大学の小磯先生が書いた本もございましてお送りします。そこにこの建設業の一般的な状態と北海道の建設業はこんなことやっていますというのがありますからお読みいただければありがたいです。

岩城会長…一つお願いしたいのですが、北海道建設新聞や北海道通信で北海道180ぐらい自治体がありますが、せつかくの機会なので、町で頑張っているところ、建設業者以外のこと

も月に1回ぐらい取り上げてください。

栗田副会長…北海道建設新聞や北海道通信では、このインタビュアーが珍しいらしくて、建設業のことだけしか今までインタビュアーしたことがないので新鮮なようです。この付き合いを少しずつ記者とやっていただけばすごくありがたいです。

岩城会長…小さい町だけど、郊外レストランが二つあり、「ハーベスト」は年間約6万人、「クレス」で3万数千人来ています。そして長沼の町の中にいっぱいいろいろな地方の車が来てくられて、例えば富良野からもご飯を食べに来てくれます。この前富良野の農協青年部が十数人来て行きました。なぜこの町を訪れるかというと、農業試験場だとか日本農薬(株)など視察する施設があるのです。ちょうどここで昼ご飯を食べて札幌に行きます。これは良いルールです。あと修学旅行生が4,000人ぐらい入ってきています。これも10年になります。グリーンツーリズムの農家民宿で11年目に入っています。120〜30軒が旅館の免許を取っています。これも道の中で10年以上続いているのは長沼町だけです。ただ受け入れ側が老齢化してきて難しい時代に入ってきています。そういう人の一部が長沼の父さん母さんのところに帰るといって、今大人になってからきてくれます。

栗田副会長…なるほど。すごいですね。それが新規就農者になったりすることもあるのですか。岩城会長…それはまだ聞いたことないですが、北海道へ旅行に来る、結婚して訪ねてきている

ことは確かです。

栗田副会長…また泊まっていくわけですね。

岩城会長…そうです。泊まったたり寄ってお土産置いて札幌行ったり小樽行ったりしています。千歳が近いので、ここから30分で飛行機に乗れます。

栗田副会長…この修学旅行の受入を始めたのも前町長のときですよ。

岩城会長…そうです。当時の農協組合長の協力がありました。

栗田副会長…しかし、これだけ人が集まるのは少ないです。

岩城会長…そうですか。どこの町でもこういうことは皆さんやっていますよ。

栗田副会長…単位が千人です。他では百人単位です。

岩城会長…しかし、グリーンツーリズムであろうがやはり継続です。継続していけばなんとか理解して、または仕方なくついて来ざるを得ないです。継続なのです。

栗田副会長…農家民宿を説得した農協組合長はすごいですね。

岩城会長…そうですね。

栗田副会長…みんな農家が旅館免許を取らないとできないことです。

岩城会長…それはやはり町がすごく苦労しています。あとどぶろく特区を取っています。4軒、5軒でやっています。どぶろくは農家で製造して、個性があり好き嫌いはあります。人口が

5万人も6万人もの町がやっているようなことを人口1万人ちょっとでやっています。

岩城会長…私は、よく元気な町、元気な町といえます。そのかわり岩城は元氣しか知らないと言われていますが。

（事務局長は元教育長）

栗田副会長…事務局長は長沼町商工会で長いのですか。

相澤商工会事務局長…私は去年の4月からです。

岩城会長…前職が長沼町教育長です。

栗田副会長…そうですね。

相澤商工会事務局長…ここに来る前は図書館の館長でした。

岩城会長…こういう人たちが現職時代にいろいろ携わって今度こういうところに来て朝早くから夜遅くまで仕事してくれます。こういう人がいないと、前に進まないのです。役所、警察との関係で、例えば通行止めではいろんな資料を出さなければなりません。道路事務所、トラック協会、バス協会へ行つて説明して了解を得なければなりません。みんなストップしますので、書類作成、交渉、全部です。影の力はすごいです。

栗田副会長…そうですね、前に教育長されたのであれば先ほどお話しの合ったサミットでお互

いにお会いしているわけですね。

岩城会長…そうです。

（建設業の方は挨拶が下手です）

栗田副会長…長沼町の建設協会の会員は何社ですか。

池内長沼町建設業協会事務局長…正会員12社で、砂子組も含めまして準会員の方が13社入っております。

栗田副会長…町の建設業協会ですから、水道、設備、電気とかみんな入っておりますね。

池内長沼町建設業協会事務局長…長沼はその業種は入ってないのです。

栗田副会長…土木建築だけですか。

池内長沼町建設業協会事務局長…そうです。

栗田副会長…そうすると水道設備の人たちなんかは別に団体があるのですか。

池内長沼町建設業協会事務局長…また違う団体があります。

栗田副会長…長沼町の協会として別にあるのですか。

池内長沼町建設業協会事務局長…いえ、管組合とかは南幌と長沼で一緒に作っています。あとは任意団体で建設業協会には入っていないです。私は入ってほしいと思っています。

栗田副会長…長沼町の仕事をメインとして考えると入ってもらったほうが楽ですね。

池内長沼町建設業協会事務局長…そうですね。ただ昔から門戸を広げないやり方で来ています。

栗田副会長…もったいないですね。今まで各地でお聞きした中で、土木と建築だけは初めてです。みんな水道、設備、電気が入っていました。

岩城会長…そうなのですか。

栗田副会長…はい、町の建設業協会会員はそういう業種も入っているとところが多いです。法律ではみんな建設業です。それで会費が入るわけですね。

池内長沼町建設業協会事務局長…大きい物件は町外の会社が受注したりしていますので、そうでもないです。

岩城会長…長沼町は2つの大手建設会社がなくなったので非常にさみしいことです。町からAランクやBランクの会社が消えていくと誠にづらいものがあります。私は建設業界のことはよくわかりませんが、だからよそから来た業者の人たちがお金でなくて、先ほどお話ししたように人的な支援といったことでお手伝いしていただいていることがすごくありがたいです。

栗田副会長…先ほどもおっしゃられましたけど、協会活動でまともっていかないと、大きな意味で仕事が来ない形になるのでうまく行かないです。

岩城会長…私は、建設協会の方によく話しているのです。もう少し宣伝、挨拶をしつかりする、ただ名刺をボンボン置いてくるのではなくて、頭を下げて話をするということになっています。そして名刺を受け取るときは、名刺はその人を代表するものなので、名刺は見てあげることが大切と若い人達に言っています。その人は勇気を出して出されるのだから、まず手元においてあげることです。私はすぐ名刺入れにしまわれて返してくれと言った人がたくさんいます。名刺は姿形を相手に披露するので、受け取ったら一瞬でもいいから見えてあげることです。そうすると必ず相手も見てください。これが基本だと私は思っています。若い者が一所懸命歩いて、ペコペコ頭下げてそこにボンと置かれたら切ないものです。世の中はこれからそれしかないです。

〔商業は大変です〕

岩城会長…今子供さんたちはインターネットで服を買います。そして気に入らなかつたら返します。これでは町から商店はなくなります。建設会社も数奇屋大工はいなくなりました。今から30年40年前は、スコップで穴掘って何するにしても何日もかかり1年かかって家を建てましたが、今はまとめてドンと穴開けていきます。

栗田副会長…そうですね。工場である程度作って組立てます。土台さえしつかりできれば簡単

になりました。

岩城会長…時代は変わりました。

栗田副会長…商工会の人たちの元気度っていうのはどうですか。やはり廃業などは多いのですか。

岩城会長…多いです。

栗田副会長…青年部は何人いるのですか。

岩城会長…長沼町で今二十数人です。これでも多いほうです。

相澤商工会事務局長…青年部は27年の3月末で23名です。

砂子副会長…二十数人もいれば多いほうですね。

岩城会長…岩見沢商工会議所のJ Cの新年交礼会の招待が来るのです。一昨年出て、お客さんが140〜50人いまして、J Cだから百何人ぐらいいるだろうと思っていました。が、会員は六十数名でした。岩見沢は8万人の都市です。それだけ、後継者が少ないのでしょうか。岩見沢でもこれしかないと思います。だから長沼町の二十数人は多いほうです。

岩城会長…南幌商工会の50周年式典に行ったら、青年部は6人でした。

栗田副会長…青年部は定年40歳ですか。

相澤商工会事務局長…青年部の定年は40歳を45歳にしています。ただ45歳になっても、40歳過

ぎたら役員をやらないようにしています。

岩城会長…まだ30代です。それで非加入者もけっこういます。ただ農家も商工会も同じで独身者が多いです。

栗田副会長…結婚していないということですか。

岩城会長…はい、農家の後継者は特に多いです。これはどうこうできるものでもないですが、これが一番の課題でしょう。女性も結婚していない人が多いです。

栗田副会長…女性も結婚してなくて、親の面倒をずっと見ている人が多いですね。

岩城会長…結婚してない人が多いのはどこの町もおんなじようなものだと思います。

栗田副会長…先程の商工会の廃業が多いのは後継者の問題ですか。

岩城会長…後継者です。そして個人の店には若い人たちは入りたがりません。今どこ行ってもそうですが、きれいに揃えた品物をひっくり返したり斜めにして買わないでみんな帰ってきます。昔からのお店はごめんくださいと入ったら、必ず何か買ってこないと出てこられないです。品揃えも悪いし、お客さんが来ないから電気を消しちゃうし真つ暗な店には誰も入っていきません。今の子供たち、小学生、中学生が見ているテレビに出ている流行の品物は地元では揃えている店はないです。

栗田副会長…難しいですね。

岩城会長…難しいです。靴屋も本屋も衰退していききました。それから寿司屋は美唄にも今1軒か2軒です。寿司屋が町からなくなりました。今寿司は30分もかけて回転寿司に行きます。今の子供たちはみんな回転寿司です。町から一番消えているのが寿司屋、呉服屋、酒屋です。ビールを隣のスーパーが100円で売ったら、酒屋では130円ですのでスーパーで買います。変わらないのはタバコと塩だけです。昔の専売品はみんななくなりました。本当は町をみんなで守ってあげないとダメだと思います。あと蕎麦屋も消えてきました。ラーメン屋は何とか生きた。大衆食堂は全くなりませんでした。ゴルフ、パークゴルフ、温泉の入場者が減るかという元気にやってきた人たちのお友達がいなくなって、自分一人では行けないから必ず仲間が必要です。仲間が病氣、奥さんが病氣、自分がまいつてきたとかになっています。

〔長沼町の建設業界の協力は全道一です〕

栗田副会長…今までのお話をお聞きしますと、長沼町の建設業協会をはじめとする建設業界は町としっかり協力してやっているということですね。

岩城会長…そうです。小さな町で争ってみてもたかが知れています。仲良くやっていくようにしなければいけません。

栗田副会長…建設業界がしっかり町づくりを手伝っていますね。

岩城会長…私は全道一だと思っています。

砂子副会長…先ほどの話は他の町ではやってないようなことをやっていますね。

岩城会長…建設業界では、他の会社が仕事を持っていつてしまうなどいろいろあります。大手の会社がなくなったので小さな会社の仕事もなくなるのです。

岩城会長…今長沼町で国営の公共事業をやっていて、これからも継続しますので、商工会から見て建設関連の仕事がいろいろあります。例えば灯油です。一度建設関係でできることを、話し合いをしていただきたいと思います。みんながどこかで付き合っていて良かったなどお互いにそうやって話ができるように努力していただきたいと思います。

砂子副会長…協会としても受け賜わります。  
岩城会長…建設協会は町の顔です。

岩城会長…商工会も会員は全道で3万社ぐらいです。商工会議所と違って、会費は誠に少ないです。北海道の補助金などで賄われているのが現実です。この長沼のまだいいところは240の会員が、辞めても脱退しても別の人が入ってきてくれます。入会金を2万円取ってありますが、北海道では長沼町だけ入ってきてくれるのです。だから会員の落ち込みが少ないです。長沼町もあと10年ぐらい経ったら半分ぐらいになるでしょう。今のところこの10年ぐらいはなんとか抜けても入ってきてくれます。

相澤商工会事務局長…新規に郊外のカレー店などが入ってくれます。

砂子副会長…地方でそういうのはないです。

岩城会長…来月はスーパードがきます。町会議員が社長です。町会議員は、空知の商工会長で6人いるのです。これもみんな50代で珍しいです。

栗田副会長…そうですか。

岩城会長…議員は若い人が多いからまとめていくのは大変です。

砂子副会長…奈井江町の石川さんもちょうど60歳くらいです。

岩城会長…そうそう。これもこの地域の元気のひとつですよ。ああいう人たちが頑張ってくれているから、この地域の重い仕事も継続できます。議員でなかったらそうはいかないかもしれないです。

栗田副会長…どうもありがとうございました。

砂子副会長…ありがとうございました。

平成28年1月22日 金曜日 14:00～15:00 於…白糠町長室

棚野 孝夫 白糠町長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

村井 順一 一般社団法人釧路建設業協会理事

栗田副会長…町長さんが普段お考えになっている地域の課題とそれに対する考え方をお話しいただければと思います。よろしくお願います。

重要なキーワードは北海道が広すぎること及び一次産業の再興

棚野町長…私どもの地域の課題ですが、今、北海道全体が同じ課題を抱えていると思います。といつても、札幌を中心とする地域は違うところもあります。

まず人口減少については、どういふふうにとらまえばいいのか、重要なキーワードは「北海道が広すぎる」ということです。それと、北海道は、昔は石炭がありました。それが消え、いまは農業、漁業、林業、これらなくして北海道はない。今日も将来も同じ。これをどう認

識するからです。この3つの産業に笑顔があつて初めて観光に繋がるのです。この3つと観光の4本柱が北海道の基幹産業であり、私たちが今、認識しなければならぬ大きな要素です。ところが人口減少を考えると、国策が大きく影響しています。私自身は人口が減ることはそんなに心配していません。どこが下限かをしっかりと認識し、身の丈に合った町づくりをすればいいことです。

現状を考えると、やはり一次産業を再興して発展させる、この再興が非常に重要な部分です。ここをどう私達が努力するかです。日本の就業人口の7割の人が三次産業に就業しています。これは先進国としては異常だと思えます。これも非常に大きな問題です。私達が子供のころは一次産業、二次産業。三次産業の就業人口がだいたいバランスが取れていました。

しかし、戦後の高度成長期に入ると、食糧、エネルギーをほとんど海外からの輸入に頼ってきました。ですから国民も消費者も、安心安全と口で言いながら海外からどんどん食糧を入れてきました。今この事実を考えなければいけないんです。例えば、日本の方が海外に行つて魚の捕り方から増養殖を教えて、日本へ輸入してくる。当然国内の生産者は減少していく、又農業で頑張っていた人たちも海外から農産物がどんどん入ってくるようになったら生活が成り立ちません。ですから必然的に一次産業から離れるのです。離れた人がどこへ行くかという、都会へ行かざるを得なくなりえます。

要するに、北海道では一次産業から三次産業にシフトしてしまったことが人口減少に繋がっているのです。それでは食糧は要らないのかとなります。当然そんなことはありません。特に今は大事です。これだけ人口が爆発して増えてきた中国等のことを考えた場合に、絶好のチャンスでもあります。これも私達がこの経過を踏まえて考え直さなければならぬことです。

北海道では農業も漁業も林業も実は「公共事業」だった

棚野町長…北海道では農業も漁業も林業も実は公共事業だったということです。「北海道はどうかどう」で頑張れと言われ、国家国民のために非効率なことをさせられてきたのです。生産するだけ、出荷するだけ、です。生産物は北海道内には回りませんから国策がある。そういう意味で「公共事業」です。長い間それら下がってきた反省と、その意識を変えなければならぬ時代に来ています。そう考えますと、国が地方創生といっているのは間違いなく一次産業の再興です。食糧とエネルギーをこんなに海外に頼っている国はないわけです。石破大臣がよく言っていますが、円高なら困る、円安なら困るというが、どちらが本当なのか。これだけ輸入に頼っていたら当然そうなります。

それが今地方創生で食糧とエネルギーの自給率を高めると言っているわけですから、北海

道はまさしくチャンスを迎えています。そのチャンスを生かすためにここで考えなければならぬのは、より効率的な一次産業を実現するということだと思います。北海道は付加価値の高いものを効率的に作る。それを可能にするかどうかは「物流」によります。マーケットにいかん早くアクセスするかが最大の条件の一つ、大きな要因になります。これは今後の建設業界に大きく作用することでもあります。

今の北海道はそういう経過の中で人口減少が起きていますから、これを今の食糧の自給率や自然再生可能エネルギーを増やす前提で盛り返すチャンスを迎えています。それもこれまでの一次産業の守るべきところは守りつつ、新たなものいかに取り組んでいくか、ということが今後の大きな人口減少の歯止めをかけるための要素だと思っています。それがまず一つです。

二つ目に「北海道は広すぎる」ことがあります。北海道は広いことが今までのスケールメリットだった。これを活かし、豊富な資源や生産物を本州へ送っています。

しかし、今はこの「広すぎる」ということが北海道の最大の課題なのです。

栗田副会長…分かります。私もずっとそう思っています。

北海道町村会は最大の応援団、そして一次産業があつて今がある」

棚野町長「広いがゆえのハンディキャップです。分かりやすく言うと、北海道の動脈、静脈（都市部）には血液が流れています。しかし、毛細血管（地域）には血液が流れていない状態です。これは北海道や知事の責任ではなく、地域が頑張らなければいけません。毛細血管はぶら下がってばかりではダメなのです。この地域をこう活性化させたいとこちらが提案し、知事に「わかった、一緒にやりましょう」と言っていたのだと思います。これがいま地域づくりに求められていることなのです。釧路根室管内をどう活性化すればいいのかと言ったときに建設業協会のみなさんも私たちもきちんと認識しなければいけないことは、一次産業があつて今がある、ということです。一次産業が活性化しない限り二次、三次にはつながりません。

これが原点であり、非常に大切なところですよ。例えば白糠町も山側の地域は林業、農業が中心です。しかし、林業・農業が衰退し、人がいなくなる山側の地域は僻地に思えてくるのです。白糠には道道道のインターチェンジが二つ必要というのが絶対条件でした。白糠は管内で一番狭隘で丘に囲まれている平野が少ないのです。しかし、逆にいうと冷涼で日照時間に恵まれている気候風土から、畜産や葉物野菜にはものすごく向いているのです。この二つのインターチェンジを中心に考えると、条件的にはとても素晴らしい地域となります。まさに一次産業の再興にふさわしい場所なのです。そういう意味で我々もいま意識を変えなければ

ばならないのです。

白糠の一次産業と考えると、キーワードは「冷涼」と「太陽」です。野菜作りには最適な町です。群馬県や長野県がよくてここはダメなのかと言われたら、答えはひとつ、とても簡単です。これまでは消費地が遠かったのです。それが今チャンスを迎えています。白糠の発展は「物流」にかかっているのです。私はずっとフェリーが必要だと言っているのはそこです。釧路からフェリーが出ていくようになれば、間違いなく管内、北見、根室の酪農以外のものが物流によって起き上がっていきます。

私が中央へ出た折には、生産活動は私たちが一所懸命やりますから、フェリーにお金を出してくださいと言っています。釧路管内は一次産業をもう一度再興させて発展させるということに視点を置いていく。例えば、農業に関して言うならば、酪農ももちろん守りますが、野菜や生き物を飼うには最高の町です。生き物に最適な「冷涼」と「太陽」で、肉牛、羊、豚などを増やしていくことで畜産も振興していく。漁業については未利用資源を活用する、付加価値を付けるといふことは当然あります。こういうことをテーマに掲げながら今努力をしているのです。林業については短期間で所得になるといふことも必要ですので将来のことを考えて早生樹、早生木を増やしていくことにも取り組んでいます。

栗田副会長…早く成長する木ということですか。

棚野町長…はい、例えば今までで言うとかラマツもそうでした。ひと昔前は使いようがないと言われていましたが、技術が進んで利用価値が上がリ今では引っ張りだこです。ほかにハンノキ、ポプラなどがあります。これらも白糠町では6年前からずっと実証していきっています。さらに、これを農業と連携させながらどうかと研究しています。白糠の場合は「ヤナギ」です。これはいづれ大化けすると私は夢を持っているのです。でも、なかなか理解はされない。

〔管内町村会で「釧路管内地域づくりビジョン」(平成19年釧路管内町村会)の策定〕

棚野町長…「北海道が広すぎる」ということは、各々のゾーンを活性化するために具体的に何があるのかを考えることが必要なのです。それで私たちは平成19年から管内8市町村、市もオブザーバーも入っていますから、7プラス1でまず行政業務の広域連携をしようと思いました。しかし、各論になるとみんな反対です。これではダメだと思い、首長全員が集まり、振興局長を入れて、改めてみんなで考えようということになりました。各々の町ではなく、釧路管内を一つとした「釧路」、その時にみなさんがトップならどういう地域づくりをしたいかをみんなで考えませんか。理念から行動目標など基本となることを全て首長で決めたのです。例えば、白糠に観光はないですが、管内には弟子屈があるので「観光がある」ということになります。逆に弟子屈に海はありませんが、ほかの町を見れば「海がある」わ

けです。ですから、釧路全体を見て、農業、漁業、林業、そして観光だということになったのです。

農業、漁業、林業に笑顔があつてこそ観光に繋がるので観光は上位にあります。観光もほとんど多様化してきています。

北海道の一次産業で共通しているのは「所得が少ない」ことです。所得が少ないから後継者がいないのです。では所得を上げるためにはどうしたらいいのか。要するに「取るだけ、出荷する」だけではダメということなんです。今まで一次産業では原価計算などしなくてもよかったです、なぜかというところも価格が抑えられているからです。私たちは農業振興とか漁業振興とかかっこいいことを言っています。組合から相談をされたら相談に乗ります。しかし、そうこうしている間に生産者がいなくなっているのです。これは大変なことです。

（人口減少のデータでわかったことは、管内の一次産業を再興すること）

棚野町長… 今回の地方創生で私たちがより一層認識したのは人口減少についてです。地方創生推進本部が発表したデータによると人口動態には4つのパターンがあります。このデータからわかることは人口動態は東京の一極集中ということです。入る人も出る人も多いのですが、入る方が圧倒的に多いです。これは名古屋や大阪とはちよつと違うのですが、札幌は東京と

まったく同じ状況であります。しかし双方とも欠点があつて、出生率が一番悪いという大きな課題を抱えています。単純に、便利だから行くという人が増えていく。これが一つ目のパターンです。

二つ目は周りからも入ってくる、しかし、出る人もいる。若干入る方が多いのが帯広市です。三つ目が周りからも入るが、周りに出る方が若干多い。これが旭川・北見です。そして四つ目が周りからも入らないが出る人が多い。これが釧路です。そこに白糠も隣接しているのです。

このデータで私たちが何を感じたかという点、キーワードは「農業」です。例えば三つ目のパターンの旭川は東川などに出ているので圏域は同じなのです。どこかへ行つてしまつたということではないのです。しかし、釧路は違うのです。どこかへ行つてしまつていゝのです。そのひとつずつを見ていて「農業」がキーワードとして出てきたのです。農業は一度軌道に乗ると続きます。懐も広いし持続力があるのです。それは十勝、上川の売上げに現れてきています。約10年前の釧路の農業生産高が550億円だった当時、酪農畜産が中心でした。例えば、釧白工業団地の(株)神明畜産が牛1万頭を飼育し、その出荷額は年42億円でした。今では50億円を超えているでしょう。また、養豚の場合は年2回生まれまゝから、1万頭買えば2億円、3万頭買えば6億円に増えるのです。こういう努力をしましよつたということでは

受け皿になるにはいろいろな勉強も必要です。

いま国もそういう方向で地方創生をやっていますが、大切なのはリスクを抱えながらもそういうことに積極的に参画することが必要で、その代りセーフティネットをどうするかを考えながらみんなでやる時代に来ていると思っています。これからの釧路根室管内のキーワードである一次産業、とりわけ農業にどのように棹を差していけるのかです。建設業界のみなさんが自分の仕事をしながら、いかに新たなところにチャレンジしてくれるかが重要なところだと思います。漁業をやれと言っても無理でしょうが、農業、林業は大きな可能性と魅力のある部分だと思っています。それを行政も一緒にやっていくことが、地域の活性化です。建設業界が近年いろんなことで協力をしていただいていますから、そこは十分に評価している上で、改めて一緒に取り組んでいただければというのが私の思いです。

↓建設業に感動がなくなった↓

棚野町長…新たな再興、チャレンジはその地域、地域で連携をしながらやっていく。その時に初めて建設業界が出てくるのです。地域が良くならなければ建設業界も良くなりません。公共事業も減ってきています。しかし、その中で建設業界も地域貢献等で頑張っていただいていますが、やはり昔と違って人を抱え込むということが出来ませんから、連携とか色々な効

率的なことを考えながら企業努力をして下さっています。これには私たちは感謝しています。

昔で言う建築屋や大工さんと今一般的に言われている建設業界では少し違ってきました。私が生まれたのが昭和24年、自分の子供の頃は木造の古い家があつて、中学生くらいの方に建て替えることになり、そこで建設・建築屋、棟梁という人たちに会いました。「この棟梁はすごい」と思つて、造る段階から楽しみに見ていたのを思い出します。そういう感動が今はありません。北海道は寒冷地ですから、家を造ることは本当に尊いことなのです。時代は変わってきましたが、生活する上で何が大切かと考えると住処はものすごく大事です。そしてインフラも大事、これはいつの時代も変わらない事です。昔、砂利道が舗装され、でこぼこな道がきれいになったとき、本当に有難くて、天国に行ったような気持ちになりました。しかし、最近はそういうことが当たり前すぎてひとつひとつの事に感動がないのです。

これから地域づくりをしていく上で建設業界の人たちに心掛けてほしいのは、この地域は一次産業で生きていかなければならないということを理解し、積極的に一次産業に関わっていただきたいということです。白糠町は農業、林業、漁業があつての町です。そこに特化して再興をしていくところをなるほど見てほしいのです。

白糠町では4年前から野菜の実証を始め、いろいろなことをやっています。これをやっているのは建設業界の方です。畜産の誘致をするために農業生産法人を作るべきと考えていた

ときに、ある建設会社の社長が「私がちょっとやってみます」と生産法人を作り野菜生産を入れてくれたことによりすぐに実現しました。これからはそういうことも大いに考えられるということなのです。建設会社はやる気になれば畜産もできます。土木建設業者が持っているもの、会社も従業員も重機などの機械もすべてが農業にも生かせる財産なのです。「あなるほど、そういうところに自分たちが入り込んでいけばいいのか」と思っていたら、先ほど話した毛細血管の部分に血が通い始めるのではないかと思っています。

平成19年の釧路の農業生産高が約550億円です。十勝は2、400億円です。北網が1、700億円、根室が770億円、釧路は最下位です。だからダメだということではなく、その実態を釧路の人が知らないのです。酪農が主体と言いながら最下位なのです。

その内容について経済団体のトップのみなさんと懇談したことがあります。JAは金融や購買などが内部で完結してしまっていて、外に波及することがないのです。それには組合側の責任もあると言っていました。そして、これから考えていきたいと言っていました。しかし、その後も十勝は数字を伸ばしているのに釧路は変わっていない、酪農がそれだけ厳しいということなのです。ですから、新たなことにももっと取り組んでいかなければいけないということです。

（平成19年のビジョンの組織は今も続いている）

栗田副会長…先ほどの平成19年に7プラス1で首長さんが集まったというお話がありました  
が、それは今も続いていますか？

棚野町長…続いています。

栗田副会長…それはいいことです。

棚野町長…北海道で釧路管内だけだと思います。

栗田副会長…十勝でも帯広市と18町村が一緒になってやっていますね。

棚野町長…あそこまで数が多いと大変です。上川も多いです。

栗田副会長…上川も20の市町村があり、北と南では相当違います。

棚野町長…ゾーンごとに違うということですか。そこさえ認識すればお互いが協力できると思  
います。

栗田副会長…それは年1回くらい集まるのですか。

棚野町長…いや、しょっちゅう開いています。平成19年当時の釧路市長は伊東さんです。伊東  
さんのところに行つて、市長は入れませんからと言いました。市が考えることと町村が考  
えることは違うからです。その代りオブザーバーで入ってもらうことにしました。私たち町村  
の首長と振興局、これは大事なところです。振興局は出先と考えられがちですが、振興局の

人たちは道職員であり、私たちの仲間です。道庁に行つてすぐに出来ないと言われて帰ってくるのなら道職員はいらないです。それなら国があればいいだけです。道庁は、私たちがこういうことをやって地域を活性化したいと思つた時に、すぐに出来ない事であっても、より一層頑張ろうと協力してくれる、それでもダメなら私たちは理解します。その代り得るものもありますから。

栗田副会長…行政として入口でノーと言うのは最悪です。

棚野町長…ただ、それは私たちも反省があつてのことです。国も道も私たちも上目線で来たのです。極端に言えば「やってやる」という姿勢でした。これを今直さなければいけないのです。媚びているわけではなく、実際に住民がいなければ私たちも存在しません。道庁の場合には住民と直接会うことは少ないですが、私たちは最前線です。ですからそこをつなぐ振興局はとても大事です。だからこそ手を組んで一緒に考え、取り組んでいるのです。

最初に4つのプロジェクトを作りました（釧路町村会地域づくり広域プロジェクト）。もともと協議会は課長中心の推進会議で進めていたのですが、これを機に首長も揃い、課長、係長まで全員集まり、そこでプロジェクトを作り、係長が中心になって推進していくことを決めました。この時、全員にお話ししたのは、これから釧路管内は連携して同じ思いで地域づくりをしていく。向かう目標と方向を示し、4つのプロジェクトについて1つでもいいか

ら毎年取り組んでいく。それが連帯意識です。基本理念、行動目標があつて、自主的な活動がある。釧路管内町村のすべての事業を目標に落とし込みました。実に膨大です。それを確認した上で重点項目を絞り、展開しているのが今なのです。管理職には係長が検討して上げてきたことは一切否定しない事、お金と人のことは心配せず頑張れと言うようにと伝えました。そのためのプロジェクトです。農業、林業、水産業、観光の4つのプロジェクトチームを作りました。このチームで今年、来年は何をしようと決めるのです。私たち首長は毎年ローテーションをして相談役をやります。その相談役のトップになった首長の町の係長がプロジェクトリーダーをやるのです。平成19年からですから、係長以上の管理職はみんなお友達です。おかげで釧路管内で何かをやるといった時にはすぐに話が決まります。

栗田副会長；それはいいですね。

棚野町長…とつてもいいことです。そういう組織体が出来て、振興局も入っていますから、課題が出てきたら改めて振興局長に要望に行くのです。そして振興局長から知事に要望してもらいます。ほかの14の振興局のどこもやっていないことです。振興局長が知事に説明した時点で、管内の道議にお話しします。こういう形で私たちは連動していますので、とてもやりやすいです。

また「できない」という場合も真剣に考えます。白糠が「ヤナギ」の事業を始めるとき、

農政では「ヤナギ」は作物ではありません。農地には植えられませんという話になりました。その時、振興局が「みんなで何とか考える」と言って本庁と相談してくれました。同じ職員同士ですので、私たちとは違います。そして結果的に「肥培すればいい」ということになりました。それでヤナギを植えられることになったのです。しかし今度は林野の部分での「伐期」という問題が上がりました。いつ木を切るかです。ヤナギは一般材に入るので18年から20年は切ってはいけないということです。これも相談した結果、国や道の森林計画に基づいて市町村で位置づけなければならないということになりました。

北海道庁はまさしくこういう組織です。そのつなぎ役となる振興局が大切なのです。私たちはいまでもいい状況にあります。そしてこれが知事の目指すところでもあると思います。このプロジェクトはみんなの頑張りで心を一つにできています。本当にやってきてよかったです。

（平成19年のビジョン策定組織の立ち上げ）

栗田副会長…最初に集まった平成19年は町長さんが声掛けを始めたのですか。

棚野町長…市町村合併が終わった時で、北海道ももう合併は進まないと思って行革室を作ったのです。当時、行革を担当している部長職の方が白糠を訪れ、「広域連携」ということを言っ

たので、私は「申し訳ないですが、白糠はもう合併しないです。それを目途にして広域連携というなら、最初から話はできません」と答えたのですが、そうではないということだったので、広域連携を進めることにしたのです。

初めは事務的なことを広域で出来ないかと3つくらいのことを担当に下ろしたのですが、各町村の担当者が集まると「システムが違う」などという理由で全くまとまりませんでした。その時にたまたま私がお長になったので、まず私たち首長がその気にならなければ話にならない。しっかりとビジョンを作って、管内全体で一つの「釧路」という形の中で考えた方がいい、みんなやってみようということで始まったのです。「釧路管内地域づくりビジョン」(平成19年6月釧路管内町村会)にその経過も出ています。

基本理念「活力に満ちた産業づくり」を決めて、農業、林業、水産業、観光の産業別に行動目標があります。行動目標は、釧路地域の農業の可能性にチャレンジ、釧路農業は酪農、畜産、これから畑作、農地の有効活用、安心安全です。このように柱を分類してそこに具体的な施策を落とし込んだのです。まずは釧路管内の町村がやっていることを全ておろし、そこから分類して類似した事業をまとめてスタートしたということです。実施事業に優先順位を決め、毎年二重丸のところからやっついていこうということにしました。空港線の花壇の植栽もそうです。あれは観光プロジェクトのひとつなのです。釧路管内は一つ、空港はみんなの

空港です、というように毎年いろいろな取り組みをしています。

栗田副会長…あれは管内町村会でやっているのですね。

棚野町長…そうです。

〔釧路管内町村会組織は地域創生のまち・ひと・しごと創生本部から評価された〕

棚野町長…地域創生のまち・ひと・しごと創生本部でこのお話をしたときに、本当にそんなことをやっているのですかと言われました。この組織がありますから釧路管内での広域の事業はなんでも通ります。ある意味では先駆性があったのです。いま管内町村がやっていることをさらに良くしたいと思えば、国の地方創生の計画に上げればいいのです。これまでの積み重ねとはつきりした目標がありますから説得力があります。今回、国が求めた戦略ビジョンは実はこういうことです。だから釧路管内のようにすでに進めているところは改めてやる必要はないのです。

栗田副会長…そういうことだと思います。

棚野町長…総合計画を作ることと勘違いするようなこともあったのです。

栗田副会長…はい、わかります。町ごとに戦略計画を作ればよいような雰囲気になりました。

棚野町長…そうです。国の地方創生の産官学金労言というのは外から見ている人の意見を求め

なさい、そして検証してもらいなさいということです。釧路管内はみんなそういう意識でいます。白糠も酪農が始まって約60年です。当然60年経てば見直しの時期が来ます。白糠が見直しの時期を迎えた今、原点に返り、「冷涼」と「太陽」をキーワードに、守るものはしっかり守り、また野菜と畜産の振興を積極的に推進する。その中には馬産の振興もあります。栗田副会長…そういえば白糠は馬産地でしたね。戦前はすごかったようですね。

「戦前の馬産地を再興する、さらに羊、豚も再興する、建設業界の参加を期待する」  
棚野町長…当時、農業も漁業も林業もみんな馬を飼っていたのです。漁業では漁師が船を引くのに使いました。船を丘に上げるのに馬力が必要だったのです。林業は切り出した木を運ぶのが馬でした。原動機がない時代の最大の動力だったのです。白糠町には軍馬圃場もありました。釧路の大楽毛が日本で最大の馬市を開催していました。それが戦後、軍馬もいなくなり、また新たな動力の出現により馬がいなくなりました。それで酪農を始めたのです。二頭、三頭の牛を買って、子を作りながら増やしていったのです。酪農の見直し、と考えると牛乳は決してなくなりませんが、やはり効率的にやらなければいけない時代が来ているのは確かです。白糠では原点という意味では馬がありますが、羊も進めています。

白糠町の羊は肉に特化して評価されています。茶路めん羊牧場では30年くらいかけてよう

やく今1、000頭まで増えました。全道の羊の数は約1万頭と言われています。

白糠の羊の肉は北海道洞爺湖サミットで営業活動しなかったにも関わらず、一流のシェフが選り最高の肉と称賛されました。今後、養豚の企業誘致もするのですが、みなさんに力を借りたいことがあるのです。白糠で豚を育てるとして、育てる業者にはマーケットが必要なのです。東京で売るなら、わざわざ北海道で育てる必要はないですから、北海道で8割くらいが消費されるマーケットが必要なのです。私たちが企業誘致をするにあたって養豚業者とマーケットの両方をつなぐことが必要です。さらに再生エネルギーも付け加えます。

それから馬です。いま馬刺しがすごい人気です。これまでこちらの人が供給するのは2歳まで飼い、市場に出して九州に持っていきます。そしてその馬を九州で1年育てて仕上げをして高く売るので。これが2年ほど前から価格が上がっています。

2歳の馬は30万円か40万円で売りますが、九州での1年の仕上げで100万円以上になっていると思います。だとすれば、白糠で3年飼った方がいいというわけです。ただし、それには屠場も必要です。しかし、この屠場は建て替えをする計画はあっても対象は牛だけなのです。馬も羊も豚もやろうとする白糠町では困るのです。

農業の再興という視点でこういった部分も建設業界の方々に注目していただき、一緒に何かをやっていただければありがたいと思いますし、同時にそれが建設業界のこれからにもか

かってくると思っっています。

〔北海道の農産物にとって中国は最高のマーケット〕

棚野町長…いずれにしても北海道は今チャンスを迎えています。広すぎるといふこと、それをどうとらえるか、そして今国が地方創生でやろうとしていること、このチャンスをどうとらえるかです。

いま世界が動いていて、中国がその中心にあります。これは間違いありません。私はTPPをやるのであれば中国のマーケットをすべて解放してからやるべきだと思っています。中国に物を売ることができれば何も心配ないです。北海道のものはすぐ持つて行ける。こんな有難いマーケットはないです。「北海道」と言えばすべてが安心安全でなんでも売れるのです。

栗田副会長…そうです。北海道の農産物は非常に貴重だと思っています。

棚野町長…東南アジアの国々も所得を上げて発展させようとしています。みんな中国を横目に見てやっています。

栗田副会長…商売を考えたなら中国を見ない人はいないです。

棚野町長…そうです。白糠町は中国に持つて行くにはどうしたらいいかと考えながらやってい

ます。東京で途中下車してもちょうどいいかなと思っ  
ているのです。そういう時代です。  
栗田副会長…長時間貴重な話をどうもありがとうございます。

棚野町長…ありがとうございます。

平成28年1月25日月曜日13:00～14:00 於…鹿部町長室

川村 茂 鹿部町長

山口 政幸 鹿部町建設水道課長

聞き手 栗田 悟 一般社団法人北海道建設業協会副会長

砂原 隆 一般社団法人函館建設業協会事務局長代行・事務部長

栗田副会長…今日は、いつもお悩みになっている地域の課題をお話ししていただきたいと思  
います。

〔間歇泉公園に道の駅がオープンして鹿部の特色を出していく〕

川村町長…鹿部町の課題として、やはり少子高齢化が出てきます。経済的な部分では漁業と水  
産加工が主であり、農業は無く、昔から水産の町です。農業があれば、バランスがいいのか  
と思います。あと、商工業と観光の方にも力を入れています。間歇泉公園がありますが、  
もう少し温泉にこだわった施設ということで今リニューアルしており、このたび道の駅に登

録されたところです。

栗田副会長…北海道で117番目ですね。

川村町長…木古内町が116番目で、一緒に登録されました。

砂原事務局長代行…あの新聞に出ていた函館開発建設部長との登録証伝達写真ですか。

川村町長…はい、そうです。3月18日にオープンします。

栗田副会長…リニユールオープンですか。

川村町長…はい。物産館が主ですが、その中の「浜のかあさん食堂」という店で鹿部町の魚介類の料理を食べていただくことにしています。また、温泉を利用して蒸し釜などをやる予定です。

栗田副会長…もうだいぶ前ですけど、寄らしてもらったことがあります。間歇泉のすごく太いのがボーンと出るのが印象にあって、今でも同じですか。

川村町長…同じです。温泉が15mほど上がります。間歇泉公園の隣の土地を買収して、今そこに物産館を造っています。土地の中にある5本の温泉源も一緒に買収したのですが、これを使って蒸し釜をやる予定です。野菜、魚介類の蒸し釜です。

栗田副会長…蒸し野菜ですね。

川村町長…はい。他ではあまりないのです。

栗田副会長…確かにないですね。今、健康志向ですから、油を使わずに蒸して野菜を食べることは流行りですね。

川村町長…そうですね。それと国道278号ですが、3年前にバイパスができました。そのバイパスからの風景がいいのです。(壁の写真を指して) 駒ヶ岳もああいふふうに見えます。栗田副会長…山側のちよつと高い所にあるわけですね。

川村町長…そうですね。結果として、駒ヶ岳の噴火や津波時の避難道路が高台にできました。そのバイパスと下にある間歇泉公園をつなぐ歩道を設け、さらにバイパス海側には駐車場も整備しました。これらにより利便性が向上するものと考えています。

栗田副会長…バイパスから降りてくれば、間歇泉公園に行けるんですね。

川村町長…さらに平成28年度以降に温泉にこだわった施設を造ろうと計画しています。どうせやるのですから、その辺にないような温泉施設を考えています。

砂原事務局長代行…吉(よし) 社長が商工会長ですか。

川村町長…はい、そうですね。

砂原事務局長代行…地元で100年の歴史の吉建設があるので。函館建設業協会の会員にもなっていますが、その社長が商工会の会長です。

川村町長…観光協会の会長もやっています。

砂原事務局長代行…鹿部建設協会長と三つですか。

川村町長…そうです。

砂原事務局長代行…大活躍ですね。

川村町長…吉さんに一所懸命観光のことをやっていたんでいます。

砂原事務局長代行…商工会、観光協会、建設協会では忙しいですね。

栗田副会長…建設会社が地元のために活動することはいいことです。

〽鹿部町は漁業と観光、海と温泉の町、そして飛行場もあります〽

川村町長…漁業と観光、海と温泉の町というキャッチフレーズで昔からやっています。海の方

は魚介類も豊富に獲れますので、手もかけていますし、お金もかけています。

栗田副会長…今その蕎麦屋「やぶ政」で昼食を食べたら、目の前が鹿部漁港ですから漁業の町ですね。

川村町長…あの規模の漁港が二つあります。それから飛行場もあります。

砂原事務局長代行…去年飛行場でイベントもありましたね。

川村町長…はい、そうです。朝日航空がヘリコプターのパイロット養成をされていて、免許の取得ができます。元々はトヨタ自動車が始めたのですが、今は子会社の朝日航空が業務を引き

継いでいます。去年はスカイスポーツフェアというイベントをやりました。鹿部で、第一次試験とその後の研修をやつて、アメリカに行くらしいです。そして、また帰つてきて大阪の八尾で免許を取得する流れです。その関係でどんどんやつていただくようお願いしています。

栗田副会長…そうすると、免許試験のときに町に泊まる人も出てくることになりましたね。

川村町長…そうです。また新たな事業展開も考えているみたいです。

栗田副会長…そうですか。イベントは毎年やっていますか。

川村町長…去年が初めてです。スカイスポーツフェアは道内持ち回りでやっているみたいです。

栗田副会長…北海道開発庁が始めた事業です。

川村町長…道南でやるのは初めてらしいです。民間でこれだけの施設を持つてるところは、北海道では他にないです。

（ダイワハウスの分譲リゾートには定住者が約530人住んでいます）

川村町長…あとダイワハウス工業の分譲地があります。鹿部ロイヤルホテル、ゴルフ場があり、周辺が碁盤の目に分譲されています。定住者については、住民登録して住んでいる方は現在530人くらいで、20年ほど前から住んでいます。大阪など関西方面の方が多いようです。人口の約1割となります。昭和40年代にダイワハウス工業がリゾート開発して売り出し、ほ

とんどの土地は売れたみたいで。今各地で定住を進めようとしていますので、鹿部町も負けずにやろうとしています。去年から「ちよつと暮らし」などから進めています

栗田副会長…「ちよつと暮らし」ですか。住み方のお試しですね。

砂原事務局長代行…魅力ある町ですね。

栗田副会長…ゴルフ場とホテルと別荘が一つにそろっているのですね。

川村町長…そうです。ダイワハウスがリゾート開発したものではありません、ここ鹿部が第1号だそうです。

栗田副会長…確か若いころ、日経ビジネスで読んだ記憶があります。

川村町長…亡くなりましたが、初代社長がリゾート開発はどこがいいかと、この辺を歩いたみたいです。鹿部駅がありますが、そこで降りたらしいのです。降りたら海が見えるし駒ヶ岳が見えるので、ここはいいと思ったそうです。すぐその足で村役場に來たらしいのです。それで当時の村長と話をして、実はこういうことを考えていると話をして、そのまま帰ったらいいのですが、そのあと村長がダイワハウスを訪問して、それから始まったということです。

栗田副会長…分譲地の方々は冬もお住まいなのですか。

川村町長…はい、冬も住まれています。季節的に來る方もおられます。夏の間だけこっちに來て、冬の間は本州に帰るといふ方もおられます。今住民票をお持ちの方が約530人で、建

物は全体で500戸ぐらいあり、約半分が別荘で残りが定住です。

「駒ヶ岳の火山砂防対策も進めていきます」

川村町長…あと、問題は活火山の駒ヶ岳です。風景はたいへんよろしいのですが、怒ると怖い  
です。

栗田副会長…小さな噴火があつたのは10年ぐらい前でしたか。

川村町長…小噴火は平成8年から12年です。過去に昭和4年の大噴火、それから昭和17年の中  
噴火がありました。

栗田副会長…昭和4年から約90年弱ですか。

川村町長…そうです。土石流対策として、駒ヶ岳の上流から町に向かって治山えん堤や砂防え  
ん堤などが設置されています。一番上流は国有林です。

栗田副会長…そうですね。(壁の写真を見て) えん堤ですつと囲まれていますね。この配置を  
見ると土石がまともに鹿部町に向かってきたのですね。

川村町長…そうです。ゴルフ場の山側に防衛省の駒ヶ岳演習場がありますが、土石流はこの  
地盤も削り取って下流へ流れました。上流から国有林、演習場、ゴルフ場という配置になっ  
ています。

砂原事務局長代行・砂防ダムはたくさんあるのですか。

川村町長…はい。国有林では、まだ治山工事を継続しています。演習場内は全体計画の95%が整備されていますが、依然演習場下流側が未整備であり課題となっています。このため、町では下流域の安全度を高めるための演習場内の更なる施設整備を北海道防衛局とともに検討しているところです。また、北海道、北海道防衛局、鹿部町の三者で、下流域の安全確保を目的とする火山砂防計画の協議をしています。

栗田副会長…それは関係者全体でやらないといけないですね。

山口建設水道課長…先ほどの火山砂防計画ですが、いわゆる融雪型火山泥流に対応する砂防計画です。これは冬季積雪時に噴火を原因として発生する泥流への対応を最終目的とするものです。

川村町長…火山砂防計画では、泥流を安全に海まで流下させるための施設である導流工の整備が大きな課題であると考えています。駒ヶ岳は昔から鹿部へいろんな影響を与えています。風景はいいんですが、噴火により、ここの土壌は火山灰、軽石です。昭和4年の噴火で、この辺でも1mぐらい軽石が降りました。このあたりを掘れば出てきます。

栗田副会長…逆に、それで温泉もあるので選択は難しいです。

川村町長…移住、定住される方へは必ず「駒ヶ岳もあります。」と付け加え、活火山駒ヶ岳を

知ってもらうことにしています。今さら駒ヶ岳が別の場所に移動することはないわけですから。共存共栄で考えなければなりません。

栗田副会長…火山の場合は火山性微動がかなり確実に捉えられるようになってきたので、噴火するかどうかはわかりませんが、それが激しくなってくると対策をみんなで作るといいう事前準備ができます。普通の地震では、いつ発生するか全くわからないです。

川村町長…鹿部町の防災体制も、やはり一刻も早く避難していただくことに力を入れています。栗田副会長…先ほどのパイパスの避難道路の話も一気には無理ですけど、その発想をずっと持っていて順番に一個ずつやっていくことが必要です。

川村町長…今のパイパスを整備したときですが、完成の3年ぐらい前に事業が止まりました。栗田副会長…はい、ありました。

川村町長…全国18カ所で工事がストップしたのです。北海道では鹿部道路、今金道路、天塩道路の3路線がこれに該当しました。それで国交省に行きまして、鹿部道路はただ単に利便性だけではなく、駒ヶ岳噴火の避難道路でもあることを説明したのです。その後、3月にストップした工事が8月に再開し、それから3年ぐらいで完成しました。

栗田副会長…それは大事なことです。結局は面と向かってお話しするのが一番効きます。観光の話は駒ヶ岳を活用して進める発想もありでしょうが、温泉と駒ヶ岳とあとは定住、こう

いった施策をこれからも進めていくお考えですか。

川村町長…そうです。七飯町、鹿部町、森町の駒ヶ岳を巡る三町で、環駒ヶ岳広域観光協議会を作りました。大沼公園のイベントなどで、各町の特産物を持ち寄って販売することをやっています。これには北海道にも力を入れていただいています。

### 〔鹿部漁港は衛生管理型漁港〕

砂原事務局長代行…この辺では珍しく、鹿部漁港も屋根のある岸壁があります。

川村町長…衛生管理型漁港を目指して今やっています。

栗田副会長…見ると、すごい天井だと思います。

川村町長…天蓋施設を造って、港外から海水を引っ張ってきて浄化させて滅菌して洗浄する。それから岸壁で水揚げして、洗浄後の汚水の浄化処理をするという三つの機能です。

栗田副会長…鹿部漁組は、売り上げどのぐらいですか。

川村町長…今40億円ぐらいです。助宗が獲れると、だいたい50億円です。一番がホタテ養殖、それから助宗です。助宗は今漁期ですが、もうそろそろ終わりです。

栗田副会長…1月になったら終わりですね。

川村町長…はい。それから昆布、タコ、ナマコ、ウニです。ナマコは3億円です。一つの漁協

では管内でトップです。

栗田副会長…ナマコは中国向けですか。

川村町長…中国です。ウニより高いです。

栗田副会長…中国人にとつてはナマコが最高級です。漁組の組合員は200人くらいですか。

川村町長…400人です。一番多いときは800人くらいいました。

栗田副会長…400人ということは、5,000人の町民の水産関係で生活している人は半分

以上ですね。

川村町長…そうですね。

栗田副会長…それは大きな漁組ですね。

〔鹿部町の水産は、漁組の水揚げで40億円、水産加工で100億円です〕

栗田副会長…水産加工は主に助宗の加工ですか。

川村町長…今はタラコが主です。水産加工会社が8社くらいあり、全体で100億円以上生産しています。

栗田副会長…漁組で40億円、水産加工で100億円はすごいですね。

川村町長…聞くところによると、水産加工では女工さんが不足しているようです。

栗田副会長…中国人をお使いなのですか。

川村町長…はい。60人ぐらいです。

栗田副会長…あとは周辺の町からも来てもらっているのですか。

川村町長…旧南茅部町などからも来ています。

〱 駒ヶ岳周辺観光と交通アクセス 〱

栗田副会長…先ほどお話ししていた「ちょっと住んでみる」という施策は、もう始められているのですか。

川村町長…去年から始めています。旅館、ホテルを活用するものと、あと別荘が空いているところもあるので、ダイワハウスがお試し住宅として、おそらく今年から本格的に始められると思います。できれば、そのまま住んでほしいです。防災体制をしっかりと本格的に移住をやるうと考えています。新幹線が3月26日に開通します。鹿部町の間歇泉、道の駅を3月18日にオープンします。新函館北斗駅から車でだいたい30分ぐらいです。それで駒ヶ岳をぐるっと周るのですが、七飯町の大沼公園があり、鹿部の間歇泉を通り、森町を周るというルートです。それと、鹿部から旧南茅部町の縄文遺跡を周るルートもできるのです。

栗田副会長…そうですね。旧南茅部町の中空土偶を見ましたけど、すごいです。

北海道に国宝が一つしかないと、あらためて思いました。

川村町長…この海は、浅い所でウニ、海藻が採れるのですが、この時期は岸の近くでゴッコが獲れます。

栗田副会長…ゴッコですか。この辺は獲れますね。

川村町長…恵山の方も獲れます。そろそろスーパードに行くと思っています。おそらく、間歇泉公園の「浜のかあさん食堂」では、ゴッコ汁も出すと思います。

栗田副会長…季節限定と言って出したら、すぐ売れますね。

川村町長…「浜のかあさん食堂」のように、お互いに自分たちの特色を出しながら連携をしてやっけていくということが重要です。

栗田副会長…協力するのは大事だと思います。新幹線と道の駅と七飯の大沼、中空土偶、その観光名所をつなぐために必要な道路整備も考えていますか。

川村町長…今、道道大沼公園鹿部線で工事をやっています。また、旧南茅部町と鹿部町にバイパスができ、函館からの移動時間が短縮しました。

栗田副会長…今は南茅部のバイパスと鹿部のバイパスはつながっていませんが、つながればいいですね。

川村町長…それでも、だいぶ整備されてきています。今はバイパスを降りたところに間歇泉公

園があり、利便性は高まっていると思います。函館バスでは鹿部営業所を起終点としてバスを運行していますが、新幹線開業と道の駅オープンに合わせ、起終点を間歇泉に変更してもらえることになりました。

栗田副会長…それは大事なことです。

川村町長…鹿部町は公共交通が弱く、タクシーもないのです。

砂原事務局長代行…大沼はありますね。

川村町長…大沼、森はあります。タクシー運行が平成28年度の重点項目になっています。

栗田副会長…そうですか。

砂原事務局長代行…やはり、温泉旅館に車で来てもタクシーで帰るときがあります。

川村町長…あるタクシー会社に一度検討してもらいましたが、採算がとれないとなりました。

栗田副会長…他の町では見守りタクシーなどを厚労省の補助でやっているところもあります。

観光客が来たら、タクシーの1台や2台は要ります。

川村町長…そうです。函館バスと、また協議をしながら進めていこうと考えています。

栗田副会長…そうですね。そちらの応援も得ないといけないと思います。

川村町長…JR鹿部駅から函館バスが出ているのですが、本数が少ないです。

栗田副会長…鹿部町に今回来るのに、公共交通機関の時間を調べてみました。1日に3本、4

本ですので、なかなか厳しいと思いました。

栗田副会長…今日は長時間ありがとうございました。

北海道内町村長及び商工会長インタビュー

# 「地域とともに生きる」

---

2016年10月27日 初版第1刷発行

著 者 北海道建設業将来ビジョン策定ワーキンググループ  
(委員長 栗田 悟)

発行所 一般社団法人 北海道建設業協会  
〒060-0004 札幌市中央区北4条西3丁目1  
北海道建設会館7階  
TEL 011-261-6184 (総務部)

印 刷 札幌大同印刷株式会社

製 本 石田製本株式会社

hokkaido kensetsugyokyo2016©Printed in Japan



くらしを守り地域を支える



一般社団法人

**北海道建設業協会**

Hokkaido Construction Association